

伊丹市所在

有岡城跡・伊丹郷町IV

—主要地方道伊丹停車場線舗装修繕工事に伴う発掘調査報告書—

2006年3月

兵庫県教育委員会

伊丹市所在

有岡城跡・伊丹郷町Ⅳ

—主要地方道伊丹停車場線舗装修繕工事に伴う発掘調査報告書—

2006年3月

兵庫県教育委員会



遺跡遠景（東から）



調査地点 上空（東から）



瀬戸黒茶碗（J44）



中国産施釉陶器壺（左 A160・右 A89）



円筒埴輪（左 H241・中央 H246・右 H242）

例　　言

1. 本書は伊丹市伊丹1～3丁目に所在する有岡城跡・伊丹郷町の調査報告書である。
2. 本書は伊丹停車場線工事に伴う調査の発掘調査報告書である。本工事に伴う発掘調査は確認調査を平成2年に実施し、本発掘調査は平成4～11年度の8年間に亘って、10地区について実施した。(各年度の詳細は後述の通り。)
3. 本報告書は兵庫県教育委員会が発行する有岡城跡・伊丹郷町遺跡の4冊目の報告書である。各地区の調査概要・担当者は第1章にそれぞれ記した。また、本書の執筆分担は以下の通りである。
第1・2章、第3章第1・3・4・8・10節、第4章を山上雅弘、第3章第2・6・9節の遺構を山田清朝、第3章第2・5・6・9節の遺物を岡田章一、第3章第5節遺構を西口圭介、同古墳時代の遺構・遺物および第3章各節の金属製品を岡本一秀、第3章第7節を池田征弘がそれぞれ担当した。
4. 写真は現場写真を各地区の調査担当者が撮影し、遺物については株式会社タニグチ・フォト、株式会社アコードに委託した。
5. 現地調査終了後、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において整理作業を平成15～17年期間実施し、報告書を刊行した。作業の詳細は後述の通りである。
6. 報告書の整理にあたっては編集を山上雅弘が、宮田麻子の協力を得ておこなった。
7. 本書では調査年次ごとに成果を報告した。調査区の一覧は第1章のとおりである。
8. 遺物番号は調査地区ごとに付した、この番号は遺物図版・写真図版・本文観察表を通して共通したものを作っている。なお、番号の冒頭に付したアルファベットは地区名である。
番号は土器類・土製品・瓦類については通し番号であるが、鉄製品・石製品は別番号とした。鉄製品については冒頭にI、石製品についてはSを付した。
9. 観察表に関しては書式の統一を図ったが担当者の便宜を図り地区ごとに別形式となっている。
10. 本書で使用した標高は大阪平均海水準を基とし、方位は旧の国土座標V系の座標北を用いた。
11. 出土遺物並びに写真・図面類は埋蔵文化財調査事務所および魚住分館で保管している。
12. 本報告書において使用する25,000分の1地形図は、国土地理院発行の「伊丹」を使用し、調査区の周辺の地形図については伊丹市発行の道路図を使用した。また、個別の遺構図・平面図などに関しては各担当者が現場で作成したものである。
13. 発掘調査および出土品の整理に際しては、下記の機関並びに個人からご指導・ご教示をいただいた。ここに貴機関名ないし御芳名を記して謝意を表します。
伊丹市教育委員会・伊丹市博物館・小長谷正治・川口宏海・藤本史子・赤松和佳・中畦明日香・細川佳子・和島恭仁雄

目 次

第1章 調査の経緯.....	1
第1節 調査に至る経過	
第2節 調査体制	
第2章 遺跡をとりまく環境.....	3
第1節 歴史的環境	
第2節 地理的環境と周辺の遺跡	
第3章 調査の成果	
第1節 A地区.....	7
第2節 C地区.....	16
第3節 D地区.....	25
第4節 I地区.....	32
第5節 H地区.....	39
第6節 E地区.....	54
第7節 G地区.....	70
第8節 B地区.....	77
第9節 F地区.....	84
第10節 J地区.....	92
第4章 まとめ.....	106
分析・鑑定.....	112

挿図目次

- 第1図 調査区位置図
 第2図 有岡城跡、伊丹郷町の位置
 第3図 有岡城跡周辺の堀

表 目 次

第1表	有岡城跡・伊丹郷町遺跡停場線調査一覧	第24表	E地区遺物観察表5
第2表	A地区遺物観察表1	第25表	E地区遺物観察表6
第3表	A地区遺物観察表2	第26表	E地区遺物観察表7
第4表	A地区遺物観察表3	第27表	E地区遺物観察表8
第5表	A地区遺物観察表4	第28表	E地区遺物観察表9
第6表	C地区遺物観察表1	第29表	G地区堀橋一覧
第7表	C地区遺物観察表2	第30表	G地区土坑一覧
第8表	C地区遺物観察表3	第31表	G地区遺物観察表1
第9表	C地区遺物観察表4	第32表	G地区遺物観察表2
第10表	C地区遺物観察表5	第33表	G地区遺物観察表3
第11表	D地区遺物観察表1	第34表	B地区遺物観察表1
第12表	D地区遺物観察表2	第35表	B地区遺物観察表2
第13表	I地区遺物観察表1	第36表	B地区遺物観察表3
第14表	I地区遺物観察表2	第37表	F地区遺物観察表1
第15表	I地区遺物観察表3	第38表	F地区遺物観察表2
第16表	H地区遺物観察表1	第39表	F地区遺物観察表3
第17表	H地区遺物観察表2	第40表	F地区遺物観察表4
第18表	H地区遺物観察表3	第41表	J地区遺物観察表1
第19表	H地区遺物観察表4	第42表	J地区遺物観察表2
第20表	E地区遺物観察表1	第43表	J地区遺物観察表3
第21表	E地区遺物観察表2	第44表	J地区遺物観察表4
第22表	E地区遺物観察表3	第45表	J地区遺物観察表5
第23表	E地区遺物観察表4	第46表	J地区遺物観察表6

図 版

第1図	有岡城跡・伊丹郷町周辺地形環境図	第30図	D地区 第2面 出土土器2・瓦1
第2図	調査全体制	第31図	D地区 第1・2面 瓦2
第3図	第2面 調査全体制	第32図	D地区 銀貨
第4図	A地区 調査区平面図	第33図	D地区 金属製品・石製品
第5図	A地区 堀断面図・S K31平・断面図	第34図	I地区 調査区平面図(2区)
第6図	A地区 第1面 出土土器1	第35図	I地区 調査区平面図(1・3区)
第7図	A地区 第1面 出土土器2	第36図	I地区 堀橋平断面図
第8図	A地区 堀出土土器1	第37図	I地区 出土土器1(1区)
第9図	A地区 堀出土土器2	第38図	I地区 出土土器2(1・2区)
第10図	A地区 堀出土土器3	第39図	I地区 出土土器3(2区)
第11図	A地区 堀出土土器4	第40図	I地区 出土土器4(2区)
第12図	A地区 第2面 出土遺物・瓦1	第41図	I地区 出土土器5(2・3区)
第13図	A地区 瓦2	第42図	I地区 出土土器6(3区)・瓦1
第14図	A地区 瓦3・銭貨・金属製品・石製品	第43図	I地区 銀貨・金属製品・石製品
第15図	C地区 調査区平面図(1/200)	第44図	H地区 調査区半・断面図
第16図	C地区 出土土器1	第45図	H地区 墓輪棺平・断面図
第17図	C地区 出土土器2	第46図	H地区 墓輪棺輪方平・断面図
第18図	C地区 出土土器3	第47図	H地区 出土土器1
第19図	C地区 出土土器4	第48図	H地区 出土土器2
第20図	C地区 石製品・金属製品	第49図	H地区 出土土器3
第21図	D地区 調査区平面図	第50図	H地区 出土土器4
第22図	D地区 崩壊区断面図・横列平断面図	第51図	H地区 出土土器5
第23図	D地区 第1面 連續平断面図1	第52図	H地区 出土土器6
第24図	D地区 第1面 連續平断面図2	第53図	H地区 出土土器7
第25図	D地区 第2面 連續平断面図1	第54図	H地区 出土土器8
第26図	D地区 第1面 出土土器1	第55図	H地区 出土土器9・瓦1
第27図	D地区 第1面 出土土器2	第56図	H地区 瓦2
第28図	D地区 第1面 出土土器3	第57図	H地区 瓦3
第29図	D地区 第2面 出土土器1	第58図	H地区 瓦4・石製品

第59回	H地区	埴輪	第98回	B地区	第1面 出出土器3・瓦1
第60回	H地区	錢貨	第99回	B地区	瓦2
第61回	H地区	金属製品1	第100回	B地区	瓦3・金属製品1
第62回	H地区	金属製品2	第101回	B地区	錢貨・金属製品2
第63回	E地区	調查区平面圖	第102回	B地区	石製品
第64回	E地区	出土土器1	第103回	F地区	調查区平面圖
第65回	E地区	出土土器2	第104回	F地区	山土土器1
第66回	E地区	出土土器3	第105回	F地区	出土土器2
第67回	E地区	出土土器4	第106回	F地区	錢貨
第68回	E地区	出土土器5	第107回	F地区	石製品
第69回	E地区	金属製品1・錢貨	第108回	J地区	調查区平面圖
第70回	E地区	金属製品2・石製品	第109回	J地区	調查区断面圖
第71回	G地区	調查区断面圖	第110回	J地区	石組溝・堀変遷図
第72回	G地区	調查区断面圖	第111回	J地区	石組溝・堀変遷図
第73回	G地区	遺構平・断面図1	第112回	J地区	石組溝・堀変遷図
第74回	G地区	遺構平・断面図2	第113回	J地区	第1面 遺構平・断面図1
第75回	G地区	遺構平・断面図3	第114回	J地区	第1面 遺構平・断面図2
第76回	G地区	遺構平・断面図4	第115回	J地区	第1面 遺構平・断面図3
第77回	G地区	遺構平・断面図5	第116回	J地区	第2面 遺構平・断面図1
第78回	G地区	遺構平・断面図6	第117回	J地区	第2面 遺構平・断面図2
第79回	G地区	遺構平・断面図7	第118回	J地区	第1面 出出土器1
第80回	G地区	遺構平・断面図8	第119回	J地区	第1面 出出土器2
第81回	G地区	出土土器1	第120回	J地区	第1面 出出土器3
第82回	G地区	出土土器2	第121回	J地区	第1面 出出土器4
第83回	G地区	出土土器3	第122回	J地区	第2面 出出土器1
第84回	G地区	出土土器4	第123回	J地区	第2面 出出土器2
第85回	G地区	出土土器5	第124回	J地区	第2面 出出土器3
第86回	G地区	出土土器6	第125回	J地区	第2面 出出土器4
第87回	G地区	出土土器7	第126回	J地区	墓1・石組溝出土土器1
第88回	G地区	瓦	第127回	J地区	墓1・石組溝出土土器2
第89回	G地区	錢貨	第128回	J地区	瓦1
第90回	G地区	石製品・金属製品	第129回	J地区	瓦2
第91回	B地区	調查区平面圖	第130回	J地区	瓦3
第92回	B地区	調查区断面圖	第131回	J地区	瓦4
第93回	B地区	遺構平・断面図	第132回	J地区	錢貨1
第94回	B地区	第1面 出出土器1	第133回	J地区	錢貨2
第95回	B地区	第1面 出出土器2	第134回	J地区	金属製品・石製品1
第96回	B地区	第2面 出出土器1	第135回	J地区	石製品2
第97回	B地区	第2面 出出土器2			

卷首図版

- 第1回 遺跡全景
第2回 出出土物

写真図版

写真図版1	A地区	遺跡遠景	写真図版17	C地区	第1・2面	瓦・土製品・石製品・錢貨
写真図版2	A地区	調查区全景	写真図版18	C地区	第1・2面	調查区全景
写真図版3	A地区	調查区遠景	写真図版19	C地区	第1・2面	出土土器1
写真図版4	A地区	調查区全景	写真図版20	C地区	第1・2面	山土土器2
写真図版5	A地区	第1面	写真図版21	C地区	第1・2面	出土土器3
写真図版6	A地区	第2面	写真図版22	C地区	第1・2面	出土土器4
写真図版7	A地区	第2面	写真図版23	C地区	第1・2面	出土土器5
写真図版8	A地区	第2面	写真図版24	C地区	第1・2面	出土土器6
写真図版9	A地区	第1面	写真図版25	C地区	第1・2面	出土土器7
写真図版10	A地区	第1面	写真図版26	C地区	第1・2面	鐵製品
写真図版11	A地区	第1面	写真図版27	D地区	第1・2面	調查区全景
写真図版12	A地区	第2面	写真図版28	D地区	第2面	調查区近景
写真図版13	A地区	第2面	写真図版29	D地区	第1・2面	遺構近景
写真図版14	A地区	第2面	写真図版30	D地区	第1面	出土土器1
写真図版15	A地区	第2面	写真図版31	D地区	第1面	出土土器2
写真図版16	A地区	第2面	写真図版32	D地区	第1面	出土土器3

写真図版33	D地区	第2面	出土土器1	写真図版96	G地区	第2面	造情近景
写真図版34	D地区	第2面	出土土器2	写真図版97	G地区	第1・2面	出土土器1
写真図版35	D地区	第1・2面	埴瓦・石製品・土製品	写真図版98	G地区	第1・2面	出土土器2
写真図版36	D地区	第1・2面	金製品	写真図版99	G地区	第1・2面	出土土器3
写真図版37	I地区	1区第1・2面	全景	写真図版100	G地区	第1・2面	出土土器4
写真図版38	I地区	2区第1面	全景	写真図版101	G地区	第1・2面	出土土器5
写真図版39	I地区	2区第2面	全景	写真図版102	G地区	第1・2面	出土土器6
写真図版40	I地区	3区第1・2面	全景	写真図版103	G地区	第1・2面	出土土器7
写真図版41	I地区	2・3区第1面	遺構近景	写真図版104	G地区	第1・2面	出土土器8
写真図版42	I地区	第1面	出土土器1	写真図版105	G地区	第1・2面	出土土器9
写真図版43	I地区	第1面	出土土器2	写真図版106	G地区	第1・2面	瓦・石製品
写真図版44	I地区	第1面	出土土器3	写真図版107	G地区	第1・2面	錢貨・金属製品
写真図版45	I地区	第1面	出土土器4	写真図版108	B地区	第1面	調查区全景1
写真図版46	I地区	第2面	出土遺物	写真図版109	B地区	第1面	調査区全景2
写真図版47	I地区	第1面	金属製品	写真図版110	B地区	第2面	調査区全景
写真図版48	H地区	第1面	調査区全景1	写真図版111	B地区	第1面	出土土器1
写真図版49	H地区	第1面	調査区全景2	写真図版112	B地区	第1面	出土土器2
写真図版50	H地区	第2面	調査区全景1	写真図版113	B地区	第1面	出土土器3
写真図版51	H地区	第2面	調査区全景2	写真図版114	B地区	第2面	出土土器1
写真図版52	H地区	第1面	遺構近景1	写真図版115	B地区	第2面	出土土器2
写真図版53	H地区	第1面	遺構近景2	写真図版116	B地区	第2面	出土土器3
写真図版54	H地区	第2面	遺構近景1	写真図版117	B地区	第2面	出土土器4
写真図版55	H地区	第2面	遺構近景2	写真図版118	B地区	第1・2面	瓦1
写真図版56	H地区	第2面	円筒埴輪棺1	写真図版119	B地区	第1・2面	瓦2・石製品
写真図版57	H地区	第2面	円筒埴輪棺2	写真図版120	B地区	第1・2面	錢貨・金属製品1
写真図版58	H地区	十畳半構状況	出土土器1	写真図版121	B地区	第1・2面	金製品2
写真図版59	H地区	第3面	出土土器2	写真図版122	F地区	第1・2面	調查区全景
写真図版60	H地区	第1面	出土土器3	写真図版123	F地区	第1・2面	出土土器1
写真図版61	H地区	第1面	出土土器4	写真図版124	F地区	第1・2面	出土土器2
写真図版62	H地区	第1面	出土土器5	写真図版125	F地区	第1・2面	出土土器3
写真図版63	H地区	第1面	出土土器6	写真図版126	F地区	第1・2面	石製品
写真図版64	H地区	第1面	出土土器7	写真図版127	F地区	第1・2面	錢貨
写真図版65	H地区	第1面	出土土器8	写真図版128	J地区	1区第1・2面	調査区全景
写真図版66	H地区	第1面	出土土器9	写真図版129	J地区	2区第1・2面	調査区全景
写真図版67	H地区	第1面	出土土器10	写真図版130	J地区	3区第1・2面	調査区全景
写真図版68	H地区	第1面	出土土器11	写真図版131	J地区	4区第1・2面	調査区全景
写真図版69	H地区	第1面	出土土器12	写真図版132	J地区	4・5区	遺構近景
写真図版70	H地区	第1面	出土土器1	写真図版133	J地区	3・4区第2面	堀2
写真図版71	H地区	第2面	出土土器2	写真図版134	J地区	5区第1・2面	調査区全景
写真図版72	H地区	第2面	出土土器2	写真図版135	J地区	6区第1面	調査区全景
写真図版73	H地区	第2面	出土土器3	写真図版136	J地区	6区第2面	調査区全景
写真図版74	H地区	第2面	出土土器4	写真図版137	J地区	6区第2面	遺構近景
写真図版75	H地区	第2面	出土土器5	写真図版138	J地区	7区第1面	堀1など
写真図版76	H地区	第2面	円筒埴輪	写真図版139	J地区	7区第1面	調査区全景
写真図版77	H地区	第1・2面	出土土器9	写真図版140	J地区	7区第2面	調査区全景
写真図版78	H地区	第1・2面	出土土器10	写真図版141	J地区	第1面	出土土器1
写真図版79	H地区	第1・2面	出土土器11	写真図版142	J地区	第1面	出土土器2
写真図版80	E地区	第1・2面	出土土器12	写真図版143	J地区	第1面	出土土器3
写真図版81	E地区	第1・2面	出土土器1	写真図版144	J地区	第1面	出土土器4
写真図版82	E地区	第1・2面	出土土器2	写真図版145	J地区	第1面	出土土器5
写真図版83	E地区	第1・2面	出土土器3	写真図版146	J地区	第2面	出土土器1
写真図版84	E地区	第1・2面	出土土器4	写真図版147	J地区	第2面	出土土器2
写真図版85	E地区	第1・2面	出土土器5	写真図版148	J地区	第2面	出土土器3
写真図版86	E地区	第1・2面	出土土器6	写真図版149	J地区	第2面	出土土器4
写真図版87	E地区	第1・2面	出土土器7	写真図版150	J地区	第2面	出土土器5
写真図版88	E地区	第1・2面	出土土器8	写真図版151	J地区	第2面	出土土器6
写真図版89	E地区	第1・2面	出土土器9	写真図版152	J地区	第2面	出土土器7
写真図版90	E地区	第1・2面	出土土器10	写真図版153	J地区	第2面	出土土器8
写真図版91	E地区	第1面	十製品	写真図版154	J地区	第1・2面	瓦1
写真図版92	E地区	第1面	金属製品1	写真図版155	J地区	第1・2面	瓦2
写真図版93	E地区	第1面	金属製品2	写真図版156	J地区	第1・2面	十製品・石製品・その他
写真図版94	G地区	第1・2面	調査区全景	写真図版157	J地区	第1・2面	錢貨1
写真図版95	G地区	第1面	遺構近景	写真図版158	J地区	第1・2面	錢貨2・金属製品

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

今回の調査は主要地方道伊丹停車場線舗装修繕工事に伴うものである。本書で扱う調査はすべて兵庫県阪神県民局西宮土木事務所伊丹土木事務所（現兵庫県阪神北県民局宝塚土木事務所伊丹土木事務所）より依頼を受けて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が調査を実施した。

調査は平成2年度に範囲確認調査を地中レーダー探査と発掘調査によって実施した。これらの調査では近世伊丹郷町の遺構が発見された。また前後して行われた周辺調査からも有岡城跡・伊丹郷町の遺構の存在が確認されている。このため検討を経た結果、平成5年度から順次工事範囲全体の発掘調査を行うこととなった。

調査にあたっては各調査区とも西宮土木事務所の事業により道路舗装面・盛土・コンクリート路盤を除去した後、江戸時代の遺構面（第1面）から調査を開始し、中世面・地山面（第2面）の調査を行った。

今回の伊丹郵便局前交差点からJR伊丹南交差点の区間、延長250mについて上下両車線とも実施した。調査区は順次A～J地区の調査が行われた。しかし、調査に際しては交通量が著しく多いため交通阻害とならないよう片側車線ごとの調査を実施した。また、民家進入路や交差点などについても交通疎外を防ぐために地区分割などで対応せざるを得なかったため、I・J地区ではさらに小分割を行った。このため調査に際しては多くの労力を割くこととなり、長い調査期間を必要とすることとなった。また、特に産業道路との接点となる伊丹郵便局前交差点付近のJ地区では調査区の細分を余儀なくされ7区に分割した調査を実施している。また、I地区でも民地への進入路の関係で1～3区の3区に分割して調査を行った。さらに、他の地区でも進入路確保の観点から調査区を未調査にせざるを得ない部分が若干生じた。このため、事情の許す限りにおいて全面的な調査をすめることとなった。このような事情から調査開始から終了まで10年の歳月を要することとなった。

第2節 調査体制

発掘調査の方法

各年度の調査地区・期間については下記別表のとおりである。平成2年度に確認調査を実施し、平成5年度～平成11年度までの7カ年間に亘って本発掘調査を行った。この間、調査区を10地区（A～J地区）に分割し調査を行っている。

現場では各調査員が全体図・遺構平面図・断面図（基本的に1/20）などを適宜作成し、遺構写真についても適宜行った。また、調査区の全景写真については高所作業者および航空撮影によって実施している。

整理の体制

本事業の整理作業は平成13～17年の5カ年間に亘って実施した。平成13年度は遺物洗浄とネーミング、14年度は遺物の接合・復元、15年度は遺物実測・分析鑑定・木製品の保存処理、16年度は遺物の実測・遺物写真撮影、金属器の保存処理、17年度は遺物実測・写真撮影・トレイス・レイアウトを実施した。

報告書の編集作業は最終年度の17年度に行った。

整理作業関係者

接合・復元作業

眞子ふさ恵・島村順子・木村淑子・前田千栄子・小野潤子・宮野正子・三好綾子・奥野政子

実測作業

池田悦子・宮田麻子・松本嘉子・前川悦子・高瀬敬子・津田友子・溝上くみ・村上京子

保存処理

栗山美奈・大前篤子・藤井光代・三島重美・高橋朋子・那須かおり

第1表 有岡城跡・伊丹郷町遺跡停車場線調査一覧

調査次数	調査番号	地区名	小地区	担当者	調査期間	面積
確認調査	900170			西口和彦	H3.3.11~5.3.16	49.5m ²
119次調査	920296	A地区		岡崎正雄・所崎明雄	H5.1.11~5.3.18	138m ²
119次調査	920297	B地区		岡崎正雄・所崎明雄	H5.1.11~5.3.18	102m ²
124次調査	930158	C地区		山田清朝・所崎明雄	H5.11.2~6.3.4	(259m ²)
150次調査	950017	D地区		山上雅弘・服部 寛	H7.5.8~7.6.15	140m ²
124次調査	930094	E地区		山田清朝・所崎明雄	H5.8.18~5.9.24	143m ²
125次調査	930159	F地区		山田清朝・所崎明雄	H5.11.2~6.3.5	(259m ²)
190次調査	960420	G地区		池田征弘・野村謙右	H9.2.3~9.3.25	144m ²
204次調査	970429	H地区		西口圭介・岡本一秀	H10.2.10~10.3.24	108m ²
214次調査	980367	I地区	1~3区	鈴木毅二・牛谷好伸	H10.5.21~10.8.24	241m ²
238次調査	990232	J地区	1~8区	山上雅弘・柏原正民	H11.10.8~12.3.8	320m ²



図1 調査区位置図

第2章 遺跡をとりまく環境

第1節 歴史的環境

伊丹城が文献で確認されるのは、南北朝期の文和2年（1353）、森本左衛門次郎基次軍忠状である。森本氏は伊丹氏の一族とされることから、このころすでに伊丹氏は同地に所在したといわれている。実際に伊丹氏が史料に登場するのは正和4年（1315）の「離官八幡宮文書」が所見といわれる。その後、摂津周辺において地歩を固めた同氏は、南北朝期には守護被官となることで公的な身分を得る。応仁・文明の乱以降は畿内周辺の争乱に巻き込まれ、16世紀前半の細川家の内紛などでも伊丹城が落城するなど、大きな影響を受けたと考えられる。

永禄11年（1479）、織田信長が入京し摂津に侵攻してくると、伊丹城の伊丹親興はこれに与し、三好三人衆を攻め、伊丹城を安堵されている。しかし、天正2年（1574）には荒木村重によって伊丹城は攻められ、伊丹親興は同城を追われてしまう。これによって、村重は伊丹城を有岡城と改名し、大規模な改修を行ったといわれている。荒木氏の有岡城改修についてはその過程が明らかになっている訳ではないが、最終的にはいわゆる「惣構え」構造をもった大規模な城郭であったとされる。

惣構えを含めた規模は南北1.7km、東西0.8kmにおよび、内部は城郭域・内郭部（武家連敷区）・外郭域（町屋）に大きく区分されていたといわれる。特に、今回の調査に関連の深い部分でいえば内郭部と外郭域を区画する場所に築かれた大溝筋と呼ばれる堀が重要である。この堀は内郭域の西側外周を南北に縱断して構築されたもので、これまで江戸期の伊丹郷町を描いた絵図などによって存在を知られてきた。

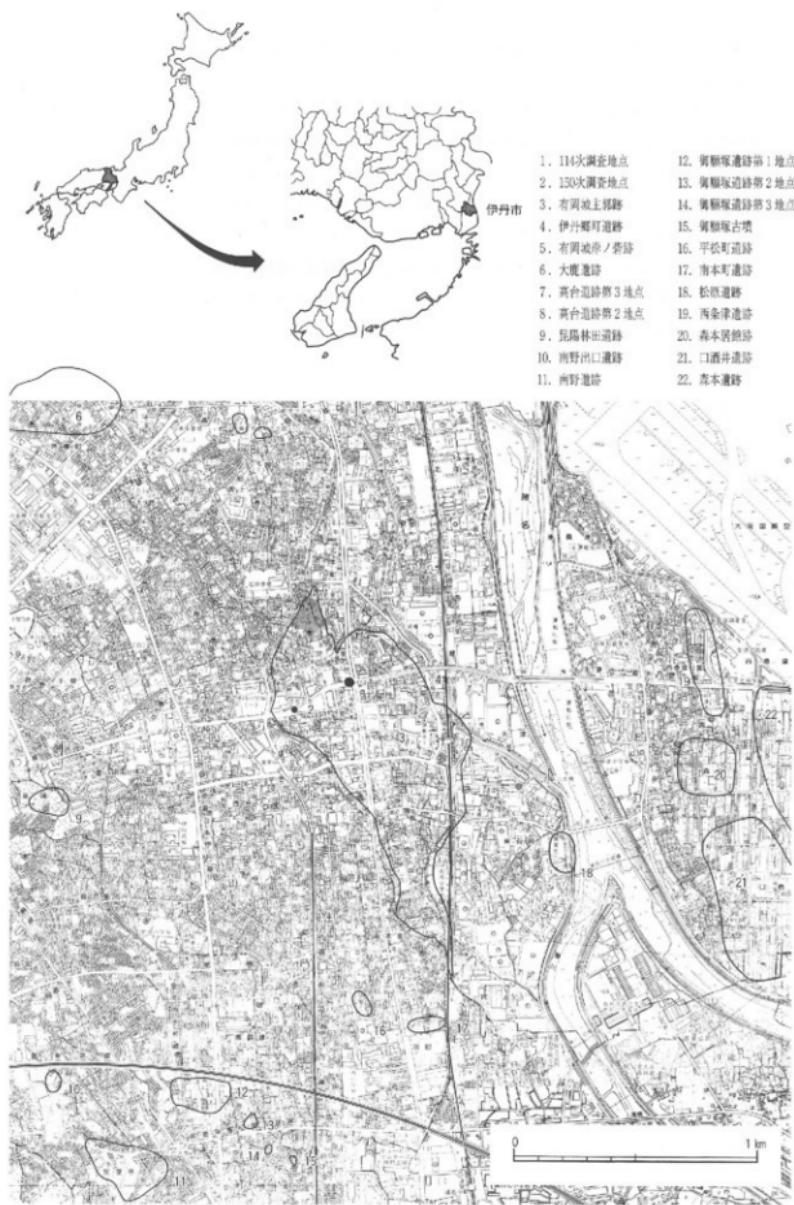
しかし、荒木村重は天正6年（1578）摂津の石山本願寺と結び信長に反旗を翻したこと、信長方から攻められ同7年11月に有岡城は落城する。これによって同城は廢城となつた。

天正11年に豊臣秀吉は大阪築城を行うが、これに並行して同氏の蔵入地である播磨経営のために摂津から有馬・三木を通る湯ノ山街道の整備が進められたようである。これに伴って伊丹の町も三木や淡河などと同様に在郷町としての復興が計られたものと推測される。これ以降、江戸初期は不明な点が多いが、豊臣期以降も在郷町としての一定の発展は認められたものと推測される。

江戸期の17世紀後半、文禄年間（1592～96）には伊丹の町には15町の存在が知られ、在郷町として発展した。この頃になると酒造業が発展し、いたるところに酒蔵が建てられ、活況を呈し西摂津でも大きな在郷町として栄え発展したようである。

伊丹の酒造業は元禄期には最盛期を迎へ、元禄8年（1695）刊行の「本朝通鑑」には江戸を市場とする江戸積酒の銘醸酒として伊丹酒があげられている。正徳5年（1715）には酒造家72軒、酒造株数103株、株高6万石を記録し、元文5年（1740）には伊丹酒は將軍の御膳酒となり「丹膳」として歓迎されている。しかし、江戸時代中期になると幕府が享保16年（1731）に米ぬ引き上げを目的として、酒造統制策から酒造獎勵作に転じたことから灘の酒造業が台頭する。これによって内陸に位置する伊丹・池田は江戸積酒を直送できる灘との運送格差から、次第に販路を減じ18世紀後半には灘に開けたトップシェアを譲ることとなる。

この傾向は明治以降さらに加速され、酒造株制度から酒造鑑札制度の導入によって伊丹の酒造業は打撃を被る。こののち、伊丹の酒造業は明治～昭和にかけて淘汰を繰り返しながら、生産量は減少してゆくが命脈を保つ。



挿図2 有岡城跡 伊丹郷町の位置

酒造業の衰退に伴って、ランプ・錦ネル・マッチなどの近代業が試みられ、町の産業構造の転換が図られる。

都市としての伊丹は明治期の鉄道敷設によって大きく変貌する。明治24年尼崎・伊丹間に川辺馬車鉄道が開通し、明治37年には大阪・舞鶴間を結ぶ福知山線（設立当時は阪鶴鉄道）が開通する。

さらに大正6年には塚口・伊丹間に結ぶ阪急伊丹線が開通する。これによって伊丹は大阪など大都市の近郊住宅都市として注目されるようになる。このほか、戦前に行われた現産業道路の敷設や幹線道路の拡張によって都市景観は大きく変貌することとなった。

この一方で、福知山線の敷設は古城として残されてきた有岡城の遺跡の大部分を削平させて失うこととなった。また、大阪街道などの街道を中心に営まれ、意識されてきた都市景観も大きく変貌を遂げることとなった。

第2節 地理的環境と周辺の遺跡

伊丹城跡・伊丹郷町は伊丹段丘の東縁に位置し、北側を除く大部分は周間に段丘崖によって遮断されている。さらに、北背後についても昭和56年の調査で堀の存在が確かめられたことから、四周を防御した懸構え構造をもつとされている。伊丹周辺は東側に猪名川および渓川が南流する。北背後には長尾山の丘陵地帯が東西に伸び、この辺から伊丹段丘が延びてくる。南側には低位段丘がひろがり阪急伊丹線のあたりまで続き、沖積平野に下る。

有岡城跡の北側には西国街道が東西に通る。近世の西国街道は伊丹段丘に上る伊丹坂を通って大桑村、さらに昆陽村を通る。さらに、大阪から通る大阪街道が伊丹郷町の南端から郷町内を北に抜けている。この道はさらに北に抜け宝塚の小浜を通って、有馬にいたる湯ノ山街道に至る。さらに、大阪街道から分岐して南下すると尼崎に通じる。中世から戦国期にかけて伊丹氏・荒木氏の城郭として西摂津において大きな位置を占めた伊丹は、近世にいたっても在郷町として栄えたのはこのような交通の要衝にあつたことが大きく影響した。

伊丹周辺にはあまり遺跡は多くない。有岡城跡・伊丹郷町南部では奈良時代から中世までの集落遺跡である南本町遺跡、螢塚古墳・黄金塚古墳などの古墳が知られている。また、郷町内にも鶴塚古墳・女郎塚古墳などの古墳が知られ、北側には隣接して桜ヶ丘遺跡（繩文時代）、伊丹小学校遺跡（弥生・古墳時代）などの遺跡がある。古くから市街地化したために明確にされてないが、多くの遺跡が遺跡周辺に立地していたことが推測される。

有岡城周辺の城郭では塚口城・富松城（尼崎市）・原田城（大阪府豊中市）・池田城（大阪府池田市）などの調査も進んでいる。また、南本町遺跡からは有岡城攻城時の鐵田方の陣城跡が検出されている。

塚口城では平成13・16・17年の3カ年に亘って南辺の調査が行われ、塚口城南辺の堀を検出している。堀の規模は幅4～5m前後、深さ1.5m前後で南西隅では二重堀になることが判明した。この付近には南西の木戸口が存在し、二重堀はこの虎口を防御するためのものの可能性が指摘される。堀の埋没時期は出土遺物から18世紀後半以降とされるが、この時期、生活の不便を感じた住民が夫役を割り当て、徐々に土壠を崩して堀を埋め立てたことが知られている。塚口城の土壠は南辺には残存しないが、現在は東・北の虎口部分脇にわずかに残されている。堀はやはり北から東辺にかけて用水路となって現在でもその面影を残している。

富松城では周辺の宅地開発などに伴って小規模な調査が断続的に行われている。富松城そのものの実態は土塁が残される以外は全く不明であるが、集落の北西側では15世紀前後から堀囲いの遺構が検出され何處かの改修を経ながら、最終的に土塁が残る遺構に取戻されたことが明らかにされた。また、富松北側の東富松遺跡Bでは15世紀代の区画溝を伴う屋敷跡が形成されるが16世紀には南側の現集落に遺跡が集約されたことが明らかになった。

原田城跡では再終期に有岡城を囲んだ陣城としての利用が確認されているが、幅10m、深さ10m前後の大型の堀が検出されている。

池田城でも主郭の主屋を破壊して、曲輪を南北に分断する堀が検出された。これらは有岡城跡を攻める際の陣が敷かれた痕跡で、戦乱の規模を窺わせるものである。

【参考文献】

- 「兵庫県文化財調査報告書第123号 伊丹郷町発掘調査報告書」兵庫県教育委員会 平成5年度
- 「兵庫県文化財調査報告書第164号 伊丹郷町発掘調査報告書Ⅱ」兵庫県教育委員会 平成9年度
- 「兵庫県文化財調査報告書第207号 伊丹郷町発掘調査報告書Ⅲ」兵庫県教育委員会 平成12年度

第3章 調査の成果

第1節 A地区

1. 遺 槽

A地区は天保15年伊丹郷町分限絵図(天保15年伊丹分限絵図)の大手町東側に位置し、有岡城跡第5次調査では主郭域を画する堀の南端に位置すると推定される地点にあたる。この堀の北側は「二ノ丸金の間」・「金ノ丸」が推定される場所で、調査地点は有岡城跡の城郭域南側の一角を占める。さらに、第5次調査では主郭域から張り出した堀が検出されたことから、周辺に虎口の可能性が指摘されていた。また、大手町という町名からは大手道や大手虎口が存在することも期待され、本地点の標相は有岡城跡の解明にとって重要と考えられた。なお、A地区の調査面積は138m²で、本地点北側はC地区、西側はD地区に該当する。

【第1面】(第4図、写真図版5~7参照)

調査区西端で廃棄土坑が集中して胎衣壺が検出された。東側は小規模な土坑が検出されるが顕著な遺構は見つかっていない。このため、周辺は道路あるいは空地であった可能性が高い。

土 坑

いくつかの土坑が見つかった。東側では10基の土坑が見つかっている。SK3は円形で直径1.0m、深さ0.2mを測る。SK4・5は切り合う土坑でSK4が新しい。平面方形を呈しSK4は長さ1.3m、幅0.8m、深さ0.4m、SK5は長さ1.2m、幅0.6m、深さ0.5mを測る。SK31は平面円形の遺構で調査区西北の壁際で検出された。萩焼小碗A169や石仏が出土している。SK21は直径2m前後の円形土坑で内部からシジミ・アカガイの貝類や白磁皿A7などが出土した。SK25・26は切り合う土坑でSK26が新しい。SK26が長さ1.6m、幅1.0m、SK25が長さ1.7m、幅1.0mを測る。どちらもシジミ・アカガイの貝類や陶磁器が多数出土した。

遺物が出土した遺構はSK3・7・9・21・23・25・26・27・28・30・31・P24・胎衣壺などである。

これらの遺物の年代はおむね18世紀後半から19世紀初頭頃である。土坑群が形成されたのはこの時期と考えられ、18世紀後半以降に周辺の宅地化が進んだと推定される。

【第2面】(第4・5図、写真図版6~8参照)

第2面は伊丹役丘の地山面で検出した。調査区の大部分を堀が占めている。東端にはC地区から続く堀(SF1)が検出された。中央でも堀(SF2・4と3)が東西方向に検出され、調査区の大半を占めている。西側は通路のために一部調査が行えなかったが、直下が堀(SD5)にあたり、西肩のみが検出された。

堀

SF1は調査区東端に検出された堀で、南肩部の一部のみが確認された。検出した範囲は長さ6.0m、幅2.0mほどの狭い範囲に限られる。ただ、堀の側壁は急勾配で深さ2.5mまで検出している。ただし、堀底の検出には至っていない。

SF2・4は調査区西側で検出され、長さ6.0m、幅2.0m、深さ1.0mを測る。中央でより深くなるSF

2と東側の浅いSF 4に分けて調査を行った。断面は箱型状で小規模であるため区画を目的とするものと推定される。内部からは多量の遺物が出土した。

SF 3はSF 2・4の東側に掘削された堀で、これに対応する堀と考えられる。規模はほぼ同じでSF 1に重なる地点で終わっている。

溝

SD 3はSF 2・4とSF 3の開口部に検出された溝で、規模は幅30cmほどの小規模なものである。堀の全面を塞ぐような形で検出されている。

SD 1はSF 2・4とSF 3の北側に平行に確認された溝であるが規模はC地区SD03とを合わせると幅2.0m前後を測る。埋土からはミニチュア鳥A170・青磁碗A171・備前焼壺A172が出土したがA170は混入と考えられる。

SD 5は西側の肩部のみがわずかに検出された遺構であるが、実際にはSF 2 西側に東肩を持つ可能性がある堀である。このため堀の規模は6 m級のものである可能性がある。

様相としては東側のSFから30m西側に平行して掘削されたもので、曲輪空間を形成した堀の1つであると考えられる。埋土からは羽釜A175・A176が出土した。

このほか、SD 2からは青磁碗A173、瓦器碗A174が出土している。

柱穴

A地区は大半が堀で占められており、曲輪内部の施設は形成される範囲が限られている。しかし、狭い範囲ではあるが多くの柱穴など検出されている。検出された柱穴はおおむね円形ないし稍円形で直径30~40cm前後のものであるが、建物に復元できるものはなかった。このうちP41からは丹波焼壺A182が出土した。

2. 遺 物

【第1面】(第6~8図・写真図版9~12)

第1面から出土した遺物は主に西側の土坑群からの出土である。ただし、第2面で調査をおこなったSF 1上層・SF 3などにも一部近世遺物が含まれているので、これらも含めて報告する。

土師器

土師器には皿・灯明台・火鉢がある。皿A 9・A10・A21・A29・A30は内外面に指痕痕跡の顯著に残る厚手のつくりで、外面上半を横ナデする。灯明台A27は手づくりの製品である。火鉢A15・A25は脚の付くものである。

瓦質土器

火鉢A18がある。隅部の細片で花文のスタンプを押す。

磁 器

磁器は肥前系磁器、瀬戸系磁器がある。量的には肥前系磁器が圧倒的に多い。

肥前系磁器には染付碗A 2・A 5・A 13・A 17・A 65~67、皿A 3・A 14・A 22・A 32、壺A 19、徳利A 12、青磁染付碗A 1、赤絵壺A 28、白磁碗A 6・A 7、壺A 19、青磁皿A 140・A 167・A 168などがある。

瀬戸焼は碗A 31がある。

陶 器

関西系・京焼系と堺明石焼系のものがある。

陶器には関西系陶器柿輪皿A35・堺明石焼系擂鉢A8・京焼系陶器碗A11がある。

土 製 品 (第6~8図・写真図版17参照)

土製品にはミニチュアと面子がある。ミニチュアには人物A24・狐A20の2点がある。面子は瓦を打ち欠いて転用したA4・A93・A108・A145・A146の5点がある。

【第2面】(第9~12図・写真図版13~16)

第2面の出土土器は大半が堀からのものである。堀出土の遺物はSF01最下層・同上層・SF01(層位不明)・SF02上層・中層・下層・SF03下層・同上層に分けて報告した。なお、堀出土土器は有岡城期に留まるのではなく、17世紀後半ごろまでの土器を含んでいた。また、SF3では上層に一部18世紀後半以降の遺物を含んでおり、近世期にも堀の上層は搅乱を受けたようである。

土 師 器

土師器皿・堀・擂鉢・羽釜がある。

皿はすべて手づくね皿である。いわゆる京都系土師器が大半である。京都系土師器にはA70~A78・A94~A102・A110~A126・A154~A157がある。この他、手づくね製品であるが粗製のものにA33・A34・A79・A127がある。さらに極小の製品にA158がある。

堀はA36・A37・A81・A82・A103・A132がある。A81・A82は口縁部外面をナデて突帯の痕跡を残す。外面の平行タキも体部下半に限られるが顯著に施されている。A36・A37は突帯がなく口縁部を丸くおえる。外面の平行タキはほとんど消されている。A103は口縁部の破片である、わずかに口縁部外面に凹線状のナデを観察できるので前者に近い製品であろう。A132は口縁部が大きく外反する個体である。

羽釜はA129・A130・A177の3個体がある。A129は有段羽釜で内面に板なでの痕跡を残す。A130は外開きの体部をもち、鋸を上方に伸ばす、内面には板ナデを観察する。A177は口縁部の破片である。

擂鉢はA131がある。口縁部周辺の省略が進んだ個体で、底部が大きく、体部が丸く内湾しながら立ち上がる。外面には平行叩きが観察される。

瓦 器・瓦質土器

瓦器碗・瓦質土器羽釜・火鉢・蜀台がある。

瓦器碗はA174がある。内面に平行暗文のある個体であるが、ミガキは粗く観察できる程度である。

羽釜はA159・A175・A176の3点を図化した。火鉢はA104の1点、風炉はA147・A148の2点がある。蜀台はA80がある。

磁 器

磁器には中国製の製品と初期伊万里がある。中国製のものは16世紀後半~17世紀前半頃のものが中心である。白磁小杯・同皿・染付小杯・同碗・同皿・青磁碗・同鉢・三彩壺などがある。

白磁は碗A7・皿A105・A133がある。

染付は小杯A13・136、碗A137~A139・A162がある。このうちA139は蓮子碗タイプ(碗C類)で外面に花文を描く。皿A161はB類の皿で外面に花文を描く。A39は口縁部が内湾しながら立ち上がる。

青磁は碗A84・A85・A88・A141・A171・A173・鉢A142・A143・A178がある。

三彩壺A89は中国南方産のもので、華南三彩である。国内では19世紀前半に出土することが多い製品で混入の可能性がある。同じくA160は翡翠釉を施した壺で、17世紀前半頃に出土する製品である。

初期伊万里は皿A40・60がある。2点とも底部の小破片で、底部径が小さく、高台には砂が付着する。内面には粗い草花文様を描き、内面底体部の境に2重の囲線を施す。

陶 器

陶器には備前焼擂鉢・甕・壺、丹波焼壺・甕・擂鉢、唐津焼碗・皿、肥前系半磁器碗、瀬戸美濃焼鉢・織部焼向付・天目碗、信楽焼壺がある。

備前焼は擂鉢A46・A90・A91・A149～A153・A164・A165・A180、甕A43～A45・A92・A163・A181、壺A106・A172がある。擂鉢は上方に拡張し口縁端部を尖らせておえるA91・A180、大きく拡張して丸くおえるないし端面をもつA46・A90・A149・A150、口縁部を縁帯状にして外面に四線状のナデを施すA152・A153・A164・A165などがある。15世紀から16世紀代の製品である。甕は楕円形の玉縁となるA92・163、玉縁外面に凹線状のナデがないし凹線を持つA43～45がある。擂鉢と同じく15世紀～16世紀のものである。壺A106・A172はどちらも小型のもので16世紀代のものである。

丹波焼は擂鉢A50～A57、壺A49・壺A182がある。丹波焼擂鉢は御目が1本描きのものではなく、口縁上面が尖り内面に段をもつA51・A52・A53・A54、口縁内面がやや窪むA50、口縁部を上方に拡張するA55がある。いずれも17世紀前半の製品である。

瀬戸美濃焼は天目碗A86・87・144、鉢A61、織部焼向付A68がある。

信楽焼は壺A47がある。

唐津焼は碗A38・皿A41・A42、刷毛目唐津皿A62・A64がある。このほか、肥前系半磁器碗A63・65がある。時期は17世紀代のものである。

【瓦】(第12～14図、写真図版17参照)

第1面の瓦には軒丸瓦A186～A188、軒棟瓦A189・A190、丸瓦A191・A192、平瓦A194～197、埠A193がある。軒丸瓦A186～188は大きな珠文と幅広な巴文をもつ。丸瓦A191・A192は凹面に棒タタキを観察する。

第2面の瓦には軒丸瓦A183～185の3点がある。すべてSF 1からの出土で小さな珠文で、巴文も尾部が長くのびている。

【金属製品】(第14図、写真図版17参照)

金属製品は、錢貨、刀子が出土した。

錢貨 錢貨のうち、國化できたのは7枚である。本邦錢と渡来錢があり、渡来錢はすべて北宋錢である。元豐通寶AI4、元祐通寶AI5、熙寧元寶AI6が出土している。

本邦錢はすべて寛永通寶である。寛永通寶は1636(寛永13)年から1781(天明元)年までの145年の間に渡って各地で鋳造された。鋳造期間は一般に3期に大別されている。1期は1636年～1659(万治2)年、2期は1668(寛文8)年～1683(天和3)年、3期は1697(元禄10)年～1747(延享4)年である。1期に鋳造されたものを古寛永、2期に鋳造されたものを背面に「文」の字があることから文錢、3期のものを新寛永とそれと称している。AI1・AI7は古寛永に、AI2・AI3は新寛永に分類される。

工具 AI8は刀子と考えられる。切先と茎の部分を欠損している。

【石製品】(第14図参照)

AS 1は五輪塔の空風輪である。花崗岩製で残存部分の高さ32cmを測る。下部に火輪への挿入部の突起が残る。

3. 中世以前の遺物 (図版8・9参照)

今回の停車場線では各地点で古墳時代の遺物も散見されるが、A地区でもわずかであるが出土している。いずれも混入遺物であるが2点を図化した。

A109は須恵器杯身である。立ち上がりが高く、底部のヘラ削りも丁寧である。A69は円筒埴輪の破片である。埴周辺の部分で器表面は荒れて調整を観察することができない。

4. 小結

江戸時代後半から近代までの第1面と鎌倉～近世初頭の第2面の遺構を調査した。

第1面は西側に遺構が集中する。シジミ・アカガイの貝類や陶磁器片が捨てられた廐棄土坑（SK21・25・26）や脇衣壺も検出された。この状況から周辺は道路面ないし屋敷地の前庭的な場所であったことが推定され、A地区第1面は18世紀後半になって遺構が検出され始めることから、周囲の開発はこの時期になってようやく始められたと考えられる。

第2面では大半の部分が堀で占められており、屋敷や建物などの遺構の詳細は明らかにできなかった。堀はSF 1がC地区から続きA地区で東に屈曲し、調査区外に伸びている。この堀は周辺の調査の状況と合わせて、主郭域前面において小空間を形成した堀と推定されている。ちなみに主郭域の堀は幅10m以上のもので規模差において有岡城跡内で最大の規模を有するが、SF 1はこれに次ぐもので大溝筋（J地区）の堀1と同規模と推定される。

SF 1の西側にはSD 5がある。通路確保のため大半が調査されていないが、この溝との間には東西方に向 SF 2・4とSF 3を検出した。そして、SF 2・4とSF 3の間に2.5mの開口部が存在し、南前面にはSD 3が南北を塞いで検出された。

これらの掘・溝は開口部を虎口として北側を区画した施設と推定される。西側の区画は不明確であるが、D地区的柵などとともに主郭外周域の区画を形成した遺構と考えられる。これらの北側に検出されたSD 1（B地区SD03）も平行して掘削されるが、状況から考えるとSF 2・4とSF 3に先行する区画である。一方、これらの柵や区画溝は遺物から18世紀後半になって埋められており、このことからすると一帯の開発が、調査区以西よりも遅れて始まったことが考えられる。

第2表 A地区遺物観察表1

番号	出土地点	種別	基準	諸量 (cm)			成形・調整法の特徴・文様	備考
				口径	器高	底径		
A1	SK09	青磁樂片	第	—	(4.25)	5.30	内面に込み五弁化、高台内面に模様	肥前系
A2	SK07	染付	第	(9.90)	5.40	(4.90)	丸鉢。外面部花文。無い若器に小さい縦条台	肥前系
A3	SK07	染付模様	皿	(12.30)	(3.40)	(7.25)	丸鉢。内面各部グリ版に雲を描く。外側は、見込み五弁花	肥前系
A4	SK07	丸	皿子	長(5.06)	幅(4.80)	厚(4.45)	瓦を打ち大きく	
A5	SK09	染付	碗	(9.90)	5.30	(4.00)	外面部花文。無い若期に小さい縦条台	肥前系
A6	SK23	白磁	碗	9.90	6.00	3.95	小さな縦条台を持つ	肥前系
A7	SK21	白磁	碗	—	(1.40)	(5.85)	高台内露筋。西台周邊窓いケズリ。(中世)	中国製
A8	SK06	海螺	錐体	26.60	13.40	(15.85)	内面直彎な脚部、口脚側に凹痕	唐・明石舟
A9	SK25	土器器	碗	(10.30)	2.10	—	手づくね、内面・口縁外側を模ナゲ、外脚部下に指痕痕跡	
A10	SK25	土器器	小皿	9.95	2.0	—	手づくね、内面・口縁外側を模ナゲ、外脚部下に指痕痕跡	幻日皿
A11	SK25	施釉陶器	碗	5.80	4.45	4.35	内面直彎文	肥後系
A12	SK25	染付	碗	—	(6.00)	—	外面部花文	肥前系
A13	SK25	染付	碗	11.00	5.55	4.60	丸鉢。外面に墨文直彎に描く	肥前系
A14	SK25	染付粗器	大皿	18.80	5.30	6.10	内面直彎化した花文。見込みコンニャク印の五弁花	肥前系
A15	SK25	十脚器	火鉢	(21.30)	15.60	(18.80)	高台と脚持	
A16	SK25-26	青磁	碗	11.75	5.00	3.80	高台部周邊模様	内野山系
A17	SK26	染付模様	碗	(16.30)	4.95	(4.20)	丸鉢。外側に墨文直彎を描く	
A18	SK27	瓦質土器	火鉢	長(5.40)	—	岸(2.35)	角部の破缺	
A19	SK27	白磁	皿	(10.20)	(2.80)	—	薄手の手つき	
A20	SK27	土器品	【ニチュエ】長(5.85)	幅(4.65)	厚(2.50)	型押し・成形・施		
A21	SK28	十脚器	皿	9.60	1.60	手づくね、内面・口縁外側を模ナゲ、外脚部下に指痕痕跡	灯明皿	
A22	SK28	染付	皿	—	(2.55)	(5.70)	善的。	肥前系
A23	SK28	染付	皿	7.10	2.80	2.15	内面にかき丸をもつ。火井部に模開山水画	肥前系
A24	SK28	上乳器	人形	16.90	5.40	厚(4.60)	厚脚・成形・人形	
A25	SK28	土師器	火鉢	(21.00)	8.55	(20.75)	厚手の模様。口脚部上縁に雲を描つ	
A26	堆立蓋	七脚器	大円筒	—	(17.60)	(13.60)	口縁部を久く。行脚の腰と蓋全体で横模みの痕跡が残る	
A27	P24	十脚器	灯明台	9.30	4.70	(6.15)	手づくねで模開山水画が盛り残る	
A28	P24	染付器	水瓶	—	(4.30)	5.40	赤褐色の新品种と書き下す。水滴などに描かれたものか	
A29	SK23	土器器	瓶	10.00	2.15	手づくね、内面・口縁外側を模ナゲ、外脚部下に指痕痕跡		
A30	SK23	土器器	瓶	(16.50)	(2.00)	—	手づくね、内面・口縁外側を模ナゲ	
A31	SK36	染付模様	錐	(14.30)	5.00	(4.20)	内面に花文。着物袋。仙芝祝寿文。18C中一火	肥前系
A32	P24	染付	皿	(14.00)	4.15	(8.70)	柳葉模様。内面花文。内腹模様。純の目高台。高台内湯湯	肥前系
A33	SP 1 下唇	土器器	皿	(12.35)	(2.40)	手づくね、内面・口縁外側を模ナゲ		
A34	SP 1 下唇	土器器	皿	(11.10)	(2.65)	手づくね、内面・口縁外側を模ナゲ	幻明皿	
A35	SP 1 下唇	陶器	皿	(11.20)	(2.15)	施釉陶器	幻明皿	
A36	SP 1 下唇	土器器	錐	22.20	(5.10)	外脚部半平行タキ		
A37	SP 1 下唇	十脚器	錐	(9.6.10)	(6.10)	外脚部半平行タキ		
A38	SP 1 下唇	唐津燒	純	—	(4.06)	(3.3)	高台周辺クリヤ底盤	
A39	SP 1 下唇	染付	皿	(12.40)	2.80	(7.00)	内面二輪脚丸と二輪脚錐。見込み植物ないし野菜圖	中国製
A40	SP 1 下唇	染付	皿	—	(1.40)	(5.60)	透脚部、両方に砂金付	初期伊万里
A41	SP 1 下唇	唐津燒	純	—	(2.05)	(2.60)	高台周辺クリヤ成型	
A42	SP 1 下唇	唐津燒	皿	—	(2.60)	(4.80)	高台周辺クリヤ底盤	
A43	SP 1 下唇	假面頭	錐	長(8.70)	—	伝承した口縁部。口縁部に凹線模のナゲ	V眉	
A44	SP 1 下唇	唐前燒	純	長(6.70)	—	伝承した口縁部。口縁部に凹線模のナゲ	V眉	
A45	SP 1 下唇	唐前燒	錐	—	(8.80)	伝承した口縁部。口縁部に凹線模のナゲ	V眉	
A46	SP 1 下唇	唐前燒	錐	(29.00)	(7.10)	上方に笠張りした口縁部	V眉後半	
A47	SP 1 下唇	假楽器	森	(16.40)	(7.20)	ハラの葉に廣く口縁部。口縁部上縁に雲を持つ		
A48	SP 1 下唇	丹波燒	錐	(36.60)	(5.60)	口縁内面に絞を持つ。楊枝の脚部		
A49	SP 1 下唇	丹波燒	森	(14.60)	(4.45)	口縁内面に絞を持つ。楊枝の脚部を施す		
A50	SP 1	丹波燒	錐	—	長(13.90)	口縁内面に段を持つ。楊枝の脚部を施す		
A51	SP 1	丹波燒	錐	—	(5.35)	口縁部内面に段を持つ。楊枝の脚部を施す		
A52	SP 1	丹波燒	錐	—	(5.00)	口縁部内面に段を持つ。楊枝の脚部を施す		
A53	SP 1	丹波燒	錐	—	(4.35)	口縁部内面に段を持つ。楊枝の脚部を施す		
A54	SP 1	丹波燒	錐	—	(4.35)	口縁部内面に段を持つ。楊枝の脚部を施す		
A55	SP 1	丹波燒	錐	(25.50)	(3.60)	上方に笠張りした口縁部		
A56	SP 1	丹波燒	錐	(35.60)	(4.95)	上方に笠張りした口縁部		
A57	SP 1	丹波燒	錐	—	(7.60)	高脚部。外側に指痕痕跡		
A58	SP 1	陶器	錐	(36.90)	(15.45)	弧状の外側に凹縫を持つ口縁部。内面は横状の脚部を密に施す	華・明石系	
A59	SP 1	瓦質土器	錐	(37.70)	(3.90)	多くの字に折れで外反する白線部。舌呂は平滑に悪く		
A60	SP 1	染付器	皿	—	(2.30)	(6.00)	内面模文と二重脚部	初期伊万里
A61	SP 1	撇口燒	錐	—	(1.65)	(11.60)	底部に三足付ぐ	鹿戸焼
A62	SP 1	迎津燒	大皿	—	(3.20)	体部片。内面毛目文様	清津燒	

第3表 A地区遺物観察表2

番号	出土地点	種類	器種	法 量 (cm)			成型・調整技術の特徴・文様	備考
				口径	器高	底径		
A65 SF 1	陶器	碗	—	(3.60)	(4.70)	手摺器碗		肥前系
A64 SF 1	青磁	瓶	—	(2.85)	(6.30)	内笠部の目に神面を取り		肥前系
A65 SF 1	陶器	碗	(8.40)	(4.65)	—	手摺器碗		肥前系
A66 SF 1	街付罐	碗	(9.40)	6.96	4.49	外腹面縁と身の字文		肥前系
A67 SF 1	尖付唇口	碗	長(5.20)	幅(5.00)	厚(0.75)	外第一竪手火		肥前系
A68 SF 1	瀬戸焼	舟付	—	(1.30)	—	底部片		織田焼
A69 SF 1	土師質	埴輪	—	(5.20)	—	頭部凹面の破片		円筒埴輪
A70 SF 2 上層	土師器	小皿	(7.40)	1.25	—	手づくね。底全体削平脚		灯明皿
A71 SF 2 上層	土師器	小皿	(7.75)	(2.00)	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A72 SF 2 上層	土師器	小皿	7.80	1.80	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A73 SF 2 上層	土師器	小皿	(7.80)	q1.25	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A74 SF 2 上層	土师器	有柄皿	8.00	1.40	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A75 SF 2 上層	土師器	小皿	(7.40)	1.15	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A76 SF 2 上層	土師器	小皿	8.60	2.10	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A77 SF 2 上層	土師器	申皿	(13.20)	2.50	—	手づくね。丸底で内腹面を外反する		
A78 SF 2 上層	土師器	中皿	(13.80)	2.25	(7.30)	手づくね。底全体削平脚で外腹体部下半底復原脚		
A79 SF 2 上層	土師器	上知器	(7.45)	1.40	—	手づくね		灯明皿
A80 SF 2 上層	土師器	有柄皿	(7.05)	(4.30)	—	掌形で手づくね		
A81 SF 2 上層	土師器	瓶	(19.80)	(5.70)	—	口縁部が外方にまわる、底部下部に右上がりの平行タキ		
A82 SF 2 上層	土師器	瓶	(21.90)	(8.70)	—	口縁部が外方にまわる、底部下部に右上がりの平行タキ		
A83 SF 2 上層	土師器	刷毛	(27.90)	(5.30)	—	有段切妻、丸く内側しながら立ち上がる脚部。口縁下端に面を持つ		
A84 SF 2 上層	青磁	碗	(12.90)	(4.35)	—	透かし文鏡		中国産
A85 SF 2 上層	青磁	碗	(13.60)	(5.00)	—	織田様の墨書き文鏡		中国産
A86 SF 2 上層	青磁	天目茶碗	(11.80)	(4.65)	—	口縁片		
A87 SF 2 上層	青磁	天目茶碗	—	(4.45)	—	古く墨書きの遺物		
A88 SF 2 上層	青磁	碗	—	(2.90)	(5.60)	古く墨書きの瓶口		
A89 SF 2 上層	透釉陶器	三脚器	(3.90)	(3.75)	—	丸くくり。中西南北方の製品、缺脚。19世紀前半。(清御朝)		中国産
A90 SF 2 上層	偏前他	種類	(6.10)	—	上方に枕根、下に面を持つ		V期	
A91 SF 2 上層	偏前他	種類	(27.65)	(7.25)	—	上方に枕根し、種類を尖らせる		V期
A92 SF 2 上層	偏前他	種	—	(7.00)	—	口縁部の内面は像形的		V期
A93 SF 2 中层	瓦	瓦子	長(5.30)	幅(4.95)	厚(2.20)	瓦打ちちく		
A94 SF 2 中层	土師器	小皿	(7.40)	1.85	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A95 SF 2 中层	土師器	小皿	(8.20)	1.40	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A96 SF 2 中层	土師器	小皿	(6.80)	1.79	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A97 SF 2 中层	土師器	小皿	7.10	1.60	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A98 SF 2 中层	土師器	小皿	(7.36)	(1.60)	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A99 SF 2 中层	土師器	小皿	(7.30)	1.05	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A100 SF 2 中层	土師器	小皿	7.75	1.80	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A101 SF 2 中层	土師器	小皿	7.70	1.70	—	手づくね。丸底		
A102 SF 2 中层	土師器	小皿	9.25	2.50	—	手づくね。丸底		
A103 SF 2 中层	土師器	瓶	(20.00)	(4.50)	—	L字脚部が外方にまわる、ナデによる凹凸が乱れる		
A104 SF 2 中层	瓦葺屋根	火鉢	(27.40)	(8.95)	—	開口の網状をもつ。口縁部を内方に立ち上げる		
A105 SF 2 中层	白磁	瓶	(11.70)	2.85	(6.05)	種類り皿		中国産
A106 SF 2 中层	青磁	壺	(11.80)	(5.45)	—	口縁部分に口縁部を小さく外方に折る矢跡。		V期
A107 SF 2 中层	瓦葺土器	火鉢	—	(5.05)	—	口縁部外側に2重の網型を立て残し、中に両手を括す		
A108 SF 2 中层	瓦	瓦子	長(5.70)	幅(5.20)	厚(1.90)	瓦打ちちく		
A109 SF 2 中层	須恵器	杯身	(11.80)	(4.70)	—	大きくなり上から丸めたりをもつし、外腹体部下半を圓柱ヘラ削り		
A110 SF 2 中层	土師器	小皿	(7.70)	1.65	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A111 SF 2 中层	土師器	小皿	(7.55)	1.60	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A112 SF 2 中层	土師器	小皿	7.30	1.90	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A113 SF 2 中层	土師器	小皿	(7.90)	1.85	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A114 SF 2 中层	土師器	小皿	7.55	1.80	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A115 SF 2 中层	土師器	小皿	(7.30)	1.40	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A116 SF 2 中层	土師器	有柄皿	(8.80)	1.60	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A117 SF 2 中层	土師器	小皿	(8.90)	(1.60)	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A118 SF 2 中层	土師器	小皿	(8.00)	(1.40)	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A119 SF 2 中层	土師器	小皿	(8.60)	1.70	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A120 SF 2 中层	土師器	小皿	(9.50)	(1.85)	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A121 SF 2 下層	土師器	小皿	(12.80)	(2.20)	—	手づくね。外腹面指痕跡		
A122 SF 2 下層	土師器	瓶	(12.40)	2.10	(5.60)	手づくね。外腹面指痕跡。底全体削平		

第4表 A地区遺物観察表3

番号	出土地点	種別	器種	法 量 (cm)		成形・調整技法の特徴・文様	備 考
				口径	容積		
A123	SF 2 下層	土師器	皿	12.05	2.55	手づくね、外腹指標痕跡留め。底部は切削	
A124	SF 2 下層	土師器	皿	10.40	2.50	手づくね、外腹指標痕跡留め。丸底	
A125	SF 2 下層	土師器	皿	(13.80)	(1.70)	手づくね、外腹指標痕跡留め。底付痕跡削除	灯明Ⅲ
A126	SF 2 下層	土師器	皿	(11.65)	2.60	手づくね、外腹指標痕跡留め。丸底	
A127	SF 2 下層	土師器	小皿	5.35	0.85	手づくね、内腹板ナデ底部	
A128	SF 2 下層	施釉陶器	碗	(14.40)	(4.10)	眞入の美しい施釉	京焼系
A129	SF 2 下層	土師器	司釜	(24.80)	(7.60)	有段司釜、内腹板ナデ	
A130	SF 2 下層	土師器	司釜	(29.50)	(7.30)	有段司釜、内腹板ナデ	
A131	SF 2 下層	土師器	埴輪	(25.70)	(6.00)	口縁部外側をナデして凹凸	
A132	SF 2 下層	土師器	埴輪	(34.10)	(4.80)	口縁部外側、薄作りの体部	
A133	SF 2 下層	白磁	皿	—	(2.20)	端反り加	中国窯
A134	SF 2 下層	白磁	小皿	(7.50)	2.25	(2.20) 端子作り	中国窯
A135	SF 2 下層	白磁	角舟	—	(3.50)	体部の角をもじり、削りだし運び。高台に上の字の墨書き	中国窯
A136	SF 2 下層	白磁	舟付彌脚	—	(3.50)	3.75 外山字墨書きと直描。下平は落文	中国窯
A137	SF 2 下層	白磁	舟付彌脚	(13.70)	(4.20)	外山字アラスカスクと2重垂乳	中国窯
A138	SF 2 下層	白磁	舟付彌脚	(11.50)	(4.70)	内外面に圓彌脚	中国窯
A139	SF 2 下層	白磁	舟付彌脚	(13.60)	3.00	(5.10) 外面に花文と墨書き。内外面墨書き(鏡C版)	中国窯
A140	SF 2 下層	青磁	皿	(11.40)	2.90	4.90 口縁部舟形、体部に花弁を表現	中国窯
A141	SF 2 下層	青磁	皿	(11.40)	(3.45)	成形後墨書き	中国窯
A142	SF 2 下層	青磁	鉢	—	(2.95)	(6.90) 厚手の製品。体部に花弁	中国窯
A143	SF 2 下層	青磁	鉢	—	(4.45)	厚手の製品。体部に花弁、口縁部を外反させ上方につまむ	中国窯
A144	SF 2 下層	東洋美術品	天日岡	(11.80)	(5.60)	露筋部に斜りひびきを寄せる	
A145	SF 2 下層	丸	面子	長(5.65)	幅(5.25)	厚(2.35) 瓦を打ち欠く	
A146	SF 2 下層	瓦	面子	厚(3.35)	幅(6.85)	厚(1.90) 瓦を打ち欠く	
A147	SF 2 下層	瓦	瓦伊	(24.20)	(15.85)	瓦型の腰部を打ち、口縁部を上方に立ち上げる。脚部に一直重突	
A148	SF 2 下層	瓦質土器	瓶	—	(9.30)	(26.20) 瓶形の胸部で、低・高台をもつ	
A149	SF 2 下層	焼前焼	盆鉢	(23.00)	(4.80)	口縁部を工芸に近似する	
A150	SF 2 下層	焼前焼	縁鉢	(28.30)	(5.75)	口縁部を上方に拡張する	
A151	SF 2 下層	焼前焼	縁鉢	厚(9.20)	幅(13.00)	口縁部を上方に拡張する	
A152	SF 2 下層	焼前焼	縁鉢	(20.30)	(9.60)	口縁部を上方に拡張する	
A153	SF 2 下層	焼前焼	縁鉢	(29.40)	11.90	(10.00) 口縁部を上方に拡張する	
A154	SF 3	土師器	小皿	(8.05)	1.40	手づくね、外腹指標痕跡留め	
A155	SF 3	土師器	皿	8.90	2.05	手づくね、外腹指標痕跡留め	灯明Ⅲ
A156	SF 3	土師器	小皿	(7.40)	1.15	手づくね、外腹指標痕跡留め	
A157	SF 3	土師器	皿	9.75	2.40	手づくね、外腹指標痕跡留め	灯明Ⅲ
A158	SF 3	土製品	ミニチュア	2.40	2.20	手づくね	
A159	SF 3	瓦質土器	羽釜	(28.60)	(6.10)	有段羽釜、上方に伸げる肩	
A160	SF 3	三彩	蓋	—	(2.40)	河東三彩、藍乗車。(17世紀前半)	
A161	SF 3	染付彌脚	皿	—	(1.50)	場所: 里山(高岡城)	中国窯
A162	SF 3	染付彌脚	皿	(13.70)	(3.60)	内外面に圓彌脚	中国窯
A163	SF 3	燒前焼	器	高(5.70)	—	福岡の白山	日本期
A164	SF 03 上層	焼前焼	縁鉢	—	(7.05)	口縁部を上方に拡張し、外面に凹面を施す	V期
A165	SF 03 上層	焼前焼	縁鉢	(24.70)	(6.55)	口縁部を上方に拡張し、外面に凹面を施す	V期
A166	SF 03 上層	塔-明石舟	縁鉢	(30.80)	(9.50)	密に封緘を施す	
A167	SF 03 上層	青磁	皿	(12.20)	3.50	(6.80) 口縁部花	肥前系
A168	SF 03 上層	青磁	皿	長(3.30)	幅(6.80)	口縁部花	肥前系
A169	SK31	森造	小瓶	(6.70)	6.35	(4.00) ピラ巻け瓶	
A170	SD 1	土製品	ミニチュア	長(4.00)	幅(5.10)	塑型し成型、舟	
A171	SD 1	骨組	鉢	—	(3.20)	(4.10) 高台舟底露頭	
A172	SD 1	骨組	皿	(11.95)	(5.30)	底させる口縁部に小さく丸い玉縁	V期
A173	SD 2	骨組	鉢	(2.15)	(4.90)	内間に凹みに平行彫文	
A174	SD 2	瓦形	鉢	(14.95)	5.55	4.60 内面凹込みに平行彫文	
A175	SD 5	瓦質土器	羽釜	(16.00)	(4.00)	口縁部直に退化した尖角。内面板ナデ、外間に指標痕跡	
A176	SD 5	瓦質土器	羽釜	(20.30)	(7.20)	口縁部直に退化した尖角	
A177	包含層	土師器	羽釜	—	(6.10)	匂させる体部、方向の調を持つ	
A178	包含層	片柄	鉢	—	(3.60)	口縁部片、口縁輪花。	
A179	包含層	高・美濃燒	天日柄	(11.80)	6.20	露筋部に铁錠蓋	
A180	包含層	埋前焼	鉢	—	—	上方に抵抗し、口縁部を尖させておえる	晩期後半
A181	包含層	埋前焼	器	(26.70)	(7.40)	体部片。土手の粒土	V期
A182	P41	丹波燒	器	(24.80)	(7.50)	退化したN字状口縁	14C代

第5表 A地区遺物観察表4

瓦類												
番号	出土場所	種別	器種	法 量 (cm)			成型・調製方法の特徴・文様			備考		
				長さ	幅	厚さ						
A183	SF019中層	瓦	折丸瓦	高(9.35)	—	厚(2.80)	丸巻き巴文			中世		
A184	SF019最下層	瓦	折丸瓦	高(5.65)	—	厚1.45	丸巻き巴文			中世		
A185	SF01中層	瓦	折丸瓦	高(7.05)	—	厚1.15	丸巻き巴文			中世		
A186	宝ヶ塚	瓦	折丸瓦	長(10.25)	—	厚2.35	丸巻き巴文			近世		
A187	宝ヶ塚	瓦	折丸瓦	高(4.30)	長(5.70)	厚1.85	丸巻き巴文			近世		
A188	宝ヶ塚	瓦	折丸瓦	高(7.10)	長(3.05)	厚2.25	丸巻き巴文			近世		
A189	SK 6	瓦	折平瓦	高4.30	長(5.45)	厚3.85	瓦文の中心縁りと1反軒の唐草文			近世		
A190	SK 7	瓦	折平瓦	高(3.15)	幅(12.00)	厚3.85	瓦文の中心縁りと2反軒の唐草文			近世		
A191	SK 6	瓦	丸瓦	長(13.55)	幅14.45	高6.35	凹面模タスキ、千溝の鏡片			近世		
A192	P24	瓦	丸瓦	長(22.75)	幅13.65	高6.00	凹面模タスキ、工縫の鏡片			近世		
A193	SD 1	瓦	博	高28.30	幅(15.40)	厚2.20	凹面ヘラナゲ			中世		
A194	SF 2 中層	瓦	半瓦	長(17.00)	幅(12.00)	厚(2.95)	凹面模ナガ底跡			中世		
A195	SF 2 上層	瓦	半瓦	長(12.90)	幅(15.30)	厚2.05	凹面模ナガ底跡			中世		
A196	SF 2 下層	瓦	半瓦	長(10.80)	幅(9.80)	厚1.60	凹面模ナガ底跡			中世		
A197	SK28	瓦	半瓦	長(17.05)	幅(9.80)	厚3.75	凹面模ナガ底跡			中世		
A198	P51	瓦	戸口瓦	長(11.50)	幅(5.75)	高(5.55)	戸口瓦			近世		
A199	SF 1 中層	瓦	丸瓦	長(12.30)	幅3.75	厚1.75	丸瓦			近世		
金属製品										備考		
報告書 番号	地区	土 壤 面	遺構名	種 別	品 目	材種	初採年 鉄鑄錠年	時代	法 量 (cm)			
									長さ	幅	厚さ	
A11	6区		SK23	鍛製品	鐵貨	寛永通寶	古		2.2	2.2	0.1	
A12	3区	瓶下層	SF02	鍛製品	鐵貨	寛永通寶	新		2.3	2.3	0.1	
A13	6区	包含層		鍛製品	鐵貨	寛永通寶	新		2.4	2.4	0.1	
A14	6区	雨壁	サブトレ	鍛製品	鐵貨	元豐通寶	1678	北宋	2.3	2.2	0.1	
A15	3区	下層	SF02	鍛製品	鐵貨	元祐通寶	1086	北宋	2.4	2.4	0.1	
A16	6区	下層	SF02	鍛製品	鐵貨	熙寧通寶	1068	北宋	2.4	2.4	0.1	
A17	5区	第1面		鍛製品	鐵貨	寛永通寶	吉		2.6	2.6	0.1	
A18	3区	下層	SF01	鉄製品	刀子				7.0	1.8	1.3	
石製品										備考		
番号	出土場所	種別	器種	法 量 (cm)			成型・調製方法の特徴・文様					
				長さ	幅	厚さ				五輪等		
AS1	SF 2	石製品	石等	28.10	19.90	19.60	空気輪・花崗岩等					

第2節 C地区

1. 遺構

東端に位置する調査区で南側がA地区、西側がB地区である。

【第1面】(第15図、写真図版18)

土 坑

SK07 調査区中央部北側で検出した。SK13の西側に位置する。一部は調査区北側へ拡がっており、全体を検出することはできなかった。平面形は隅丸方形をなすものと考えられ、長軸方向で2.23m検出し、その直交方向で2.55mを測る。横断面は箱形をなし、最深部における検出面からの深さは68cmを測る。埋土は暗褐色土1層からなり、炭・焼片が多量に含まれていた。

銅銭（寛永通宝）が1枚出土している。

SK13 調査区中央部で検出した。SK07の東側に位置する。当遺構の南側は、後世の搅乱を受け、全体を検出することはできなかった。平面形は、隅丸方形を呈するものと考えられ、長軸方向で1.0m検出し、その直交方向で1.10mを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは12cmを測る。

銅銭（寛永通宝）が1枚出土している。

【第2面】(第15図、写真図版18)

土 坑

数基検出したが、時期を特定できるような遺構は検出されていない。

溝

SD02 調査区東部で検出した。全体を検出することはできず、多くは北側へ拡がっているものと考えられる。このため、溝として報告するが、土坑等になる可能性も考えられる。検出した範囲では、平面形は半円形を呈する。検出面における最大幅（東西方向）は8.45mを測り、その直交方向で2.90m検出した。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは56cmを測る。埋土は、上から、暗灰色土、暗灰色粘土が堆積していた。

SD03 調査区東部で検出した。東西方向から西側で南北方向にほぼ直角に屈曲する。東西方向部分は南側A区にまたがって検出されている。東西方向で21.0m、南北方向で2.80m検出した。横断面はU字形をなし、A区での成果を合わせた検出幅は20mを測る。最深部における検出面からの深さは45cmである。

SD05 調査区東端部で検出した。SD06の東側に位置する。南北方向にのびる溝で、西側の肩部のみ検出できた。また、南北両端についても、調査区外まで伸びている。検出面における幅は、5.90m～5.60mを検出した。横断面は箱形をなすものと考えられ、最深部における検出面からの深さは4.80mを測る。

埋土は大きく2層からなる。上層から江戸時代の土器が出土しており、当該期に埋められたものと考えられる。なお、下層から室町時代の土器が比較的多く出土している。

SD06 調査区東部で検出した。SD05の西側に位置し、SD05に一部切られている。東西方向から東端部

で南北方向に屈曲する溝で、東西方向はSD03につながるものと考えられる。南側はA区にまたがり、北端は調査区外まで伸びている。南北方向部分での検出面における幅は3.15mを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは45cmを測る。

SD08 調査区西部で検出した。造構の大半が南側へ拡がっており、一部を検出したにとどまる。断面形は箱形をなし、検出下範囲内での最深部における検出面からの深さは97cmを測る。

2. 遺 物

【第1面】(第16図~19図、写真図版19~25)

土器・陶磁器

C地区から出土した土器・陶磁器には、種別では土師器・瓦質土器・無釉陶器・施釉陶器・白磁・青磁・染付磁器などがある。

A 土師器

土師器には器種別には皿・鍋・焼烙・焼塩壺がある。

皿 皿はいずれも、非ロクロ成形である。形態から、底部が平底のもの(C4・C6・C12・C13・C23・C24)と丸底のもの(C7)とに大きく分類できる。平底のものには、底部を指押さえでわずかに上方に突出させるもの(C6・C13)と突出させないもの(C4・C12・C23・C24)がある。底部を突出させないものは、底部と体部の界が不明瞭なもの(C4・C23・C24)と内面の底部と体部の界に凹部をもつもの(C12)に細分される。C8・C12はいずれも京都系土師器で、16世紀代に比定される。

鍋 C14は外面の口縁部と体部の界に退化した断面三角形状の錫を貼り付けるもので、体部外面には平行叩き目が残る。長谷川分類播磨型I C類相当で、15世紀後半~16世紀初頭に比定できる。C15はいわゆる足鍋の脚部である。全面にナデ調整を施す。

焼 烙 C26は丸底で体部は僅かに内傾する。長谷川分類焰烙形IVB類相当で、17世紀中頃に比定される。

焼塩壺 C27・C28は型作り成形で、内面には布目压痕が残る。いずれも、体部外面に刻印が認められるが、C28は「御口塩師 塚添伊織」の銘文が読める。

B 瓦質土器

瓦質土器に羽釜と火舎がある。

羽 釜 C16は外面の口縁部と体部の界に断面長方形状の幅の広い錫を貼り付け、体部外面にはヘラケズリ調整が施される。16世紀後半代に比定される。

火 舎 C29は平底で底部に切頭円錐状の脚を貼り付ける火舎である。体部は僅かに外傾し、口縁端部を内側に引き出す。

C 無釉陶器

無釉陶器には器種別では、擂鉢・鉢・甕・壺がある。

擂 鉢 擂鉢には產地別では備前焼と丹波焼のものがある。

備前焼 備前焼と考えられる擂鉢は、口縁部の形態から、口縁部を斜め方向に切り、口縁部下端を外方につまみ出すもの(C55)、口縁部が上下に拡張し、縁帶をもつもの(C1・C17・C22)、口縁部が上下に拡張し、縁帶をもち、口縁部外面に凹縦を巡らせるもの(C9)の3つに大きく分類できる。

C55は備前焼III期相当で14世紀代に、C1・C17・C22はIV期相当で15世紀代に、C9はV期相当で16世紀

代にそれぞれ比定される。

丹波焼 丹波焼と考えられる擂鉢は、内面の擂目の施文方法からヘラ描きのもの（C38）とクシ描きのもの（C2・C32～C38）とに大きく分類できる。さらにクシ描きのものは口縁部の形態から口縁部が上下に拡張し縁帶をつくるもの（C33～C35）、口縁部が断面三角形状を呈するもの（C37）、口縁部の上面が水平に端面をもつもの（C36）に分類できる。さらに口縁部に縁帶をつくるものは外面に凹線を施すもの（C33・C35）と施さないもの（C34）に細分される。C32・C35は大半分類E類相当で、18世紀前半に、C34はF類相当で18世紀中頃に、C36はG1類相当で17世紀中頃に、C37はB類相当で17世紀前半に、C38は長谷川分類IA2類相当で16世紀末～17世紀初頭にそれぞれ比定される。

甕 甕には底地別では備前焼と丹波焼のものがある。

備前焼 備前焼と考えられる甕にはC21・C39がある。C39は腹部の細片で詳細は不明であるが、C21は口縁部の形態から備前焼IV期相当のものと考えられ、15世紀代に比定される。

丹波焼 C30は頸部が短く直立し、口縁部は水平方向に拡張し、体部外面に凹線を巡らすもので、長谷川分類のIVA2類に相当し、18世紀前半代の時期が与えられる。

壺 壺は備前焼の壺（C31）が1点出土している。頸部が短く直立し、口縁部は玉縁状に肥厚するもので、17世紀前半代に比定される。

鉢 鉢（C40）は平底で体部は中位で大きく屈曲してほぼ直上に延びるもので、丹波焼と考えられ、火入れとして使用された可能性がある。

D 施釉陶器

施釉陶器には器種別では碗・皿・鉢・盤があり、いずれも肥前系と考えられる。

碗 碗は形態的特徴及び施釉技法から、端正な形態をもつ肥前系京焼風陶器碗（C19・C42）と白泥を横方向に刷毛塗りした後、前面に透明釉を施すいわゆる刷毛目唐津碗（C41・C43）とに分類できる。いずれも17世紀後半～18世紀前半代の所産である。

皿 皿には、底部外面は露胎で内面に砂目跡が4箇所残る砂目の皿（C45）と、端正な輪高台を持ち、高台に「木下跡」の銘をスタンプする肥前系京焼風陶器皿（C44）がある。C45は17世紀前半代に、またC44は17世紀後半～18世紀前半代にそれぞれ比定される。

鉢 C11は高台は幅が広く低く、口縁部は玉縁状に肥厚する。外面に白泥を刷毛で横方向に波状に施し、さらに全面に灰釉を施すいわゆる刷毛目唐津鉢で17世紀後半～18世紀前半代に比定される。

盤 C46は内面に草花文・幾何学文をヘラで描き、そこに白泥を充填して施文するいわゆる三島唐津で、17世紀後半～18世紀前半代に比定される。

E 白 磁

C54は体部の下半以下は露胎で、底部内面は蛇ノ目状に釉ハギする粗製の白磁皿である。肥前系波佐見窯の製品と考えられ18世紀前半代の時期が与えられる。

F 青 磁

C8は外面に線描きの細蓮弁文を施し、劍頭と蓮弁の体部とが一致する。龍泉窯系青磁細蓮弁文碗で、16世紀前半代に比定される。

G 染付磁器

染付磁器には碗・皿・盤がある。

碗 碗（C49）は外面に一重網目文を模倣で施文する肥前系染付磁器で、17世紀後半代の時期が考えら

れる。

皿 皿には中国製のものと肥前産のものがある。

中国製 C18は草花文を施し、器面には虫喰いが見られ、高台裏には砂が附着する。C20は基筈底で内面に芭蕉文を描く。いずれも16世紀後半代の明青花皿である。

肥前系 C50は高台は断面三角形状を呈し、内面には草花文を描く。高台疊付には砂が附着する。C51は草花文を描く。C52は高台が断面台形状を呈し、疊付には砂が附着する。C53は底部の器壁が厚く、内面に牡丹唐草文・半截菊花文を描く。C50・C52は、いわゆる初期伊万里で17世紀前半代に、C51・C53は、くらわんか手の粗製の皿で18世紀後半代にそれぞれ比定される。

盤 C48は器壁は非常に厚く、高台は幅が広く低く、疊付には砂が附着する。内面に淡い吳須で雲龍文を描く。いわゆる初期伊万里で17世紀前半代に比定される。

【第2面】（第20図）

1. 石製品

SD02とSD03から五輪塔の一部が出土している。

SD02から出土したCS 1は、空輪・風輪部分が出土している。一石からなるもので、空輪高12.8cm、風輪高10.9cmを測り、全体で23.7cm残存する。SD03から出土したCS 1は一部が残存している。高さ24.2cm、径30.95cmを測る。

【金属製品】（第20図、写真図版26参照）

金属製品は鎌、鏡前が出土している。鎌（CI1、CI2）CI1は、刃先と基部が欠損している。CI2は、先端のみ残存する。鏡前（CI3）平面形が「四」の字を横に延ばした形状である。弦部が牡命具に取り込まれている。合田芳正氏の牡金具の分類のV群に属する。

引用・参考文献

- (1) 兵庫県教育委員会 2004 「兵庫津遺跡 II」
- (2) 伊丹駒町研究会 2003 「伊丹駒町の陶磁器の様相」
- (3) 伊野近富 1995 「土師器」「概説 中世の土器・陶磁器」 中世土器研究会
- (4) 兵庫県教育委員会 1992 「下相野窯址」
- (5) 長谷川眞 2003 「中世丹波焼の変遷と技術移入・導入」『中近世土器の基礎研究ⅩⅦ』 日本中世土器研究会
- (6) 長谷川眞 2004 「窯場にみる近世丹波焼」『関西近世考古学研究ⅩⅡ』 関西近世考古学研究会
- (7) 九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の編年」
- (8) 堀内秀樹 1996 「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学埋蔵文化財調査室紀要Ⅰ』 東京大学文化財調査室

第6表 C地区遺物観察表1

報告 No	出土場所	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	成形・調整技法等	文様	色調	産地	時期	備考
C1	第1面 無輪陶器	罐	件	(30.1)	(7.9)	—	底部は直筒的に削り上方に延びる。口縁部は上部に弧形、鋸歯状をもつ。内・外表面共コナガ調整。体部外側に指紋・土拂。	—	—	唐前後	15c代	V期
C2	第1面 椎出時	無輪陶器	罐	—	(6.85)	(23.4)	底の陰形の高台を突き付ける。体部は直筒的に削り上方に延びる。内・外表面共コナガ調整。内面 6条1単位の捺目施文。	—	灰赤色	丹波後	—	地上中に砂粒を含む。 出土から見 て刀痕跡か
C3	第1面 P4測定	施輪陶器	壺	18.4	26.6	(13)	平底。底部は内側気泡には口縁部に延びる。腰部は短く直立。口縁部は平方式に調整。上面に高台をもつ。内・外表面共コナガ調整。底部外側は多方角のカット痕跡。内面～口縁部外周は灰釉施文。淡黄緑色に發色。外腹・赤土部を盛出した後、灰釉をかけた上で施釉。	—	暗赤褐色 に発色。	丹波後	16c後半	—
C4	第2面 椎出	土師器	壺	(30.4)	1.8	—	平底。底部と体部の界は不明確。体部は腰や少し削め上方に延びる。口縁部は火炎形。	—	黄褐色	—	—	—
C5	第2面 椎出	条付瓶	瓶	—	(6.7)	(6.4)	高台は比較的幅広く高い。底部の腰部は非常に厚い。体部は内側50mmほど削り上方に延びる。	内面 やや反 り出しで 舟底 型。 口縁部 はコナ ガ調整。 底部外 面 強いコナ ガ調整。	—	墨前系	16c後半	内・外腹 とも 火炎形。 墨前系 から わんかず。
C6	第2面 SD02	土師器	壺	7.9	1.65	—	平底。底部は指紋サエで上方に突出させる。体部は腰や少し削め上方に延びる。口縁部は多少火炎形に收める。内・外表面共コナガ調整。口縁部内外面 強いコナガ調整。	—	浅黃褐色	京都系	—	—
C7	第2面 SD02	土師器	壺	7.25	1.85	—	丸底。体部は腰や少し削め上方に延びる。口縁部は火炎形をもつ。	—	にぶい黄 褐色。	京都系	—	—
C8	第2面 SD02	青磁	瓶	(10.3)	(2.05)	—	体部は削り上方に延びる。口縁部は丸底をもつ。	—	灰青色 に発色。	青磁系	16c代	鹿児島系青 磁 細選井 文瓶
C9	第2面 SD02	無輪陶器	罐	(34.6)	(5.2)	—	体部は直筒的に削り上方に延びる。口縁部は上部に弧形、鋸歯状をもつ。口縁部は上方につまり上げる。内・外表面共コナガ調整。口縁部外側に凹線1条。	—	—	唐前後	16c代	V期
C10	第2面 SD02	無輪陶器	罐	—	(6.05)	(16.4)	平底。体部は直筒的に削り上方に延びる。内・外表面共コナガ調整。体部内面に8条1単位の捺目施文。	—	—	唐前後	—	内面 灰被 り。
C11	第2面 SK07	施輪陶器	鉢	(21.8)	11.6	(10.6)	底は軽が広く低い。体部は内側して削り上方に延びる。口縁部は直筒形に削りする。内・外腹とも灰釉施釉。外腹の体部下部以下無施釉。	—	—	肥前系	17c後半～ 18c前半	網毛白唐 鉢。

第7表 C地区遺物観察表2

報告 No.	出土場所	種別	基盤	口径 (cm)	幕高 (cm)	底径 (cm)	成形・調整技法等	文様	色調	産地	時期	備 考
C12	第2面 SD03	土師器	皿	8.5	1.6	-	平底。体部は織やかに斜め上方に盛り込む。口縁部は丸味をもつ。内外面ともヨコナガ調整。口縁部内・外側 強いヨコナガ調整。体部外側に捲頭压痕。	-	淡青褐色	京都系	16c代	-
C13	第2面 SD03	土師器	皿	7.65	1.4	-	平底。底部をおさえて上方に突き立てる。体部は周辺から斜め上方に盛り込む。口縁部は丸味をもつ。内外面 強いヨコナガ調整。口縁部内・外側 強いヨコナガ調整。体部外側に捲頭压痕。	-	淡黄褐色	京都系	-	-
C14	第2面 SD03	土師器	鍋	(20.8)	5.15	-	体部内壁、口縁部内壁、口縁部 優かに上方につまみ出る。体部と口縁部の高さに斜面三角形孔の追加して縁を貼り付ける。内外面 強いヨコナガ調整。口縁部内・外側 強いヨコナガ調整。体部外側 斜め方向の平行印苷が残る。	-	-	-	16c代	外側 全面 に保形器。 春日川分類 須磨型IC 類。
C15	第2面 SD03	土師器	鉢	(10.35)	壁2.35	-	外周 ナガ壓板。	-	-	-	-	足感の鋭 度。
C16	第2面 SD03	瓦質土器	羽釜	(18)	(6.2)	-	体部は優かに内脣気味に斜め上方に盛り込む。口縁部は上方につまみ出る。縁部を貼り付ける。口縁部外側に浅い凹窓 2条。(準滅して不明瞭)。口縁部下笠に溝、テラ彩。口縁部外側 ヨコナガ調整。体部外側 ヘラケリ押 壓。	-	暗灰色	-	-	-
C17	第2面 SD03	無釉陶器	箱体	(29.2)	(8.2)	-	体部は優かに内脣気味に斜め上方に盛り込む。口縁部は下方に斜面。縁部を貼り付ける。口縁部は上方につまみ出る。内外面 強いヨコナガ調整。口縁部内・外側 強いヨコナガ調整。体部外側 7条(1半径)の捲頭压痕。	-	-	捲頭状	16c代	内腹 縦縫 状に灰被 り。捲頭状 压痕。
C18	第2面 SD03	乗付研器	皿	(11)	(1.9)	-	体部は優かに内脣。口縁部は大きくて上方にひらく。口縁部は丸味をもつ。内外面 等窓 2条。	やや深い只張 で草花文を描 く。	やや青み を帯びた 灰白色	明治花瓶 器	16c代	器底に斑塗 いあり。
C19	第2面 SD03	無釉陶器	鍋	-	(2.1)	(5.4)	高台は端正な楕円台。 内腹一面台盤 透明釉施釉。外腹の高台以下 施釉。	-	淡黄褐色 に発色。	肥前系 豆皿風陶 器	17c後半	底 部 外 壁 「口」字スタ ンプ。
C20	第2面 SD03	乗付研器	皿	-	(1.6)	(3.5)	底部は凸起部。体部は織やかに斜め上方に盛り込む。 内腹 界縫 2条。宽葉文?施文。	やや深い只張 で界縫 2条。 輪削状?施文。	青みを帯 びた灰白 色	明治花瓶 器	16c代	底部外側の 一部 施釉。 器身裏。
C21	第2面 SD05	無釉陶器	蓋	-	-	-	口縁部は斜面拘門形狀に肥厚。 内外面ともヨコナガ調整。口縁部内側、唇子切麻状に灰被り。	-	-	捲頭状	16c代	計量。
C22	第2面 SD06	無釉陶器	箱体	-	(8)	-	体部は直線的に斜め上方に盛り込む。口縁部は上方につまみ出る。縁部を貼り付ける。内外面ともヨコナガ調整。口縁部内側、唇子切麻状に灰被り。	-	-	捲頭状	-	計量。

第8表 C地区遺物観察表3

報告 No.	出土所	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	規則・調整枝法等	支種	色調	産地	時期	備考
C23 第2面 SD05下層	土師器	瓶	(10.5)	(1.75)	-	平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は横や少し上から上方に延びる。口縁部に凹字彫刻。 内・外面ともヨコナガ彫刻。底部外側はサエによる強張圧痕。	-	に赤い青 褐色	-	-	-	
C24 第2面 SD05下層	土師器	瓶	(11.2)	(1.9)	-	平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は横や少し上から上方に延びる。口縁部に凹字彫刻。 内・外面ともヨコナガ彫刻。口縁部内・外面はヨコナガ彫刻。底部外側はサエによる弱張圧痕。	-	に赤い青 褐色	-	-	口縁部内・ 外側ともに 強張痕。	
C25 第2面 SD05下層	土師器	錐	(24.7)	(5)	-	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は僅かに内傾。口縁部は丸味をもつ。 底部に凹字彫刻。体部外側～口縁部内面ヨコナガ彫刻。体部内面～底部内面ハタケリ彫刻。	-	に赤い青 褐色	-	-	外面 全面 に壓縮痕。	
C26 第2面 SD05下層	土師器	壺	(24.7)	(5)	-	丸底。体部は僅かに内傾。口縁部は丸味をもつ。 底部に凹字彫刻。内・外面ともヨコナガ彫刻。 底部内面～口面ヨコナガ彫刻。体部内面ヨコナガ彫刻。体部外側はヘタケリ彫刻。	-	に赤い青 褐色	-	-	底部外側 強張痕。	
C27 第2面 SD05下層	土師器	浅盤盆	(6.4)	9.95	(5.2)	型作り底部、型作りの円筒状の体部に円筒状の底部を貼り付ける。 体部内面 布目压痕。体部内・外面ヨコナガ彫刻。体部外側1ヶ所削印跡があり。	-	褐色	-	-	-	
C28 第2面 SD05下層	土師器	燒成窓	(6.3)	9.2	(6.7)	平底。体部はほぼ直立。口縁部は失り強張痕。 型作り底部。円筒状の底部に型作りの底部を貼り付ける。口縁部内面に布目压痕。内・外面ともヨコナガ彫刻。	-	褐色	深灰	-	体部外側に 「御口は海 ノ城伊賀」銘をス タンプ。	
C29 第2面 SD05下層	瓦質土器	六合	(21.8)	8.25	(34)	平底。底部外側に低い環状突起の脚を2ヶ所付ける。(1ヶ所のみ発見)。体部は僅かに内傾。口縁部は丸味をもつ。口縁部は口縁部を内側に引き出す。 内・外面ともヨコナガ彫刻。	-	緑灰色	-	-	-	
C30 第2面 SD05下層	無釉陶器	甕	(33.6)	(16.75)	-	体部は内腹。腹部は丸く立。口縁部は横方に彎曲する。上側に丸形もつ。体部は僅かに内傾。口縁部は丸味をもつ。口縁部は口縁部を内側に引き出す。 内・外面ともヨコナガ彫刻。口縁部上面 四周2条。	-	-	丹波焼	18c前半	内・外側と も化粧土 (土塗)施 す。墨赤褐色 に発色。 外側 灰被 り。	
C31 第2面 SD05下層	無釉陶器	甕	8.2	14.9	(9.6)	平底。体部は内側してほぼ直立に延びる。縁部は横幅が大きくなる。口縁部は横幅が大きくなる。口縁部上面に横筋をもつ。口縁部外側に凹字彫刻2条。口縁部内面に凹字彫刻をもつ。 内・外面ともヨコナガ彫刻。口縁部内・外側にヨコナガ彫刻。体部内面7条を有する。	-	褐灰色	備前焼	17c前半	外側の口縁 部～体部上 部に強張 痕あり。体部外側 部分にハラ那 カ彫印。 底底は 褐 色。	
C32 第2面 SD05下層	無釉陶器	錐体	(35.4)	(9.4)	-	体部は直線的に斜めに下方に傾きる。口縁部は上下に笠狀で縁部をもつ。口縁部上面に横筋をもつ。口縁部外側に凹字彫刻2条。口縁部内面に凹字彫刻をもつ。 内・外面ともヨコナガ彫刻。口縁部内・外側にヨコナガ彫刻。体部内面7条を有する。	-	に赤い赤 褐色	丹波焼	18c代	-	
C33 第2面 SD05下層	無釉陶器	錐体	(33.7)	(7.6)	-	体部は直線的に斜めに下方に傾きる。口縁部は上下に笠狀で縁部をもつ。口縁部上面に横筋をもつ。口縁部外側に凹字彫刻2条。体部内面に凹字彫刻2条。 内・外面ともヨコナガ彫刻。口縁部内・外側にヨコナガ彫刻。体部内面7条を有する。	-	に赤い青 褐色	丹波焼	18c代	-	

第9表 C地区遺物観察表4

報告 No	出土場所	種別	器種	口径 (cm)	縦高 (cm)	底径 (cm)	成形・調整法等	文様	色調	產地	時期	備考
C34	第2面 SD05下層	無釉陶器	擂钵	(32.6)	(8)	-	体部は実錆的に斜め上方に張る。口縁部は上に斜張して底部を形成する。口縁端部は前の上方向に立ち上がる。 内・外面ともヨコナガ彫整。口部内部・外側・強いヨコナガ彫整。体部内面9条目。底位の口沿部は丸。	-	褐灰色	丹波焼	18c後半	内・外面とも胡麻状に灰被り。器壁は全体に比較的薄い。
C35	第2面 SD05下層	無釉陶器	擂钵	(31.4)	13.2	15	平底。作業は直線的に斜め上方に張り込む。口縁部はアーチ型く彫整して形成される。(内面) 縦高2.6cm。口縁部内面・外側・強いヨコナガ彫整。口部内部・外側・強いヨコナガ彫整。口縁部内面2条目。底位の口沿部は丸。	-	灰褐色	丹波焼	18c代	-
C36	第2面 SD05下層	無釉陶器	擂钵	(22.4)	16	(11.6)	平底。体部は直線的に斜め上方に張り込む。口縁部はアーチ型く彫整して形成される。(内面) 縦高2.6cm。口縁部内面・外側・強いヨコナガ彫整。口縁部内面7条目。底位の口沿部は丸。内・外面ともヨコナガ彫整。	-	灰褐色	丹波焼	17c代	-
C37	第2面 SD05下層	無釉陶器	擂钵	-	(10.15)	-	体部は実錆的に斜め上方に張り込む。口縁部はアーチ型く彫整して形成される。(内面) 縦高2.6cm。口縁部内面・外側・強いヨコナガ彫整。口縁部内面8条目。底位の口沿部は丸。内・外面ともヨコナガ彫整。体部内面9条目。底位の口沿部は丸。	-	灰褐色	丹波焼	17c代	外面灰被り。
C38	第2面 SD05下層	無釉陶器	擂钵	-	(7.8)	-	体部はほぼ直線的に斜め上方に張り込む。口縁部は断面菱形状で内面に凹部を持つ。 内・外面ともヨコナガ彫整。口縁部内面・外側・強いヨコナガ彫整。体部内面8条目。底位の口沿部は丸。内・外面ともヨコナガ彫整。	-	灰褐色	丹波焼	16c後半～ 17c前半	-
C39	第2面 SD05下層	無釉陶器	便	-	(8.9)	-	裏面。 外面・ヨコナガ彫整。内面・板ナガ彫整。ヨコ方向へのハサキ形に板ナガ底が見える。	-	暗赤褐色	備前焼	-	外周胡麻状に灰被り。後述は堅致。
C40	第2面 SD05下層	無釉陶器	钵	(12.65)	6.25	(8.2)	平底。底部と体部の差は大きく粗朶。体部の外反形状には斜面上に張る。口縁部は横方向に彫整。斜面上に張る。内・外面とも圓弧状に調整。底部外周は素面状。	-	暗赤褐色	丹波系	-	底波は堅致。体部外周一部灰被り。
C41	第2面 SD05下層	施釉陶器	碗	(12.1)	6	5.1	底面の施釉をトロ状に削り出す。高台は比較的低く、体部は盤中に内側に斜め上方に張る。口縁部は丸味をもつ。白釉を横方向にハサキ形に削り、後、透明釉を施す。器底を包む底部は厚く、底部付近を削り取り。高台発生に温かみがある。	-	-	肥前系	17c後半～ 18c前半	-
C42	第2面 SD05下層	施釉陶器	碗	(10.3)	(5.55)	-	体部は12cm立高。口縁部は丸味をもつ。 内・外面とも透明白釉。	淡褐色に 發色。	肥前系 京焼風陶器	17c後半～ 18c前半	器内に細かい出入。	
C43	第2面 SD05下層	施釉陶器	碗	(11)	6.2	4.2	底部の器壁は非常に薄い。高台は比較的低く、内側に内側に斜め上方に張る。口縁部は丸味をもつ。 外側・内面とも透明白釉。	-	-	肥前系	17c中頃～ 18c前半	高台疊付の カキ取り。肥前系 京焼風陶器。
C44	第2面 SD05下層	施釉陶器	皿	-	(1.05)	(5)	高台は比較的低く、内側に斜め上方に張る。 内・外面とも透明白釉。	淡い乳 白色に 發色。	肥前系 京焼風陶器	17c後半～ 18c前半	肥前系京燒 風陶器	
C45	第2面 SD05下層	施釉陶器	皿	-	(2.5)	4.2	高台は比較的低く、内側に斜め上方に張る。 内・外面とも灰被りを施す。外側の高台部に下部下限に跡跡。	淡黄色に 發色。	肥前系 京焼風陶器	17c後半	底内面に 砂目跡4ヶ所。	

第10表 C地区遺物觀察表5

報告 No.	出土場所	種別	基盤	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	成形・調整技法等	文様	色調	產地	時期	備考
C46	第2面 SD05下層	施指輪器	盤	(25.6)	(2.5)	-	底部は僅かに斜め上方に延びる。口縁部は水平に前後に曲げる。 内・外周とも鉛錠型を有す。内・外表面とも透明釉施釉。褐色に発色。外側の体部下端は「火薙輪」。	内面 淡い丸 模様文をハ クで表現し、 内側を充填。	-	肥前系	17c後半～ 18c前半	三島唐津。
C47	第2面 SD05下層	施釉海殻	貝	(21.55)	(4.4)	-	体部は僅かに斜め上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。 内面全面に砂利施釉。透明釉に發色。 外側 高台盤まで区隔施釉。灰黄色に 發色。外側の高台盤以下露胎。	-	-	肥前系 吉津	17c後半～ 18c前半	-
C48	第2面 SD05下層	施付瓶器	盤	-	(4.2)	(10)	唇部は非常に厚い。高台は幅が広く灰 色。	内面 淡い丸 模様文。外匝 模様文。	-	肥前系	17c前半	高台盤付の 積力坂 リ。初期伊万里。
C49	第2面 SD05下層	施付瓶器	瓶	(9.2)	(5.2)	-	体部は僅かに内側へ延びて口縁部は丸味をもつ。	外腹 淡い丸 模様。口縁部 は「火薙輪」。 丸窓内「參詮」 模様1条施 釉。内面 無文。	青味を帯 びた灰白色	肥前系	17c後半	-
C50	第2面 SD05下層	施付瓶器	瓶	-	(1.4)	(5.6)	高台は断面三角形で低い。体部は極 やかに斜め上方に延びる。	内面 淡い丸 模様で花文と施 釉。外側 無 文。	青味を帯 びた灰白色	肥前系	17c前半	高台盤付に 砂利施釉。初 期伊万里。
C51	第2面 SD05下層	施付瓶器	瓶	(10.2)	2.4	(5.4)	底部の器壁は薄い。高台は断面台形状 で比較的高い。体部は内側気泡に斜め 上方に延びる。 内・外周とも透明釉施釉。	内面 淡い丸 模様で花文と施 釉。	灰白色に 発色。	肥前系	18c後半	高台盤付に 砂利施釉。肥 前系くらわ んか手。
C52	第2面 SD05下層	施付瓶器	瓶	-	(1.05)	(5.6)	高台は断面台形状で比較的高い様が広く 低い。	内面 やや墨 色の丸模様で草 花模様「參詮」 模様。草花文(?) 模様。	やや青味 を帯びた灰 色。	肥前系	17c前半	初期伊万里
C53	第2面 SD05下層	施付瓶器	瓶	(13.2)	2.75	(8.2)	底部の器壁は厚い。高台は断面台形状 で幅が広く比較的高い。体部は僅かに 斜め上方に延びる。口縁部は尖り突 起。	内面 やや淡 い丸模 様で草花 模様「參詮」 模様。草花文(?) 模様。	やや青味 を帯びた 灰白色。	肥前系	18c後半	肥前系くら わんか手。
C54	第2面 SD05下層	白組	瓶	11.7	3.2	3.9	高台は断面三角形で比較的高い。体 部は僅かに内側して斜め上方に斜め上 方に延びる。口縁部は尖り突起。 内側 体部外壁上部 漆衣施用。体 部下部以下露胎。底部内側「五ノ目状 輪」。	-	淡青綠色 に発色。	肥前系 波佐見窯	18c前半	粗製の白組
C55	第2面 SD06	無釉陶器	盤鉢	-	(3.9)	-	各部は斜めに斜め上方に延びる。口 縁部は斜め下方に切る。「腰跡」下邊は 焼方につまみ出る。 内・外周とも強いヨコナタテ彫器。体部 内側「8字」。肩部の縦目施用。口縁部 は灰被り。	-	-	肥前系	14c代	唐津 灰 組。

金属製品

報告書 番号	地区	土 葵 面	調査名	種 別	品 目	説 明	初期年 代遺存	時代	法 量 (m)			備 考
									長さ	幅	厚さ	
CI 1	第2面	SF01	鉄製品	鑑					14.7	4.0	1.6	下層
CI 2	第2面	SD05	鉄製品	鍊丸					8.1	3.0	0.8	下層
CI 3	第2面	SF01	鉄製品	鍊筒					12.1	4.3	2.5	下層

第3節 D地区

1. 遺構

D地区は停車場線の南側車線に位置し、緩やかにカーブする地点にある。東側は有岡城期の堀を検出したA地区、西側はH地区、北側はI地区となる。調査区の規模は長さ40m、幅3.5m、面積は140m²である。

【第1面】(第21~24図、写真図版27・29参照)

江戸期から近代にかけての遺構が検出された。検出遺構には土坑・埋桶・污水溜めなどがあるが、建物などの屋敷地内部の遺構は検出できなかった。当該期の調査地点は屋敷地の前面ないし街路にあたる部分と推定される。

土坑

多数の土坑が検出されたが大半が廐棄土坑である。各遺構は、一部近代のものも含まれるが江戸期の遺物が多数出土していることから、中心時期は江戸期と考えられる。この時期の土坑は東側に集中し、北側と南側でやや様相が異なる。状況から考えて北側は屋敷地前面にあたり、南側は道路になる可能性がある。

SK101・102は廐棄土坑である。深く掘削された部分をSK102としたが一連の土坑である。浅い土坑であるが土坑埋没後、疊混りシルトを客土して地ならしを行う。SK101から丹波焼匣鉢(D19)、SK102から土師器皿(D20)・磁器白磁碗(D21)が出土した。

SK104は長さ1.65m、幅0.9m、深さ0.2mの規模を測る。SK104から土師器壺焼(D17)、磁器染付碗(D14・15)・匣鉢(D16)・同青磁染付碗(D13)が出土した。SK114は平面方形の土坑で1辺1.8m、深さ0.38mを測る。内部からは礫や瓦片が多く出土した。SK113・132・131は平面円形ない方形の小規模な土坑群である。調査区西端から検出された。

SK106は直径0.78mの円形の小規模土坑である。北側に污水を流す溝を持つことから、小型の埋桶を据えた埋桶で、土坑は污水溜め用の埋桶遺構であった可能性が高い。SK109は平面靴型の形状をした土坑で、東西4.1m、南北2.2m以上、深さ0.15mを測る。

SK126は調査区の西南隅で検出された大型の土坑である。東西方向に長軸を持ち、東西5.1m、南北2.35m、深さ0.47mの規模を測る。

この他、遺物はSK114から備前焼壺D22、SK126から瓦質土器鉢D11、丸瓦D96、SK128から施釉陶器碗D28、磁器染付碗D6・碗D9・同青磁染付碗D10が出土した。

埋甕遺構

SX101は調査区中央で検出された土坑である。平面円形で直径1.18m、深さ1.4m以上の規模を測る。内部には備前焼甕を倒立させて据えていた。この甕は口縁部と底部が大きく破損し、胴部が大きく割れた状態で出土した。側面にはこの胴部の破損を補強するために埠をあてがっていた。土坑の上面には暗青灰色シルト質土が堆積するが、このために透水性が確保されている。また、甕の内部には泥上の堆積物が多量に溜まっていた。一見水琴窟に酷似するが、内部に共鳴具は確認されなかった。

隣接のSK239は平面円形で直径1.35mの規模を測る。内部には黒褐色シルトが堆積し、瓦片を多数包含していた。土坑底および側面の形状からすると旧状は甕あるいは桶などを据えていた土坑と考えられ

るが、廃棄時に再び掘り直して内部の甕などを取り出し、瓦等を廃棄したと推測される。

SX101から出土した遺物は土師器皿D26・壺D27、関西系陶器皿D42・43・壺D98、瀬戸焼皿D31・32、京焼系陶器碗D28・29・欽賀施釉陶器皿D30、肥前系磁器碗D34・D35、同鉢D36、同青磁香炉D37、関西系陶器擂鉢D38～41、備前焼甕D45、SK124から瓦質土器火鉢D18などが出土した。

【第2面】(第25図、写真図版28参照)

中世から戦国末期の遺構が多数検出された。検出遺構には土坑・溝・柱穴・柵列などがある。中でも柵列は調査区を東西に縦断するもので、周辺の内部構造を考える上で重要な遺構と考えられる。ただ、遺構が多く検出され、稠密な土地利用が行われるが、遺構からの遺物は意外と少ない。

柵　列

調査区を東西方向に縦走する遺構で、2列が検出された。ほぼ調査区の全域に検出されたが西端では途切れるが、H地区に続きが検出されている。2本の柵列は30cmほどの間隔を置いてほぼ平行に走るが、互いの柱位置は一致しない。柱間隔は柵列aが0.8～1.5m、柵列bが1.0～2.0mほどである。柱の掘方は円形のものが多く直径30～50cm前後である。深さは検出面から20～30cmのものが中心である。柱底には礫や石仏(P213)転用の根固め石が入れられているものもある。

柱　穴

おおむね全域で柱穴群が検出された。平面は円形のものが多く、直径は30～50cm前後である。いずれも地表面に掘削するもので、内部からの遺物の出土は少ないが、埋土の状況や形状からすると柵列の柱穴に近い時期のものと考えられる。

柱穴から出土した遺物はP298から土錐D54、P234から丸瓦D95、P210から石仏DS3が出土した。

土　坑

多数の土坑が出土したが主要なものについて報告する。

SK201は1辺1.2m、深さ0.15mの平面瓢箪型を呈する土坑である。東播系の擂鉢D49が出土しており、14世紀代の遺構と考えられる。SK205・206は切り合う土坑でSK205が1辺1.2m、深さ0.18m、SK206が1辺1.3m、深さ0.12mを測る。丸瓦D94が出土している。SK223は調査区西より北側で検出された土坑である。I地区2区のSK211につながる遺構である。平面は長方形を呈する。内部からは瓦質釜D53が出土した。

そのほか、土坑からの出土遺物はSK204土製円盤D55、SK222青磁碗D50・瀬戸美濃焼皿D51・丹波焼擂鉢D52などがある。

溝

SK214は調査区を南北に横断する溝である。土坑として検出したが、南北に統くため溝とした。幅2.8m、深さ0.4mの規模を測り、溝底はほぼ平らに掘削されている。溝底西壁付近にこぶし大の礫を並べた石列が遺存することから旧状は護岸石積をもった石組溝であろう。ただし、南側では軽く狭くなり段差を持つ。この溝はI地区2区のSD201と一連のものである。SK214からは丹波焼甕D56、軒丸瓦D91が出土した。

井　戸

SK210は調査区東側の南壁に接して検出された。調査区の制約のために深く掘削することができなかつたが、側壁が直に立ち上ることから井戸と考えられる。平面円形で直径0.78mの規模を測る。内

部からは土師器皿D46～48が出土した。

SK203は調査区南西隅付近から検出された井戸で直径1mを測る。側壁は直に掘削するもので1.2m間で掘削した。内部から軒平瓦D93が出土した。

2. 遺 物

【第1面】(第26～28図、写真図版30～32参照)

第1面から出土した遺物は江戸後期から近代のものが含まれる。大半が廃棄土坑からの出土遺物であるが、汚水溜(SX101)からも多量の土器・陶磁器が出土した。なお、D84は中世の備前焼鉢であるが混入のため、第2面で報告した。

土 師 器

土師器には皿・焰壘・火鉢がある。土師器は灯明皿大半である。

ロクロ使用(D1)のものと未使用のものがある。このうちロクロ未使用のものには型成型(D2)のものと、手づくり成型(D3・D4・D5・D20・D26)のものがある。焰壘にはDタイプ(D17)・Hタイプ(D27)がある。

瓦器・瓦質土器

鉢D11・火鉢D18の2点を図化した。D11はバケツ型の製品で口縁部上端に面を持つ。

磁 器

肥前系の染付碗・蓋・鉢・青磁香炉・青磁染付筒碗などがある。

染付碗は丸碗D6・D9・D14・D34、広東碗D35・半筒碗D15がある。蓋はD33がある。口縁部内面に四方擇文を施す。鉢はD16、皿はDの30の各1個体がある。いずれも口縁部を外反させるもので、D16ではU字形高台で口縁部は輪花を表している。青磁香炉D37は3足が付くもので肩部に円形の花文が貼り付けられる。青磁染付筒碗のD10・D13は外面が青磁、内面が染付となる。内面口縁部に四方擇を描き、内面底部には五弁花をスタンプする。

陶 器

陶器には丹波焼、京焼系陶器、関西系陶器、瀬戸焼がある。

瀬戸焼には皿D31・D32がある。口縁部を波打たせて花弁を表現する製品である。京焼系陶器には碗D28・29、軟質施釉陶器皿D30がある。

丹波焼には匣鉢D19・徳利D44がある。D19は小型の匣鉢型の製品である。D44は外面に鉄軸を掛け、イッチャン描きで町名を記した酒徳利である。

関西系陶器には灯明皿D7・D23～D25・D42・D43がある。D7は透明釉をかけた製品で底部に糸切り痕跡を残す。D23～D25・D42・D43はいわゆる柿釉と呼ばれる小型の灯明皿で、D24・D25・D43は内面にかえりを持つ。

このほか堺明石焼鉢D38～D41がある。いずれも口縁部を拡張し内面には密に鈎目を施すもので内面見込みにいわゆるウールマーク状の鈎目を施す。

土 製 品

土錐はD54で管状土錐である。面子はD55で青磁片を打ち欠いて転用したものである。

【第2面】(第29・30図、写真図版33・34参照)

第1面を埋め立てた土砂内部に含まれた遺物が多くを占めている。このため、調査区内から出土した遺物は他の地点から運ばれ盛土内に混入した可能性が高い。

須恵器

捏鉢（D49）がある。東播系の須恵器で、口縁部を上方に立ち上げ端部を丸くおえる個体である。体部外側には指頭痕跡を顕著に残す。14世紀代の製品である。

土師器

皿・堀・羽釜がある。

土師器皿は手づくねの製品である。口径12cm、器高2cmのものでD58～D61・D63のように指頭痕跡を顕著に残し歪みが見られるものと、丸く外反しながら立ち上がるD57・D62・D64～D67の2つのタイプが見られる。その他、SK210から出土したD46～D48は底体部が丸く立ち上がるもので口縁端部を丁寧にヨコナデする。須恵器鉢とのセットから考えて古い段階のものと考えられる。

堀D68～D70は錫の退化したもので、強いナデによってわずかに痕跡を残すものD68と、突帯状の痕跡が残るものD69・D70がある。後者は口縁部が外反する。

羽釜は薄手で体部の上位に錫を貼り付けるものD71と、厚手で口縁部外面直下に錫を貼り付けるものD72がある。

磁器

磁器には中国製と初期伊万里がある。中国製磁器には白磁皿、染付碗・皿、青磁碗・皿がある。

白磁皿D73～D75は切高台になるもので白濁した釉をかける。14世紀代の製品である。染付碗D76・D77・D78には口縁部を外反させておえるものD76・D78と、外開き気味に立ち上がり口縁部をすんなりおえるものD77がある。後者の外側には天馬文を描く。同皿D79・D80・D81は基筒底の碗C類とD79・D80、端反脛タイプ（D81）の碗B類がある。染付はいずれも16世紀代のものである。青磁碗D50は碗C類、皿D82は皿B類である。

初期伊万里には皿（D83）がある。底部片で低く小さな高台を持つもので、17世紀中頃の製品である。

陶器

陶器には唐津焼・瀬戸美濃焼・丹波焼・備前焼がある。

唐津焼には碗D84がある。小型の底部片で、底部に糸切り痕跡が確認される。瀬戸美濃焼には皿D12・85がある。いずれも丸皿である。

丹波焼には擂鉢・壺がある。いずれも16世紀末から近世初頭頃のものである。擂鉢D52は御印が1本単位のものである。壺D56は頭部から口縁部にかけて外反する個体で、肉厚な製品である。

備前焼には擂鉢・壺がある。擂鉢は口縁部を上方にやや肥厚させるD86・D87と、上下に少し拡張するD87、大きく拡張するD88がある。壺は丸い玉縁をもつものD89と、扁平に拡張するものD90玉縁が上下に拡張し、外面に凹縫状の強いナデを施すものD22・D45がある。D45はほぼ全形の知れるものであるが、肩部が張り、口縁部が頭部から彎曲しながら立ち上がる。16世紀後半段階のものである。

【瓦】（第30・31図、写真図版35参照）

瓦は屋瓦と近世の堀や平瓦・丸瓦が出土した。図示したものは軒瓦には軒丸瓦2種と軒平瓦1種、丸瓦・堀である。軒丸瓦はD91のようにやや大き目の珠朱文を持つものと、小さい珠文D92がある。軒平瓦D93は中心飾りと唐草文が観察される。これらのうちD92・D93が中世の瓦である。丸瓦は4点を図化

したこのうちD95・D97が中世の瓦である。塙はD98がある。縦42.9cm、横26.5cmの大型のもので、上端に釘穴を持ち、表面の右端に合わせ部と思われる窪みを入れ、左端に欠損するが突起を持つ。

【金属製品】(第32・33図、写真図版36参照)

金属製品は銭貨、煙管、簪、釘、ペイゴマが出土している。

銭貨 銭貨のうち、図化できたのは21枚である。本邦銭と波来銭があり、波来銭はすべて北宋銭である。宣和通寶(DI9)、治平元寶(DI21)が出土している。

本邦銭のうち、DI2・DI6・DI12・DI13は、古寛永に分類される。DI18は2期の文銭である。DI19は、文久永寶である。DI20は2銭銅貨で明治13年鋳造の銘がある。

煙管 DI26～DI28は、雁首である。DI29は、吸口である。DI26は、火皿がやや深く、雁首の首も太い、小口に2条の沈線を巡らせていている。DI27は火皿の口径が深さに比べて大きい。雁首の首の部分が細く、胴部がふくれる形状である。DI28は火皿の径が深さに比べて小さい。胴部には羅字が残存している。簪、こうがい DI30は片方の先端を折り曲げた形状である。全長の1/3の部分に2条の沈線を巡らす。DI31は一方の先端がへラ状に広がる形状をしている。

釘 釘はDI22～DI24がある。いずれも頭巻釘である。3本を図化した。

ペイゴマ DI25は中心がへこんでおり、底部には突起がある。外面には貝の形状の名残と見られる螺旋の筋掘りが施されている。

【石製品】(第33図、写真図版35参照)

石製品には石臼 (DS1・D2)、石仏 (DS103) がある。石臼は上臼で中央に軸穴を持つ。いずれも残決で全体の詳細は不明である。石仏は花崗岩製で地蔵尊を表現する。

3. 小 結

第1面では多くの遺構・遺物が出土したが廃棄土坑などの江戸後期のものと、西端のSX06などの近代の遺構があり、これらの遺構は同一面で昭和まで継続することが確認された。屋敷地に伴う建物周辺の遺構が出土せず、廃棄土坑が多いことから、屋敷地の前庭に当たると推測され、SX101などの状況から南端が屋敷と道路の境界になる可能性がある。

第1面との間に盛土された造成土内には唐津・伊万里などを含む中世～近世前期の遺物が多く出土した。第1面直上は包含層や仰表土の堆積がわずかなうえ、全体に第2面の遺構の深度が浅いことから、第2面は上面を削平された可能性がある。伊丹段丘上に形成された旧遺構が削平され、その後、17世紀後半に盛土がおこなわれ、第1面が形成されたと考えられる。

第2面は地山上に形成された面であるが、権・柱穴など多数の遺構が検出された。第2面は柱穴などの稠密な検出から居住空間周辺の状況と考えられるが、ある時期に柵列が構築され区画域となる。この柵列はH地区の柵、A地区の柵SF1・SD5の間を横断しており、おそらく曲輪内部の区画と考えられが、柵との関係からすると有岡城期の区画である可能性が高い。

このほか、SK201の白磁D73～75などの出土は、明らかに14世紀代の遺構が存在することを示しており、段丘東端部には古い遺構が形成されていたことがわかった。

第11表 D地区遺物観察表1

(1面)			土器・陶磁器				成形・調整技術の特徴・文様	備考
番号	出土地点	種別	器種	法 量 (cm)	口径 基盤 底径			
D1 SK106	十郎野	土器	盆	6.75	1.30	3.30	手づくね、内面および口縁部上半を模ナゲする	灯明皿
D2 SK106	上御器	土器	盆	9.75	2.00	5.20	手づくね、内面および口縁部上半を模ナゲする	灯明皿
D3 SK106	土器群	土器	盆	9.70	2.20	-	手づくね、内面および口縁部上半を模ナゲする	灯明皿
D4 SK106	土器群	土器	盆	10.00	2.00	-	手づくね、内面および口縁部上半を模ナゲする	灯明皿
D5 SK106	土器群	土器	盆	10.95	2.05	-	手づくね、内面および口縁部上半を模ナゲする	灯明皿
D6 SK106	染付陶器	陶器	碗	10.10	5.60	3.70	外側追跡模	肥前系
D7 SK128	施釉陶器	陶器	碗	8.60	1.45	(3.50)	灯明皿	肥前系
D8 SK128	施釉陶器	陶器	小杯	(5.30)	4.20	3.35	外側面と模倣文、西面に落序	肥前系
D9 SK128	施釉陶器	陶器	碗	9.35	4.90	4.00	丸足、外側單花文	肥前系
D10 SK128	施釉陶器	陶器	手舟瓶	5.10	6.75	4.50	内面山線彫、[回方瓶]・見込「五年佐」	肥前系
D11 SK126	瓦灰土器	土器	盆	(25.00)	18.20	(18.00)	内面ナラ模	肥前系
D12 SK131	無口燒造器	土器	盆	-	(1.50)	5.05	丸足・内面印封制文	肥前系
D13 SK104	古窯陶器	土器	扁瓶	(7.10)	7.00	4.50	内面山線彫、[回方瓶]・見込「五年佐」	肥前系
D14 SK104	染付陶器	陶器	丸瓶	(9.60)	4.00	-	外側に空文	肥前系
D15 SK104	古窯陶器	土器	半舟瓶	(9.10)	6.40	7.80	外側は丸底に竹文	肥前系
D16 SK104	古窯陶器	土器	棒	22.00	8.60	10.90	内面に唐草文、口縁部に轍筋。底部は丸の高台	肥前系
D17 SK364	上御器	漆器	盆	(26.80)	(5.60)	-	外側山線彫指捺痕跡、休形成ナメ、内面後ナメ	漆前系
D18 SK126	瓦灰土器	土器	大鉢	(24.00)	(10.30)	-	底面に3足。	IIタイプ
D19 SK101	丹波焼	陶器	盆	11.40	5.10	12.00	内外裏外褐色を呈する。外側追跡下干に凹繩	肥前系
D20 SK102	上御器	土器	盆	(9.40)	1.70	-	手づくね、内面および口縁部上半を模ナゲする	肥前系
D21 SK108	白磁	陶器	碗	19.60	6.00	(6.00)	立壁する両端、底は露輪	肥前系
D22 SK114	施釉陶器	陶器	碗	(65.20)	(9.00)	-	口縁部、縁帶部に凹繩。背盤しながら立ち上がる口縁部	V期
D23 SK101	施釉陶器	陶器	碗	6.30	1.50	3.20	内面に灯台受けを持つ	肥前系
D24 SK101	施釉陶器	陶器	盤	6.00	1.10	3.45	内面に灯台受けを持つ	肥前系
D25 SK101	施釉陶器	陶器	盤	6.00	1.25	3.25	内面に灯台受けを持つ	肥前系
D26 SK101	土器群	土器	盤	34.00	2.40	-	手づくね、外側指捺痕底立つ	灯明皿
D27 SK101	土器群	土器	盤	(29.80)	6.05	-	高脚盤型	IIタイプ
D28 SK101	陶器	陶器	碗	9.00	5.40	3.20	内面した葉巻形筋、小さく取り出した高台	肥前系
D29 SK103	陶器	陶器	碗	-	(4.90)	3.45	白釉した施褐色色、細々と裂り出した高台	京焼系
D30 SK103	陶器	陶器	碗	(4.90)	1.15	(2.70)	軟質陶泥陶密、綠色の柄。高台に唐草「ロシ」	京焼系
D31 SK308	陶器	陶器	盆	(19.30)	4.50	7.70	口縁部縮頬、香港高台	肥前系
D32 SK308	陶器	陶器	盆	-	(3.30)	-	口縁部縮頬	肥前系
D33 SK101	施付陶器	陶器	蓋	(9.65)	(2.20)	-	天井部に花文、内面四方開文	肥前系
D34 SK101	施付陶器	陶器	蓋	(10.50)	5.55	(4.80)	斜面西東北など、内面白腹部に四方模文	肥前系
D35 SK101	施付陶器	陶器	蓋	10.50	5.70	(6.00)	伝統、外側皆に火文	肥前系
D36 SK101	施付陶器	陶器	蓋	25.15	8.40	-	内面は片口、裏面は片口、華文	肥前系
D37 SK101	片口	土器	盆	23.80	9.60	(10.70)	底面に3足付き、裏面にあらわした付文が付く。底部輪扁台	肥前系
D38 SK101	阿彌	土器	盤	31.30	12.05	14.20	内面見込みクルマの頭部。口縁部を笠基と呼ぶ。底部に凹繩	底・脚石系
D39 SK101	阿彌	土器	盤	(34.00)	13.00	14.80	内面見込みクルマの頭部。口縁部を笠基と呼ぶ。底部に凹繩	底・脚石系
D40 SK101	阿彌	土器	盤	-	15.30	(20.60)	口部が開湯をあけて残される。施脂は當台が付く	底・脚石系
D41 SK101	阿彌	土器	盤	(39.30)	16.80	(14.70)	脚部が開湯をあけて残される。底部は高台が付く	底・脚石系
D42 SK101	施釉陶器	陶器	目明皿	(6.95)	1.40	3.10	脚部底、底張型	関西系
D43 SK101	施釉陶器	陶器	目明皿	(6.30)	1.25	2.20	脚部底、底張型	関西系
D44 SK101	施釉陶器	陶器	目明皿	-	21.00	9.90	器表に鉄格、イッヂ接ぎで可名などを書き	酒造利
D45 SK101	備前陶	土器	碗	60.80	92.80	(42.40)	口縁部の縦縫はトに施し、底盤が詰著	V期
(2面)								
D46 SK210	土器群	土器	盆	(7.60)	1.70	(2.20)	手づくね、内面および口縁部上半を模ナゲする	灯明皿
D47 SK210	上御器	土器	盆	(9.70)	1.70	(2.00)	手づくね、内面および口縁部上半を模ナゲする	灯明皿
D48 SK210	土器群	土器	盆	(11.25)	(2.50)	-	手づくね、内面および口縁部上半を模ナゲする	灯明皿
D49 SK201	祇園器	土器	棒	29.10	11.15	(9.60)	口縁部を下方に傾斜。外縁堅直底立つ。使用痕跡	宋津系
D50 SK222	青磁	碗	-	(1.70)	-	4.45	高台部、高台面刃切跡	中國系
D51 SK222	施釉陶器	陶器	盤	(16.50)	(2.20)	-	丸底、底面中空で底厚	丹波燒
D52 SK222	丹波燒	土器	盤	(23.50)	(2.20)	-	口縁部を下へくさえる。	丹波燒
D53 P298	瓦灰土器	土器	盤	-	(5.80)	-	口縁部を失くす。	通・明石系
D54 P298	上御器	土器	盤	25.90	14.20	6.40	外側に指捺痕跡	管状土器
D55 SK204	十郎野	土器	子子	長さ4.90	幅5.10	高さ5.0	背盤片を打ちついで作る	管状土器
D56 SK214	片底器	土器	盤	(23.90)	(12.50)	-	手づくね、内面および口縁部上半を模ナゲする	管状土器
D57 包合器	土器群	土器	盤	7.20	1.70	-	手づくね、内面および口縁部上半を模ナゲする	管状土器
D58 包合器	土器群	土器	盤	7.55	1.50	-	手づくね、内面および口縁部上半を模ナゲする	管状土器
D59 包合器	土器群	土器	盤	(7.95)	1.50	-	手づくね、内面および口縁部上半を模ナゲする	管状土器
D60 包合器	土器群	土器	盤	(7.40)	1.85	(3.30)	手づくねへそ付、内面および口縁部下半を模ナゲする	管状土器
D61 包合器	土器群	土器	盤	8.30	1.40	4.10	手づくねへそ付、内面および口縁部下半を模ナゲする	灯明皿
D62 包合器	土器群	土器	盤	(5.15)	1.50	-	手づくね、内面および口縁部下半を模ナゲする	管状土器
D63 包合器	土器群	土器	盤	(9.35)	2.20	-	手づくね、内面および口縁部下半を模ナゲする	管状土器
D64 包合器	上御器	土器	盤	(9.75)	(2.00)	-	手づくね、内面および口縁部上半を模ナゲする	管状土器
D65 包合器	十郎野	土器	盤	(9.80)	2.00	-	手づくね、内面および口縁部上半を模ナゲする	管状土器
D66 包合器	土器群	土器	盤	(10.45)	(1.80)	-	手づくね、内面および口縁部上半を模ナゲする	管状土器
D67 包合器	土器群	土器	盤	(10.20)	(1.80)	-	手づくね、内面および口縁部上半を模ナゲする	管状土器
D68 包合器	土器群	土器	盤	(20.00)	(5.00)	-	外縁平行引き、内面および口縁部	管状土器
D69 包合器	土器群	土器	盤	(25.30)	(3.60)	-	外縁する口縁部、縁はナメによる痕跡程度	管状土器

第12表 D地区遺物観察表2

(1面)												
土器・陶磁器			法 量 (cm)				成型・調整技術の特徴・文様			備 考		
番号	出土場所	種別	器種	口径	高さ	底径						
D70	包合層	土器	桶	(23.80)	(4.80)	—	外周字形引き、脚は貼り付け					
D71	包合層	土器	羽皿	(17.90)	(9.80)	—	脚貼り付け、内面糊ナゲ					
D72	包合層	土器	羽皿	(27.00)	(7.45)	—	脚貼り付け、内面糊ナゲ					
D73	包合層	陶器	盆	—	(1.35)	4.20	切り高台、白釉した直輪 (14世紀代)			中国産		
1774	包合層	白磁	盤	—	(1.95)	3.60	切り高台、白釉した直輪 (14世紀代)			中国産		
1775	包合層	白磁	盤	(9.60)	(2.20)	(4.80)	切り高台、白釉した直輪 (14世紀代)			中国産		
D76	包合層	柴付直輪	碗	—	(5.00)	(4.80)	外周草花文			中国産		
D77	包合層	柴付直輪	碗	(13.25)	(4.55)	—	外周...直輪と草花文、体は天板文、内面...直輪			中国産		
D78	包合層	柴付直輪	碗	(9.40)	(1.65)	—	外周草花文 (碗A型)			中国産		
D79	包合層	柴付直輪	盘	(10.10)	(2.80)	—	外周二重直輪と草文、内面二重直輪 (碗C型)			中国産		
D80	包合層	柴付直輪	盘	—	(1.35)	3.25	外周二重直輪と草文、内面二重直輪 (碗C型)			中国産		
1881	包合層	柴付直輪	盘	(9.80)	2.50	(4.40)	外周草花文、内面...2本の直輪と草文 (碗B型)			中国産		
D82	包合層	青磁	盘	—	(2.20)	5.70	光脚片			中国産		
D83	包合層	青磁	足付	—	(1.50)	5.00	内面草花文、高台に脚付型			初期辽?五代		
D84	包合層	青磁	小盤	—	(1.90)	(4.60)	直脚片、赤色片、赤色片を残す					
D85	包合層	直口浅腹	足	—	(1.50)	5.00	丸足、直脚片					
1886	包合層	楕前部	香炉	(31.20)	(3.35)	—	山根直筒三脚			初期		
D87	包合層	直口浅腹	香炉	(25.30)	(7.30)	—	口縁部を上に払深し焰輪を尖らせて放かる			初期		
D88	包合層	直口浅腹	香炉	(32.70)	(9.00)	—	直脚片を上方に放し、直脚片にする			中期		
D89	包合層	直口浅腹	香炉	(26.70)	(7.60)	—	二脚部を折り、正面脚片にする			中期		
1990	包合層	直口浅腹	香炉	—	(7.60)	—	山根部を切り、玉脚片にする			中期		
瓦類												
番号	出土場所	種別	器種	法 量 (cm)			成型・調整技術の特徴・文様			備 考		
				長さ	幅	厚さ						
D91	SK214	瓦	瓦丸瓦	(8.20)	—	—	直(4.20)					
D92	瓦	瓦	瓦丸瓦	—	—	—						
D93	#P202	瓦	瓦丸瓦	(3.80)	—	—	直(3.70)					
1594	SN206	瓦	瓦丸瓦	壁25.90	横14.20	高6.10						
D95	P204	瓦	瓦丸瓦	(17.90)	(15.15)	高6.65						
1596	SK205	瓦	瓦丸瓦	(16.90)	14.20	高6.40						
D97	P216	瓦	瓦丸瓦	(8.30)	(12.8)	高6.10						
D98	水牢塗	瓦	佛	壁42.90	横26.50	2.50						
金属製品												
後番 号	地区	土 壤 面	埋 深 度	種 別	品 目	銘種	初鉄牛 鉄鑄年	時代	法 量 (cm)	備 考		
									長さ	幅	厚さ	
D11	1区	土 1面	包合層	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新	1119	2.2	2.2	0.3	劉備
D12	4区	土 1面	包合層	鋳製品	鉄貨	束火通寶	古		2.5	2.4	0.3	
D13	1区	土 1面	包合層	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新		2.5	2.5	0.3	
D14	4区	土 1面	包合層	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新		2.3	2.3	0.3	劉備
D15	4区	土 1面	包合層	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新		2.3	2.3	0.3	
D16	3区	土 1面	包合層	鋳製品	鉄貨	束火通寶	古		2.3	2.3	0.3	
D17	4区	土 1面	包合層	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新		2.4	2.4	0.3	
D18	3区	SK102	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新			2.4	2.4	0.3	
D19	3区	SK110	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新			2.5	2.5	0.3	
D20	3区	SK110	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新			2.3	2.3	0.3	劉備
D21	3区	SK110	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新			2.5	2.5	0.3	劉備
D22	1区	SK102	鋳製品	鉄貨	束火通寶	古			2.4	2.4	0.3	
D23	1区	SK102	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新			2.5	2.5	0.3	
D24	1区	SK102	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新			2.3	2.3	0.3	
D25	2区	SK102	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新			2.4	2.4	0.3	No.3ライン上
D26	2区	SK102	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新			2.4	2.4	0.3	
D27	2区	SK102	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新			2.4	2.4	0.3	
D28	2区	SK102	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新			2.4	2.4	0.3	
D29	1区	SK102	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新			2.4	2.4	0.3	
D30	1区	SK102	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新			2.5	2.5	0.3	
D31	2区	SK102	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新			2.4	2.4	0.3	
D32	2区	SK102	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新			2.4	2.4	0.3	
D33	2区	SK102	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新			2.4	2.4	0.3	
D34	2区	SK102	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新			2.4	2.4	0.3	
D35	2区	SK102	鋳製品	鉄貨	束火通寶	新			2.4	2.4	0.3	
石製品												
番号	出土場所	種別	器種	法 量 (cm)			成型・調整技術の特徴・文様			備 考		
				長さ	幅	厚さ						
DS1	P209	石製品	石臼	(22.1)	(13.5)	8.6	円の目は6分割で9本単位。花瓶型			上臼		
DS2	包合層	石製品	石臼	27.7	28.0	5.2	円の目は8~9分割で5本単位。花瓶型			下臼		
DS3	P210	石製品	石臼	30.0	22.6	10.3	花瓶型			東漢化		

第4節 I 地区

1. 遺構

I地区は延長距離70mを測るが、北側への進入路確保などのために3地区（1～3区）に分割して調査をおこなった。本地点周辺は本京寺の南側に位置し、停車場線の北側車線にあたる。南側がD地区、東側がC地区、西側がE地区にあたる。なお、1～3区は様相が酷似するため報告は一括でおこなう。

【第1面】（第34～36図、写真図版38・40・41）

各区（1～3区）とも埋桶・土坑が多数検出された。土坑は廃棄土坑が多数を占める。1・2区では土坑・埋桶が北壁に半蔵されて並ぶものが多い。3区では調査区中ほどに同方向に並ぶものが多い。ほかには胞衣壺が検出されたことから、調査地は屋敷地の前庭にあたると推定される。

埋桶

1区のSK102・104・105、2区のSK139・155・156・162・161・164・165・166・174・176、3区のSK120・119がある。埋桶は数基がセットになり、大小がある。これらの状況から大半が便所と考えられる。多くは調査区北端に東西列に並ぶことから、前庭ないし、家屋の前面に設けられた便所と推定される。

埋桶から出土した遺物はSK102磁器染付碗I3、SK105施釉陶器棒粂皿I10・同陶器皿I11、磁器染付碗I4・青磁染付碗I12・白磁壺I13、SK155磁器染付碗I38・I39・丹波焼徳利I40、SKI56土人形I41・陶器土壙I43・土師質炮烙I42、SK160磁器染付碗I55・土瓶I51・同蓋I50、SK161陶器棒粂皿I46・同徳利I47・土製模造品I48・I49、SK162土師器皿I52・53がある。

土坑

土坑は各区とも南側に検出されたものが多い。大半が廃棄土坑である。2区のSK157は平面橢円形を呈し、長さ1.8m、幅0.84m、深さ0.4mを測る。SK158は隅円方形を呈し、長さ1.15m、幅1m、深さ0.25mを測る。

土坑から出土した遺物は1区ではSK101土師質炮烙I2・瓦質火鉢I1・SK103磁器染付碗I5・6・SK108丹波焼徳利I7～9、2区ではSK152染付仏壇具I25・SK153磁器染付碗I26・I27・I28・同皿I29・30・同蓋I32・仏壇具I31・関西系陶器土瓶蓋I33～35・同花瓶I36・SK154磁器染付碗I37・SK157丹波焼鉢I44・SK158磁器染付碗I45・SK173陶器土鍋I56・同窓道具I85・SK174関西系陶器掘鉢I57・SK176陶器尿瓶I59・土師器炮烙I60・SK181陶器皿I61・同灯明皿I62・同碗I63・窯道具I86・I87・SK197施釉陶器皿I65～68・磁器染付蓋I69・SK198土師器皿I64、3区ではSK112磁器染付碗I88・SK117では磁器染付碗I89・90・SK128磁器染付碗I91・SK137磁器染付碗I92・皿I93がある。

胞衣壺

2区で2基、3区で1基が検出された。

SK101 2区で検出された胞衣壺（土師質火消壺I73・蓋I72）である。壺方は直径0.3mを測る。

SK141 3区で検出された胞衣壺（土師質火消壺I99・同蓋I98）である。SK141の一角に据えられているが、土坑埋め戻し後に据えられたものである。SK141からは陶器皿I94・陶器土瓶I95・土鍋I96・磁器染付皿I97などが出土している。

SK160 2区で検出されたもので、内部に土瓶 I 51を掘えている。あるいは胞衣壺の可能性もある土坑である。他に染付碗 I 55が出土した。

溝

SD103 2区中ほどで南北に横断する溝からは白磁皿 I 70・磁器染付皿 I 71が出土した。

【第2面】(第34・35図、写真図版39・40参照)

第2面は地山直上で検出したが、いずれも稠密に遺構が確認された。検出された遺構には堀・溝・土坑・柱穴がある。

堀

2区西寄りで検出された南北方向の堀で、南側はH地区につながる。H地区とのつながりからすると堀の方向は北東から南西を方向に掘削された可能性がある。調査区の制約から全掘できなかつたが、幅は6m前後、側壁は急傾斜で地山を人工的に掘削していることが確認できた。この堀から東側A地区的SF 1までは約40m、西側J地区的堀1までは約70mの距離がある。6m級の堀は調査区周辺域では標準的な規模である。

溝

2区で堀1に平行して東側に4本の溝が検出されたほか、調査区東側ではSD201がある。

4本の平行する溝は幅0.6~1m、深さ0.2~0.3m前後のもので、内部に砾を投棄したものもみられる。これらの溝はD地区的SD206につながるものである。

また、SD201はD地区的SD209につながる溝で、堀1と同じく屋敷の区画溝の可能性が大きい。幅は3m前後、深さ0.2mの規模である。

柱 穴

1区全域と2区東側で比較的多く検出されたが、調査区の制約もあって建物を復元することはできなかつた。

土 坑

土坑は1・2区で特に多く検出された。しかし機能が明確なものはほとんどない。

土坑から出土した遺物は1区SK210から瓦質土器羽釜 I 18・I 19、3区SK223から丹波焼播鉢 I 100・瓦質土器羽釜 I 102・I 103がある。2区SK211はD地区的SK223と同じ遺構である。全形は東西に長い長方形土坑となる。全体の大きさはD地区も含めると長さ6m、幅3m、深さ0.4mほどである。

2. 遺 物

【第1面】(第37~42図、図版42~45参照)

土 師 器

土師器には皿・炮烙がある。皿が比較的少なく、2個体(I 52・I 53)を図化した。小皿で底部糸切りになる個体である。炮烙はDタイプのI 2・HタイプI 42、GタイプI 60・I 79がある。

瓦 質 土 器

火鉢(I 1)がある。高台の付くもので口縁上端が受け口状になる。

磁 器

磁器には肥前系磁器染付碗・皿・鉢・蓋・仏具・青磁染付碗、産地不明染付皿・白磁がある。

肥前系磁器染付碗は丸碗 I 3～I 6・I 26・I 38・I 39・I 45・I 55・I 89～I 92・筒碗 I 28・端反碗 I 37・広東碗 I 27・I 88や青磁染付碗 I 12がある。皿は I 29・I 30・I 58・I 71・I 75・I 93・I 96などがある。

この他、鉢 I 58・蓋 I 54・I 69・仏飯具 I 25・I 31・青磁染付碗 I 12がある。このうち鉢 I 58は薄手で口縁部に花卉をあしらったもので、外面に唐草、内面に花文を描いている。

産地不明染付皿 I 65～I 67は厚手のもので渕った緑色の釉を施す。白磁壺 I 13は薄手の製品である。

陶 器

陶器には丹波焼徳利・関西系陶器擂鉢・土瓶・土鍋・不明陶器徳利・尿瓶・花瓶・壺がある。

丹波焼擂鉢 I 44は口縁部が三角形状のものである。徳利 I 7・I 8は酒屋の量り売りのもので鉄釉を掛けた器表に I 7が玉置酒店・□□二三・坪井町、I 8が伊丹・錦□□とイッチンで描く。

関西系陶器 I 57は口縁部が拡張したものである。土瓶 I 51・蓋 I 50は肌色の発色の釉を施す製品で蓋はかえりが付く。同じく I 94は胴部が大きく貼り口縁部がやや小さくなる。土鍋は I 43・I 56・I 95がある。I 43は小さな足が付くもので深手である。I 56も足の痕跡が観察されるが、取手が付き浅く小型のものである。外面に墨書きが見られる。I 95は取っ手が付き深手のものである。

この他、不明陶器徳利 I 40・I 47、尿瓶 I 59、花瓶 I 36・壺 I 99がある。

窯道具

窯道具は内窯 I 85・86・87の破片と、製品を置くための底板 I 68がある。窯そのものは検出できなかつたが、今回の調査によってこれが投棄された屋敷地の裏庭周辺に窯が構築されていた可能性がある。これらは堅微に焼成されるが、胎土には粘性のないものが用いられている。器表は暗赤褐色を呈し、底板 I 86・87には直径12cmほどの製品を載せた痕跡がどちらも 2箇所残されている。

I 85は厚さ 8 cmで内窯の側壁の可能性がある。底部と側面の罐部が残されている。何つかを並べて全周する構造だったと推測される。

土 製 品

ミニチュアと人形がある。ミニチュアには三重塔 I 15・擂鉢 I 48・釣鐘 I 74がある。人形には牛 I 49・後行者 I 41がある。

【第2面】(第38・40図、写真図版40)

第2面からの遺物は遺構密度の割には少量である。遺物が出土した遺構は1区でSK210・217・P 2037、3区でSK223がある。この他、包含層遺物でいくつか出土があるがやはりわずかである。

土 師 器

土師器には皿・壺がある。皿は I 64・I 77・I 78がある。外面に指頭痕跡を顯著に残す個体で、口縁部(I 77)、および上半(I 64・78)を横ナデする。壺は I 22がある。I 22は口縁部をくの字に外反させる個体で外面に継刷毛、内面に板ナデの調整痕跡を残す。

瓦質土器

羽釜(I 23・24)がある。外面に指頭痕跡を顯著に残し、底部はヘラ削りする。内面は板ナデの痕跡が顯著に観察される。

磁 器

中国産には白磁皿 I 16・染付皿 I 17・青磁碗 I 80の3点がある。I 16は端反の皿の底部片である。I

I7は染付皿B類の底部片で花文を内面に描く。I80は青磁碗の底部で内面に印を持つ。

陶 器

陶器には備前焼擂鉢 I 20・I 21・I 83・I 84・煮 I 82、丹波焼擂鉢 I 100、信楽焼煮 I 81、唐津焼小碗 I 14・皿 I 79がある。備前焼擂鉢は口縁部を上方に拡張するものと、上方に拡張し外側に凹線状のナデを施すものがある。丹波焼擂鉢は1本描きの御目を持つ製品である。

【瓦 類】(第42図参照)

埴瓦はI 103の1点を圓化した。2邊が合わせ構造になったもので組み合わせて使用した製品である。

【金属製品】(第43図、写真図版47参照)

金属製品は銭貨、包丁が出土している。

銭 貨

銭貨のうち、圓化できたのは16枚である。本邦銭と波来銭のベトナム銭が出土した。本邦銭のうち、II 6、II 7・II 9、II 12は古寛永に分類される。II 5は文銭である。II 4は4文銭である。II 1～II 3・II 8、II 10、II 13は3期の新寛永である。ベトナム銭は洪順通寶(II 11)が出土している。

そのほか、II 14、II 16は1銭銅貨である。II 14鋳造年は不明である。II 15は大正12年の銘が、II 16は明治18年の銘がある。

包 丁

包丁はII 17がある。切先と茎の先端が欠損している。残存長は刃部が10cm、茎部が5.7cmである。

【石 製 品】(第43図参照)

茶 白

IS 1の1点がある。第1面から出土したもので、下白の断片である。

3. 小 結

本調査地区は停車場線東側の北側車線にあたり、第1面は胞衣壺や埋桶(便所)などの状況から、屋敷の前庭にあたり、初期の屋敷地は18世紀後半から19世紀前半に成立したと推定される。

また、SK 176・173から窯道具が出土したが、これらは埋桶の廃棄時に投棄されたものと考えられ、付近で窯業生産がおこなわれたことを裏付けた。時期は19世紀前半と考えられ第93次・第216次調査などで見つかった小型窯と同様のものが付近に存在する可能性がある。

第2面は2区で壠が検出され、1区と2区壠の東側に遺構が集中する。南側のH区で幅10mほどの遺構空白地が存在し、壠周辺に何本かの小規模な溝が存在することから、壠の周辺は区画として長く維持された可能性がある。

第13表 B地区遺物観察表1

(1区)								
番号	出土地点	種別	器種	法 量 (cm)			成型・調整法の特徴・文様	備考
				口径	體高	底径		
11 SK1	瓦葺土器	火鉢		24.05	12.90	15.60	輪状の高台、外側を平底に働く	
12 SK1	土器群	壺	(36.45)	9.20	—	Dタイプ、通は成型、焼れ跡行看		
13 SK102	壺群	壺	(7.80)	4.15	3.60	丸錐、外側蓋型文		
14 SK105	壺群	壺	(10.20)	5.50	(3.90)	丸錐、外側二重綱手		
15 SK3	安付造器	壺	16.20	5.30	4.45	丸錐、外側蓋型文		
16 SK3	壺群	壺	(16.20)	5.00	(4.20)	丸錐、外側縁枝文		
17 SK8	丹波燒	壺利	3.40	25.95	15.45	鉄錐型け、イッチャン書きで「玉置酒店」・「坪井町」・「□□ニ三」		
18 SK8	丹波燒	壺利	3.30	27.65	9.20	鉄錐型け相手する		
19 SK8	丹波燒	壺利	3.30	25.85	9.50	鉄錐型け、イッチャン書きで「伊丹」・「鈴町」		
20 SK106	上部器	壺	5.70	1.05	—	堅押し・堅品		
21 SK105	施釉陶器	壺	(6.20)	1.25	(3.80)	堅押し・壺、内面に花文		
22 SK105	施釉陶器	壺	(12.40)	7.30	(5.25)	内面花文、口縁斜方律文、底部内凹模		
23 SK105	白磁	壺	(12.15)	(11.10)	—	直立する口錐部		
24 包含器	糠塚	小碗	—	(2.00)	2.90	高台底黒邊模		
25 包含器	千葉品	小碗	(5.64)	(3.40)	—	堅押し・成型、壺		
26 SK217	瀬戸朱波	壺	—	(1.55)	(5.60)	丸錐の底部片		
27 SK217	瀬戸朱波	壺	—	(1.55)	(5.60)	丸錐・底部片、直立片、内面花文		
28 SK210	瓦葺土器	羽釜	(6.25)	(7.95)	厚さ2.15	三足の脚部片		
29 SK210	瓦葺土器	羽釜	(26.90)	(4.22)	(23.00)	小さな脚を持つ		
30 包含器	唐前	壺体	(96.00)	(3.75)	—	口錐部を上方に拉張し帯縁外側に凹模	V期	
31 包含器	唐前	壺体	—	(4.05)	—	口錐部を上方に拉張し縁部外側に凹模	V期	
32 A 3 P2037	土器群	壺	(31.30)	(6.50)	—	ぐの字に外側する口縁、内面底黒毛目		
33 A 3 P2037	土器群	羽釜	(27.90)	(6.90)	—	有段鉄蓋、取り付けの脚を持つ		
34 A 2 P2037	土器群	羽釜	(24.20)	(8.80)	—	有段鉄蓋、取り付けの脚を持つ		
(2区)								
35 SK152	乗付造器	仏具	(8.00)	5.75	4.30	外周杯沿草文		
36 SK153	乗付造器	壺	(7.90)	3.80	2.85	丸錐、外側蓋型文		
37 SK153	壺群	壺	(9.40)	(5.45)	(5.40)	広葉文。外側花文		
38 SK153	乗付造器	湯飲み	(7.30)	3.60	(3.65)	外周圓文、内面白堅板凹方律文		
39 SK153	乗付造器	壺	(13.30)	3.65	(10.20)	内面花開闊水、外側アラベスク文		
40 SK153	壺群	壺	(17.30)	(3.20)	(11.50)	内面花込み文。体部錐錐と笠文、外側アラベスク文		
41 SK153	乗付造器	仏具	6.60	6.00	4.20	外周折梅文		
42 SK153	乗付造器	壺	(9.35)	3.00	—	外周脚部在文		
43 SK153	施釉陶器	壺	7.25	(2.45)	—	天井形に錐錐		
44 SK153	施釉陶器	壺	(9.40)	2.65	3.80	土瓶の壺、内面見込みにつまみを持つ		
45 SK153	施釉陶器	壺	(8.40)	3.35	—	土瓶の壺、内面見込みにつまみを持つ		
46 SK153	施釉陶器	壺	(14.90)	(11.20)	—	ラッパ状に聞く口錐部、錐錐付文		
47 SK155	安付	壺	10.00	5.60	4.25	薄尻の壺、内面錐錐の子と垂文		
48 SK155	乗付造器	壺	(10.50)	(4.90)	—	丸錐、外側花文		
49 SK155	乗付造器	壺	(10.20)	(4.45)	—	丸錐、外側蓋型文		
50 SK155	青磁	壺利	—	(3.85)	4.10	体部をへこませ、円形脚を貼り付ける		
51 SK156	千葉品	人形	高さ6.50	高さ3.80	厚さ2.10	堅押し・成型、後小角		
52 SK155	土器群	壺	(33.00)	(4.00)	—	廿タイブ、底部型作り		
53 SK156	施釉陶器	土鍋	(21.00)	10.90	(8.70)	底部に小さな3足が付く		
54 SK157	片底壺	壺群	(32.80)	(5.45)	—	底倒し三角形になる口縁、縁部外側に印模		
55 SK158	乗付造器	壺	(9.80)	3.65	—	丸錐、外周アラベスク文		
56 SK161	陶器	灯明皿	5.60	1.07	—	製作り、施釉陶器	灯明皿	
57 SK161	白磁	壺利	—	(14.20)	(5.50)	透明度を施す		
58 SK161	千葉品	人形	(5.70)	2.95	2.55	型押し・成型、複雑		
59 SK161	土器群	人形	長(7.00)	高さ(3.40)	高さ(4.20)	堅押し・成型、半の壺		
60 SK160	施釉陶器	壺	8.85	4.50	—	新規の型、施釉を強す		
61 SK160	施釉陶器	茶碗	12.00	14.90	8.40	丸錐を出す、体部下部施釉、削り調整		
62 SK162	七寶器	灯明皿	6.40	1.45	—	製作り	灯明皿	
63 SK162	七寶器	壺	6.80	1.35	2.85	製作り		
64 SK162	七寶器	壺利	(9.40)	2.90	(4.10)	人井型に錐錐のつまみ、革文		
65 SK165	安付造器	壺	(10.10)	(5.35)	(4.20)	丸錐、外側		

第14表 H地区遺物観察表2

(2区)								
土器・陶器								
番号	出土地名	種別	基種	法 量 (cm)			成型・調製法の分類・文様	備 考
				口径	器高	底径		
156	SK173	施釉陶器	罐	14.50	5.35	5.50	取手を溝す縦穴を持つ。底部に墨書	
157	SK174	施釉陶器	盞鉢	(22.20)	(7.80)	(11.20)	笠倒した口縁、器外周面に回紋	明石・源氏
158	SK175	施釉陶器	皿	(28.30)	6.55	(16.40)	内面見込み素と花文、体部に茎と渦文、外縁アラベスク文	肥前系
159	SK176	施釉陶器	底盤	6.15	14.40	13.95	濃緑色の施釉	
160	SK176	土師器	盤	(32.00)	(6.70)	—	Gタイプ。底部斜作り。口縁部に墨書	
161	SK181	施釉陶器	皿	6.25	0.45	2.05	いわゆる特輪底。塑作り	灯明皿
162	SK181	施釉陶器	皿	(10.80)	(2.20)	(4.80)	内面に小孔を持ち。底部斜持付臺	灯明皿
163	SK181	京焼系	瓶	(8.55)	(3.05)	—	体部下平頭削	
164	SK198	土師器	小皿	10.80	2.35	4.20	内面および底部模様ナギ、体部上半をくの字に外反させる	
165	SK197	青磁?	皿	15.40	3.70	10.00	深緑色の施釉、器底の黄土が目立つ	不明
166	SK197	磁器?	皿	15.55	3.45	8.80	深緑色の施釉、器底の黄土が目立つ	不明
167	SK197	磁器?	皿	(15.40)	(3.40)	(8.30)	深緑色の施釉、器底の黄土が目立つ	不明
168	SK197	施釉陶器	皿	23.35	1.35	23.10	白色の施釉、器底に寅人あり	
169	SK197	朱付陶器	皿	15.40	3.30	—	輪状のつまみ、人形部に牡丹文	肥前系
170	SD103	白磁	皿	(7.20)	(2.80)	(2.90)	兔糸を擬して模作する	
171	SD103	朱付陶器	皿	(14.25)	2.60	0.00	薄作り、内面に印文	
172	SK101	土師器	盤	14.95	4.20	—	火消しの墨。器底に蓋文として私用	
173	SK101	土師器	盤	(12.40)	(9.30)	12.20	火消しの墨。蓋文として紀用	
174	苗ヶ原	十輪品	ミニチャ	真(4.75)	縦幅(3.35)	厚さ(2.2)	製作より底面、釣縄	
175	包含層	透窓骨付	皿	12.20	3.45	4.20	内面底の墨の種割ぎ。体部斜削子文	肥前系
176	包含層	土師器	壺	(30.80)	(6.95)	—	Gタイプ。底部斜作り。外縁墨書き	
177	包含層	土師器	皿	7.40	1.40	3.20	手づくね、内面によだれ模様ナギナ。ヘン皿	V類
178	包含層	土師器	皿	9.15	1.80	3.50	手づくね、内面によだれ模様ナギナ。ヘン皿	V類
179	包含層	唐津	鉢	(12.10)	(4.12)	(4.40)	折り線模様。断り出し高台	
180	包含層	吉祖	瓶	—	(2.20)	4.80	底脚片。見込みに卯文。(難共出)	中国產
181	包含層	丹波焼	蓋	6.80	13.25	11.20	うずくまき小窓。手足の器耳、小さくすぼまり外側の口縁部	V類
182	包含層	吉祖?	蓋	(10.50)	(6.30)	—	輪部に波状文、口縁部は小さな王冠になる	V類
183	包含層	福岡焼	瓶	—	(6.90)	(14.30)	虎爪。内面地模削刻頭。胎土は灰土	V類
184	包含層	福岡焼	墨跡	—	(4.80)	(12.30)	表脚片。内面使用痕跡墨。胎土は灰土	V類
185	SK173	陶器	施漬具	長(8.10)	幅(5.50)	15.4	—	内窓の側面片
186	SK173	陶器	施漬具	長(8.17)	幅(5.48)	18.6	—	内窓の側面片。2箇所に器底の底部痕跡を残す
187	SK176	陶器	施漬具	長(36.8)	幅(25.15)	—	内窓の側面片。	
(3区)								
188	SK112	朱付陶器	瓶	(9.70)	5.35	(4.40)	廣東碗。外面に単文	肥前系
189	SK117	朱付陶器	瓶	(10.45)	(4.85)	(3.95)	丸瓶。外面に草文	肥前系
190	SK117	朱付陶器	瓶	(10.90)	5.70	(4.20)	朱瓶。内面見込みに五瓣花	肥前系
191	SK128	朱付陶器	瓶	(10.20)	(4.85)	—	丸瓶。外面に単文	肥前系
192	SK137	朱付陶器	瓶	(10.10)	(4.40)	—	丸瓶。外面に単文	肥前系
193	SK137	朱付陶器	皿	(13.40)	3.10	(7.60)	内面花文、外面アラベスク文	肥前系
194	SK141	施釉陶器	皿	6.00	4.00	1.00	桔梗皿。型押し墨。透彫削施釉	肥前系
195	SK141	施釉陶器	十瓶	7.30	11.10	7.70	製作り。肩部に取手の紐穴を持ち、底部に小さな3足をもつ	肥前系
196	SK141	施釉陶器	瓶	17.40	10.35	6.80	製作り。肩部に取手の紐穴を持ち、底部に小さな3足をもつ	肥前系
197	SK141	朱付陶器	瓶	(11.60)	3.60	4.30	内側輪の口に施墨。底部に斜削子文	肥前系
198	SK141	土師器	蓋	(14.60)	3.55	—	火消し墨。ナガ開脚。人形部につまみ	肥前系
199	SK141	十輪器	大甕	19.90	15.60	14.40	火消し墨。墨厚し内側する口縁部。内外面ナギ調整	肥前系
200	SK141	陶器	鉢	—	(12.20)	(23.10)	バケツ型をした鉢。詳細不明	
201	SK223	丹波焼	箱	(26.80)	(6.90)	—	1本縫き割目。尖り氷柱におりる口縁部	
202	SK223	上種器	羽釜	(21.90)	(13.70)	(31.60)	有底羽釜。上方に伸びる脚を語り付けら	
203	SK223	土種器	羽釜	31.70	27.30	—	有底羽釜。脚を語り付ける。外縁底部ノズリ調整	

第15表 I地区遺物観察表3

瓦類												
番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)			成型・調製技法の特徴・文様			備考		
				口径	基底	底径						
I104	C区 瓦留り	瓦	道具瓦	幅30.90	横26.60	厚3.90				道具瓦		
金属製品										備考		
報告書 番号	地区	土層	遺構名	種別	品目	種種	初期年 鉄道年	時代	法量(cm)			
									長さ	幅	厚さ	
II1	A-1	粘土帶		陶製品	瓦質	瓦水道管	新		2.4	2.4	0.3	
II2	A-1	包含帶		陶製品	瓦質	瓦水道管	新		2.5	2.5	0.3	
II3	A-2	1面目		陶製品	瓦質	瓦水道管	新		2.3	2.3	0.3	
II4	A		土坑2	陶製品	瓦質	瓦水道管	新		2.8	2.8	0.1	
II5	A-2	上面		陶製品	瓦質	瓦水道管	古		2.5	2.5	0.3	
II6	A-1		土坑9	陶製品	瓦質	瓦水道管	古		2.6	2.6	0.3	
II7	A-2	上面		陶製品	瓦質	瓦水道管	古		2.4	2.4	0.3	
II8	B-2		SK161	陶製品	瓦質	瓦水道管	新		2.5	2.5	0.3	
II9	B-2		SK166	陶製品	瓦質	瓦水道管	古		2.6	2.6	0.3	
II10	B-7			陶製品	瓦質	瓦水道管	新		2.3	2.3	0.3	
II11	B-8			陶製品	瓦質	瓦水道管	新	1509	後期	2.5	2.5	0.1
II12	B		SK181	陶製品	瓦質	瓦水道管	古		2.4	2.4	0.1	
II13	C-3			陶製品	瓦質	瓦水道管	新		2.3	2.3	0.3	
II14	A		陶SK160:SK169	陶製品	瓦質	瓦水道管	新		2.3	2.3	0.1	
II15	A-2			陶製品	瓦質	一焼	12	大正	2.4	2.3	0.3	
II16	A-3	十焼7 +燒内		陶製品	瓦質	一焼	18	明治	2.8	2.8	0.3	
II17	C		SK120	陶製品	瓦質				15.7	3.9	2.7	
石製品										備考		
番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)			成型・調製技法の特徴・文様					
				口径	基底	底径						
IS1	IS1 包含帶	石製品	石臼	(24.80)	-	(9.45)	茶臼の断片、臼の目は8~9の分割数で10本単位			下臼		

第5節 H地区の遺構

1. 遺構

H地区はD地区とG地区の間にあたる全長30m・幅約3.6mの範囲である。

検出した遺構は防空壕・井戸・土壙・ごみ穴・溝・堀などを検出している。

今回検出した遺構は、調査区の西半部に顕著に見られる江戸時代中頃の火事面（もしくは火事かたずけ層）を境に大きく、火事層の上、火事層の下、地山面直上の3面に大別される。

火事層の上では、①期 戦前～終戦前後（19世紀末～20世紀前半）・②期 江戸時代後期（18世紀後半～19世紀前半）。

火事層の下では、③期 江戸時代中期（17世紀末～18世紀前半）の遺構・遺物を検出した。

地山面上では、④期 江戸時代前期・⑤期 戦国時代・⑥期 鎌倉時代末・⑦期 鎌倉時代以前（古墳時代前期末の可能性が高い）の7時期の遺構・遺物を検出した。各時期の概要は以下の通りである。

①期 戦前～終戦前後（19世紀末～20世紀前半）一現道路敷直下から現れる。礎石建物。白色粘質土を敷いた土間・防空壕2基（SK112・SK113）・ゴミ穴・汚水溜（木製の枠SD105）・瓦列を伴う南北溝（SD101）・便座・埋め桶等が伴う。

②期 江戸時代後期（18世紀後半～19世紀前半）一③期の火事面の上から掘り込まれ、①期の土間敷の下層に位置する。調査区西半～中央部を中心にゴミ穴・埋め桶（SP107）・径50cm前後の土坑・溝（SD104）を検出した。

③期 江戸時代中期（17世紀末～18世紀前半）一火事面もしくは火事片付け層の直下より検出した。調査区西半部には径1m前後・深さ30cm前後のゴミ穴が密集して掘られている。

調査区東半部では畠と考えられる溝状遺構を検出している。下層に存在する内堀の底みの痕跡部分を利用したと考えられる。火災後、更に全焼を大きく掘り下げ、火事片付けにともなう炭・焼土を畠状遺構部分に埋め込んでいる。

④期 江戸時代前期～⑤期 戦国時代～地山面直上において検出した。出土遺物が少なく、現時点では時期を特定し難い遺構が多い。

⑤期の遺構としては、有岡城に伴うと考えられる堀がある。調査区東半部では幅約4.2m・深さ約2.2mの堀を検出した。幅約4.2m・深さ約2.2m以上を測る。堀は南北方向に走り調査区を横断する。埋土からは土師器皿・備前焼鉢片（V期）・軒丸瓦・黄瀬戸皿片が出土している。④期には堀は埋められ、地山土によって整地、整地面上の土壤層からは17世紀代の唐津焼片や磁器片が出土している。

中央部では素掘り井戸（SK117）を検出している。井戸の埋土最上層からは色絵磁器片等が出土しており、戦国時代～江戸時代にかけて使用された可能性がある。

西半部では構列SA201・土坑群（ゴミ穴SK120・SK202・SK203）を検出している。構列は東西方向に、1間約1.3mで9間以上延びており、東半部の柱穴とあわせて20m以上の延長が復元できる。平成7年度の調査において同様の構列（戦国時代）を検出しており、同時期のものと考えられる。土壙群（ゴミ穴SK120・SK202・SK203）は主に構列にそって連なって掘られており、幅約2m・長さ13m程度を測る。土壙内からは円錐とともに、備前焼鉢片（V期）・瓦片が出土している。構列とは一部きりあい新しい。戦国時代～江戸時代前期にかけて使用されたものと考えられるが、時期を特定し難い。

⑥期 鎌倉時代末～調査区中央部から西半部にかけて、ピット群を検出している。ピット内からは瓦器

椀片・土師器皿片が出土している。獨立柱建物の存在が想定されるが、現状では復元できていない。

⑦期 鎌倉時代以前－古墳時代から奈良時代の須恵器が調査区東半において若干出土している。周辺地に遺構が存在する可能性がある。また、特筆すべきものとして円筒埴輪片及び円筒埴輪片がある。

円筒埴輪片は調査区西半部で検出した。径約38cm・残存長約80cmの円筒埴輪を棺として使用し、幅約75cm・残存長約90cmを計る楕円形の墓擴に南北方向を軸に水平に据えている。円筒棺の中央部及び南端には柱穴があき、更に墓擴の南半部はゴミ穴によって擾乱・損壊されているために全容は詳らかではない。円筒埴輪自体の時期は5世紀末から6世紀初頭の時期と考えられる。検出された円筒埴輪片以外にも円筒埴輪片は調査区の西端から西半部にかけて複数のゴミ穴から計30点近く出土しており、複数の埴輪円筒棺が破壊された可能性も考慮する必要がある。

以下に各時期の遺構について述べていく。複数面の遺構面を便宜上上下2面に分けて調査を実施した。即ち、①期から③期を第1面、地面上において検出した④期から⑦期の遺構を第2面として調査を実施した。

但し、遺物については、他年度の調査との整合性の便宜上①期から④期を第1面の遺物、⑤期から⑦期を第2面の遺物として図示した。

【第1面】(第44図、写真図版48~53参照)

溝

溝は後述する畠状遺構以外に5本検出している。何れも調査区を横断しており、調査区中央に集中している。大半は近現代の家屋に伴うものでSD101・SD103・SD104・SD105がある。

SD101は平瓦を利用した瓦列を伴っている。家屋・宅地の境界にあたるものと考えられる。

SD103・SD104についてもSD101と同様家屋・宅地の境界にあたるものと考えられる。

SD102は幅約60cm・深さ約5cmを測る。近代に入る遺物が出土している。

土 坑

土坑の大半は調査区の西1/3に集中しており、径1m前後の円形の土坑群から構成される。

SK119a~d・SK104・SK108や長軸2.5m・幅1m前後の楕円形の土坑SK114・SK121などがあり大半はゴミ穴であると考えられる。

土坑の時期は17世紀(SK104 第2面において調査)から18世紀(SK116・SK121)のほか、19世紀代(SK109)にわたる。

これらゴミ穴はSD102・SD104を境に東側には見受けられない。溝を境に土地利用に違いがあるものと考えられる。

また、調査区の東端にはSK112・SK113が存在するが、これは戦時の防空壕である。

調査区西半中央寄り北壁際のSK117は径約1.3mの素掘りの井戸である。調査区の壁にかかるため精査はできず1m程度の掘削で終了した。深さは不明である。埋土からは17世紀から18世紀の遺物が出土している。

埋め桶・埋め甕

調査区東端(SK117)、中央のSD104内、調査区中央南壁において埋め桶遺構を検出している。

埋め甕遺構は中央のSD104に近接して調査区中央南壁において検出している。これらの大半は近代の家屋に伴うものと考えられる。

ピット

江戸時代以降と確定できる柱穴・ピットは殆んど確認できない。

壠状遺構

調査区東端より検出した。内堀の窪みの痕跡部分を利用したと考えられる。

壠状遺構は約80cmの間隔を空けて、調査区内だけで10本の平行した溝が走っている。溝は幅約30cm・深さは5cm前後、浅い弓形の断面形状を呈している。

【第2面】(第44図、写真図版51・54・55参照)

堀

調査区東堀より検出した。堀は調査区を横断しており、幅約4.2mを測る。深さは2.2m以上を測るが、調査区の幅の割約から堀の底を明らかにすることはできなかった。また、堀の肩は約60°の角度で立ち上がりっている。堀は下層では主に地山を掘削した埋土、上層は土壤化した土や礫によって埋められており、埋土からは土師器皿・備前焼播鉢片（V期）・軒丸瓦・黄瀬戸皿片が出土している。また、堀が埋まつた上に溝状の土坑SK205が存在している。

出土遺物の時期から堀は16世紀後半以降に埋められたことがわかる。有岡城跡に関連した堀と考えられる。

土坑群

土坑はその大半が調査区の西半部に掘られている。上層からゴミ穴が多数穿たれており、規模・性格が明瞭なものは少ない。SK202a・SK202b・SK202c・SK203は調査区の西半部を中心には掘られた廐棄土坑群で、両半が調査区外にある。合わせて、全長約13m・幅約2m以上の規模をもち、深さは40cmを測る。土坑からは円錐とともに、備前焼播鉢片（V期）・瓦片が出土している。また、横列とは一部きりあい新しい。土坑群は最終的には第1面まで継続して使用され江戸時代中頃に入つて最終的に埋まつた（SK120）と考えられる。

これらSK202a・SK202b・SK202c・SK203から構成される土坑群は先行する横列SA201と並行して存在している。土地や家屋の境界や道路にそつて東西方向に掘られていった可能性が考えられる。

SK205は堀が埋没した後に掘られた土坑もしくは溝である。幅約60cm・深さは5cm前後を測る。壠状遺構が上層に営まれている。

柵　列

調査区の西端から東半にかけて走る柵列SA201を検出している。

柵列は軸を東西方向（N83°E）にとる。SP216・SP218・SP210からSP266にかけて1間約1.3mで15間以上延びており、20m以上の延長が復元できる。（第44図 第2面 濃色の柱穴列）

柱穴からは16世紀代の遺物が若干出土しており、平成7年度の調査において検出されている戦国期の柵列と、同時期のものと考えられる。また、土坑群SK202a・SK202b・SK202c・SK203ときりあい先行する。

柱穴群

調査区内からは、2時期の柱穴を検出している。一つは前述した柵列に関わる柱穴で、東半部の柵列に平行して存在するSP259・SP210・SP260である。SP254・SP264・SP265と共に2間×1間以上の獨立柱建物跡となる可能性も残る。

今一つはSP223の出土遺物が示す鎌倉時代の柱穴である。同時期の遺物はSP241・SP270など調査区の西半部において検出されている。掘立柱建物跡の存在が想定されるが、復元することはできなかった。

溝

溝SD201は調査区の東半より検出した。幅約2m・深さ約40cmを測り、調査区を南北に横断している。断面形状は箱形を呈するが、溝底に更に幅約50cmの溝があり掘り直された可能性がある。またSD201はSP264・SP265ときりあい新しい。

溝内からは16世紀代の遺物が出上している。

円筒埴輪棺

調査区西側より埴輪棺を検出した。今回の調査区で、唯一の占墳時代の造構である。棺は径約38cm・残存長約80cmの円筒埴輪を棺として使用し、残存長90cm、幅75cm、検出面より深さ30cmの墓壙に納められていた。主軸の方向はN22.5°Wである。墓壙の南側は、近世以降のゴミ穴によって擾乱を受けているため、全体の規模は不明である。

棺に使われた埴輪は、1個体分で構成される。棺内部には人骨は遺存していなかった。墓壙、棺内部からも副葬品は検出されなかった。棺の南側から2/3の部分は、後世に柱穴として穿たれた穴によって擾乱を受けている。検出時には棺身の埴輪は土圧により、ひしゃげた状態であった。

口縁部には半裁された円筒埴輪が北側小口板として利用されている。南側の小口はゴミ穴による擾乱により不明であるが蓋形埴輪の底部の破片が出土しており、小口を閉塞するために用いられた可能性を考えられる。埴輪の透孔の部分が閉塞されていたかどうかは十分に確認できなかった。

棺の大きさ(径)から推定すると被葬者は子供であるか、成人の再葬墓として埋葬された可能性がある。

2. 遺 物

【土器・陶磁器】(第47~55図、写真図版63~73参照)

H地区から出土した土器・陶磁器には、種別では、土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、無釉陶器、施釉陶器、白磁、青磁、染付磁器、色絵磁器がある。

A 土 師 器

土師器には器種別では、皿・焼烙・鍋・羽釜・火消し壺・蓋・焜炉、用途不明品がある。

皿にはロクロ土師器と非ロクロ土師器がある。非ロクロ土師器には底部が丸底のもの(H94・H133・H136・H187)と平底のものがある。平底のものには、大型(H180)、中型、小型のものがある。平底の中型皿は底部と体部の界が比較的明瞭なA類(H188・H190)、底部と体部の界が不明瞭なB類に分類できる。B類はさらに器壁の薄いBⅠ類(H57~H59・H109・H110・H189)と器壁の厚いBⅡ類(H135)に細分される。平底の小型皿も中型皿と同様に、体部と底部の界が明瞭なA類(H205)と体部と底部の界が不明瞭なB類に分類できる。さらにB類は器高が低く、器壁が比較的厚いBⅢ類(H39・H40・H127・H131・H134・H199・H194・H206・H215)、器高が低く、器壁が非常に厚いBⅣ類(H104・H108・H129)に細分される。ロクロ土師器には大型のもの(H54・H55・H96・H125)と小型のものがある。小型皿は、内面に透明釉を施さないA類と内面に透明釉を施すいわゆる柿釉の灯明皿のB類に分類できる。B類は体部と底部の界が明瞭で体部内面に凸縦を巡らせるBⅠ類(H9・H13)と体部と底部の界が不明瞭なBⅡ類

(H26・H124・H137・H138) とに細分される。いわゆる柿輪の灯明皿は18世紀後半から19世紀前半代に比定される。

焰 烛 焰焰には底部が丸底のものと平底で口縁部が断面三角形状に肥厚するもの (H90)、及び体部の破片 (H139・H140・H142・H216) がある。丸底のものは体部と底部の界が丸みをもつA類と底部の界が角張るB類 (H15・H41・H64) に分類できる。A類はさらに外面に叩き目が残るA I類 (H143) と叩き目が見られないA II類 (H63・H91) に細分される。H90は19世紀前半代に、H15・H91は19世紀初頭に、H143は17世紀前半代に、H63は17世紀後半代にそれぞれ比定される。

羽 釜 羽釜には口縁部が内傾し、断面台形状の鋸をもつもの (H182)、口縁部がほぼ直立し、断面三角形状の短い鋸をもつもの (H192)、口縁部が内傾し、口縁部外面に凹線をもつもの (H207) などがある。

鍋 H111・H141・H191は鍋の口縁部と考えられる。細片のため詳細は不明であるが、H111は長谷川分類播丹型鍋の口縁部と考えられ、15世紀代のものであろう。

火消し壺 H37は体部が上位で大きく「く」の字状に屈曲し、口縁端部が丸みをもつ火消壺である。

蓋 H5は底部外面に糸引き痕が残る。瓶の蓋と考えられる。

焜 爐 H12は外面に空気孔を穿孔し、内面に棒状の突起を貼り付ける焜爐である。

用途不明品 H145は手づくね成形の筒形の土製品である。小型の堆塙の可能性が考えられる。

B 瓦 器

瓦器はいずれも和泉型瓦器範である。底部まで残存するものと底部が欠失するもの (H199・H200) とがある。底部まで残るものは、高台の形態から、高台がないもの (H195)、断面半円形の退化した高台をもつもの (H196)、断面三角形状の退化した高台をもつもの (H197・H198) に分類される。H195は森島分類のⅣ-4期相当で14世紀前半に、H196~H198はⅢ-3期相当で13世紀前半代にそれぞれ比定できる。

C 瓦質土器

瓦質土器には、器種別では、羽釜・火鉢がある。

羽 釜 H144は口縁部が内傾し、断面三角形状の短い鋸をもつ。内外面ともヨコナデ調整を施す。

火 鉢 H181は円筒状の体部に半円形のタガを貼り付けるもので、火鉢と考えられる。H38は型作り成形で、体部は下位、上位で大きく屈曲する。体部外面には型押しで、幾何学文・円形文を施す。体部外面には2箇所に游環をもつ。

D 須恵器

須恵器には器種別では、壺・捏鉢・壺・蓋などがあり、いずれも細片である。

壺 H3は短い頸部をもち、口縁部の上端と下端をそれぞれつまみ出す。

捏 鉢 H147は体部が直線的に斜め上方に延び、口縁部は断面三角形状に肥厚する。東播系須恵器魚住窯の赤根川支群の製品で14世紀前半代に比定される。

壺 H212は比較的高い高台を持ち、体部が直線的に斜め上方に延びる壺の底部である。

蓋 H178は断面三角形状の短いかえりをもつ杯の蓋である。

E 無釉陶器

無釉陶器には器種別では、捏鉢・壺・壺・鉢がある。

捏 鉢 捏鉢には産地別では、丹波焼、備前焼、堺・明石焼、産地不明のものがある。

丹波焼 丹波焼と考えられる描鉢には、口縁部のみ残るものと、底部のみ残るものがある。口縁部のみ残るものは、その形態及び内面の描日の施文方法から、口縁部が断面長方形状を呈し、内面にヘラ描きの描目を施すもの（H92）、口縁部が断面長方形状を呈するが、先端が丸みをもち、内面にヘラ描きの描目を施すもの（H117・H210）、口縁部が上下に拡張し、縁帶をもち、口縁部外面に円線が廻り、内面に櫛描きの描目を施すもの（H50・H151）に分類される。底部のみ残るものは、いずれも外面に指頭圧痕が残り、内面にはヘラ描きの描目が施される。H92・H117・H210は17世紀前半代に、H151は18世紀前半代にそれぞれ比定される。

備前焼 備前焼と考えられる描鉢も丹波焼同様、口縁部のみ残るものと底部のみ残るものがある。口縁部のみ残るものは口縁部の形態から、口縁部が上下に拡張し、断面三角形状の比較的厚い縁帶をもち、口縁部外面に2条の円線が廻るもの（H103・H113）、口縁部が上下に拡張し、断面長方形状の比較的薄い縁帶をもち、口縁部外面に2条の凹線が廻るもの（H116・H204・H218）とに分類される。底部のみ残るものは、底部と体部の界が不明瞭で内面に櫛描きの描目を施すもの（H93・H185・H208・H211）である。H103・H113・H116・H204・H218はいずれも備前焼V期相当で、16世紀後半～17世紀前半に比定される。

堺・明石焼 堀・明石焼と考えられる描鉢は、口縁部の形態の違いから、口縁部が上下に拡張し、口縁部の断面形状が長方形を呈し、口縁の下端部を下方につまみ出すA類（H17・H65・H67）、口縁部が上下に拡張し、口縁部の断面形状が長方形を呈し、口縁の下端部をつまみ出さないB類（H68・H148・H150）、口縁部が上下に拡張し、口縁部の断面形状が台形状を呈し、口縁部の下端部を横方向に拡張するC類（H66・H101・H102）に大きく分類できる。B類はあるいは備前焼の可能性も考えられる。A類はいずれも18世紀後半～19世紀前半代に比定される。

壺 H8は平底で、体部はほぼ直上に延び、口縁部が断面台形状を呈する。H48は口縁部が断面格円形状に肥厚するもので、備前焼IV期相当で、15世紀代に比定される。

壺 H202・H203はいずれも壺の破片と考えられる。H202は体部が上半部で内傾する。H203は平底で体部は直線的に斜め上方に延びる。

鉢 H219は平底で、体部が大きく屈曲してほぼ直上に延びる鉢である。火入れとして使用された可能性が考えられる。

F 施釉陶器

施釉陶器には器種別では、碗・皿・鉢・蓋・鍋・壺・甕・水滴などがある。

碗 碗は産地別では、肥前系のものと、産地が特定できないものがある。肥前系碗は底部を浅く削りだし、高台裏を兎巾状に成形し、高台脇以下は露胎のもの（H213）、内外面とも鉄釉と白泥を刷毛で施釉する刷毛目唐津碗（H75・H89）がある。H213は17世紀前半に、刷毛目唐津は17世紀後半～18世紀前半にそれぞれ比定される。産地の特定できないものには外面の高台脇以下が露胎で底部内面を鉢ノ目釉ハギするもの（H46・H77）などがある。

皿 皿には産地別では、瀬戸・美濃系、肥前系、産地の特定できないものがある。

瀬戸・美濃系 瀬戸・美濃系と考えられる皿には内面にヘラで菊花を彫りこみ、内外面に灰釉を施釉するいわゆる黄瀬戸の菊皿（H1・H183・H184）、内外面とも灰釉を施す丸皿（H161）、内面に長石釉を施釉する美濃焼志野皿（H70）などがある。いずれも、16世紀後半～17世紀前半代に比定される。

肥前系 肥前系と考えられる皿には内面に鉄釉で施文する絵唐津（H114）、内面に胎土目跡が残る胎

土日皿 (H120)、体部が大きく屈曲する皿 (H163)、高台を浅く削りだし、外面の高台脇以下が露胎で、器壁の比較的厚いもの (H69・H221) などがある。H114・H120は17世紀初頭に、H69・H221は17世紀前半に、H163は17世紀中頃にそれぞれ比定される。

産地不明 H220は内面に灰釉を施し、底部外面は露胎である。

鉢 鉢には肥前系、瀬戸・美濃系のものと産地の特定できないものとがある。

肥前系 肥前系と考えられる鉢には、内面を蛇の目状に釉ハギするもの (H119)、外外面に刷毛で白泥を波状に施文する刷毛目唐津鉢 (H74)、同じく白泥で草花文を施文する現川焼 (H73) がある。いずれも17世紀後半～18世紀前半に比定される。

瀬戸・美濃系 瀬戸・美濃系と考えられるものには、内外面に長石釉を施釉する美濃焼志野向付 (H106) がある。17世紀初頭の時期が考えられる。

産地不明 H86は筒状を呈し、外面に鉄絵で簡略化した草花文を施文する。H105は口縁部上面が水平に端面をもつもので、内外面とも全面に鉄釉を施釉する。

蓋 蓋には外面にトビガンナ施文を施すもの (H2)、体部は山笠形で外面に白泥で草花文を施すもの (H29)、環状のつまみを持ち、外面に沈線を施し、全面に灰釉を施すもの (H160)、落とし蓋で外面は露胎の急須の蓋 (H159) などがある。いずれも、京焼系の在地産の製品と考えられ、19世紀前半に比定される。

鍋 鍋は2点固定化している (H35・H162)。いずれも平底で体部は内彎してほぼ直上に延びる。H35には団子状の形骸的な脚を3箇所貼り付ける。いずれも、京焼系の在地産の製品で19世紀前半の時期が考えられる。

壺 H118は無頭壺の破片である。内外面とも鉄釉を施す。体部は内彎気味に延び、口縁部が大きく内彎する。内外面とも灰釉を施釉する。

甕 H36は体部は内彎気味にほぼ直上に延び、口縁部は上面に水平に端面をもち、口縁端部を外方につまみ出す。外面は鉄釉施釉の後、灰釉を柄杓掛けで鉢状に施釉する。丹波焼で19世紀前半に比定される。

水 滴 H87は硯箱形の水滴である。型作り成形で上面に型押しで筆、硯、水滴などの文房四宝を施文する。前面に透明釉を施釉し、灰白色を呈する。京焼系の製品である。

G 白 磁

白磁には器種別では、碗・皿・鉢がある。

碗 H112は比較的細く低い高台をもち、体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。内外面とも透明釉を施釉し、青味を帯びた灰白色に発色する。

皿 H99は比較的細く高い高台をもち、体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方に開く。内外面とも透明釉を施し、白色を呈する。

鉢 H31は底部の器壁が非常に厚く、高台は細く低い。クロコ成形の後、口縁部は型打ちで花弁状に整形する。肥前系で19世紀前半のものと考えられる。

H 青 磁

青磁には器種別には、碗・皿・鉢がある。

碗 碗には產地別では、中国製のものと国産のものとがある。

中国製 H84は底部内面に、H177は外面に、それぞれ片切り彫りで草花文を描く。龍泉窯系青磁割

花文碗で13世紀代に比定される。

国 産 H6は筒形の湯呑み碗で、緑灰色に発色する。クローム青磁で近代以降の製品と考えられる。

H164は型押しで内面に「賣」文を外面に「白水山」銘をスタンプする。近世後半のものと考えられる。

皿には、ロクロ成形の丸皿（H165）と型作り成形の角皿（H30）がある。H30は内面に型押しで草花文を施す。三田焼の可能性が高く、19世紀前半代に比定される。

鉢 H115は外面に青磁釉を施釉し、内面に異須で草花文を描く染付青磁である。肥前系で18世紀後半代のものであろう。

I 染付磁器

染付磁器には器種別には、碗・皿・猪口・鉢・蓋・御神酒徳利などがある。

碗 碗はいざれも肥前系のものである。肥前系の碗には、その形態などから、器壁が厚く、体部が内側気味に斜め上方に延びる、粗製のいわゆるくらわんか手（H32・H42・H45・H76・H79・H80・H81・H82・H167・H168・H169・H170・H222）、高台が細く高く、体部がほぼ直線的に斜め上方に延びる広東碗（H10・H223）、器壁が非常に薄いもの（H18・H49・H107）、体部がほぼ直立するもの（H78・H171）、小型の碗（H11・H83）などがある。くらわんか手の碗はその施文方法から、コンニャク印判で菊花文（H76・H169）あるいは矢羽根文を施すもの（H167）と手描きで文様を描くものに分類できる。手描きの碗には花蝶文を描き、京四条遍と朱書きするもの（H32）、草花文を描くもの（H80～H82・H222）、藤文を描くもの（H42）、簡略化した草花文を描くもの（H168・H170）、笠文を描くもの（H45・H79）などがある。コンニャク印判は18世紀前半代に、手描きのものは18世紀後半代にそれぞれ比定される。広東碗には丸文に草花文を描くもの（H10）、芙蓉手風に草花文を描くもの（H223）があり、いざれも18世紀後半から19世紀前半の時期が考えられる。器壁の非常に薄い京焼風碗には、口縁部がそのまま上方に延び、外面に細かい草花文を描くもの（H18）、渦巻きに松を描くもの（H49）、口縁部が外方にひらき、外面に草花文を描くもの（H107）などがある。いざれも、19世紀前半代に比定される。体部がほぼ直立するもの（H78・H171）はいざれも一重網目文を描くが、H78は17世紀中頃に、H171は18世紀後半代の時期が考えられる。小型の碗（H11・H83）には、器壁が厚く、外面に笠葉文を描く粗製の碗（H11）と器壁が薄く、口縁部が外方にひらき、草花文を描く清朝青花写しの碗（H83）がある。H11は18世紀前半にH83は19世紀中頃にそれぞれ比定される。

皿には、肥前系と考えられるものと産地の特定できない基筒底の皿（H4）がある。

肥前系 肥前系の皿には底部の器壁が厚く、底部内面の釉を蛇ノ目状に釉ハギする粗製の皿（H71・H172～H174）、高台が比較的薄く高く、体部が内側気味に斜め上方に延びる皿（H72）、高台が非常に低く、器壁も薄い大皿（H100・H175・H176）がある。粗製の皿には、外面に簡略化された草花文を描くもの（H71・H172・H173）と内面に唐草文、底部内面にコンニャク印判で五弁花文を施すもの（H174）がある。いざれも、肥前系波佐見産の製品で、H71・H172・H173は18世紀前半代に、H174は18世紀後半代にそれぞれ比定される。大皿には、内面に雲龍文を描くもの（H100）、竹葉文を描くもの（H175）、文字文を描くもの（H176）などがあり、いざれも18世紀代の所産と考えられる。H72は内面に鹿と草花文、外面に唐草文を描く。18世紀代の製品であろう。

産地不明 H4は葵筒底の小皿の細片である。瀬戸・美濃系磁器の可能性が考えられる。

猪 口 猪口には平底で、体部は直線的に斜め上方に延び、外面に冰裂文、底部外面に渦巻文を施すもの（H33・H34）と比較的厚く、高い高台をもち、口縁部が外反し、外面に草花文、内面に雷文帶

を描くもの（H22）とがある。H33・H34は肥前系で19世紀前半代に、H22は瀬戸・美濃系で19世紀前半以降にそれぞれ比定される。

鉢 鉢には蛇ノ目凹形高台で、体部が中位で屈曲し、口縁部は玉縁状に肥厚するもの（H23）、ロクロ成形の後、型打ちで口縁部を花弁状に整形するもの（H16）とがある。いずれも、19世紀前半代の時期が考えられる。

蓋 蓋はいずれも碗蓋である。外面に魚と打ち出の小槌を描くもの（H7）と稻束を描くもの（H166）とがある。いずれも京焼系で19世紀前半代の製品と考えられる。

御神酒徳利 H85は体部が大きく内脣し、比較的長い頸部をもつ御神酒徳利である。外面には筆葉文と五曜星を描く。肥前系で18世紀代の所産であろう。

2 土 製 品

土製品にはミニチュア土製品、面子、独楽、土鉢、硯などがある。

ミニチュア土製品 ミニチュア土製品には人形・動物形・器物形・不明ミニチュアがある。

人 形 人形はいずれも型作り成形で、仏頭（H20）、天神像（H156）、力士像（H157）、僧像（H217）などがある。いずれも、両型作りで、中央部に貼り合わせ痕が認められる。彩色は全て剥落している。

動物形 動物形も人形と同様に、両型作りで成形されている。鳥形（H97）、牛形（H98）、狐形（H158）などがある。狐形は神棚に供せられたものであろう。彩色は全て剥落している。

器物形 器物形には、分銅形と考えられるもの（H43・H62）、羽釜の蓋形（H60）、底部に圓子状の脚を貼り付ける鉢形（H61）、内面に菊花文を型押しで施す皿（H155）などがある。いずれも彩色は剥落している。

不明ミニチュア土製品 H19は貝殻状を呈する。土製品の部品と考えられる。

面 子 H21は型作り成形の方形の泥面子である。底部外面に指頭圧痕が残る。

独 樂 H154は型作り成形の独樂である。円錐状を呈し、上面の中央に棒のヘタ状のつまみを貼り付けた。彩色は全て剥落している。

土 鉢 H14は土鉢である。手づくね成形で外面には指頭圧痕が全面に残る。上部に1箇所穿孔が認められる。

硯 H27・H28はいずれも型作り成形の土製硯である。比較的小型で携帯用と考えられる。

【瓦・埴類】（図版55～58、写真図版74参照）

H224は埴と考えられる。

軒丸瓦 H225・H226・H230・H239・H240は軒丸瓦である。うち、H239・H240は堀埋没後、程なくして掘られたSK205より出土している。17世紀代に遡る可能性がある。

丸 瓦 H227・H232・H234・H236・H237・H238は丸瓦である。うち、H234・H236・H237は堀内より出土している。16世紀後半代に遡る可能性がある。また238についても内面にいわゆるコビキA手法がみられる。

軒平瓦 H233は軒平瓦である。堀内より出土している。16世紀後半代に遡る可能性がある。

【円筒埴輪】(図版59、写真図版76参照)

復元、図化できたのは6点である。

H241は、棺身に使用された埴輪で底径25.5cm、口径32.7cm、底部から口縁部までの高さ68.7cmを測る。厚みは体部で1.6cmを測る。

埴輪の外面は摩滅が著しくてほとんど調整痕が確認できないが、1段目にからうじて縱方向のハケ調整の痕跡が認められる。内面は3段目から5段目にかけては、粘土の輪積みの痕跡が若干残る。1段目には、縱方向のハケ調整が顕著に残っている。ハケの幅は1cmあたり12本である。

突帯は体部に4条巡る。突帯間の幅は、11.5cmである。1段目、3段目、5段目には長方形の透孔が各2個対に縱一列に穿たれている。

H242は、半裁されて小口の閉塞に用いられていた埴輪である。残存長は高さ21.2cm、口径は29.1cmを測る。厚みは0.9~1.2cmある。

突帯は体部に1条巡っている。梢円形の透孔が穿たれている。孔の長径は7.8cm、短径は5.7cmを測る。孔は2対穿たれている。

埴輪の内面には粘土紐の貼り付け痕が残るほか、ハケ調整が施されている。調整は横方向に施されている。ハケの幅は1cm辺り5本である。

H246は、蓋形埴輪の底部と考えられる。埴輪棺の墓坑の南側やゴミ穴内に散乱していた。南側の小口を閉塞するのに用いられていたものが、ゴミ穴掘削時の搅乱により散乱したものと考えられる。

埴輪の外側の調整は摩滅が著しく、不明であるが、内面は縱方向のハケ調整を施している。ハケの幅は1cmあたり7本である。底部の内面には指頭圧痕が残っている。

H244は円筒埴輪の口縁部の破片である。H245は埴輪の破片であるが、種類は不明である。

【金属製品】(第60~62図、写真図版77~79参照)

金属製品は錢貨、釘、工具が出土している。

錢 貨

錢貨は29枚が図化できた。本邦錢と渡来錢があり、渡來錢はすべて北宋錢である。皇宋通寶(HI28)が出土している。本邦錢のうち、HI1~HI5は、古寛永に分類される。HI6~HI10は文錢である。HI11~HI27は3期の新寛永である。HI54、HI55銅錢である。HI29は1錢銅貨で明治16年鋳造の銘がある。釘

釘はHI30が皆折釘、HI32が切り釘と考えられる。HI36~48は頭巻釘である。工具その他ではHI49が鍛状の工具と考えられる。HI50は鍔前の健と考えられる。HI51は肥後守ナイフである。HI52は筒状製品である。HI53は楔と考えられるが直角に折り曲げられている。HI56~HI57は銅製の鉢である。HI58は笄の一部と考えられる。

【石 製 品】(第48~58図、写真図版75参照)

石製品は3点出土している。その内の2点HS1・HS2は硯である。

3. 小 結

今回の調査では、これまでの数次の調査において検出されてきた伊丹郷町に係わる遺構・遺物に加え、

有岡城跡（もしくは先行する伊丹城跡）に係わる遺構・遺物、古墳時代中期の埴輪棺の検出をみている。

遺構及び造構面からは細分は不可能であったが、遺物からは長期間にわたる遺物が出土している。

最も古いものは円筒埴輪棺である。時期は5世紀末から6世紀前半と考えられる。円筒埴輪棺の存在は調査区周辺が墓域であったことを示唆している。周辺に同様の円筒棺の存在を含め、古墳時代中期から後期の遺構が存在する可能性は高い。

ついで古いものは1点のみであるが、7世紀代の須恵器杯蓋片が出土している。調査区の南方に位置する南本町遺跡では同時代の集落遺跡が検出されており、至近にも同時期の集落が存在する可能性は高い。

中世の遺物は13世紀の瓦器椀・龍泉窯系青磁碗片などが数点出土しており、また、14世紀代では、須恵器捏鉢・瓦器椀が出土している。特に瓦器椀は土師器皿とともにまとまって柱穴から出土しており、建物の復元には至らなかったが、中世前期に遡る集落遺跡が調査区周辺に存在した可能性は高い。中世前期の集落は平成4年に実施した第114次調査においても木棺墓を伴って検出されており、台地の広い範囲に集落が広がっていた可能性も考えなくてはいけないだろう。

中世後期の遺物では15世紀代の遺物として、土鍋・備前焼甕（IV期）などが散見される。有岡城に先行する伊丹城関係の遺物の可能性がある。16世紀後半から17世紀にわたる遺物が、備前焼擂鉢を中心に量が増える。有岡城跡に係わるものであろう。調査区東半の掘及び柵列（SA201）・溝SD201は有岡城跡（もしくは先行する伊丹城跡）の時期に相当する遺構である。

17世紀の遺構・遺物（壺状遺構・土坑SK202・SK203・SK104）の検出からは、町屋が調査地点周辺では有岡城廃絶直後の17世紀には形成され始めることが伺えた。遺物は、17世紀前半の焼物が出土しており、量的には17世紀後半代に入って、焼物などの日常雑器の量が増加していることが伺える。

これは、平成4年度（B地区）の調査成果を追認する結果といってよいであろう。

引用・参考文献

- (1) 兵庫県教育委員会 2004 『兵庫津遺跡 II』
- (2) 伊丹郷町研究会 2003 『伊丹郷町の陶磁器の様相』
- (3) 伊野近富 1995 「十郎屋」「概脫 中世の上器・陶磁器」 中世上器研究会
- (4) 兵庫県教育委員会 1992 『下相野窯址』
- (5) 長谷川眞 2003 「中世丹波焼の変遷と技術移入・導入」『中近世土器の基礎研究XⅦ』 日本中世土器研究会
- (6) 長谷川眞 2004 「婆娘にみる近世丹波焼」『関西近世考古学研究XⅡ』 関西近世考古学研究会
- (7) 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
- (8) 堀内秀樹 1996 「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学理蔵文化財調査室紀要I』 東京大学文化財調査室

第16表 H地区遺物観察表1

備考	土器・陶磁器	出土地点	種別	器種	法 庫 (cm)			成型・調整法の特徴・様式	備考
					口径	器高	底径		
H1	Ⅰ区、近江焼2、(中空瓶)か?		普通陶器	壺	(5.7)	1.4	(3.3)		
H2	Ⅰ区、近江焼2、(中空瓶)か?		普通陶器	壺	(15.1)	(3.5)	—		
H3	Ⅰ区、Ⅱ-Ⅲ区、SK113系2箇まで		普通陶器	壺	—	(3.1)	—		
H4	Ⅰ区、SK113		普通陶器	壺	—	(1.1)	(3.8)		
H5	Ⅰ区、壠か1		上部器	壺	幅5.1	1.65	3.4		
H6	Ⅰ区、壠か1		普通	壺	(6.5)	(6.3)	—		
H7	Ⅰ区、壠か1		普通陶器	壺	7.7	2.2	—		
H8									
H9	Ⅰ区、赤褐色灰色シルト		普通陶器	灯明壺	6	1.2	3.45		
H10	Ⅰ区、灰		普通陶器	壺	(10.4)	3.95	(6.4)		
H11	Ⅰ区、赤褐色灰色シルト		普通陶器	壺	(6.65)	(3.3)	(2.85)		
H22	Ⅰ区、赤褐色灰色シルト		上部器	壺?	(19.1)	(7.3)	(23.4)		
H33	Ⅰ区、(?)大手原代遺物私有帶		普通陶器	小瓶	(5.6)	1.25	2.8		
H41	Ⅰ区、SP106		土器	土鉢	長3.3	壺4	厚1.2		
H25	Ⅰ区、SP106		土器	切削	(29.3)	(5.3)	—		
H36	Ⅰ区、SP107タケ		普通陶器	鉢	(15.65)	(6.0)	—		
H17	Ⅰ区、壠		土器	壺	(27.6)	11.2	(14.2)	片側	
H18	Ⅰ区、SD102		普通陶器	鉢	(9.0)	(4.05)	—		
H19	Ⅰ区、SD104		土器	壺	1.36	1.4	0.65		
H20	Ⅰ区、SD104		土器	壺	人形(頭部) 狹(1.95)	幅(1.85)	厚(1.95)		
H21	Ⅰ区、SD104		土器	壺?	長3.5×幅2.4	—	厚1.5		
H22	Ⅰ区、SD104		普通陶器	第二	(6.9)	(4.1)	(3.4)		
H23	Ⅰ区、SD104 壺1型まで(上半)		普通陶器	鉢	(16.5)	8.35	(9.5)		
H24	Ⅰ区、SK101		土器	壺	(6.0)	1.1	(2.4)		
H25	Ⅰ区、SK101 褐色灰青土瓦陶器		土器	壺	6.05	1.2	2.7		
H26	Ⅰ区、SK101 褐色灰青土瓦陶器		普通陶器	小瓶	(6.25)	1.4	(2.7)		
H27	Ⅰ区、SK102		陶器	壺	長4.25	幅3.2	厚1.1		
H28	Ⅰ区、SK108		陶器	壺	長(6.45)	幅3.2	厚0.95		
H29	Ⅰ区、SK109		普通陶器	壺	8.45	3.95	11.2		
H30	Ⅰ区、SK109		陶器	壺	(7.75)	2	3.5		
H31	Ⅰ区、SK109		陶器	壺	(13.9)	(3.85)	(6.50)		
H32	Ⅰ区、SK109		普通陶器	鉢	(8.5)	4.55	3.25		
H33	Ⅰ区、SK109		普通陶器	萬葉櫻口	9.6	6.6	5.1		
H34	Ⅰ区、SK109		普通陶器	鉢	9.7	6.7	4.9		
H35	Ⅰ区、SK109		普通陶器	壺	(18.9)	(10.35)	(7.0)	複数 16.2	
H36	Ⅰ区、SK109		陶器	壺	(13.65)	(11.90)	—	複数 15.6	
H37	Ⅰ区、SK109 上部器		上部器	火折し壺	(23.2)	(18.3)	—	最大径 33.0 E部	
H38	Ⅰ区、Ⅰ-Ⅱ区、SK109 壺1型2北、1箇1面まで		瓦質土器	大杯?	20.7	19.4	15.4	複数 32.7	
H39	Ⅰ区、SK114 上層の遺物が主		土器	壺	8.15	1.65	5.5		
H40	Ⅰ区、SK114 上層の遺物が主		土器	壺	(9.3)	(1.6)	(4.25)		
H41	Ⅰ区、北部SK114か? 上層の遺物が主、第2箇まで		土器	壺	31.8	(8.45)	(31.85)		
H42	Ⅰ区、SK114 上層の遺物が主		土器	壺	(9.8)	(5.9)	(4.0)		
H43	Ⅰ区、SK114		陶器	(ニコラ)?	長(2.7)	幅1.8	厚(1.15)		
H44	Ⅰ区、SK121		土器	壺	(7.6)	(1.45)	—		
H45	Ⅰ区、SK121		普通陶器	鉢	(10.1)	5.4	3.6		
H46	Ⅰ区、SK121		普通陶器	鉢	(12.0)	5.05	4.2		
土器・陶磁器									
H47	Ⅰ区、SK121		陶器	壺	—	(6.25)	(12.6)		
H48	Ⅰ区、SK121		普通陶器	壺	(6.0)	—	—		
H49	Ⅰ区、SK121b		普通陶器	壺	(9.4)	5.4	(3.8)		
H50	Ⅰ区、SK116		陶器	壺	(4.3)	—	—		
H51	Ⅰ区、SK119 黒の外		土器	壺	6	1.2	3.3		
H52	Ⅰ区、SK119 黒の外		土器	壺	(6.0)	(13.3)	(2.7)		
H53	Ⅰ区、SK119b		土器	壺	(6.0)	1.1	(3.4)		
H54	Ⅰ区、SK119 黒の外		土器	壺	(9.2)	1.55	(3.4)		
H55	Ⅰ区、SK119 黒の外		土器	壺	(9.0)	1.8	(3.4)		
H56	Ⅰ区、SK119 黒の外		土器	壺	7.7	1.6	—		
H57	Ⅰ区、SK119b 黑色瓦含む繩縄		土器	壺	(10.1)	(2.65)	(7.1)		
H58	Ⅰ区、SK119 黒の外		土器	壺	(10.5)	(1.8)	—		
H59	Ⅰ区、SK119 黒の外 南西		土器	壺	(11.35)	1.85	—		
H60	Ⅰ区、SK119付近1箇1面まで下部分		ニコア	壺	長3.3	幅3.25	厚0.95		
H61	Ⅰ区、SK119 黒の外		土器	壺	(5.1)	2.05	—		
H62	Ⅰ区、SK119		土器	壺	3.5	1.85	厚2.45		
H63	Ⅰ区、SK119		土器	壺	3.5	1.85	厚2.45		
H64	Ⅰ区、SK119付近1箇1面まで(上半)、灰瓦含む繩縄		土器	壺	(20.6)	(8.45)	—		
H65	Ⅰ区、O窓(上開) 障子灰(?) (1火災層生)		普通陶器	壺	(25.2)	(8.6)	—		
H66	Ⅰ区、SK119b		普通陶器	壺	(30.2)	(12.5)	(15.0)		
H67	Ⅰ区、SK119付近 SK119b、上層の遺物が主		陶器	壺	(46.6)	(21.6)	(24.0)		
H68	Ⅰ区、SK119 黒色瓦含む繩縄		陶器	壺	(37.8)	(8.6)	—		
H69	Ⅰ区、SK119 黒色瓦含む繩縄		普通陶器	壺	—	(2.45)	(4.1)		
H70	Ⅰ区、SK119 黒の中		陶器	壺	(12.75)	3.55	(4.85)	北野派	
H71	Ⅰ区、SK119 黒の中		普通陶器	壺	(12.95)	(3.2)	(7.95)		
H72	Ⅰ区、SK119b 水色瓦含む繩縄		普通陶器	壺	(33.5)	(2.9)	—	現川派	
H73	Ⅰ区、Ⅰ区、第2箇まで(上半) SK119 水より外		普通陶器	壺	38.3	13.4	(11.85)		
H74	Ⅰ区、O窓(上開) 障子窓、(1火災層生)		普通陶器	壺	(10.75)	(3.3)	—		
H75	Ⅰ区、SK119		普通陶器	壺	(9.8)	(4.4)	—		
H76	Ⅰ区、SK119 黒の中		普通陶器	壺	(12.2)	(5.0)	4.25		
H77	Ⅰ区、SK119 黒の下部西		普通陶器	壺	(12.2)	(5.0)	4.25		

第17表 H地区遺物観察表2

番号	出土地点	種別	器種	生量(cm)			成型・調整法の特徴・様式	備考
				口徑	高さ	底径		
H79	I区 SK119 西南隅 SK119 以外(東より西) 戻の下東側	陶器	灰陶器	高	(9.0)	6.2	(3.7)	
H79	I区 SK119b 戻を灰瓦含む埋甃	陶器	灰陶器	高	(10.75)	5.35	4.4	
H80	I区 SK119b 戻を灰瓦含む埋甃	陶器	灰陶器	高	(10.1)	5.9	4.3	
H81	I区 SK119b 戻を灰瓦含む埋甃	陶器	灰陶器	高	(10.0)	5.6	(3.9)	
H82	I区 SK119 SK119a SK119b 戻の中、夷の下、灰瓦含む埋甃	陶器	灰陶器	高	(10.0)	5.6	4.05	
H83	I区 SK119 戻の中	陶器	灰陶器 小鏡	高	6.5	3.4	2.9	
H84	I区 SK119	青磁	—	—	(1.4)	(5.6)		
H85	I区 SK119b	青磁	—	—	(7.6)	3.2		
H86	I区 SK119b 从他灰瓦含む埋甃	陶器	灰陶器	高	(10.9)	(7.75)	—	
H87	I区 SK119	陶器	灰陶器 水滴	高	7.6	5.7	厚3.0	
H88	I区、II区 アザ瓦部分	瓦	瓦りん瓦?	長	(5.6)	幅0.9	—	
H89	I区、II区、SK119b 灰瓦含む埋甃/SK115 SK119b	陶器	灰陶器 勇	高	(10.6)	(4.8)	(3.9)	
H90	I区、II区、SK115 SK119-SK205 禺アゼ跡空塚の缶鉢	土器	土器	高	(41.0)	(6.1)	—	
H91	I区、II区、SK115 SK119-SK205 禺アゼ跡空塚の缶鉢	土器	土器	高	(31.0)	(6.2)	—	
土器・陶磁器								
H92	I区、SK115	陶器	陶器	口径	(51.8)	(5.45)	—	
H93	I区、SK115	陶器	陶器	高	—	(7.35)	—	
H94	I区、市壁	土器	小皿	口径	(6.15)	1.5	—	
H95	I区、SK123	土器	灰陶器	口径	(6.2)	1.2	3.75	
H96	I区、SK123	土器	小皿	口径	(8.9)	1.15	(4.5)	
H97	I区、SK123	土器	灰陶器	口径	(5.7)	2.8	厚(3.75)	
H98	I区、SK123	土器	小皿	口径	(4.45)	幅(2.8)	—	
H99	I区、SK123	白磁	盤	口径	9.95	2.6	4	
H100	I区、SK123	白磁	盤	口径	(22.4)	2.8	(13.4)	
H101	I区、SK123	白磁	盤	口径	(38.4)	(12.55)	—	
H102	I区、SK123 SK119灰の外	陶器	陶器	口径	(26.8)	(10.8)	—	
H103	I区、SK114	陶器	陶器	口径	(22.8)	(4.8)	—	
H104	I区、SK117a (井戸か?)	陶器	不明	口径	(6.03)	(1.2)	—	
H105	I区、SK117	陶器	鉢	口径	(12.6)	(2.0)	—	
H106	I区、SK117a (井戸か?)	陶器	向付鉢	口径	(1.6)	(9.3)	木野庵	
H107	I区、SK117a (井戸か?)	染付陶器	盤	口径	—	—	—	
H108	I区、SK118	土器	灰陶器	口径	—	—	—	
H109	I区、SK126 鳥山土況じりの黄褐色釉陶器	土器	灰陶器	口径	(7.1)	1.75	—	
H110	I区、SK205	土器	灰陶器	口径	(11.2)	(2.2)	—	
H111	I区、SK206	土器	小皿	口径	—	(1.6)	—	
H112	I区、SK205	土器	鉢	口径	—	(3.6)	—	
H113	I区、SK104	陶器	碗	口径	(30.8)	(4.9)	—	神奈川県
H114	I区、SK104	陶器	碗	口径	—	(2.2)	(4.4)	
H115	I区、SK104	陶器	鉢	口径	—	—	—	
H116	I-II区、SK120	陶器	鉢	口径	(26.5)	(4.95)	厚0.95	
H117	I-II区、SK120	陶器	鉢	口径	(30.4)	(6.35)	—	丹波
H118	I-II区、SK120	陶器	鉢	口径	(6.0)	(2.1)	—	
H119	I-II区、SK202	陶器	碗	口径	—	(3.3)	(8.4)	
H120	II区、SK202b	陶器	碗	口径	—	(2.72)	(4.0)	
H121	I区、市壁	土器	灰陶器	口径	小皿	(6.2)	1.45	
H122	I区、市壁	土器	土器	口径	—	(1.6)	(3.5)	
H123	I区、市壁まで	陶器	灰陶器	口径	6.3	1.3	3.4	
H124	I区、市壁まで	土器	灰陶器	口径	(6.5)	(1.45)	—	
H125	I区、白瓦シルト土開削より第1層上まで	土器	灰陶器	口径	(7.9)	1.95	(4.2)	
H126	I区、白瓦シルト土開削より第1層上まで	土器	小皿	口径	(6.3)	0.9	—	
H127	I区、白瓦シルト土開削より第1層上まで	土器	小皿	口径	(7.43)	1.6	—	
H128	Ⅱ区、白壁付灰色シルト質砂漠	土器	小皿	口径	(6.6)	(1.4)	—	
H129	Ⅱ区、白壁付灰色シルト質砂漠	土器	灰陶器	口径	(6.7)	(2.0)	—	
H130	I区西半、第1層まで家屋かたづけ土? 呂む	土器	灰陶器	口径	(8.1)	1.1	—	
H131	I区西半、第1層まで家屋かたづけ土? 呂む	土器	灰陶器	口径	(8.9)	(1.9)	—	
H132	I区西半、第1層まで家屋かたづけ土? 呂む	土器	灰陶器	口径	(8.3)	(1.5)	—	
H133	I区西半、第1層まで家屋かたづけ土? 呂む	土器	灰陶器	口径	(10.85)	(2.0)	—	
H134	I区西半、第1層まで家屋かたづけ土? 呂む	土器	灰陶器	口径	(8.1)	(1.8)	—	
H135	I区、焼物廻所	土器	灰陶器	口径	(12.2)	2.9	—	
H136	I区西半、第1層まで家屋かたづけ土? 呂む	土器	灰陶器	口径	(11.9)	(2.4)	—	
H137	I区、市壁	土器	灰陶器	口径	6.25	1.3	2.9	
土器・陶磁器								
H138	I区、壁上まで	土器	灰陶器	口径	—	(0.8)	3.15	
H139	Ⅱ区東半、第1層まで灰土上中	土器	土器	口径	—	(3.6)	—	
H140	Ⅱ区、第1層まで(上半) 灰瓦色土上中	土器	土器	口径	—	(4.4)	—	
H141	Ⅱ区、灰瓦色土上中	土器	土器	口径	—	(3.45)	—	
H142	Ⅱ区、壁上まで(上半) 灰瓦色土上中	土器	土器	口径	—	(3.5)	—	
H143	Ⅱ区、壁上まで	土器	土器	口径	—	(5.15)	—	
H144	Ⅱ区、壁上まで(上) 灰瓦色土上中	土器	正貫	口径	—	(3.5)	—	
H145	Ⅱ区、壁上まで	土器	土器	口径	—	(5.9)	(4.6)	—
H146	Ⅱ区、壁上まで	土器	土器	口径	—	(5.6)	—	
H147	Ⅱ区、灰瓦色土上中	土器	灰瓦色土上中	口径	—	(24.0)	(5.25)	—
H148	Ⅱ区、北壁	陶器	陶器	口径	(37.0)	(8.5)	—	
H149	Ⅱ区、0箇(土築) 施工後、第1層まで(直上中火災層?)	陶器	陶器	口径	—	(9.25)	—	
H150	Ⅱ区、第1層まで(上半) 灰瓦色土上中	陶器	陶器	口径	(28.9)	(14.5)	16.3	
H151	Ⅱ区東半、第1層まで灰土上中	陶器	陶器	口径	—	(5.25)	—	

第18表 H地区遺物観察表3

番号	出 土 点	種別	器種	量 (m)			成型・調整法の特徴・様式	備 考
				口径	高さ	底径		
H152	II区、南側溝地の土器通貫層底の断面	陶器	壺形	—	(5.05)	(14.8)		
H153	II区、第1面積で	陶器	甕?	(21.9)	(11.65)	—		
H154	I区、第1面積より上? (蓋上層中)	土製品	陶器	高さ1.95	幅4.15	—		
H155	Ⅲ区、第1面積で窓の先端部	土製品	皿	(4.0)	1.7	(2.8)		
H156	Ⅱ区窓下、第1面積まで、O面底第1面	土製品	長方形	(4.15)	4.7	厚1.7		
H157	Ⅲ区、窓の「間」窓底時。(大火廢棄)	土製品	丸人形	(4.6)	幅3.4	厚1.85		
H158	Ⅲ区、白色シート+陶器より下迄1面まで	土製品	丸人形	長5.6	幅4.0	厚1.4		
H159	Ⅲ区、窓下で「窓」	陶器	丸人形	長8.8	1.9	7.15		
H160	— 目録2、窓下で「窓」	陶器	蓋	10.1	3.6	—		
H161	Ⅲ区、第1面積で	陶器	甕	—	(1.4)	5.35	窓口半溝	
H162	Ⅲ区、第1面積で(下半部)	陶器	短角陶器	瓶	(15.8)	(6.7)	(6.5)	
H163	Ⅲ区、第1面積で	陶器	短角陶器	甕	(11.4)	(3.25)	(4.05)	
H164	Ⅲ区、第1面積まで(下半部)	陶器	甕	—	(1.4)	(5.6)		
H165	Ⅲ区、第1面積まで(上部)	陶器	甕	—	(2.5)	(4.6)		
H166	Ⅲ区、第1面積で(窓と屋根に反対?)	陶器	蓋	(9.4)	(2.9)	—		
H167	Ⅲ区、第1面積まで(窓と屋根に反対?)	陶器	短角陶器	甕	(9.8)	(3.85)	—	
H168	Ⅲ区、第1面積で(下半)褐色色の中土	陶器	短角陶器	甕	(3.6)	(4.0)		
H169	Ⅲ区、褐色	陶器	短角陶器	甕	(12.75)	(5.0)		
H170	Ⅲ区、第1面積で(上半)	陶器	短角陶器	甕	(9.8)	(5.65)	(3.65)	
H171	Ⅲ区、窓下、第1面積まで窓から下け上?含む	陶器	短角陶器	甕	9.8	5.3	4.25	
H172	Ⅲ区、第1面積、第1面積までシルナイト	陶器	短角陶器	甕	(12.2)	3.6	(3.85)	
H173	Ⅲ区窓下、第1面積まで窓から下け上?含む	陶器	短角陶器	甕	(11.9)	3.4	(4.11)	
H174	Ⅲ区、白色シート+陶器より下迄1面まで土中	陶器	短角陶器	甕	12.8	2.85	6.6	
H175	Ⅲ区、第1面積で	陶器	短角陶器	甕	(10.9)	3.25	(12.8)	
H176	Ⅲ区、第1面積で(上半)褐色色の中土	陶器	短角陶器	甕	(1.3)	(13.8)		
H177	Ⅲ区、第1面積で(上半)褐色色の中土	陶器	短角陶器	甕	(1.3)	(13.8)		
H178	Ⅲ区、第1面積で下部分	陶器	有柄	明	19.7	(5.15)	—	
H179	Ⅲ区、第1面積まで下部分	陶器	有柄	甕	(12.7)	(1.45)	—	
H180	Ⅲ区、陶器底足 -0~40cm茶色砂礫中	土製品	短角	小甕	(8.0)	(1.5)	—	
H181	Ⅲ区、内側軒下割り -0~40cm	土製品	短角	甕	(16.8)	(1.9)	—	
H182	Ⅲ区、内側軒下割り -0~40cm	土製品	瓦質土器	火鉢	—	(3.95)	—	複数(25.5)
D183	Ⅲ区、内側軒下 -0~40cm茶色砂礫中	土製品	短角	甕	—	(3.3)	—	複数(26.0)
D184	Ⅲ区、地内断ち割り -0~40cm	陶器	短角陶器	甕	(11.2)	(1.85)	—	
H185	Ⅲ区、窓の中	陶器	短角陶器	甕	—	(3.6)	(9.1)	複数
H186	Ⅲ区、窓の中	瓦	瓦子	長6.7	幅6.2	厚1.8	瓦を内利用	
H187	Ⅲ区、SP254	土製品	短角	甕	(12.85)	(1.6)	—	
H188	Ⅲ区、SP110d	土製品	短角	甕	(11.8)	(2.0)	—	
H189	Ⅲ区、SP110 (埴輪)	土製品	短角	甕	(11.8)	(2.0)	—	
H190	Ⅲ区、SP220	土製品	短角	甕	11.95	2.1	—	
H191	Ⅲ区、SP224	土製品	短角	甕	—	(4.7)	—	
H192	Ⅲ区、SP224	瓦質土器	羽釜	(19.2)	(4.0)	—	最大値(22.6)	
H193	Ⅲ区、SP223a	土製品	短角	甕	(6.9)	(0.95)	—	
H194	Ⅲ区、SP223a	土製品	短角	甕	(7.8)	(1.5)	—	
H195	Ⅲ区、SP223a, SP223c	瓦	瓦	13.1	3.5	—		
H196	Ⅲ区、SP223a, SP223c, SK202c	瓦	瓦	13.35	3.8	3.65		
H197	Ⅲ区、SP223a	瓦	瓦	(13.3)	(3.5)	(3.4)		
H198	Ⅲ区、SP222	瓦	瓦	(13.6)	4	(4.35)		
H199	Ⅲ区、SP241	瓦	瓦	(13.2)	(3.8)	—		
H200	Ⅲ区、窓下、SK203 茶色砂礫中	瓦	瓦	(13.65)	(3.25)	—		
H201	Ⅲ区、SP101	陶器	短角	甕	—	(6.25)	(14.6)	
H202	Ⅲ区、SP226	陶器	短角	甕	—	(4.5)	—	
H203	Ⅲ区、SP260	陶器	短角	甕	—	(4.2)	(10.0)	底部一部のみ
H204	Ⅲ区、窓下、SD201	陶器	短角	(21.2)	(5.45)	—	側面V型	
H205	Ⅲ区、東北側削溝茶色よりも下	土製品	短角	甕	(7.2)	1.7	5.9	
H206	Ⅲ区、SK203窓下 第2面まで	土製品	短角	甕	(9.75)	(1.7)	—	
H207	Ⅲ区、山腹斜面石壁上	土製品	短角	甕	(28.45)	(7.1)	(35.0)	並大仙~(35.0)
H208	Ⅲ区、窓下、第2面まで	陶器	短角	甕	—	(6.05)	(17.65)	側面
H209	Ⅲ区、西側削溝2面まで	陶器	短角	甕	—	(9.2)	(13.25)	片抜
H210	Ⅲ区、西側削溝の窓跡	陶器	短角	甕	—	(5.2)	—	
H211	Ⅲ区、SK206窓下 第2面まで	陶器	短角	甕	—	(3.8)	—	片拔
H212	Ⅲ区、北側削溝2面まで	陶器	短角	甕	—	(5.2)	(12.6)	武道一部のみ
H213	Ⅲ区、西北窓下 第2面まで	陶器	短角陶器	甕	(12.0)	(6.8)	(4.25)	
H214	Ⅲ区、西北窓下 第2面まで	土製品	短角	甕	長2.6	幅3.9	厚0.8	
H215	Ⅲ区、西北窓下 第2面まで	土製品	短角	甕	(6.15)	1.5	(2.2)	
H216	Ⅲ区、西北窓下 第2面まで	土製品	短角	甕	(35.0)	(3.5)	—	
H217	Ⅲ区窓下、2より上、茶色シート質砂礫中	土製品	短角	甕	(35.25)	幅(2.8)	—	
H218	Ⅲ区、SK206窓下 第2面まで	陶器	短角	甕	—	(8.1)	—	側面V型
H219	Ⅲ区、SK206窓下 第2面まで	陶器	短角	甕	(13.75)	7.4	(10.0)	
H220	Ⅲ区、東北側削溝茶色よりも下	陶器	短角	甕	—	(1.2)	(7.0)	
H221	Ⅲ区、東側削溝	陶器	短角陶器	甕	(10.2)	(3.2)	(4.8)	
H222	Ⅲ区窓下、2より上、茶色シート質砂礫中	陶器	短角	甕	(8.6)	(3.2)	—	
H223	Ⅲ区、窓下2面まで	土製品	短角	甕	(9.6)	5.15	(5.6)	
H224	Ⅲ区、SKL14 卵巣の壺が生	土	平瓦	表(31.3)	幅(22.1)	厚1.1		
H225	Ⅲ区、SKL19~SK205壁アビ	土	灰瓦	表(12.0)	幅(6.85)	厚(1.6)		
H226	Ⅲ区、SKL19c	土	灰瓦	表(7.75)	幅(2.1)	—		
H227	Ⅲ区、SKL19 壁アビより下	土	丸瓦	表(15.2)	幅(4.65)	厚(6.95)		
H228	Ⅲ区、SKL19	土	平瓦	表(6.4)	幅(4.15)	—		
H229	Ⅲ区、SKL21	土	丸瓦	表(23.6)	幅(2.75)	厚1.25		

第19表 H地区遺物観察表4

番号	出 土 地 点	種別	器種	法 量 (cm)			机型・調整方法の特徴・様式	備 考
				口徑	器高	底径		
H201	I 区 SK119 戸の外	瓦	軒丸瓦	長(8.3)	幅(8.3)	厚1.5		
H231	I リ・ミ・区、SK203 砂利の中	瓦	?	長(9.6)	幅(7.1)	厚(3.7)		
H232	[西面、南1面まで家かたすけ上?含む]	瓦	丸瓦	長(20.0)	幅(5.7)	厚13.0		
H233	III区、通路も廻り -40cm~ -20cm	瓦	軒半瓦	長(8.7)	幅(3.4)	厚(1.3)		
H234	III区、砂利も製り -40cm~ -20cm	瓦	丸瓦	長(20.35)	幅(13.85)	厚2.1		
H235	III区、窓の中	瓦	半瓦	長(15.26)	幅(13.25)	厚1.8		
H236	III区、窓の中	瓦	丸瓦	長(11.0)	幅(6.3)	厚(9.3)		
H237	II区、SP210	瓦	丸瓦	長(6.0)	幅(5.5)	厚1.45		
H238	[一区区、ST226	瓦	丸瓦	長(6.3)	幅(5.7)	厚(3.8)		
H239	III区、SK205周辺 第2面まで	瓦	軒丸瓦	長(7.3)	—	厚2.25		
H240	III区、SK205周辺 第2面まで	瓦	軒丸瓦	長(7.3)	—	厚2.25		
H241	[一区区窓、第1面西側土埴(肥覆め)]	石製品	鏡	長(11.8)	幅(6.2)	厚2.5		
H511	[I区、第1面まで(直)・屋内火燶?]	石製品	鏡石	長(12.25)	幅(6.25)	厚1.9		
HS21	III区、SP119-SK205周辺	石製品	鏡石	長(12.55)	幅(11.95)	厚4.05		

金属製品

番号	出 土 場 所	種 別	品 目	銘 標	地 請年 跡跡年	時代	法 量 (cm)			備 考
							長	幅	厚	
H11	II 区 SK112 防空壕	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.6	2.5	0.5		
H12	I 番1面まで	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.4	2.4	0.3		
H13	I SK112底の外	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.5	2.3	0.3	底の外	
H14	I SK123	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.3	2.3	0.3		
H15	I SK125	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.5	2.2	0.3		
H16	I SK123	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.6	2.6	0.3		
H17	B 番1面まで上手	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.5	2.6	0.3		
H18	I 番1面まで(直上層中) 大火燶?	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.5	2.5	0.3	底まじり土主	
H19	I 番1面まで	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.2	2.2	0.3		
H20	I 番1面まで	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.2	2.2	0.3		
H21	I 番1面まで	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.5	2.6	0.3		
H22	I SK123	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.5	2.5	0.3		
H23	I SK123	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.3	2.3	0.3		
H24	I SK123 第1面まで シルトの上 土間の東側	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.3	2.3	0.3	西の下	
H25	I SK123 第1面まで	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.2	2.2	0.3	西の下	
H26	I SK123 第1面まで	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.4	2.4	0.4		
H27	I SK123	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.5	2.5	0.3		
H28	I SK123	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.3	2.3	0.3		
H29	I SK123	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.2	2.2	0.3		
H30	I SK123 西面	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.3	2.3	0.3	西の下(直下)	
H31	I SK123 西面	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.2	2.2	0.3	(大灰燶主)	
H32	I-SK123 [上層] 階去時 (1大灰燶主)	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.4	2.4	0.3		
H33	III 近畿鐵風2	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.2	2.3	0.1		
H34	I SK123	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.3	2.4	0.4		
H35	III 上層赤色シルト質鏡	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.3	2.3	0.3		
H36	I SK123	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.4	2.4	0.3		
H37	I SK123	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.3	2.3	0.3		
H38	I SK123	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.3	2.3	0.3		
H39	III Ⅱ区 施色レキ振鏡跡まで 口銅鏡	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.3	2.3	0.3		
H40	I SK119 戸の下	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.4	2.4	0.3	同の下	
H41	III 番1面まで(直上層中) 銅去時 (1大灰燶主)	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.4	2.4	0.3	1大灰燶主	
H42	I SK119 戸の下	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	2.3	2.3	0.3	1大灰燶主	
H43	I SK119 戸の下	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	6.4	2.1	1.3	底少し	
H44	I SK119 戸の下	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	7.8	1.9	2.1	底の外	
H45	I SK119 戸の下	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	6.9	1.9	1.9		
H46	I SK119 戸の下	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	5.8	1.2	1.0	底少し	
H47	I SK119 戸の下	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	5.2	1.3	1.2		
H48	I SK119 戸の下	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	5.6	1.8	1.9	底まじり土主	
H49	I SK119 戸の下	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	6.0	0.7	0.7		
H50	I SK109	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	6.3	0.9	0.9		
H51	I SK119 戸の下	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	5.3	2.0	1.5	底の下	
H52	I SK119 戸の下	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	3.8	0.7	0.7		
H53	I SK119 戸の下	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	4.0	0.7	0.7	底まじり土主	
H54	I SK114	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	3.8	1.7	1.4		
H55	I SK119 黄色瓦合込被繩	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	8.0	2.4	2.4	大灰燶主	
H56	I SK119 戸の下	鉄製品	鎌	鬼永通寶	古	3.3	0.9	0.8	底の下	
H57	SK119 戸の下	鉄製品	鎌	不明品	古	20.3	4.7	1.8	底の外	
H58	SK119 戸の外	鉄製品	鎌	不明品	古	14.1	4.5	2.8	底の外	
H59	SK109	鉄製品	鎌	不明品	古	9.5	2.5	1.9		
H60	SK109	鉄製品	鎌	被綱	古	2.3	2.6	2.5		
H61	SK109 黄色瓦合込被繩	鉄製品	鎌	被綱	古	10.8	3.4	2.1	底まじり土主	
H62	SK109 黄色瓦合込被繩	鉄製品	鎌	被綱	古	2.7	2.7	0.5	底まじり土主	
H63	I 番1面まで(直上層中) 大火燶?	鉄製品	鎌	被綱	古	2.5	2.7	0.7	底まじり土主	
H64	I 番1面まで(直上層中) 大火燶?	鉄製品	鎌	被綱	古	3.7	0.9	0.5	底まじり土主	
H65	I 番1面まで(直上層中) 大火燶?	鉄製品	鎌	被綱	古	3.3	1.1	0.9	底まじり土主	
H66	I SK109	鉄製品	鎌	被綱	古	1.7	0.7	0.6		

第6節 E地区の調査

1. 遺構

E地区は調査区の西側に位置する。東側がG地区、北側がB地区、西側がJ地区にあたる。調査区の中央部分は用水路確保のため未調査となった。

【第1面】(第63図、写真図版80参照)

土 坑

SK04 当地区東部に位置する。SK05の東側に位置する。SK09・SK38・SK39・SD03と切り合い関係にあり、いずれの遺構をも切っている。北側は調査区外まで拡がっており、全体を検出することはできなかった。

平面形は長方形をなし、主軸方向で2.90m検出し、その直交方向で1.20mを測る。横断面は箱形を呈し、最深部における検出面からの深さは42cmを測る。埋土は6層からなり、いずれも人為的に埋められたものである。

SK05 当地区の東部に位置する。SK04の南西側に位置する。SK16・SD03と切り合い関係にあり、両遺構を切っている。平面形は長方形を呈する。その規模は、主軸方向で97cm、その直交方向で65cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは27cmを測る。埋土は3層からなり、いずれも人為的に埋められたものである。

SK08 当地区的東部に位置する。SK05の西側に位置する。SK07と切り合い関係にあり、SK07に切られている。このため、全体を検出することはできなかった。平面形は、隅丸方形を呈していたものと考えられる。その規模は、長軸方向で1.05mを測り、その直交方向で75cm残存する。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは24cmである。埋土は1層からなり、人為的に埋められている。

SK14 当地区的中央部に位置する。SK08の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。南側のG地区までは拡がっていない。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは20cmである。埋土は2層からなり、下層は漆喰と考えられる。上層については、人為的に埋められたものである。

SK20 当地区的中央部に位置する。SK14の西側に位置する。SK21と切り合い関係にあるが、SK21を切っている。このため、当遺構は完存する。平面形は隅丸長方形をする。長軸方向で1.65m、その直交方向で95cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは27cmを測る。埋土は3層からなり、いずれも人為的に埋め戻されている。

SK27 当地区的西部に位置する。SK20の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。横断面は箱形を呈し、最深部における検出面からの深さは71cmである。埋土は2層からなり、下層は瓦溜りであった。上層は、人為的に埋められたものである。

SK35 当地区的西端部に位置する。当遺構の大半は擾乱を受け、わずかに残存する程度である。このため、当遺構の規模等は明確にできない。

SK36 当地区的北東隅に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。平面形は梢円形を呈し、長軸方向で1.07m、その直交方向で90cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは16cmを測る。埋土は1層からなり、人為的に埋められたものである。なお、当土坑の北側底部

に、桶底と考えられる痕跡が認められた。

SK37 当地区西半部に位置する。SK29とSD07と切り合い関係にあり、前者を切り、後者に切られている。さらに、当遺構の北側は調査区外に拡がっており、全体を検出することはできなかった。残存状況から判断して、当遺構の平面形は長方形をなすものと考えられる。その規模は、長軸方向で1.23m残存し、その直交方向で1.02mを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは88cmを測る。埋土は1層からなり、人為的に埋められている。

SK47 当地区東北部に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、一部は北側調査区外へ拡がっており、全体を検出することはできなかった。残存状況から判断して、その平面形は橢円形を呈していたものと考えられる。その規模は、長軸方向で1.38mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは52cmを測る。埋土は1層からなり、人為的に埋められたものである。土坑底部の形状から、桶が埋設されていた可能性も考えられる。

溝

SD04 当地区の中央部に位置する。南北方向に直線的に延びる溝で、両端とも調査区外まで延びている。全長1.90m検出されている。検出面における幅は45cm～60cmを測り、横断面はU字形をなす。最深部における検出面からの深さは6cmを測る。埋土は1層からなり、人為的に埋められたものである。

SD05 当地区の西部に位置する。SK26と切り合い関係にあり、一部を切られている。南北方向に直線的に延びる溝で、両端とも調査区外まで延びている。全長3.47m検出されている。検出面における幅は85cm～98cmを測り、横断面はU字形をなす。最深部における検出面からの深さは7cmを測る。埋土は1層からなり、人為的に埋められたものである。

なお、当溝は、東肩部の南側において石組みが残存することから、石組みを伴う溝であったものと考えられる。

【第2面】(第63図、写真図版80参照)

土 坑

SK53 当地区の中央に位置する。SD10と切り合い関係にあるが、SD10を検出した際に確認できた遺構で、調査ではその前後関係を明らかにすることはできなかった。平面的には完存する遺構で、その平面形は円形をなす。その規模は、径88cmを測る。横断面は箱形を呈し、最深部における遺構面からの深さは、1.01mを測る。埋土は1層からなり、人為的に埋められた層である。

SK54 当地区の中央に位置する。柱穴と切り合い関係にあり、これを切っている。このため、当遺構は完存し、その平面形はやや歪んだ円形を呈する。その規模は、1.50m×1.34mを測る。横断面は箱形を呈し、最深部における検出面からの深さは、87cmを測る。埋土は2層からなり、いずれも人為的に埋められた層である。

SK60 当地区南東隅に位置する。SK43と切り合い関係にあり、一部を切られている。このため、全体を検出することはできなかった。残存状況から判断して、平面形は円形を呈していたものと考えられる。その規模は、径78cmを測る。横断面は箱形を呈し、最深部における検出面からの深さは、84cmを測る。埋土は2層からなり、いずれも人為的に埋められた層である。

SK67 当地区の中央に位置する。一部、上層で検出した遺構に切られ、全体を検出することはできなかった。残存状況から判断して、平面形は隅丸長方形を呈していたものと考えられる。その規模は、長

軸方向で1.62m、その直交方向で1.10mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは、40cmである。埋土は1層からなり、人為的に埋められたものである。

SK74 当地区の西半部に位置する。SD13と切り合い関係にあるが、SD13を切っている。このため、当遺構は完存する。平面形は円形を呈し、その規模は1.60m×1.30mを測る。横断面は箱形をなし、最深部における検出面からの深さは1.27mを測る。埋土は1層からなり、人為的に埋められたものである。

SK75 当地区の西端部に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、調査区西側へ拡がっている。その規模は、長軸方向で2.24mを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは17cmを測る。埋土は1層からなり、人為的に埋められたものである。

溝

SD08 当地区の東部に位置する。SK65と切り合い関係にあるが、SK65を切っている。南北方向に直線的に延びる溝で、両端とも調査区外まで延びている。南側のG地区での検出状況から、全長6.80m検出されている。検出面における幅は1.42m～1.28mを測り、横断面はU字形をなす。最深部における検出面からの深さは24cmを測る。埋土は1層からなり、人為的に埋められたものである。

SD10 当地区の中央部に位置する。SK53と切り合い関係にあるが、調査では、その前後関係は明らかにできなかった。南北方向に直線的に延びる溝で、両端とも調査区外まで延びている。南側のG地区での検出状況から、全長5.10m検出されている。検出面における幅は3.10m～3.25mを測り、横断面はU字形をなす。最深部における検出面からの深さは41cmを測る。埋土は1層からなり、人為的に埋められたものである。

SD13 当地区の西部に位置する。SK74と切り合い関係にあるが、SK74に切られている。南北方向に直線的に延びる溝で、両端とも調査区外まで延びている。検出面における幅は1.25m～65cmを測り、横断面はU字形をなす。最深部における検出面からの深さはわずか8cmである。埋土は1層からなり、人為的に埋められたものである。

柱 穴

P61 当地区の西部に位置する。径40cmの円形の柱穴である。検出面からの深さは13.5cmを測る。

2. 遺 物

【第1面】(第64～70図、写真図版80～93参照)

E地区から出土した土器・陶磁器には種別では、土師器・瓦質土器・無釉陶器・施釉陶器・白磁・青磁・染付磁器・色絵磁器などがある。

1 土器・陶磁器

A 土 師 器

土師器には器種別には皿・羽釜・焰烙・火舍がある。

皿は手づくね成形の非クロロ土師器とロクロ土師器に大きく分類できる。非クロロ土師器には底部を指揮さえ上方に突出させるいわゆるヘソ皿(E89)と平底のもの(E1・E60・E61・E80～E83)とがある。平底のものは体部と底部の界が不明瞭なもの(E1・E60・E61)、体部と底部の界が明瞭なもの(E80・E83)、体部と底部の界が明瞭で内面に凹線をもつもの(E81・E82)に細分される。その形態から、E80は15世紀代に、E89は京都系で14世紀代にそれぞれ比定される。ロクロ土師器は平底で体部が内彎する杯形のものと、平底で体部が内彎気味あるいは直線的に斜め上方に延びる皿形のものとがあ

る。体部が内擣気味あるいは直線的に斜め上方に延びるものには、内面に透明釉を施釉するいわゆる柿釉のもの（E9～E13・E37・E38）と施釉しないもの（E44・E67）がある。柿釉のものには18世紀後半から19世紀前半の時期が与えられる。

羽釜 E2は球形の体部に断面台形状の短い鶴を貼り付けるもので、実用品としては小型であること、内面から外面にかけて全面に煤が付着していることなどから、羽釜形の手焼きの可能性も考えられる。E69は内外面とも回転ナデ調整を施し、口縁部に穿孔が1箇所見られる。16世紀代の所産と考えられる。
鍋 E88は体部外面に断面三角形状の鶴を貼り付ける。長谷川分類の播磨型TB類に相当し、15世紀中頃に比定される。

焙 焙 焙烙には口縁部が断面三角形状を呈するもの（E15）、体部が直立するもの（E28）、体部がほぼ直立し口縁部が楕円形状に肥厚するもの（E29）などがある。いずれも、18世紀後半～19世紀前半の時期が考えられる。

火舎 E16は高い高台を持ち、体部が斜め上方に延びるもので、体部外面は板ナデ調整、内面はヨコナデ調整が施される。

風炉 E70は体部下位に指円形の透かしを入れ、体部外面にトビガンナで施文する。また、体部外面下位には、「□□山」銘をスタンプする。煎茶用の風炉であろう。

B 瓦質土器 E52は円柱状のつまみを持ち、体部は扁平で、外面はヘラ削りの後、指押さえで整形する。火消し壺の蓋と考えられる。

C 無釉陶器

無釉陶器には、器種別では、擂鉢・鉢・甕・徳利がある。

擂鉢 擂鉢には產地別では、備前焼、丹波焼、堺・明石焼のものがある。

備前焼 E85は口縁部が上下に拡張し、縁帯を持ち、口縁部外面に凹線を2条施す。備前焼V期の製品で、16世紀代の時期が考えられる。

丹波焼 E4は口縁部が断面台形状を呈し、口縁部内面に凹線を1条施すもので、内面にヘラ引きの擂目を施す。また、E51は口縁部に縁帯を持ち、口縁部外面に凹線を2条施すもので、内面には櫛描きの擂目を施す。E4は17世紀前半、E51は18世紀後半代にそれぞれ比定される。

堺・明石焼 E17・E72はいずれも口縁部が断面台形状を呈し、外面に凹線を2条施し、内面に櫛描きの擂目をもつもので、堺・明石產と考えられ、18世紀後半～19世紀前半代に比定される。

鉢 E54は平底で体部が直立する鉢で、外面には灰被りが見られる。

甕 甕には備前焼と丹波焼のものがある。

備前焼 E3は口縁部が指円形状を呈し、外面に凹線を2条施すもので、備前焼V期相当で、16世紀代に比定される。

丹波焼 E71は口縁部が外方に大きくひらくもので、外面の口縁部から肩部にかけて灰被りが見られる。16世紀後半代に比定される。

徳利 E53は水挽きロクロ成形で、内面にはロクロ目が明瞭に認められる。外面には赤土部を全面に塗布し、光沢のある赤褐色に発色する。備前焼徳利と考えられる。

D 施釉陶器

施釉陶器には器種別では、碗・皿・鉢・甕・鍋・土瓶・水滴がある。

甕 瓢には產地別では、肥前系、瀬戸・美濃系のものがある。

肥前系 E30・E73はいずれも端正な高台をもつ。E30は口縁部が外反する。E73は体部が内彎し、口縁部は直立する。いずれも肥前系京焼風陶器で、17世紀後半から18世紀前半代の時期が考えられる。E63は内外面とも鉄釉施釉の後、白濁釉を施釉する現川焼である。18世紀前半代の時期が考えられる。E74・E75は高台を浅く削りだし、底部外面は露胎のもので、17世紀前半代に比定される。

瀬戸・美濃系 E76は体部が内彎し、外面とも灰釉を施釉する。胎土から美濃産と考えられる。E84は口縁部はほぼ直立し、口縁端部は僅かに外方にひらく。E92は浅い内反高台で内面に鉄釉を施釉し、高台裏は露胎である。いずれも、瀬戸・美濃系天目茶碗と考えられる。

■ 盆には肥前系、瀬戸・美濃系のものと京・信楽系のものがある。

肥前系 E7は陶胎染付で、底部の器壁は比較的厚く、内面に呉須で草花文を描く。肥前系で17世紀後半代のものであろう。

瀬戸・美濃系 E31は外面に鉄釉で施文した後、内外面とも長石釉を施釉する。高台疊付の釉はかかる。美濃焼志野皿で17世紀前半代の時期が与えられる。E77は体部内面にヘラで菊花文を施し、全面に灰釉を施釉する。底部内面の釉は輪状にかきとる。美濃焼のいわゆる黄瀬戸菊皿で、16世紀後半から17世紀初頭の時期が考えられる。

京・信楽系 E43は体部内面にクシ描きで施文し、内面～口縁部外面にかけて灰釉を施釉する。京・信楽系灯明皿で19世紀前半以降の時期が考えられる。

鉢 E42はロクロ成形で、外面に赤土部を壘布した後、灰釉を施釉する鉢で、18世紀後半代の丹波焼と考えられる。

皿 E55は体部外面上位にヘラ状工具で波線を2条施文し、鉄釉を柄杓で流し掛けした後、全面に灰釉を施釉する。丹波焼で19世紀前半以降のものと考えられる。

鍋 E19は体部外面に団子状の脚を3箇所貼り付ける。内外面とも鉄釉を施釉し、体部外面下位から底部外面は露胎である。京焼系陶器で、在地の明石・舞子産の可能性が高い。19世紀前半代に比定される。

土 瓶 E56は体部が「く」の字状に屈曲し、外面に灰釉を施釉し、内面は露胎である。京焼系陶器で明石・舞子産と考えられ、19世紀前半代の時期が考えられる。

水 滴 E18は型作り成形で平面形状は橢円形を呈する水滴である。体部外面に型押しで学舎、菊花文、草花文などを施文する。京焼系陶器で19世紀前半代に比定される。

E 白 磁

白磁には肥前系の皿がある。E33・E58は高台を浅く削りだし、底部内面を蛇ノ目状釉ハギする粗製の皿である。肥前系波佐見皿で18世紀前半代に比定される。E59は型作り成形で、外面は型押しで花弁状に綾線を施文する。肥前系紅皿で19世紀前半代のものであろう。

F 青 磁

青磁には器種別では碗と皿がある。

碗 E90は内外面とも青磁釉を施釉し、底部内面の釉を蛇ノ目状に釉ハギする。また、E91は高台裏まで全面に施釉し、高台裏の釉を蛇ノ目状にかきとる。いずれも龍泉窯系青磁碗で、E90は13世紀後半から14世紀代に、E91は15世紀代にそれぞれ比定される。

■ 皿には中国製、肥前系、三田系のものがある。

中国製 E86は底部の器壁が非常に厚い皿もしくは盤の底部である。龍泉窯系青磁で15世紀代に比定

される。

肥前系 E39は内外面とも青磁釉を施釉し、底部外面のみ透明釉を施釉する。肥前系青磁と考えられる。

三田系 E79は内外面とも青磁釉を施釉し、高台疊付の釉はかきとる。露胎部は淡赤褐色に発色する。三田青磁と考えられ、19世紀前半代に比定される。

G 染付磁器

染付磁器に器種別では碗、皿、杯、鉢、油壺などがある。

碗 碗には肥前系のものと瀬戸・美濃系のものとがある。

肥前系 肥前系の碗には、底部の器壁が厚く、外面に淡い具模で文様を描く、粗製のいわゆるくらわんか手の碗 (E40・E47・E64・E65・E66)、高台が細く高い広東碗 (E20・E24)、体部がほぼ直上に延び、外面に一重網目文を描くもの (E45) がある。くらわんか手腕にはコンニャク印判で紅葉文を描くもの (E64) と手描きで牡丹唐草文を描くもの (E40)、芭葉文を描くもの (E47)、梅に雪輪文を描くもの (E65)、草花文を描くもの (E66) がある。くらわんか手腕は肥前系波佐見産で、コンニャク印判で施文するものは18世紀前半代に、手描きのものは18世紀中頃から後半代にそれぞれ比定される。また、E45は17世紀中頃から後半代に、広東碗は18世紀後半から19世紀前半代の時期がそれぞれ与えられる。

瀬戸・美濃系 瀬戸・美濃系碗には広東碗 (E21) と端反碗 (E23) がある。広東碗は外面に山水文を、端反碗は外面に福寿文を描く。広東碗は19世紀前半代に、端反碗は19世紀前半以降に比定される。

皿 皿には中国製のもの (E87) と肥前系のもの (E25・E34) がある。E87は基筒底で、内面に菊花文、外面に草花文を描く。明青花皿で、16世紀後半代に比定される。E25・E34はいずれも肥前系波佐見産の粗製の皿で、底部内面の釉は蛇目状にかきとる。18世紀後半代に比定される。

蓋 E26・E49はいずれも模蓋である。E26は外面に簡略化した蓮弁文を、E49は牡丹唐草文をそれぞれ描く。18世紀後半から19世紀前半代に比定される。

鉢 E27は体部は僅かに内彌してほぼ直上に延びる。体部外面には細かい草花文を描く。E41はロクロ成形の後、型打ちで口縁部から体部を花弁状に整形する。内外面とも銅版転写で細かい草花文を描く。E27は肥前系で19世紀前半代に、E41は明治以降にそれぞれ比定される。

油 壺 E57は体部が球形を呈し、外面に簡略化した草花文を描く油壺である。肥前系で18世紀後半代に比定される。

H 色絵磁器

E50は型作り成形の菊形の水滴である。頸部の背面に穿孔が1箇所認められる。外面に透明釉を施釉し、羽模は赤絵で仕上げる。肥前系と考えられ、17世紀前半代の所産であろう。

2 土製品 土製品には型作りの人形と十能がある。

人 形 人形には両型作りのもの (E93・E95・E96・E99) と片型作りのもの (E94・E97・E98) がある。両型作りのものには灯籠形 (E93)、祠形 (E95)、動物形 (E96)、遊女像 (E99) が、片型作りのものには龜形 (E94)、恵比寿面 (E97)、猿面 (E98) などがある。彩色はいずれも全て剥落している。

十 能 E100は型作り成形で内面はナデ調整、外面は未調整の土製の十能である。

【金属製品】(第69・70図、写真図版92・93参照)

金属製品は錢貨、釘、鉄剣、劍り止めが出土している。錢貨 (EI13~EI18) は6枚を図化した。本邦

銭と渡来銭があり、渡来銭はすべて北宋銭である。

紹聖□寶 (EI17) が出土している。紹聖がつく貨幣には紹聖元寶と紹聖通寶の2種類があるがどちらも行書体の文字があり、いずれか特定できない。本邦銭のうち、EI13・EI14は、古寛永に分類される。EI15、EI16は3期の新寛永である。EI18は1銭銅貨で明治21年鋳造の銘がある。

釘 (EI1～EI10、EI19) はいずれも頭巻釘である。銃剣 (EI11) は旧日本陸軍の30年式銃剣の後期型である。全長49.9cm、刀身は40cm、厚みは0.5cmを測り、側面には彫溝が彫られている。柄部には元米、柄木を柄木小ネジで固定されているはずであるが遺存していない。銃の銃剣止金具と固定する溝が掘られた鳥頭型の枘頭が本来の向きとは逆に付いた状態で出土している。

銃剣には本来、製造した工廠の刻印が刀身に施され、柄頭に製造番号を刻印されるが、この銃剣にはそれらが施された痕跡はなく、この銃剣の用途を考える上で示唆的な特徴がある。

堀り止め (EI20) は建築具の一つで、扉を受ける金具として使用された。

【石 製 品】(第70図参照)

SK60から右硯が1点 (ES 1) 出土している。ほぼ完存する長方硯で、外縁出の規模は8.05×11.2cmを測る。縁幅は、海部側のみ広く1cmを測る。他は7mmである。陸部と海部の境は不明瞭で、海側縁部のみ溝状に深くなり、陸部との比高は2mmである。陸部の厚さ1.9cmを測り、縁部の高さは、海側で2.6cm、陸側で2cmである。また、底部は約5mm抉られ、高台状をなす。

引用・参考文献

- (1) 兵庫県教育委員会 2004 『兵庫津遺跡 II』
- (2) 伊丹郷町研究会 2003 『伊丹郷町の陶磁器の様相』
- (3) 伊野近富 1995 『土師器』『楓説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- (4) 兵庫県教育委員会 1992 『下相野窯址』
- (5) 長谷川翼2003『中世丹波焼の変遷と技術移入・導入』『中世土器の基礎研究XVII』日本中世土器研究会
- (6) 長谷川翼 2004 『壺瓶にみる近世丹波焼』『關西近世考古学研究XII』關西近世考古学研究会
- (7) 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
- (8) 堀内秀樹 1996 『東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察』『東京大学埋蔵文化財調査室紀要I』 東京大学文化財調査室

第20表 E地区遺物観察表1

報告 No.	出土場所	種別	基種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	成形・調整技法等	文様	色調	産地	時期	備考
E1 第1面	土師器	皿		10.9	2.35		手づく成形。内外面とも口コナダ調整。外側の体部下部～底部 ナナ刺繡の状、指跡をもつ。		に赤い鉄色			内面・口縁 器外周 全面に保付帶
E2 第1面	土師器	杯		10.1	(7.5)	15.1	粘土錐巻上げ成形。内外面ともヨコナダ調整。		に赤い青銅色			羽茎形手摺 りかづき。山面と外周に 保付帶
E3 第1面	無釉陶器	壺					粘土錐巻上げ成形。内外面 ヨコナダ調整	口縁部外周に2 条の凹線	暗赤褐色	備前系	16c代	彌 唐 V 期。内面 的形状に灰 黒り
E4 第1面	無釉陶器	瓶		(36.9)	(7.06)		粘土錐巻上げ成形。口縁部内 外周 回転ナダ調整。体部外 面に指跡压痕	生胎内面にヘラ 溝きの振り目を 施す。	暗赤褐色	丹波系	17c前半	丹波燒
E5 第1面	施釉陶器	碗		(11.5)	3.1	(3.6)	底部の器壁は非常に厚い。高 台は近く削り出しあげ。三日月窓 台		内面～体部外面 1半 烧物を施 施釉褐色に 施す。	肥前系 (唐津)	17c前半	天日茶碗
E6 第1面	施釉陶器	皿		(11.5)	3.1	(3.6)	底部の器壁は薄い。高台は浅 く削り、削り出し高台。底部 内面 灰の目伏輪ハサ		内面～口縁以外 回転鍛錬を施した 区モリーラ色に 施す。外側体部 ～底盤 露胎 灰褐色	肥前系 (唐津)	17c後半～ 18c前半	綠釉皿
E7 第1面	陶胎朱付	皿		(13.5)	4.75	(5.8)	底部の器壁は比較的薄い。高 台は削り出し高台	内面 陶漆 朱文 外腹 無文	やや黄褐色を帯 びた灰褐色	肥前系	17c後半	器面に質 人。斑青い 跡有
E8 第1面 北側隙落 込み	朱付陶器	碗		12	4.7	4.7	底部の器壁は比較的薄い。高 台内面 灰の目伏輪ハサ	外腹 陶漆 朱文 内腹 2条。内面 無文	青みを帯びた灰 褐色	肥前系 (佐賀瓦)	18c後半	くわんか 子鏡
E9 第1面 SK02	土師器	皿		6.3	1	3.15	ロクロ成形。内外面ともに口 コナダ調整。底盤外周 朱調 整。朱切痕。内面の体部と底 部の間に控をもつ。		内面 透明釉を 施す。明赤褐色 に施す。 外腹 露胎 褐 色		19c前半	いわゆる持 物の灯明皿
E10 第1面 SK04	土師器	皿		(6.9)	1.4	(3.9)	ロクロ成形。内外面ともに口 コナダ調整。底盤外周 朱調 整。朱切痕。		内面 透明釉を 施す。明赤褐色 に施す。 外腹 露胎 褐 色		19c前半	いわゆる持 物の灯明皿
E11 第1面 SK04	土師器	皿		6.3	1.3	3.15	ロクロ成形。内外面ともに口 コナダ調整。底盤外周 朱調 整。朱切痕。		内面 透明釉を 施す。明赤褐色 に施す。 外腹 露胎 褐 色		19c前半	口縁部に保 付有(灯明 皿として使 用)。いわゆ る持物の灯 明皿
E12 第1面 SK04	土師器	皿		6.05	1.15	3.15	ロクロ成形。内外面とも口 コナダ調整。底部外周 朱調 整。朱切痕。		内面 透明釉を 施す。明赤褐色 に施す。 外腹 露胎 褐 色		19c前半 以降	いわゆる持 物の灯明皿

第21表 E地区遺物觀察表2

報告 No	出土場所	種別	基種	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	成形・調整技術等	文様	色調	產地	時期	備考	
E13	第1面 SK04	土師器	皿	5.9	1.1	3.25	口クロ成形。内外面とともに口 輪ナゲ調査。底面外観・未満 整。各切端。内部の体部と底 部の界に絞をもつ		内面 透明釉を 施施。明治時代 に施色。 外面 露胎。棕 色		19c前半	いわゆる特 徴的火打用皿	
E14	第1面 SK04	土師器	皿	14.7	3.55		軸上絞巻上げ成形の後、ロク ロ堅化。高台は板付ける。体部 外周は板ナゲ調査。一部内 面はロココナゲ調査					底部・内外 面に施付 着。	
E15	第1面 SK04	土師器	盆	(24.5)	5.15		型作り成形。口縁部、内外 面は強いロココナゲ調査によ り、所産三角形に施色。底 部外観・未調査				19c後半～ 19c前半	内外面と6 枚付着。	
E16	第1面 SK04	土師器	火鉢	(7)	(15.3)		粘土絞巻上げ成形の後、ロク ロ堅化。高台は板付ける。体部 外周は板ナゲ調査。一部内 面はロココナゲ調査		に近い褐色			粘土中に4 1mmの細胞 を含む	
E17	第1面 SK04	無釉陶器	擂鉢	(33)	(5.25)		粘土絞巻上げ成形の後、ロク ロ堅化。内外面とも、回転ナ ゲ調査。口縁部は断面・合形 軸の終部を形成		口縫部外側に凹 縫2条。内面の 口縁部と体部の 界に凹縫1条。 体部内面にクシ 縫の腹を施文	暗茶褐色	墨・明石 屋	19c後半～ 19c前半	
E18	第1面 SK04	無釉陶器	水滴	16.3	5.6	5.6	型作り成形。丁字形状は椎 形	体部外側に複数 (含含) 花文等を切削 し施文。体部上 部に、学孔1ヶ 所(注)と2ヶ所 貼付	体部外側、脚部 に施色。内面 に施色。内面 に施色。外側 に施色	直腰系 (関西系)	19c前半		
E19	第1面 SK04	無釉陶器	瓶	(17.7)	8.3	(7.6)	平底。体部外周下部に口子状 の肩を3ヵ所削り付ける。底部外 周下部に此部削り跡は露む。基 部部にへラ削り痕あり		内面とも施色 を施す。暗茶 褐色に施色	京焼系 (関西系) 明石産か?	19c前半	一部に底が 付着	
E20	第1面 SK04	無釉陶器	瓶	(9.5)	6.15	5.2	高台は高く高い。体部は僅か に内脇して斜め上方に延び る。器壁は比較的薄い。	外縫 無縫1条を 施文。内面 壁根2 - 1条を施文	やや青みを帯び た灰白	肥前系	19c後半 19c前半	底部 強度 心作。伝承 號	
E21	第1面 SK04	無付縁器	碗	11.7	6.25	6	高台は高く高い。体部は僅か に内脇して斜め上方に延び る。器壁は比較的薄い。	外面 やや濃い 緑色で水文 縫縫1条を施 文。内面 壁根2 - 1条を施文	やや青みを帯び た白	濃淡系	19c前半	灰	
E22	第1面 SK04	無付縁器	杯	7.2	5.1	(4.2)	高台は所産三角形状で低い 平底。底部と体部の肩は人字 形に削り出し。体部は直口。口縁 部も直口とする。	体部外観 やや 浅い風呂で水仙 花文。底面外觀 堅化けられた青 文。壁根2 - 1条を施文	やや青みを帯び た灰白	肥前系	19c前半	高台付 造詣外觀に 付着。杯 (焼成品)	
E23	第1面 SK04	無付縁器	瓶	(9.55)	4.6	(3.5)	高台は比較的高い。体部は僅 かに内脇して斜め上方に延び る。器壁は比較的薄い。	外面 無縫1条 を施文。各 縫縫2条をやや厚 めだら舟形で施 文。内面 壁根2 - 1条を施文	やや青みを帯び た灰白色	肥前系	19c前半 以降	端反硝	
E24	第1面 SK04	無付縁器	瓶	11.1	6.2	6.7	高台は高く高い。体部は僅か に内脇して斜め上方に延び る。器壁は比較的薄い。	外面 無縫1条 を施文。各 縫縫2条を施 文。内面 壁根2 - 1条を施文	やや青みを帯び た白	肥前系	19c後半 19c前半	庄田綱	

第22表 E地区遺物観察表3

種類 No.	出土場所	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	成形・調整技法等	文様	色調	産地	時期	備考
E25 第1面 SK04	束付鋤器	且	(13.3)	12.0	(6.6)		器壁は全体に非常に厚い。底 部内面 箕の目状跡ハギ	外面 陶文 内面 やや深い 外沿に焼略化さ れた裏茎文、裏 縁2条を施す	青みを帯びた灰 白色	肥前系 (肥前見)	18c後半	箕面甌付灰、く らわんか手
E26 第1面 SK04	束付鋤器	網目		10.1	2.5	4.9	器壁は全体に比較的薄い	外國 陶文 内面 陶文 底面 陶文 内面 1条を施す。内面 は網目、裏茎文 底面 1条を施す。 内面 有文	青みを帯びた白 色	肥前系	16c後半～ 18c前半	
E27 第1面 SK04～ SK28	束付鋤器	林	(22.5)	11.1	(12.0)		口縁部の種々取り	器外表面 やや 盛り込んだ浅鉢 形。内面 1条を 施す。内面 1～2条を施す。 底面外周 芝根 1条を施す。内 面 有文	やや青みを帯び た白色	肥前系	18c前半	器面に細か い貫入
E28 第1面 SK05	土師器	焰	(28.8)	4.7			想作り成形。体部と底部の界 はほぼ卓直。内面～口部外周 ヨコナガ調整。底部外周 米腰整				18c後半～ 19c前半	北部外周に 焼付灰。長 谷川分水嶺 葛原村 等。
E29 第1面 SK05	土師器	焰	(32.2)	(6.6)			想作り成形。体部はほぼ直立。 内面～口部外周 ヨコナガ 調整。口縁部 棒円形状に肥 厚。底部外周 未調査				18c後半～ 19c前半	流域外周に 焼付灰
E30 第1面 SK06	施釉陶器	且		9	5.5	3.8	高台は都台形状で比較的低 (「」)の状態に外方にひらく。 底部は内側して斜め上方 に延びる。口縁部は外反する。	内面外ともロカ コナガ調整。	内面外とも灰褐色 内黄色 に発色。高台脚 以下 黑釉	肥前系	17c後半～ 18c前半	肥前系、京 阪風陶器
E31 第1面 SK08	施釉陶器	且		(1.8)	5		高台付の種々取り	内面外ともロカ コナガ調整。	外室に袋地で施 文後。内面内周 に黄石積を施す。 乳白色に発色	美濃系	17c前半	志野皿
E32 第1面 SK14 F号	土師器	且		6.7	1.45		単光。体部は織やかに斜め上 方に延びる。内面の底部と体 部の差は不明顯。	ロクロ成形。内 外表面は都台形状で 調整。底部外周 未調査。赤 切痕	内面～口縁部外 周に透須賀を施 す。内面外周に 黑色。底部外周 以下 露胎に ない部分に黑色		18c前半	口縁部に焼 付灰(豆豆 皿として使 用)。いわゆ る拂毛の灯 明皿
E33 第1面 SK20	白磁	且	(9)	2.3	4		高台は浅く割りだす竹ノ瀬 型。底面内面 箕の目無ハギ	内面外ともロカ コナガ調整。	内面ともと透明 釉を施す。灰白 色に発色。高台 以下露胎赤赤 色	肥前系 (肥前見)	18c前半	施製の白磁
E34 第1面 SK20	束付鋤器	且	(13)	3.55	7.25		底部の器壁は比較的厚い。	内面 陶文 内面 有文 内面 1条 (大崩 字) 1条 (大崩 字) 1条 五瓣 花文?	青みを帯びた灰 白色	肥前系 (肥前見)	18c後半	くらわんか 手
E35 第1面 SK27	土師器	且	6.2	1.2	3.3		平底。体部は織やかに斜め上 方に延びる。内面の底部と体 部の差は不明顯。	ロクロ成形。内 外表面に輪郭ナ ガ調整。底部外 周 未調査。赤 切痕。	に深い黒色			
E36 第1面 SK27	土師器	且	6.7	1.3			平底。体部は織やかに斜め上 方に延びる。内面の底部と体 部の差は不明顯。	ロクロ成形。内 外表面に輪郭ナ ガ調整。底部外 周 未調査。赤 切痕	に深い黒色			赤土植底

第23表 E地区遺物観察表 4

報告 No	出土場所	種別	基種	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	形態・調整法等	文様	色調	産地	時期	備考
E37	第1面 SK27	土器器	皿	7.5	1.2	3.6	平底。底部は僅かに斜め上方向に延びる。内部の底部と外側の底部は不規則。底部内側に突起を1箇もつ。	ロクロ成形。外部内面 新葉 三角形状の段を押つ。外部外縁に凹紐ナテ調整。底部外縁半周側、糸切目。	内面 透明感を施す。褐色に発生。外周 青緑 褐色		19c前半	いわゆる柿輪の灯明皿
E38	第1面 SK27	土器器	皿	(7.2)	1.3		平底。底部は僅かに斜め上方に延びる。内部の底部と外側の底部は不規則。底部内側に突起を1箇もつ。	ロクロ成形。外部内面に新葉二角形状の段を押つ。外部内面に凹紐ナテ調整。底部外縁半周側、糸切目。	内面 透明感を施す。青緑色に発生。外周 青緑 褐色		19c前半	いわゆる柿輪の灯明皿
E39	第1面 SK28	吉備	皿	7.5	1.5	4.5	平底。高台は底面三角形状で低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。	内外面ともロクロナダテ調整。	内外面とも青緑色を帯びる。底部内面に新葉(底面裏)のみ透明感を施す。灰褐色に発生。			
E40	第1面 SK28	染付器	碗	9.7	5.55	3.7	高台は比較的高く高い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は尖り丸みに以降である。	外周 吉備 茶葉1種 繩1種 社丹青葉 繩1種 1・2種。底部外縁半周側、糸切目。	やや青みを帯びた白色	肥前系	19c後半 以降	
E41	第1面 SK28	染付器	鉢	(22.8)	7.8	11.2	高台は比較的高く高い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は半円に通じて丸みをもつ。口縁部を打ちで花弁状に整る。	内外面とも側面転写で細かい草花文施す。	吉備の発色は濃い藍色。			近代以降
E42	第1面 SK33	施釉陶器	鉢	17.5	13.8	9.9	ロクロ成形。内外面とも同様の内側、外縁に凹紐ナテ調整。底部外縁半周側	外周 塗上濃赤の底。内側、外縁に凹紐ナテ調整。底部外縁半周側	内面		18c後半	胎土中に約2~3mm以下の殘跡を多く含む
E43	第1面 SK35	施釉陶器	皿	(12)	3	(4.5)	LI接縫外周 直紐ナテ調整。底部外縁 ヘラ削り溝。	底部内面 クシ 滴き施文	内面~口縁部外縁半周側、内オーリップに青色。底部外縁以下、底盤露作部 黒褐色~灰褐色	京・備楽系	19c前半 以降	口縫部外縁に一部保護材。底盤内面に甘露1ヶ所。灯明皿
E44	第1面 SK35	土器器	皿	6	1.3	3.4	ロクロ成形。内斜面とも同様の内側、外縁に凹紐ナテ調整。底部外縁 半周側、糸切目。		浅黄色			口縫部外縁に一部保護材。灯明皿として使用
E45	第1面 SK35	染付器	瓶	(10.3)	(4.5)		体部は僅かに内側気泡にはばく面上に延びる。	外周 浅い灰褐色 上裏縫合口を施す。内面 無	青みを帯びた灰褐色	肥前系	17c中頃~後半	
E46	第1面 SK35	染付器	瓶	6.3	4.9	3.3	高台は比較的高く高い。体部は僅かに内側して斜め上方に延びる。	外周 吉備 茶葉1種 繩1種。内面 繩2・1種 単花文	やや青みを帯びた灰白色	肥前系	18c後半	
E47	第1面 SK35	染付器	碗	8	4	3.1	底部の盛部は非常に厚い。体部は僅かに内側して斜め上方に延びる。	外周 浅い灰褐色で施釉された茶葉文・繩縫文・單花文。内面 細文	やや青みを帯びた灰白色	肥前系(底色灰度)	18c後半	くらわんか手
E48	第1面 SK35	染付器	杯	(8)	6.35	(3.8)	高台は底面二角形状で低い。平底。底面と体部の隙は大きめに延びる。体部は直立。口縁部を立ち立てる。	外周 やや黒ずみの濃い茶葉文。内面 細文	青みを帯びた灰色	肥前系	19c後半 以降	

第24表 E地区遺物観察表5

都合 No.	出土場所	種別	器種	口径 (cm)	基高 (cm)	底径 (cm)	成形・調整状況等	文様	色調	産地	時期	備考
E49	第1面 SK35	坐付鏡面	碗蓋	(9.75)	3.4		器盤は全体に非常に厚い	外周 装脚、透 窓2枚、内面山形 文、界隈2条 コインシック印模 で五弁花纹	青みを帯びた灰 色	肥前系	18c後半～ 19c前半	
E50	第1面 SK35	色絵磁器	水滴	9.8	7.3	5.6	製作り成形。中型。腹部背面 に穴孔1ヶ所。右底あり		外裏に透明釉を 施す。底部外側 露胎。右部は 赤絵で十輪紋	肥前系	17c前半	他の軸は赤 と割落
E51	第1面 SK35	無釉陶器	擂鉢	(36.8)	14.8	(15.5)	斜十輪車上に虎形の後、ロク ロ蔓文。口縁部は斜面。台形 状の轮廓を形成	山神紋、外周に 山形文、内面山形 文の透窓2枚、内 部露胎、内 外周に透窓2枚、 内面山形文の透 窓2枚、左側にテ クスチャで細かい 横筋を施す。		月波系	18c後半	地土中に約 0.5m程度 の砂を含む
E52	第1面 SK36	瓦質土器	火消壺	(19.7)	5.9		外面 ヘラ削りの後、揮拂り 込み。内面 瓦ナマ調整。各部 内面 ミガキ調整		黒灰色			地土中に約 1m以下の 砂を含む
E53	第1面 SK36	無釉陶器	便利		(14.05)	10.45	水波ロクロ成形。内外周とも 圓輪ナマ調整。体部内面 口 クロ口直 微顯。		外面 赤土部施 青光沢を打つ 墨手焼に發 色。内面 露胎 灰白色	肥前系		機械化。外 面 外張り
E54	第1面 SK36	無釉陶器	鉢	10.3	5.85	7.65	ロクロ成形。内面～体部外側 上位、圓輪ナマ調整。体部外 側上位 ヘラ削り調整。底部 内外面 未調整		灰褐色			鉄刷り。
E56	第1面 SK36	施釉陶器	甕	(16.6)	(19.0)		体部は内青。体部上面に内板 する。口縁部は外方につまみ 出す。	体部外側上位 へラ削りで施 墨を2ヶ施す。	鉄刷りで洗 し掛けの後、全 面に灰釉を施 す。内面灰釉に 発色。内面露胎 灰手焼に発色	丹波系	18c前半	
E56	第1面 SK36	施釉陶器	上瓶	13.4	(13.4)	23.8	ロクロ成形。体部外側 延1 1.5ヶ所 フルの揚子を2ヶ所 貼付け	体部外瓶 上部 に沈板	外瓶 灰釉施 墨灰手焼に發 色。内面 露胎 に赤い墨焼	肥前系 明治・大正 子窓か？	18c前半	
E57	第1面 SK36	坐付鏡面	油瓶	2.45	7.55	4.1	杏仁2折断面形狀で比較的の 薄軽。脚部は大きく内側、無縫 部は底く深く立。二脚部は大きく 外方に立ちく。	秀麗 先頭 球 體化された花葉 文	青みを帯びた灰 白色	肥前系	18c後半	
E58	第1面 SK36	内窓	皿	8.9	2.6	3.1	底部の部屋は非常に厚い。底 部内面 目船ハギ		内面とも透明 釉を施す。底端 部に発色。外瓶 の裏面部以下は 露胎	肥前系 (淡井見窓)	18c前半	粗製の白磁
E59	第1面 SK36	白磁	紅皿	4.7	1.5	1.3	製作り成形。外面に壓榨し て底面を施文(花押)		内外面とも透明 釉を施す。底白 色に發色。底台 部以下 露胎	肥前系	18c前半	
E60	第1面 SK37	土師器	皿	7.45	2.1		手づくね調整。内外面とも当 コナガ調整。体部外側に指擦 圧痕		に赤い褐色			口縁部に像 付着。灯明 皿として使 用

第25表 E地区遺物観察表6

報告 No	出土場所	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	成形・調整技法等	文様	色調	産地	時期	備考
E61	第1面 SK37	土器	直	7.6	1.7		手づくね調整。内外面ともヨコナゲ調整。体部外面に指添 压痕		にぶい橙色			口縁部2ヶ 所に付着 着。不明瓦 として使用
E62	第1面 SK37	土器	透造	26.5	(7.2)		体部はやや内傾。型作り成形。 内面「手づくね」。外面「手づ くね」の後、指添さえ、溶接圧 痕あり。底部外周「板ナガ」調 整		にぶい橙色		18c後半	底部外周に 付着。長 谷川分類第 3形E2型。
E63	第1面 SK37	施釉陶器	直	(10.5)	5	(4)	高台は比較的幅広く高い。体部 は側面に内張して斜め上方向に 延びる。口縁端部は尖り気味 に認めめる	内外両とも弧 線? (短茎暗色 線) 施釉の後、 内外周に白滑釉 を施す	規川焼か ?	18c前半		
E64	第1面 SK37	染付陶器	碗	10	5.4	2.6	高台は比較的幅広く高い。体部 は側面に内張して斜め上方向に 延びる。口縁端部は尖り気味 に認めめる	外周「コンニヤ ク印押」で記載文 章模様1~2条 底部外周 新模様1条 大明 年製の款。内面 墨文	青みを帯びた灰 色	規川焼 (底在范)	18c前半	くらわんか 手
E65	第1面 SK37	染付盖器	碗	(10.6)	5.85	(4.2)	高台は比較的幅広く高い。体部 は側面に内張して斜め上方向に 延びる。口縁端部は尖り気味 に認めめる	青みを帯びた灰 白色	肥前高 (底在范)	18c後半	くらわんか 手	
E66	第1面 SK37	染付陶器	碗	(16)	7.35	(6.5)	高台の基部は非常に厚い。体 部はほぼ直線的に斜め上方に 延びる。	体部外周「深い 刻み」で模様で草 花、裏面「手づくね」 で模様2条、底部 内面「新模様2 条」。コンニヤク 印押で施された灰 井文強火	青みを帯びた灰 色	肥前高 (底在范)	18c後半	くらわんか 手
E67	第2面	土器	直	(10.3)	2.2		口クロ底。器壁は全体的に比 較的薄い。内外面ともに指添 ナガ調整。底部外周「米開溝」 あり		にぶい橙色			口縁部に付着 (灯明 以として使 用)
E68	第2面	土器	直	(7.3)	1.45		手づくね成形。内外面ともヨ コナゲ調整。外側の体部・底 部「指添圧痕」		にぶい橙色			
E69	第2面	土器	直	(16.4)	(5.8)		口縁部内外周「板ナガ」調 整。体部内面「底ナガ」調 整	口縁部に穿孔 1ヶ所	にぶい黄褐色			体部外周に 付着
E70	第2面	土器	直	(15)	(16.1)	(14.4)	ワクロ成形。体部外周下位 へラ削り	体部下位に指添 ナガの透かしを入れる。 体部外周「手づくね」 で模様2条、底部 内面「手づくね」 で模様2条「門」の 模様スタンプ	にぶい黄褐色			前系用の風 貌
E71	第2面	無釉陶器	壺	(25.7)	(7.3)		口縁部は外方に開く。内外面 共にナゲ調整		丹波系	18c後半		丹波焼。外 面の口縁部 ~底部「灰 被り」
E72	第2面	無釉陶器	壺	(30.6)	(10.05)		口縁部は上位に笠張。断面は 瓶状の構造を有する。口縁部 内外面に凹凸ナゲ調整	体部外周に2条 「1.2.3.4.5.6.」の 模様付材を有する。 口縁部外周に凹 凸2条	暗赤褐色	津・明石 窓	18c後半~ 19世紀	

第26表 E地区遺物観察表7

報告 No	出土場所	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	成形・焼成方法等	文様	色調	產地	時期	備考
E73	第2面	施釉陶器	碗	(9.4)	5.5	3.55	高台は低い貼付け高台		内外面とも透明釉。青磁を帯びた灰色に発色。高台部以下露胎。	肥前系窯 燒成窯	17c後半～ 18c前半	
E74	第2面	施釉陶器	碗		(4.05)	(4.19)	高台は低い削り出し高台		内外面とも灰釉を施す。釉は高台部まで及ぶに至る。青磁色に発色。	肥前系 (唐津)	17c前半	
E75	第2面	施釉陶器	碗		(3.3)	4.4	底部の厚壁は非常に厚い。高台は多段に削り出し高台、三日月高台		内面 灰釉を施す。器オーバー色に発色。外周露胎。暗紅褐色。	肥前系 (唐津)	17c前半	
E76	第2面	施釉陶器	碗	(6.4)	(2)				内外面とも灰釉を施す。青みを帯びた灰白色に発色			胎土から美濃窯か?
E77	第2面	施釉陶器	盘	(10.4)	2	(5.5)	底部内面 脊状に輪カキ取り	底部内面にヘラで菊花文を刻入	内外面とも灰釉を施す。淡青釉色に発色	瀬戸・美濃系	16c後半～ 17c初頭	美濃窯
E78	第2面	施釉陶器	钵	(21.2)	(25.0)		内外面ともロクロナデ調整。		内面一口縁部外 面に露胎。底色に発色。底部外 面は下部露胎 に赤褐色。	肥前系 (唐津)	17c前半	
E79	第2面 SK47	青磁	盘	9.7	2.8	4.4	高台付の輪カキ取り		内外面とも青磁 釉を施す。暗緑 色に発色。器全体 部は淡赤褐色。		19c前半	三田青磁
E80	第2面 SK53	土師器	皿	(11.4)	2.4		手づくね底形。器壁は比較的 薄い。内面一口縁部外 面 ロココ彫葉等。外側の 全体一塗器。ナデ調整の後、 指押正経		に赤い黄褐色	京都系	15c代	内外面とも 焼付青(打 明器として 使用)
E81	第2面 SK53	土師器	皿	7.5	1.6		手づくね底形。内面一口縁部 外面 ロココ彫葉等。外側の 全体一塗器。ナデ調整の後、 指押正経		後青褐色			
E82	第2面 SK54	土師器	皿	(9)	1.55		器壁は全体に薄い。底部はへ ソ形風に若干上方に突出する も。内面一口縁部外 面 ロココ彫葉等。全体一塗器。 底部内面 ナデ調整		に赤い黄褐色			
E83	第2面 SK57	土師器	皿	(7.7)	1.45		手づくね調整。内面 ナデ調 整。外側 ナデ調整の後、指 押正経		に赤い褐色			
E84	第2面 SK74	施釉陶器	碗	(9)	(3.3)		口縁部はほげ底。口縁端部 を側面から下方へ折り曲げる		内面～全体外面 上半 斧跡を施す。露胎色に 発色。外側の口縁部 下半部未施 釉 露胎を側面	瀬戸系		美濃茶網

第27表 E地区遺物觀察表 8

報告 No.	出土場所	種別	基種	口径 (cm)	鉢高 (cm)	底径 (cm)	成形・調整技法等	文様	色調	産地	時代	備考
E85	第2面 SK75	無地陶器	縦縫		(4)		口縁部は下に弧張 網目三。口縁部外側に内 外巻状の縦帶を形成		緑褐色	宿前系	16c後半	青白泥 V 網目。口縫部 外側 灰接 り
E86	第2面 SK69	青磁	直		(2.75)	(9)	底部の發達は比較的薄い		内青・高台側付 まで施釉。オ リーブ灰色に發 色。青白質、露 胎にぶい裡色	鹿児島系	15c代	皿口盤。藍 色或黄青 色。底底は あまい。酸 化後底底
E87	第2面 SK75	染付磁器	直		(1.2)	(3.6)	蕃夷紋。底部外周 露胎	外青 烏頭 花文。内青 蕉 縫2条 蕉花 文?	青みを帯びた灰 白色		16c後半	明青花
E88	第2面 SD08	土師器	縦	(32.4)	(8.7)		体部は僅かに内傾。体部外側 に平行切口目が並ぶ。底部の 骨洛と口縁部の間に断面三角 形状の縫合跡付け。				15c中頃	底部外側に 骨洛。長 谷山口瓶 型器 I B 型。
E89	第2面 SD10	土師器	直	7.1	1.7		底部はヘソ直状に若干突出す 。手づくね底形。内面 模 ナマ調熱。外周 ナマ調窓の 後、捺押さえ。青磁底底		褐色		16c代	内側全面 に施付青 色(対明祖として使用)
E90	第2面 SD10	青磁	直		(2.9)	(6.1)	底部内面 純の日輪ハギ(輪 夷?)		内外面とも青磁 釉を施釉。高台 側灰白色に発色。 高台部は露胎	鹿児島系	13c後半 ~16c代	型器系 模製青磁
E91	第2面 SD10	青磁	直		(1.5)	(6.8)	高台の純 純の日輪ハギ	底部内面に草花 文を印記。	内外面とも青磁 釉を施釉。高台 側灰白色に発色。 高台部は露胎	鹿児島系	13c代	
E92	第2面 PG1	施釉陶器	縦		(2.4)	(3.3)	高台は低い内反式高台。外壁 ハラ削り。底部外周 宝綱彫		火照 施釉を施 熱。施釉部位に 発色。外周 火 施釉 先底を施 布	鹿戸系		天目茶碗
E93	第1面 SK04	土製品	人形 (反身)	4.45	2.8		製作り成形。体部外側に製作 しで、馬蹄形・足を施文		に高い體色			打撲形。器 底の彩色は すべて剥 離
E94	第1面 SK04	土製品	人形 (反身)	5.55	3.5	1.5	カマド・ミニナムア。製作り 成形。体部外側に製作しして、 羽墨・輪を作り出す		に高い黃褐色			器底の彩色 はすべて剥 離
E95	第1面 SK27	土製品	人形 (反身)	4	3.5	1.4	製作り成形。片型作り。					器底の彩色 はすべて剥 離。器物形 天下を心む ミニチュア の範
E96	第1面 SK27	土製品	人形 (反身)	6	3.6	2.3	製作り成形。片型作り。後部・ 上面に貼り合せ痕が残る					器底の彩色 は全て剥 離。器物形 天下を心む ミニチュア の範
E97	第1面 SK27	土製品	人形 (反身)	3.55	2.55	1.5	製作り成形。片型作り。背面 に捺押しの痕の指紋注痕あり					器底の彩色 は全て剥 離。底底は 底底

第28表 E地区遺物観察表9

報告 No	出土場所	種別	基盤	口径 (cm)	高さ (cm)	直径 (cm)	成形・調整技法等	文様	色調	产地	時期	備考
E98	第1面 SK27	土製品	人形 (玩具)	2.9	2.3	0.9	型作り成形。型作り。背面に壓印しの際の指紋圧痕あり					背面の彩色は全て削落。帯を赤で結んだ、淑女像か?
E99	第1面 SK27	土製品	人形 (玩具)	(6.15)	3.55	2.8	型作り成形。両製作り。側面、底面に貼り合せ痕が残る					背面の彩色は全て削落。帯を赤で結んだ、淑女像か?
E100	第1面 SK35-47	土製品	十輪	21.55	14.7	3.4	型作り成形。内面 ナゲ調整。 外面 宗調整		にぼい青色			
ES1	第2面 SK60	石製品	環	11.2	8.06	2.65			灰白色			表面は著しく磨耗

金属製品

報告書 No	地区	土層面	遺物名	種別	品目	種類	初鉄年 鉄造年	時代	法量(cm)			備考
									高さ	幅	厚さ	
H11	第1面	SK27	鉄製品	釘	圓錐釘				13.9	2.0	1.6	
H12	第1面	SK27	鉄製品	釘	錐形釘				11.0	2.4	2.1	
H13	第1面	SK27	鉄製品	釘	錐形釘				8.4	1.5	1.4	
H14	第1面	SK27	鉄製品	釘	錐形釘				7.3	1.8	2.0	
H15	第1面	SK27	鉄製品	釘	錐形釘				4.2	0.9	0.7	
H16	第1面	SK28	鉄製品	釘	錐形釘				4.5	1.5	1.3	
H17	第1面	SK35	鉄製品	釘	錐形釘				4.8	1.0	0.7	
H18	第1面	SK27	鉄製品	釘	錐形釘				3.9	1.1	0.7	
H19	第1面	SK27	鉄製品	釘	圓錐釘				3.7	0.9	0.9	
H20	第1面	SK27	鉄製品	釘	錐形釘				3.2	0.9	0.7	
H21	第1面	第1面後出	鉄製品	鉄釘					49.9	2.3	0.5	
H22	第1面	SK27	鉄製品	錠蓋	寛永酒甕	新			2.7	1.6	0.7	
H23	第1面	SK14	鉄製品	錠蓋	寛永酒甕	新			2.7	2.4	0.4	
H24	第1面	第1面後出	鉄製品	錠蓋	寛永酒甕	新			2.5	2.5	0.1	
H25	第1面	第1面後出	鉄製品	錠蓋	寛永酒甕	古			2.3	2.3	0.1	
H26	第1面	SK94	鉄製品	錠蓋	寛永酒甕	新			2.5	2.5	0.2	
H27	第1面	SK29	鉄製品	錠蓋	和豊元寶	1094	北宋		2.3	1.9	0.1	
H28	第1面	SK14	鉄製品	錠蓋	一銭	21	明治		2.8	2.8	0.1	
H29	第2面	SD12	鉄製品	釘	錐形釘				8.1	1.5	1.3	
H30	第2面	第2面後出	鉄製品	煙り止め					7.2	2.5	2.3	
H31	第1面	SD05	鉄製品	スラッグ					5.2	4.8	1.3	
H32	第1面	SD05	鉄製品	スラッグ					4.6	3.6	1.6	
H33	第1面	SD05	鉄製品	スラッグ					4.6	3.1	2.4	
H34	第1面	SD05	鉄製品	スラッグ					4.2	3.6	2.6	
H35	第1面	SD05	鉄製品	スラッグ					5.4	3.4	1.7	
H36	第1面	SK27	鉄製品	スラッグ					5.5	5.2	2.0	
H37	第1面	SD05	鉄製品	スラッグ					6.0	4.5	2.3	
H38	第1面	SD05	鉄製品	スラッグ					7.7	7.3	3.4	

第7節 G地区

1. 遺構

【第1面】(第71~79図、写真図版94・95参照)

第1面は第1面で検出された第1-1面と第2面検出時に確認された江戸時代の造構の第1-2面に分かれる。第1-1面では礎石、溝、土坑、ピットなどが検出されている。江戸時代後期以降停車場線が敷設される第2次大戦頃までの造構が含まれている。調査区西部で検出された礎石もその頃まで使用された民家のものと考えられる。第1-2面では掘立柱建物跡、埋桶、土坑、ピットなどが検出されている。江戸時代前期から後期にわたる造構が含まれている。第1-1面の造構は近代に属するものが多く、以下では主として第1-2面の造構について取り上げる。

掘立柱建物跡

SB01は調査区西部で検出された掘立柱建物跡である。東西2間(2.5m)、南北2間(2.72m)の柱穴を検出した。柱穴は直径60~30cm程度で、深さは60~40cm程度と深い。柱穴内には平たい石を礎盤石として敷いている。敷石は上下2段になった状態で検出された柱穴が多く、建て替えが行われたと考えられる。柱根の直径は14cm程度である。柱穴から遺物は出土していないが、確実にSK35を切っていることから19世紀以降の造構と考えられる。

埋桶

平面円形の土坑は多数検出されている。木質が残存していたものはないが、そのほとんどが埋桶と考えられる。調査区の南半部で検出されたものが多く、南端部では特に掘り換えが頻繁になされている。(第29表参照)

埋甕

SK07は丹波焼甕(G5・G6)を据えた土坑で、染付磁器碗(G4)、軒丸瓦(G97)、軒平瓦(G98)が出土している。

土坑

平面が長方形、隅丸長方形、不整形のものなどがある。用途が不明のものが多いが、比較的遺物がまとまって出土したものは廐棄土坑と考えられる。(第30表参照)

井戸

SE02は蒸掘りの井戸である。直径1.5m、深さ1.8m以上である。埋土からは染付磁器など18世紀後半~19世紀前葉の遺物(G64~G87)が多量に出土している。

溝

SD01は南北方向に通る溝である。幅40cm、深さ12cmである。第1-1面の造構で、宅地の区画溝と考えられる。遺物は出土していない。

【第2面】(第71~79・80図、写真図版94・96参照)

第2面は第1面の下約20~30cm程度の整地土を除去して検出された。南北方向に向かう溝(SD05~07)のほか埋桶、土坑、井戸などが検出された。

埋桶

SK34は埋桶である。桶の直径は0.9mで、掘方の直径は1.2mである。掘目が1本引きの丹波焼播鉢の

破片、絵銭（G122）が出土している。SK35Cを切っている。

土 坑

SK35Cは長細い土坑で、幅50cm、深さ10cmである。SK34・SK35Aに切られている。埋土からは瀬戸美濃焼小皿（G90）、備前焼擂鉢（G91）、丹波焼擂鉢、石製硯（GS3）などが出土している。

井 戸

SE01は素掘りの井戸である。直径1.8m、深さ1.2m以上である。埋土からは土師器皿・羽釜、瓦質土器羽釜（G92）、丸瓦、平瓦などが出土している。

溝

南北方向の溝3条が検出されている。SD05は幅1.1m、深さ30cmである。中国製大口碗（G93）、青磁碗（G94）、備前焼甕・擂鉢などが出土している。SD06は当初の溝に対して東側に掘り直しが行われている。当初の溝は幅1.9m、掘り直しの溝は幅1.2mである。埋土からは土師器皿（G95）、備前焼擂鉢、青磁碗、軒平瓦（G103）などが出土している。SD07は北端では幅50cm、深さ8cmであるが、南部ではさらに掘りくぼめられ、幅1.5m、深さ30cmである。埋土からは土師器皿（G96）、須恵器甕、瓦質土器羽釜、皇宋通宝（GL23）などが出土している。

2. 遺 物

【第1面】（第81～89図、写真図版97～106参照）

遺物は18世紀のものが主体を占め、19世紀のものがそれに次ぎ、17世紀の遺物はわずかである。井戸、土坑からの出土が多く、埋桶から出土したものは少ない。

土 師 器

皿・灯明皿・焰烙・火消壺・蓋・火鉢・香炉・焼塙壺などが出土しているが、出土数は多くない。皿は柿釉の施されないもの（G31・G43・G44・G48・G60）と施されるもの（G26・G61・G62）がある。G31は全面に炭素が吸着している。G43は底部中央に穿孔がなされ、穿孔の周囲と口縁部に煤が付着している。灯明皿（G27・G32・G63）は全て柿釉が施されている。焰烙は外面に平行タタキを施すもの（G18）や把手をもつもの（G64）などがある。火鉢（G34）は平面矩形で、針金によって補修が行われている。香炉（G67）は三脚のひとつと底部中央の突起に穿孔を持ち、底部に「廿二文」の刻印をもつている。焼塙壺（G66）は外面に「泉湊伊織」の刻印をもつている。

磁 器

染付磁器のはかに染付青磁（G15）、色絵磁器（G39）、白磁（G16・G46・G55・G87）などがある。ほとんどが肥前系と考えられるが、わずかに瀬戸美濃焼（G3）、出石焼と考えられるもの（G88）がある。18・19世紀の遺構から少數出土したものが多いが、SK11からは17世紀中頃の碗・皿（G7～G16）が出土し、SE02から18世紀後半の碗・蓋（G73～G87）などがまとまって出土している。

陶 器

磁器に比べると出土量は少なく、食器として利用されるものは非常に少ない。碗は京・信楽系（G51）、瀬戸美濃焼（G71）がある。皿は肥前系（G21・G22・G57）、京・信楽系（G2・G35・G36・G72）がある。G21・G22の肥前系皿は砂目跡をもつていて、京・信楽系は灯明具としての利用が目立つ。擂鉢は丹波焼（G7・G8・G17・G20・G69）、備前焼（G19・G50）、堺系（G68・G70・G89）などがある。G69の丹波焼擂鉢は褐釉が施釉されている。G19の備前焼擂鉢は口縁部外面に簽書きによる窯印をもつていて、G89の堺系擂鉢は口縁部内面に刻印をもつていて、甕は丹波焼（G5・G6）がある。

瓦類

軒丸瓦、軒平瓦、軒棧瓦などがある。軒丸瓦（G97・G99・G100）はいずれも三巴文で、G99は圓線をもっている。軒平瓦（G98）は中心飾りが花文である。軒棧瓦は（G101・G102）は櫛唐草文である。

石製品

硯（GS1）、砥石（GS2）が出土している。硯の背面には長方形の抉りがある。

その他

GX1は骨角製の笄と考えられる。片側面が刃物状に尖り、横並びに3つの穿孔がなされている。

【第2面】（第87～89図、写真図版105・106参照）

出土した遺物は非常に少ない。

土師器

土師器皿（G95・G96）が出土している。いわゆるへそ皿である。

瓦質土器

瓦質土器羽釜（G92）が出土している。口縁部外間に段状の凹みをもっている。

磁器

天目碗（G93）、青磁碗（G94）が出土している。いずれも中国製と考えられる。G94の見込みにはスタンプ文が押されているが、文様は不鮮明で判別できない。

陶器

瀬戸美濃焼皿（G90）、備前焼搖鉢（G91）が出土している。

瓦類

軒平瓦（G103）が出土している。文様は中央に向かう波文で上下に界線をもっている。

石製品

硯（GS3）が出土している。背面に刻字があるが、判読できない。

【金属製品】（第101・102図、写真図版107参照）

金属製品は釘、煙管、錢貨がある。釘（G11）は頭巻釘である。「し」の字状に曲がっている。煙管（GI2～GI4）はいずれも吸い口である。GI2は小口に梢円形のくぼみを5個巡らし、さらに吸い口側に2条の沈線を巡らす。GI3は直線的な形状の吸い口である。GI4は小口が太く吸い口に向かって急激に細くなる形状である。

錢貨（GI5～GI23） 錢貨のうち、団化できたのは19枚である。本邦銭と渡米銭があり、渡来銭はすべて北宋銭で、皇宋通寶（GI23）が出土している。本邦銭のうち、GI6、GI9、GI14、GI20は、古寛永に分類される。GI7は文銭に分類される。GI8、GI10～GI13、GI15～GI19、GI21は3期の新寛永である。GI22は厚みがあり、片面に8条の放射状の文様が認められる。形状が不明である。

3. 小結

G地区は第1面の江戸時代には絵図によると敷地の通りに面した側に当たると考えられる。通り側の南半部に埋構が多く設けられ、頻繁に作り替えられていることが特徴的である。時期的には17世紀代の遺構は少なく、18世紀以降に遺構が増えている。第2面は遺構が少なく、溝・埋構・土坑・井戸などがわずかに検出されたのみである。溝・埋構・土坑が16世紀の遺構で、南北方向の溝3条（SD5～7）は区画溝と考えられる。井戸（SE01）は15世紀の遺構と考えられる。

第29表 G地区埋蔵一覧

遺構 (SK)	規模 (m) (現存)	深さ (m)	形状	位置	出土遺物	備考
10	1.1×(0.6)	0.6	円形	東部	束付鉢器 (肥前) 瓶:18C後半	
12	1.5×1.4	0.6	円形	東部	施釉陶器 (肥前) 瓶、束付鉢器 (肥前) 瓶・皿・钵、施釉陶器 (分流) 鍋等、施釉陶器 (分流) 瓶等;18世紀後半	SK13を切る、SK14に切られる
18	0.95×0.85	0.35	円形	東部		
23	1.0×0.95	0.35	円形	中央		
26	1.15×(0.8)	0.5	円形	中央	束付鉢器 (肥前) 瓶、施釉陶器 (肥前) 瓶、施釉陶器 (分流) 瓶等、施釉陶器 (分流) 瓶等;18C中葉~19C	
28A	0.7×(0.5)	0.5	円形	中央	G44~47	SK28Bを切る
28B	(0.7) × (0.2)	0.75	円形	中央		SK28Aに切られる
29	0.95×0.95	0.5	円形	中央	G48~54	
31	0.9×0.9	0.3	円形	西部	G55~G16	SK39Bを切る
32	1.1×1.0	0.35	円形	西部	束付鉢器 (肥前) 瓶、白磁 (肥前) 盆、施釉陶器 (丹波) 瓶等、施釉陶器 (信州) 瓶等、施釉陶器 (信州) 瓶等、上部茎脚底:18C	
33	1.1×0.9	0.25	円形	西部		
35A	1.15×(0.5)	0.7	円形	西部	施釉陶器 (肥前) 瓶等、束付鉢器 (肥前) 瓶、青磁底:18C	SK35Bを切る
35B	1.4×(1.2)	0.5	円形	西部	施釉陶器 (肥前) 瓶等、施釉陶器 (肥前) 瓶、束付鉢器 (肥前) 瓶、施釉陶器 (肥前) 瓶、上部茎脚底等、瓶:18C	SK35Aに切られる
38A	1.3×(0.6)	0.9	円形	中央		SK38Bを切る、SK46に切られる
38B	1.0×(0.7)	0.5	円形	中央		SK38Aに切られる
39A	1.3×1.2	0.4	円形	西部		SK39Bに切られる
39B	1.1×1.1	0.6	円形	西部	束付鉢器 (肥前) 瓶、施釉陶器 (丹波) 瓶等、軒丸瓦・平瓦:18C	SK39Aに切られる、SK39Aを切る
40	1.0×(0.4)	0.9	円形	西部	G56	SK43とセット
43	(0.7) × (0.2)	0.9	円形	西部	実土台相器 (肥前) 灯明器、瓦質土器片:18C	SK40とセット
44	1.05×0.95	0.4	円形	中央		
52B	(1.3) × (0.8)	0.75	円形	中央		SK52Bに切られる
52F	(1.6) × (1.1)	0.7	円形	中央	束付鉢器 (肥前) 瓶、施釉陶器 (肥戸美濃) 瓶、施釉陶器 (肥前) 瓶、軒丸瓦:17~18C	SK52Hに切られる、SK52Gを切る
53C	(0.4) × (0.3)	0.9	円形	中央		SK52Fに切られる

第30表 G地区土坑一覧

遺構 (SK)	規模 (m) (現存)	深さ (m)	形状	位置	出土遺物	備考
3	1.4×(1.4)	0.3	隅丸長方形	東部	G1	
4	1.2×0.7	0.45	長方形	中央	G2・3・GS1	SK22・27を切る
11	1.05×1.5	0.5	隅丸長方形	東部	G7~16	
13	(1.8) × 1.5	0.2	長方形	東部	G17	SK12に切られる
14	0.9×(0.4)	0.3		東部		SK12を切る
15	(2.7) × 2.3	0.2	不規形	東部	G18~22	復興の遺構
16	(0.9) × 0.8	0.4	隅丸長方形	東部	G24~29・GX1	SK15を切る
17	0.9×(0.7)	0.3	隅丸長方形	東部	G30	
20	1.2×0.65	0.35	長方形	中央	G31~42	SK21を切る
21	1.4×0.9	0.3	楕円形	中央	施釉陶器 (丹波) 瓶、土器春日・埴燒	SK20Aに切られる
22	1.5×0.9	0.15	楕円形	中央		SK27を切る、被熱を受けている
23	2.4×(1.2)	0.35	円形	東部	G43~GS2	
27	1.0×1.0	0.3	方形	中央	六邊錐、施釉陶器片、上輪部特徴底:18C	SK32に切られる、中央部がわずかに円形にくぼむ
42	0.6×(0.8)	0.55	不規形	西部	束付鉢器 (肥前) 瓶:18C	SK38を切る
49	1.6×(0.8)	0.35	不規形	中央	G57~59・100~104	

第31表 G地区遺物觀察表1

土器・陶磁器						成型・調整法の特徴・文様	備考	
番号	出土場所	種別	器種	計量 (cm)				
				口径	器高	底径		
G1	SK03	陶器	小杯	(3.7)	4.5	3.05	口縁端部から内面にかけて口縫を施施、高台に1ヶ所穿孔	京・備楽系
G2	SK04	陶器	小瓶	6.8	1.35	2.8	底部から外縁半寸は施施けびなし、口縁端部から内面にかけて底輪を施施、内面に直路2ヶ所残存(本室は3ヶ所と推定される)	京・備楽系
G3	SK04	乗付	小杯	7.3	3.45	2.75	蓋付けは露施	肥前系
G4	SK07	乗付	瓶	(10.3)	5.75	(4.3)	蓋付けは露施、蓋付青	
G5	SK07	陶器	甕	41.7	(9.3)		内外面とも口縁ナデ、口縁端部は施施覆面、体部内面中筋~下筋はカクルム行差	丹波
G6	SK07	陶器	甕	(35.9)	23.05		内面ととも口縁ナデ、底部外周はナデ、外周は施施覆面、体部内面中筋~下筋はカクルム行差	丹波
G7	SK11	陶器	罐体	(38.4)	14.05	(16.5)	内面ととも口縁ナデ、底部外周はナデ、外周は施施覆面、体部内面中筋~下筋はカクルム行差	丹波
G8	SK11	陶器	罐体	(27.1)	10.8	(12.4)	内面ととも口縁ナデ、底部外周はナデ、外周は施施覆面、体部内面中筋~下筋はカクルム行差	丹波
G9	SK11	乗付	瓶	(10.0)	(6.2)		内面ととも口縁ナデ、底部外周はナデ、外周は施施覆面、体部内面中筋~下筋はカクルム行差	肥前系
G10	SK11	乗付	瓶	(9.6)	(5.15)		内面ととも口縁ナデ、底部外周はナデ、外周は施施覆面、体部内面中筋~下筋はカクルム行差	肥前系
G11	SK11	乗付	瓶	(2.6)	1.3		蓋付けは露施、蓋付青	肥前系
G12	SK11	乗付	盖	13.4	3.5		底付けは露施、砂付青	肥前系
G13	SK11	乗付	瓶	(2.95)	(4.9)		蓋付けは露施、砂付青	肥前系
G14	SK11	乗付	盖	(2.0)	4.55		蓋付けは露施、砂付青	肥前系
G15	SK11	乗付青瓶	瓶	(3.3)	(7.6)		蓋付けは露施、見込みは他の口縁部と、側面と部分の縫合部を畫刷	肥前系
G16	SK11	白磁	瓶	(12.6)	2.6	(7.5)	蓋付けは露施、見込みは他の口縁部と、側面と部分の縫合部を畫刷	肥前系
G17	SK13	陶器	罐体	(30.7)	14.8	(14.0)	体部内面下筋にはカクルム、縁目は7本1単位の筋目	丹波
G18	SK15	土師器	焰塔	(26.7)	(7.1)		体部内面・口縁外周にはヨコナデ、底部外周は乗付タキのちナデ、底部は内外面ともナデ	
G19	SK15	陶器	罐体	(4.6)			口縁端部外周に底筋あり	肥前系
G20	SK15	陶器	罐体	(5.35)			体部外周はヨオサエ、縁目は5本1単位の筋目	丹波
G21	SK15	陶器	瓶	(3.25)		(6.2)	底部外周・体部外周下筋は露施、褐色は灰白色、見込みに砂付青あり	肥前系
G22	SK15	陶器	盖	(2.6)	4.75		底部外周中筋~上筋には露施、褐色は灰白色、見込みに砂付青4ヶ所	肥前系
G23	SK15	乗付	盖	13.95	4.2	8.95	底部外周は露施で施して縫合の目施剥が	肥前系
G24	SK16	土師器	大煎寮	21.0	(19.6)		内外面ともヨコナデ。体部内面中筋~下筋は指鉛痕あり	
G25	SK16	土師器	大煎寮	21.6	(19.7)		内面・体部外周上部はヨコナデ、体部内面下部は指鉛痕あり、体部外周中筋~下筋は露施	
G26	SK16	土師器	盖	6.1	1.05	3.45	底部外周は露施外見あり、内面・体部外周は砂付青、口縁部は保付青	
G27	SK16	土師器	灯明皿	(5.7)	0.9	(3.2)	底部外周は露施外見あり、内面・口縁部外周は砂付青	
G28	SK16	乗付	瓶	(8.45)	5.0	3.7	蓋付けは露施	肥前系
G29	SK16	乗付	瓶	(16.7)	8.05	5.5	蓋付けは露施、口縁部周間に鉄錆、ガラフ模様があり、底部外周中央に朱書きあり	肥前系
G30	SK17	土師器	瓶	(23.5)	(3.65)		天井部外周はヨコナデ、底部内面は一方向カツナ、底部外周はナデ。前面に施鉛痕	
G31	SK20	十輪器	瓶	(13.2)	2.1		口縁部内面はヨコナデ、底部内面は一方向カツナ、底部外周はナデ。前面に施鉛痕	
G32	SK20	土師器	灯明皿	5.6	0.8	3.1	底部外周は露施外見あり、口縁は砂付、口縁部に露施	
G33	SK20	土師器	焰塔	(28.9)	(4.9)		内面・口縁外周にはヨコナデ、体部外周下筋に露施、口縁部は保付青・砂付青	
G34	SK20	土師器	火鉢	-2025.5	9.3		底部外周には露施外見あり、底部内面はヨコナデ、体部外周はナデ、底部内面に2ヶ所・側面に1ヶ所穿孔あり、側面の穿孔には露施錆が付いている	
G35	SK20	陶器	盖	10.65	2.6	3.7	内面・口縁外周には露施外見あり、底部外周下筋に露施、保付青・砂付青	京・備楽系
G36	SK20	陶器	灯明皿	11.8	2.6	4.4	内面・口縁外周には露施外見あり、底部外周・底部は露施、口縁部は砂付青	京・信楽系
G37	SK20	陶器	十輪?	8.7	12.1	7.9	内面・口縁外周には露施外見あり、底部外周・底部は露施、保付青・砂付青	
G38	SK20	陶器	瓶	8.5	3.25	4.1	底部外周は露施、施鉛は深窓に薄く、袖色不明	
G39	SK20	色絵紙器	鉢	13.85	8.75	7.6	蓋付けは露施、施鉛は白袖色露形	肥前系
G40	SK20	乗付	瓶	(8.7)	4.65	4.1	蓋付けは露施、施鉛は白袖色露形	肥前系
G41	SK20	乗付	瓶	8.65	2.5	2.5	つまみ露施は露施	肥前系
G42	SK20	乗付	花器	1.7	7.45	2.6	蓋付けは露施、砂付青	肥前系
G43	SK25	土師器	瓶	12.2	3.05		内面(口ナデ)、口縁部内面はヨコナデ、底部外周はナデ、底部外周はヨビヨサエのチナデ、底部中央に穿孔あり、口縁部内面はヨビヨサエのチナデ、底部中央に穿孔あり、口縁部内面はヨビヨサエのチナデ	
G44	SK28	土師器	瓶	(6.2)	1.3	2.5	底部外周は露施外見あり、口縁部に露施	
G45	SK28	陶器	瓶	(17.6)	(6.9)		底部外周は露施、裏施は櫻模	
G46	SK28	白磁	瓶	8.25	2.4	3.4	底部外周は露施、見込みに露施の目施剥ぎ・砂付青	肥前系
G47	SK28	乗付	瓶	7.2	6.25	3.5	蓋付けは露施	肥前系
G48	SK29	土師器	瓶	10.35	2.1		口縁部内面はヨコナデ、底部内面はヨコナデ、底部外周はスス付青	
G49	SK29	土師器	焰塔	(30.0)	(5.8)		内面(口ナデ)、口縁部内面はヨコナデ、底部外周はナデ、底部外周はヨビヨサエのチナデ、底部中央に穿孔あり、口縁部内面はヨビヨサエのチナデ、底部中央に穿孔あり、口縁部内面はヨビヨサエのチナデ	
G50	SK29	陶器	罐体	(28.9)	(10.8)		口縁部外周はヨコナデ、底部外周は板ナデ、7本1単位の縁目	肥前系?
G51	SK29	陶器	瓶	(9.9)	4.7	4.1	底部外周は露施、施鉛は保付、露施は保付、露施が認められる	肥前系
G52	SK29	乗付	瓶	10.9	5.15	3.9	蓋付けは露施	肥前系
G53	SK29	乗付	瓶	12.8	4.95	4.75	蓋付けは露施、見込みは板の口縁剥ぎ・砂付青	肥前系
G54	SK29	乗付	瓶	(10.2)	3.2	4.55	つまみ露施は露施	肥前系

第32表 G地区遺物観察表2

番号	出土場所	種別	器種	量 (cm)			成型・調整方法の特徴・文様	備考
				口径	器高	底径		
G55 SK31	白磁	碗	(13.1)	4.9	4.3	縁付きは露胎、見込みは他の目皿割ぎ		肥前系
G56 SK40	染付	串	(11.9)	3.4		かえりー山津部内側は露胎		肥前系
G57 SK49	陶器	皿	(11.5)	3.2	4.0	底部外周下位～辰部外側は露胎、見込みは他の目皿割ぎ、施釉は緑がかった灰釉		肥前系
G58 SK49	串付	碗	9.5	5.3	4.3	縁付きは露胎・砂付窓		肥前系
G59 SK49	丸付	碗	(9.8)	5.15	3.95	縁付きは露胎・砂付窓		肥前系
G60 SE20	十脚器	皿	6.7	1.3	3.3	底部外周は露胎で切り、口縁部に露胎		
G61 SE20	土脚器	皿	6.1	1.25	3.3	底部外周は露胎で切り、内側～上縁部外側に柿柄、口縁部に露胎		
G62 SE20	土脚器	皿	7.4	1.8	3.5	底部外周は露胎で切り、全面に柿柄、山津部に露胎者		
G63 SE20	土脚器	灯明皿	6.5	1.0	3.5	底部外周は露胎で切り、全面に柿柄、山津部に露胎者		
G64 SE20	土脚器	鍋造	(31.9)	(4.8)		内面～底部外周はヨコナデ、底部外周は板ナデ、口縁部外周に把手状の突起が付く		
G65 S602	上脚器	袖焼	(27.0)	(4.3)		内面～口縁部外周はヨコナデ、底部外周は板ナデ		
G66 SK02	上脚器	施塗	(5.1)	7.7	5.0	切り口、体部外周はヨコナデ、底部外周はナデ、体部内側に線上の継ぎ目を残す、柄付「巻拂伊豫」		
G67 SE02	土脚器	香炉?	5.9	5.55	5.0	体部外周はヨコナデ、底部外周に刻印「川二文」		
G68 SE02	陶器	盤	(34.6)	(11.05)		内外面とも口回りナデ、指紋は9本1位筋の觸目		唐系
G69 SE02	陶器	盤	(25.9)	(4.35)		底部外周は露胎でタラクリ、露胎は密な網目、施釉は全面に柿柄		丹波
G70 SE02	陶器	搖籃		(4.0)	15.2	底部外周はヨコナデ。底部外周は不調整・難紛付着、見込みの露胎は7本1段の觸目		唐系
G71 SK0W	陶器	皿	8.7	6.0	3.7	両面は露胎、焼結、青色釉料による粗面強灰釉を施釉		糸戸美濃
G72 SE02	陶器	皿	(11.0)	2.1	(4.3)	内面～口縁部外周は灰胎を施釉、体部外周～底辺は四絞ヘラケズリ～齊脇、底部外周に露胎		京信楽系
G73 SE02	丸付	碗	(13.3)	7.2	(7.65)	縁付きは露胎		
G74 SE02	丸付	碗	(10.0)	(5.2)				
G75 SE02	丸付	碗	(7.75)	5.45	2.8	縁付きは露胎		
G76 SE02	丸付	碗	8.9	5.55	3.25	縁付きは露胎		
G77 SE02	丸付	碗	(9.45)	5.4	4.0	縁付きは露胎・砂付窓		
G78 SE02	丸付	碗	(9.8)	5.4	4.0	縁付きは露胎・砂付窓、見込みは砂付窓		
G79 SE02	丸付	碗	(10.0)	5.0	3.9	縁付きは露胎		
G80 SE02	丸付	碗	(7.7)	(3.65)				
G81 SK02	丸付	碗	(7.6)	6.7	4.15	縁付きは露胎		
G82 SK02	丸付	皿	(9.35)	3.0		つまみ頭部は露胎		
G83 SK02	丸付	皿	(8.1)	2.4		つまみ頭部は露胎		
G84 SE02	丸付	皿	10.9	2.9		つまみ頭部は露胎		
G85 SE02	丸付	皿	(8.7)	2.85		つまみ頭部は露胎		肥前系
G86 SK02	丸付	皿	6.6	0.85		かえり尖端・縦葉内側は露胎		肥前系
G87 SK02	白磁	碗	(9.5)	6.1	4.8	縁付きは露胎		肥前系
G88 SD02	丸付	皿	(9.60)	2.8		つまみ頭部は露胎		出石?
G89 SD02	陶器	盤	(33.0)	(5.2)		内外面とも口回りナデ。露胎は8本1位筋の觸目、口縁部内側に刻印「上」		唐系
G90 SK35	施釉陶器	皿	(9.0)	2.15	(5.25)	底部外周は露胎、施釉は白高した絆縫		美濃
G91 SK35	陶器	盤	(36.35)	(4.3)		内外面とも口回りナデ		備前
G92 SD01	瓦質土器	四足	(27.25)	(5.95)		休部内面はナデ、口縁部外周はヨコハケのちヨコナデ、口縁部外周はヨコナデ、体部外周はヘラケズリ		
G93 SD00	陶器	天井板		(4.2)	4.0	底部外周は口～底部外周は露胎、露胎は焼結		中国製?
G94 SD05	食器	碗		(3.8)	(4.5)	高台内～縁付きは露胎、見込みは不整明なスタンプ		中国製
G95 SD06	上脚器	皿	8.05	1.45		内面～口縁部外周はヨコナデ、底部外周はナデ		
G96 SD07	上脚器	皿	(7.7)	(1.1)		内面～口縁部外周はヨコナデ、底部外周はナデ		
G97 SK07	瓦	軒丸瓦				復元凸面15.3cm、復元高支脚13		
G98 SK07	瓦	軒平瓦				復元凸面23.8cm		
G99 SK39	瓦	軒丸瓦	瓦面14.6			瓦当面に輪砂付跡、跡文16個、瓦当裏面はナデ		
G100 SK49	瓦	軒丸瓦	瓦面14.4			瓦13個、瓦当裏面はナデ、丸瓦凹面にはコビキ3、丸瓦凸面には複方向のナデ		
G101 SK49	瓦	軒造瓦	瓦面9.4.1			瓦当裏面は複方向のナデ、平丸軒面にはナデ、平丸凸面には複方向のナデ		
G102 SD02	瓦	軒造瓦	瓦面9.3.2	企高19.6		平丸軒面はナデ、瓦当裏面は複方向のナデ		
G103 SD06	瓦	軒子瓦	瓦面9.3.9			平丸軒面は複方向のナデ、瓦当裏面は複方向のナデ		

第33表 G地区遺物観察表 3

石製品											
番号	出土場所	種別	器種	法 量 (cm)			成型・調整技術の特徴・文様				備 考
				長さ	幅	厚さ					
GS1	SK04	鐵		15.3	7.9	2.6	背面に長方形の抉りがある				粘板岩製
GS2	SK25	砥石		9.25	6.0	0.85					砂岩製
GS3	SK35	鐵		13.1	6.7	1.1	背面に刻字がある				砂岩製

その他											
番号	出土場所	種別	器種	法 量 (cm)			成形・調整技術の特徴・文様				備 考
				長さ	幅	厚さ					
GX1	SK16	舟角器	笄	(6.16)	1.3	0.3	穿孔が3ヶ所ある				

金属製品												
銘古書 番 号	地 区	土 层 面	遺構名	種 别	品 目	銘 標	初調年 鉄造年	時 代	法 量 (cm)			備 考
									長さ	幅	厚さ	
GI1			飲食店	鉄	頭飾				7.0	2.9	1.3	
GI2	1	第二面 包含層	調製品	鉄	口				6.1	1.1	1.2	
GI3	3区	第二面 包含層	調製品	鉄	口				6.6	0.9	1.0	
GI4	3区	第二面 包含層	調製品	鉄	口				4.7	1.8	1.8	
GI5	1	第一面	pit01	鉄製品	鉄質	十錢	37	明治	1.8	1.8	0.2	
GI6	4区		SD07	鉄製品	鉄質	寛永通寶	古		2.5	2.4	0.3	墨上
GI7	3区	第二面 包含層	調製品	鉄製	寛永通寶	文			2.5	2.5	0.3	
GI8	4		SE02	調製品	鉄質	寛永通寶	新		2.3	2.3	0.3	墨上
GI9	4区		SD102	調製品	鉄質	寛永通寶	古		2.5	2.5	0.1	
GI10	3	第一面 包含層	調製品	鉄質	寛永通寶	新			2.2	2.1	0.3	
GI11	3区	第一面 包含層	調製品	鉄質	寛永通寶	新			2.3	2.3	0.1	
GI12	3区	第一面 包含層	調製品	鉄質	寛永通寶	新			2.2	2.2	0.1	
GI13	1	第二面 包含層	調製品	鉄質	寛永通寶	新			2.3	2.3	0.3	
GI14	1	第二面 包含層	調製品	鉄質	寛永通寶	古			2.4	2.4	0.3	
GI15	3	第二面 包含層	調製品	鉄質	寛永通寶	古			2.3	2.3	0.3	
GI16	4	第二面 包含層	調製品	鉄質	寛永通寶	新			2.4	2.4	0.3	
GI17	3区	第二面 包含層	調製品	鉄質	寛永通寶	新			2.3	2.3	0.3	
GI18	3区	第二面 包含層	調製品	鉄質	寛永通寶	新			2.4	2.5	0.3	
GI19	3区	第二面 包含層	調製品	鉄質	寛永通寶	新			2.4	2.4	0.3	
GI20			SK31	調製品	鉄質	寛永通寶	古		2.4	2.4	0.3	墨上
GI21	3区	第一面 包含層	調製品	鉄質	寛永通寶	新			2.4	2.4	0.1	
GI22	4区		SK34	調製品	鉄質?	不明			3.3	3.2	1.0	墨上
GI23	4区		SD07	調製品	鉄質	寛永通寶	1038	北宋	2.4	2.4	0.3	墨上

第8節 B地区

1. 遺構

B地区は新町筋に位置し、大阪道との交点に当たる。道路下の水路が幅2mと広くその水路を保全するため、水路部分が未調査となり、東西を2分割にして調査することになった。B地区の東側はE地区、西側はJ地区、南側はF地区である。

【第1面】(第91~93図、写真図版108・109参照)

柱穴・埋桶・土坑・溝などが検出された。

柱穴

柱穴は東側に比較的集中して検出された。おおむね調査区の中ほどに東西方向に並んで検出される特徴が認められた。直径30~50cmで平面円形ないし梢円形のものが多い。

埋桶

SK12がある。確実に埋桶とわかるものは少ないが、この遺構は桶の痕跡が残るものである。大半が壁に接して検出されたため全容は不明である。

土坑

調査区には大小の土坑がある。方形を呈するSK5や円形のSK101・16・19・22などである。また、SK10・11・15は大型で調査区の北壁際に見つかった。内部には瓦などが投棄され、軍用道路接続以前の片付け層と考えられる。遺物が出土した土坑にはSK5・6・10などがある。

SK5からは土製品のミニチュア擂鉢B1、磁器染付碗B2、同仏花器B3、同皿B4、SK6からは磁器碗B5、同平仄B6、白磁壺蓋B7・同壺B8、染付磁器碗B9・鉢B11、壺B10、SK10からは土部器皿B12・同火消壺B13、唐津焼皿B14・同鉢B19・初期伊万里皿B15・17・磁器染付蓋B16、丹波焼擂鉢B18が出土した。

溝

調査区西端で石組溝を検出した。東側壁は候地石を並べたもので、南北方向に流れる溝である。

【第2面】(第91~93図、写真図版110参照)

第2面は地山面で検出した。調査の結果、稠密に遺構が検出され、東側は柱穴が密集するなど屋敷地の施設に関わる土地利用が確認された。検出された遺構には溝・井戸・柱穴・土坑などがある。

溝

近世石組溝の下に溝SD4~6が南北方向に検出された。ただし、調査区の幅が狭いため正確な方向は不明である。

規模はSD4が幅1.3m、深さ0.5m、SD5が幅2.5m、深さ0.6m、SD6が幅2.5m、深さ0.3mの規模を測る。中からは16世紀代の遺物が出土しており、SD4は16世紀末の火災整理事地で埋められている。

これら3本の溝は屋敷地などの地割境に設けられた区画溝と推定されるが、直上に第1面石組溝が検出されたことからすると、近世に至っても地割が存続した可能性がある。大溝筋など大きな構造物によって制約を受けた周辺の土地利用は近世にいたっても、有岡城期の構造を完全に否定できなかったことを物語っている。

一方、東側で検出されたSD 3は幅0.7~1.5m、深さ0.3mの浅い溝で、南側で屈曲する。溝内に柱穴が多数切り込まれることから短期間に機能した溝と推定される。

井 戸

調査区中央付近でSE 1・2、西端でSE 3が検出された。SE 1・2は切り合うが前後関係は不明である。北側がSE 1、南側がSE 2となる。両方とも素掘り井戸で、平面形はおおむね楕円形を呈している。2基とも直径は1m前後を測る。内部からは土師器皿B38・B39・白磁皿B40・中国製染付碗B41・黒色土器碗B42、丸瓦B108~B110、鉄滓B114が出土した。中世の井戸である。

SE 3は掘方の直径2m前後で平面円形の大型の井戸である。この井戸からは土師器皿B43・瓦質土器羽釜B44・備前焼擂鉢B45・B46・軒丸瓦B103~B106・丸瓦B107平瓦B111・B112が出土し、時期は16世紀代と考えられる。

土 坑

SK 9・8・27などがある。多くが小型であるが廃棄土坑である。SK 9からは丹波焼擂鉢B65、SK 8からは丹波焼擂鉢B66、SK27からは丹波焼擂鉢B69が出土している。両方とも16世紀代のものである。

柱 穴

全体的に柱穴が検出されたが特に東側には柱穴が稠密に存在する。柱穴はおおむね平面円形ないし楕円形で直径30~40cm前後のものである。特に、図示したP55・72・96・105・107・108などの柱穴には底に根石を据えていた。そのほか、P84からは唐津焼碗B67、備前焼盤B68が出土した。

2. 遺 物

【第1面】(第94・95図、図版111~113参照)

土 師 器

土師器には皿・堀・焜炉・火消し壺・同蓋などがある。

土師器皿B12は厚手の製品で底部に指頭痕跡を顕著に残す個体である。堀にはGタイプのB34がある。焜炉B36は前方に窓を持ち、底部は脚が付く。内面には受け部の突起が見られる。

火消し壺B13・同蓋B35がある。これらは胞衣壺として転用されたものの残欠の可能性が大きい。

磁 器

磁器には肥前系磁器染付・青磁・白磁・瀬戸焼皿がある。肥前系磁器は染付碗B2・B5・B9、皿B4・B29・鉢B11・蓋B10・B16・仏花器B3がある。碗はB2が端反碗、B9が広東碗である。B4は薄手の皿でB29は大振りの皿である。

白磁には壺B8・33・煮蓋B7がある。白濁色の薄手の個体でB8は底部片、B33は口縁部から肩部にかけての個体である。蓋は身と同質で受け部を持ち背の高くなる個体である。

陶 器

陶器には関西系陶器・唐津焼・瀬戸焼・丹波焼がある。

唐津焼は皿B14・B30・B31・鉢B19がある。関西系陶器は碗B20~B25、皿B37・平仄B6などがある。瀬戸焼皿B32は馬の目皿と呼ばれる個体で19世紀に生産された製品である。

丹波焼壺B99は外側に鉄釉を掛けたもので肩部に2条の波状文を施す。口縁部は外側に面を持ち、くの字に外反させておれる。

土 製 品

土製品にはミニチュアと面子がある。ミニチュアには鍋B1がある。面子にはB51・B52の2点がある。

【第2面】(第96・97図、写真図版111~117参照)

第2面は井戸や溝を中心に遺物が出土している。

土 師 器

土師器皿・羽釜・鉢・不明品がある。

皿は京都系土師器B38・B39・B43・B47・B55・B56・B70~B76がある。このほか、B77は径4.55cmの小型品で手づくねで成型する。B53は用途不明であるが蜀台などの高台と考えられる。羽釜はB44・B50・B78・B80の4点がある。いずれも有段羽釜でB78・B80は内面に板ナデ痕跡を残す。鉢B68は体部中位に沈線を施す。

瓦器・瓦質土器

瓦質土器には羽釜B61・B79・香炉B81がある。羽釜はいずれも有段羽釜で薄つくりのものが多いが、B50は小型で厚手のものである。香炉は外面に花弁のスタンプ文を施す。

磁 器

中国産の磁器染付・白磁・青磁と初期伊万里がある。

中国産には染付碗B41・B48・B93・皿B94、白磁皿にはB40・B90などがある。B41は碗E類である。

初期伊万里には碗B91・B92、皿B15・B96がある。

陶 器

陶器には備前焼・丹波焼・唐津・瀬戸美濃焼などがある。

備前焼には描鉢B45・B46・B54・B60・B63・B64・壺B98・盤B68がある。描鉢には口縁部端面を外上に持つもの(B60)、上方に拡張するもの(B45・B46・B54)から、大きく上方に拡張する(B63・B64)がある。B63・64タイプが最も新しく15世紀後半の遺物である。壺は小型のもので口縁部の玉縁が丸くやや大きい。

丹波焼描鉢B18・B65・B66・B69・B82~B86がある。これらは単目が1本描きのものと、樹状のものがある。1本描きのもので口縁内面に凹線ないし沈線を持つもの(B83)と、持たないもの(B65・B66・B82・B84)がある。持たないものは口縁端部が丸ないし尖る。櫛描きのもの(B69・B85・B86)は密に櫛目を施すが、やはり口縁内面に段ないし凹線状の窪みが観察される。端部はやや尖り気味に見える。B18は口縁部を欠くが1本描きの単目で沈線を持つものである。後者のタイプと推定される。

唐津焼碗B67・B88・B95、皿B14・B31、青茶碗B97がある。B97は灰色の釉をかけるもので外面に記号化された草花文を描く。

瀬戸美濃焼皿B30・B87・B89・天目碗B49・B58・B59、青磁碗B57がある。

【瓦 類】(第98~100図、写真図版118~119参照)

第1面の瓦には軒丸瓦B100・軒平瓦B101・雁振瓦B102がある。

第2面の瓦には軒丸瓦B103~B106・丸瓦B107~B110・平瓦B111~B113がある。いずれも技法・焼成が近似したもので、井戸に投棄されたものが多い。

【金属製品】(第100・101図、写真図版120・121参照)

金属製品は、銭貨、釘、鉄滓が出土した。

銭 貨

銭貨のうち、図化できたのは28枚である。本邦銭と渡来銭があり、渡来銭はすべて北宋銭である。治平元寶BI19・BI27、淳化元寶BI20、元祐通寶BI26が出土している。

本邦銭はすべて寛永通寶である。BI1・BI4・BI6・BI7・BI9・BI11・BI13・BI15・BI16・BI21・BI22・BI25は古寛永に分類される。BI2・I14・I23は2期の文銭である。BI28は鉄錢である。

釘 類

図化したものは3点である。いずれも頭巻釘である。鉄滓BI32は範形滓である。

【石 製 品】(第102図、写真図版119参照)

BS1は砾石である、図示した面を顕著に使用し、摩滅のために図の下部が磨り減っている。BS2は一石五倫塔である、花崗岩製で空輪を欠く残欠である。BS3は地蔵尊を陽刻した石仏である。

3. 小 結

第1面の江戸時代～近代と第2面の中世・室町時代～江戸初期の2面の遺構を調査した。

第1面からは土坑・柱穴や石組溝を検出した。SK10のように瓦を大量に投棄した土坑などが見つかっており、屋敷の建物に関する遺構は検出されなかった。調査区周辺は屋敷地の前庭に該当すると考えられる。

第2面では柱穴・土坑・溝・井戸などが検出され、屋敷地に関連する遺構が稠密に検出された。また、井戸2・3付近で検出された鉄滓・焼土などの存在から鍛冶施設が付近に存在することも指摘されている。そのほか南側のF地区に比べやや遺構の密度が高いため屋敷の中心は北側にあったことが推測される。

区画溝はSD5・6がF地区に続く区画溝で、J地区の堀1からは約50mの距離、さらに、SD3は調査区の東寄りにあってSD5・6の東約13mにある。狭い範囲であるため各溝の軸方位は不明な部分が多いが、いずれも調査区に直行するようで、J地区的SD1・2・4～7とは方向が異なるようである。堀1の軸方向に近いことからすると有岡城期の区画溝の可能性が高い。

井戸は重なって検出されたSE1・2と西端のSE3がある。底は検出していないがいずれも屋敷内の井戸である。

第34表 B地区遺物観察表1

（1面）								
土器・陶磁器								
番号	出土地点	種類	器種	測定値 (cm)			成製・調整技法の特徴・文様	備考
				口径	器高	底径		
B1	SK05	上野島	ミニチュア	6.05	2.10		壓押し成型、無	
B2	SK06	桑付	碗	10.45	5.45	4.15	外面部装飾、内底見込み	肥前系
B3	SK05	桑付縁器	花器	(1.90)	13.10	4.35	外面部装飾花文、下子垂弁文	肥前系
B4	SK05	桑付縁器	皿	(1.80)	8.45		内底面装飾花文、侏乳彌弁文	肥前系
B5	SK06	昭和	碗	(5.00)	(4.70)		削りだし磨合	肥前系
B6	SK06	廣川米透造	平仄	(5.60)	4.40	(3.75)	手づくね	
B7	SK06	白磁	瓶	(7.10)	8.65		かえりを押つ	
B8	SK06	白磁	瓶	(9.80)	(4.45)		器壁薄い、両台外反	
B9	SK06	桑付縁器	碗	(11.35)	6.70	(6.00)	底広続、外面部装飾文、内底見込みに島足文、口縁部に加織	肥前系
B10	SK06	桑付縁器	蓋	5.70	1.10		天井部に丸花文と島足	肥前系
B11	SK06	桑付縁器	鉢	(12.20)	(6.03)		外面部文、内底面解説	
B12	SK10	上野器	皿	(13.20)	2.70		手の型器、内底に指印揉撲痕	灯明皿
B13	SK10	土師器	火消器		(4.35)		底部凹	火消器
B14	SK10	廣津造	皿	(12.30)	2.95	(1.50)	削りだし両台、高台周辺露筋	
B15	SK10	桑付	皿		(2.00)	(4.90)	内底に草花文	
B16	SK10	桑付	皿	(6.90)	(2.00)		人井形の字文と雲文、口縁部四方彫	
B17	SK10	桑付縁器	皿	(15.80)	3.39	(5.20)	内底装飾、口縁部を削り伏させる	初期伊万里
B18	SK10	丹波造	盤		(10.46)	(13.80)	一本堀・即日、口縁部に底跡彌蒙	
B19	SK27	唐津造	鉢	(37.60)	(8.70)		外底に刻記を施す、口縁部を外反させる	
B20	包含器	青磁染付	碗	9.10	5.00	3.65	内底に花文、台面内角瘤	関西系
B21	包含器	青磁染付	瓶	(9.30)	5.50	(3.50)	内底に花文、両台内角瘤	関西系
B22	包含器	青磁染付	瓶	9.05	4.85	3.60	内底に花文、高台内角瘤	関西系
B23	包含器	青磁染付	碗	(9.30)	4.85	(4.30)	内底に花文、両台内角瘤	関西系
B24	包含器	施釉陶器	碗	8.40	5.55	3.40	内底露筋と	関西系
B25	包含器	施釉陶器	碗	(8.10)	5.60	3.50	外面部露筋	関西系
B26	包含器	青磁染付	瓶	(6.70)	3.80	(2.80)	外底に人物・風景画・内底部本文様、口縁部外反	肥前系
B27	包含器	施釉陶器	皿	(12.00)	3.35	(4.60)	口縁部に輪花を表現	
B28	包含器	青磁染付	皿	(8.65)	3.06		内底花文	
B29	包含器	桑付縁器	皿	20.20	3.10	13.60	内底底に風景画、外底アラベスク文	
B30	包含器	青磁染付	皿	(12.40)	3.10	(6.95)	丸皿、裏に青色斑点を施す、高台周辺露筋	
B31	包含器	唐津造	皿	(11.90)	(2.70)		体部中央でくぼみに内收する	
B32	包含器	柳原造	皿	(26.30)	4.90		いわゆる馬の目皿	
B33	包含器	白磁	碗	(10.20)	(5.75)		器壁薄手、直立する口脚部	
B34	包含器	土師器	鉢	(32.60)	7.35		底型づくり、Gタイプ	
B35	包含器	土器	蓋	(14.20)	2.20		天井部に墨書き	火照窯系
B36	包含器	土器	鉢		(11.40)	13.20	直面に墨文、内底に風吹けの突起を持つ	
B37	包含器	施釉陶器	皿	(11.80)	3.00	4.10	底部外側に墨書き	
B38	SE01-02	土師器	皿	10.26	2.00	3.26	手づくね、内底および口縁部を模ナゲする。底部に指印痕跡。丸底	灯明皿
B39	SE01-02	土師器	皿	(10.85)	(2.65)		手づくね、内底および口縁部を模ナゲする。底部に指印痕跡。丸底	
B40	SE01-02	尖付	皿	(2.15)	(4.60)		内底見込みと底部に指印痕跡	中国製
B41	SE01-02	桑付縁器	碗	(2.00)	(3.55)		楕円形、見込みと底面に内凹面	中国製
B42	SE01-02	萬葉土器	碗	(2.35)	5.00		底部凹、内底面にガキ調整	中国製
B43	SE03	十脚器	皿	(14.10)	(2.65)		手づくね、内底および口縁部を模ナゲする。底部に指印痕跡。丸底	
B44	SE03	土器	羽釜	(26.40)	(9.90)		有段羽釜、内底板ナダ	
B45	SE03	青磁	建錦	(7.70)			上方に施し、やや突出して見える	青磁
B46	SE03	青磁	櫻絞	(27.90)	7.70		上方に施し、やや突出して見える	青磁
B47	SD04	土器	小皿	(7.40)	1.10		手づくね、内底および口縁部を模ナゲする。底部に指印痕跡	
B48	SD04	尖付	碗	(18.90)	(4.10)		楕円形、外底に花文など	中国窯
B49	SD04	廣川先祖造	天口盆模	(11.90)	(5.30)		体部下方に青斑、腰サビ斑	
B50	SD04	土器	羽釜	(16.50)	(8.40)		厚手の羽釜、外底全体が半削り調節、内底風ナケ調節	
B51	SD04	瓦	匁子	長3.25	幅3.39	厚1.85	瓦を打ち欠いて作製	
B52	SD04	瓦	匁子	(6.90)		厚(2.00)	瓦を打ち欠いて作製	
B53	SD04	土師器	?	(6.90)	(3.90)		栗谷部器、器形不明	
B54	SD05	青磁	施釉	(29.50)	(4.90)		口縁部を上方に拡張する	青磁
B55	SD05	土師器	小皿	(7.95)	(1.70)		手づくね、内底および口縁部を模ナゲする。底部に指印痕跡	
B56	SD06	土師器	小皿	(9.80)	1.70		手づくね、内底および口縁部を模ナゲする。底部に指印痕跡	
B57	SD06	道戸先祖造	碗	(11.70)	(3.90)		外底に指印捺す落弁。中国製品を模倣	
B58	SD06	廣川先祖造	大口瓶	(12.00)	(5.30)		底部凹、高台周辺削り、腰サビ斑	
B59	SD06	廣川先祖造	天口瓶		(1.95)	(3.60)	底部凹、高台周辺削り、腰サビ斑	
B60	SD05	陶器	捺拂	(26.80)	(6.90)		口縁部は少し肥厚するが方形で縁面を持つ	青磁

第35表 B地区遺物觀察表2

番号	出土場所	種別	器種	法 量 (cm)			成型・調整技法の特徴・文様	備考
				口径	腹周	厚さ		
B61	SD06	瓦質土器	筒形	(19.80)	(6.10)		有段司蓋、外腹体部下半部に調整、内腹底ナメ調査	
T62	SD06	土師器	鉢	(13.00)	(4.30)	(15.10)	体部の凹位に汎用	
B63	SD06	陶質土器	盤形	(23.00)	(5.50)		口縁部を上方に拡張し、縁部外縫をナメて凹縫状にする	NB期
B64	SD06	陶質土器	盤形	(23.00)	(7.00)		口縁部を上方に拡張し、縁部外縫をナメて凹縫状にする	OB期
B65	SK09	陶質土器	盤形	(9.00)			1本筋の鉢部。口縁部を上方につまむ	
B66	SK8	陶質土器	盤形	(26.40)	5.15		1本筋の鉢部。口縁部をくぼむ	
B67	P84	磨擦焼 破		(10.40)	6.85	4.10	口縁部が尖る、高台周辺より調査	
B68	P84	骨質陶 無		(24.90)	(5.45)	(18.60)	赤褐色の器表面に細かなグレーラ	V期
B69	SK27	陶質土器	盤形	(33.50)	15.80	(13.70)	衝な凹縫とV字形、口縁部に段	
B70	匂合層	土師器	小鉢	7.40	1.45		手づくね、口縁部外縫を横ナメ、外腹体部下半に指痕痕跡	灯明III
B71	匂合層	土師器	小皿	(7.25)	1.40		手づくね、内面、口縁部外縫を横ナメ、外腹体部下半に指痕痕跡	
B72	匂合層	土師器	小皿	(7.30)	1.25		手づくね、内面、口縁部外縫を横ナメ、外腹体部下半に指痕痕跡	
B73	匂合層	土師器	小皿	(9.80)	1.70		手づくね、内面、口縁部外縫を横ナメ、外腹体部下半に指痕痕跡	
B74	匂合層	土師器	小皿	(8.30)	1.05		手づくね、内面、口縁部外縫を横ナメ、外腹体部下半に指痕痕跡	
B75	匂合層	土師器	小皿	(9.80)	1.50		手づくね、内面、口縁部外縫を横ナメ、外腹体部下半に指痕痕跡	
B76	匂合層	土師器	小皿	(11.30)	(2.40)		手づくね、内面、口縁部外縫を横ナメ、外腹体部下半に指痕痕跡	
B77	匂合層	土師器	小皿	(4.95)	(1.25)		手づくね、内面、口縁部外縫を横ナメ	
B78	匂合層	土師器	羽皿	(16.00)	(9.10)		手段が並、口山板ナメ	
B79	匂合層	陶器	羽皿	(20.80)	(4.70)		有段羽皿、内山板ナメ	
B80	匂合層	土師器	羽皿	(22.50)	(9.05)		右段が並、内山板ナメ	
B81	匂合層	瓦質土器	素皿	(9.45)	(4.40)		外周に花文のスタンプ	
B82	匂合層	丹波焼	盤形		(4.50)		口縁部。1本筋きの鉢目	
B83	匂合層	丹波焼	盤形		(4.30)		口縁部内腹底部の凹み、1本筋きの鉢目	
B84	匂合層	丹波焼	盤形		(7.20)		口縁部を尖らせる。1本筋きの鉢目	
B85	匂合層	丹波焼	盤形	(29.70)	(6.80)		口縁部内腹底部の凹み、櫛目	
B86	匂合層	丹波焼	盤形	(34.00)	(6.70)		口縁部内腹底部を尖らせる。織機きの鉢目	
B87	匂合層	瀬戸・近畿後	皿	(1.50)	5.90		丸皿。津い黄釉陶を施釉。高台周辺露胎	
B88	SK10	瀬戸焼	碗	(3.00)	3.75		底部凹、削りだし窓台	
B89	匂合層	瀬戸・近畿後	皿	(10.70)	2.25	(5.90)	丸皿。津い黄釉陶を施釉。高台周辺露胎	
B90	匂合層	白磁	皿	(2.10)	(4.65)		底部凹、削りだし窓台	中国産
B91	匂合層	施釉陶器	碗	(2.20)	(5.20)		底部凹、削りだし窓台	初期伊万里
B92	匂合層	白磁前頭部	瓶	(3.70)	(4.90)		底部凹、高台周辺露胎	初期伊万里
B93	匂合層	柴田	瓶	(2.40)			口縁部凹引、外腹花火、内腹円錐部分方陣火	中国産
B94	匂合層	柴付鍋器	甕	(1.00)	(5.95)		底部凹、見込みに柴付、外腹高台に甕	中国産
B95	匂合層	青磁甕	甕	(4.40)			口縁部凹引	
B96	匂合層	白陶	皿	(1.45)	(5.40)		内面に草花文、低い高台。高台周辺に砂付甕	初期伊万里
B97	匂合層	青磁甕	茶碗	(9.05)	9.50	(7.20)	絵唐草、外腹に開窓した茶碗	
B98	匂合層	青磁甕	皿	(13.90)	16.30	9.00	單手の握縫、口縁部は小さく丸い玉縫	V期
B99	匂合層	丹波焼	甕	(35.20)	37.75	20.60	開いた片脚部と肩部に2枚の握縫。錐輪を押かる	
瓦類								
番号	出土場所	種別	器種	法 量 (cm)			成型・調整技法の特徴・文様	備考
				長さ	幅	厚さ		
B100	匂合層	瓦	軒丸瓦	長(4.90)	高(3.95)		左巻三文巴、大きな舟文(16コ)	近世
B101	SK05	瓦	軒平瓦	長(2.00)	高(4.50)		唐草文	近世
B102	SE03	瓦	屋敷瓦	長(45.90)	幅(31.70)	高(10.25)	瓦縫に舟穴、口縁にハゲ調査	近世
B103	SE03	瓦	軒丸瓦	長(6.50)	高(11.85)		右巻三二文巴、外腹に舟文(103~106回文)	中世
B104	匂合層	瓦	軒丸瓦	長(6.00)	幅(8.70)		右巻三三文巴、外腹に舟文	中世
B105	匂合層	瓦	軒丸瓦	長(6.75)	幅(7.05)		右巻三三文巴、外腹に舟文	中世
B106	匂合層	瓦	軒丸瓦	長(11.85)	幅(6.60)		右巻三三文巴、外腹に舟文	中世
B107	SE03	瓦	丸瓦	長(12.60)	幅(8.60)	高(5.60)	末縫の壁片、コビキ痕跡	中世
B108	SE01・02	瓦	丸瓦	長(13.55)	幅(9.20)	厚(2.69)	コビキ痕跡	中世
B109	SE01・02	瓦	丸瓦	長(18.60)	幅(8.40)	厚(5.65)	コビキA	中世
B110	SE03	瓦	丸瓦	長(24.75)	幅(11.05)	厚(2.80)	コビキA	中世
B111	SE03	瓦	平瓦	長(11.60)	幅(29.30)	厚(2.00)	四面へラ削り調査	中世
B112	SE03	瓦	平瓦	長(25.90)	幅(14.10)	厚(2.40)	四面へラ削り調査	中世
B113	匂合層	瓦	平瓦	長(16.20)	幅(26.45)	高(5.00)	四面へラ削り調査	

第36表 B地区遺物観察表3

金属製品										法 量 (cm)		
報告書 番号	地区	土 壤 面	遺物名	種 別	品 目	材種	特殊年 跡年	時代	法 量 (cm)			備 考
									長さ	幅	厚さ	
BI 1	1区	包合層	調製品	鉄貨	兎永通寶	古			2.5	2.5	0.1	
BI 2	1区	包合層	調製品	鉄貨	兎永通寶	文			2.5	2.5	0.1	
BI 3	1区	無1面	調製品	鉄貨	兎永通寶	新			2.2	2.2	0.1	
BI 4	2区		SK瓦鑄まり	調製品	鉄貨	兎永通寶	古		2.5	2.5	0.1	
BI 5	2区		SK瓦鑄まり	調製品	鉄貨	兎永通寶	新		2.6	2.6	0.1	
BI 6	2区		SK瓦鑄まり	調製品	鉄貨	兎永通寶	古		2.4	2.4	0.1	
BI 7	2区	包合層	調製品	鉄貨	兎永通寶	古			2.5	2.5	0.1	
BI 8	2区	包合層	調製品	鉄貨	兎永通寶	古			2.5	2.5	0.1	
BI 9	2区	包合層	調製品	鉄貨	兎永通寶	古			2.4	2.4	0.2	
BI 10	2区		SE01,02	調製品	鉄貨	兎永通寶	新		2.4	2.4	0.1	
BI 11	2区	包合層	調製品	鉄貨	兎永通寶	古			2.5	2.5	0.1	
BI 12	2区	包合層	調製品	鉄貨	兎永通寶	新			2.4	2.4	0.1	
BI 13	2区	包合層	調製品	鉄貨	兎永通寶	古			2.6	2.6	0.1	
BI 14	2区	包合層	調製品	鉄貨	兎永通寶	古			2.5	2.5	0.1	
BI 15	3区	包合層	調製品	鉄貨	兎永通寶	古			2.5	2.5	0.1	
BI 16	3区	包合層	調製品	鉄貨	兎永通寶	古			2.4	2.4	0.1	
BI 17	3区	包合層	調製品	鉄貨	兎永通寶	新			2.4	2.4	0.1	
BI 18	3区	包合層	調製品	鉄貨	兎永通寶	新			2.5	2.5	0.1	
BI 19	3区	包合層	調製品	鉄貨	治平元寶		1064 北宋		2.2	2.1	0.1	
BI 20	3区	包合層	調製品	鉄貨	治化元宝		990 北宋		2.4	1.9	0.1	
BI 21	4区	包合層	調製品	鉄貨	兎永通寶	古			2.5	2.5	0.6	
BI 22	4区	包合層	調製品	鉄貨	兎永通寶	古			2.5	2.5	0.1	
BI 23	4区	包合層	調製品	鉄貨	兎永通寶	文			2.6	2.6	0.1	
BI 24	4区	包合層	調製品	鉄貨	兎永通寶	新			2.0	2.0	0.2	
BI 25	4区	包合層	調製品	鉄貨	兎永通寶	古			2.4	2.4	0.1	
BI 26	4区	包合層	調製品	鉄貨	兎永通寶	新			1066 北宋	2.5	2.6	0.1
BI 27	4区	包合層	調製品	鉄貨	治平元寶		1064 北宋		2.4	2.4	0.2	
BI 28	3区	包合層	調製品	鉄貨	兎永通寶				2.6	2.6	0.4	
BI 29	3区	包合層	調製品	鉄貨	唐	唐魯			3.1	1.1	1.0	
BI 30	3区	包合層	調製品	鉄貨	唐魯				3.9	0.5	0.6	
BI 31	4区	無 2面	調製品	鉄貨	唐魯				4.8	1.4	1.1	
DI 32	1区		SK35	調製品	スラッグ				13.0	8.5	5.6	
BI 33	B-2		SE03	鉄製品	スラッグ				13.1	9.7	5.0	断ち割り
BI 34	1区		SK35	鉄製品	スラッグ				4.5	3.7	2.8	
BI 35	1区		SK35	鉄製品	スラッグ				6.0	3.4	1.8	
BI 36	1区		SK35	鉄製品	スラッグ				3.7	2.8	2.0	
BI 37	1区		SK35	鉄製品	スラッグ				9.3	6.2	3.4	
BI 38	1区		SK35	鉄製品	スラッグ				6.4	3.4	2.9	
BI 39	1区		SK35	鉄製品	スラッグ				8.2	4.8	2.5	
石製品										法 量 (cm)		
番号	出土場所	種別	器種	法 量 (cm)			成形・調整技術の特徴・文様				備 考	
				長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ			
DS 1	包合層	石製品	範石	22.40	7.00	3.35	4面使用					
DS 2	包合層	石製品	一石三輪 (33.10)	18.00	10.20		空輪を大きく、芯筒岩製					
DS 3	包合層	石製品	石仏 (33.65)	18.30	17.60		花崗岩製					地底等

第9節 F地区

1. 遺 構

【第1面】(第103図、写真図版122)

土 坑

SK08 調査区西部で検出した。一部は調査区北側へ拡がっており、全体を検出することはできなかった。平面形は長方形を呈するものと考えられ、長軸方向で1.30m検出し、その直交方向で1.05mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは55cmを測る。埋土は、暗褐色土からなり、炭・焼土片が多量に含まれていた。

SK10 調査区東半部で検出した。一部は調査区北側へ拡がっており、全体を検出することはできなかった。平面形は長方形を呈するものと考えられ、長軸方向で1.90m検出し、その直交方向で2.45mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは59cmを測る。

SK12 調査区東半部で検出した。SK10の南東側に位置する。当遺構の一部は南側へ拡がっており、全体を検出することはできなかった。平面形は楕円形を呈するものと考えられ、長軸方向で1.46m検出し、その直交方向で1.68mを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは52cmを測る。

SK13 調査区東半部で検出した。SK10の南側、SK12の西側に位置する。当遺構の一部は南側へ拡がっており、全体を検出することはできなかった。平面形は楕円形を呈するものと考えられ、長軸方向で1.63m、その直交方向で72cmを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは96cmを測る。

SK15 調査区西部で検出した。平面形は楕円形を呈するが、南側の一部は調査区外まで拡がっている。長軸方向で1.40mを測り、その直交方向で75cmを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは1.24mを測る。埋土中には、炭片が多量に含まれていた。

【第2面】(第103図、写真図版122)

土 坑

SK30 調査区東部で検出した。一部を土坑に切られているが、ほぼ全体を検出することができた。平面形は円形をなし、その径は1.60mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは41cmを測る。

SK38 調査区西部で検出した。東側を溝状遺構に切られており、全体を検出することはできなかった。平面形は、楕円形をなすものと考えられ、長軸方向で2.00mを測り、その直交方向で1.30mを検出した。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは21cmを測る。

溝

SD03 調査区西部で検出した。SD04・SK38の東側に位置する。南北方向に延びる溝で、両端とも調査区外まで延びている。3.50m検出した。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは36cmを測る。

SD04 調査区西部で検出した。SD03の西側に位置し、SD03とはほぼ平行する。南北方向に延びる溝で、両端とも調査区外まで延びている。3.42m検出した。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは27cmを測る。

SD06 調査区西端部で検出した。SK38の西側に位置する。当造構の南側は調査区外まで延び、北側は調査区内で収束している。2.10m検出した。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは16cmを測る。検出面における幅は1.12m~85cmを測る。

2. 遺 物

【第1面】(第104図、写真図版123)

1 土器・陶磁器

F地区から出土した土器・陶磁器には種別では土師器・瓦質土器・無釉陶器・施釉陶器・白磁・青磁・染付磁器などがある。

A 土師器

土師器には器種別には、皿・羽釜・灯火具がある。

皿 皿はいずれも手づくね成形の非クロコ土師器である。底部の形態から丸底のもの(F18)と平底のものに大きく分類できる。平底のもの(F19・F22~F26)には底部を指押さえによって上げ底にするもの(F24)、内面の底部と体部の界に凹線をもつもの(F19)などがある。F19・F23~F26は京都系土師器と考えられ、16世紀代に比定される。

羽釜 F27は口縁部がやや内傾し、口縁部と体部の界に断面台形状の比較的幅の広い鉢をもつ。口縁部外面は凹線を3条施す鉄製羽釜を模倣したものである。

灯火具 F3は底部内面に棒状の灯芯立てを貼り付ける。底部外面には釘穴が見られる。F10は底部は円盤状で、円柱状の脚をもつ。内面から底部上面にかけて鉄粋を施す。

B 瓦質土器

F20は口縁部がやや内傾し、口縁部下に断面台形状の比較的幅の広い鉢を貼り付ける。

C 無釉陶器

無釉陶器には器種別では、擂鉢・鉢・壺がある。

擂鉢 擂鉢には產地別では備前焼と堺・明石焼のものがある。

備前焼 F21・F28はいずれも口縁部が上下に拡張して縁帶をもつ。いずれも備前焼IV期相当で15世紀代に比定される。

堺・明石焼 F8は体部は僅かに内彎して斜め上方に延び、口縁部を上下に拡張して断面台形状の縁帶をもつ。口縁部外面に2条、内面に1条の凹線をもつ。堺・明石産擂鉢で18世紀後半以降の時期が考えられる。

鉢 F9は平底で、体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上面に端面をもつ。内面全体に灰釉が付着する。形態・色調などから丹波焼と考えられる。

壺 F12は平底で肩は丸みをもったナデ肩で、頸部は短く直立する。口縁部内面から底部外面にかけて、赤土部を塗布する。丹波焼と考えられる。

D 施釉陶器

施釉陶器には器種別では碗・皿・急須・向付・ひょうそくなどがある。

碗 碗には瀬戸・美濃系のものと京・信楽系のものがある。

瀬戸・美濃系 F6は体部が中位で大きく屈曲する段付天目形の碗である。内外面とも白濁釉を全面施釉した後、緑釉・金彩・銀彩で竹葉文を描く。瀬戸・美濃産と考えられる。F29は外面にヘラ書きの

蓮弁文状の文様を描き、全面に灰釉を施釉する。瀬戸・美濃系の龍泉窯系青磁写しの碗の可能性が考えられる。

京・信楽系 F16は外面に杉葉文を鉄釉で描く。京・信楽系の小杉碗で19世紀前半代の時期が考えられる。

皿も产地別では瀬戸・美濃系のものと京・信楽系のものとがある。

瀬戸・美濃系 F2は高台は断面台形状で低く、全面に灰釉を施釉する。美濃焼大窯期の製品で16世纪後半代に比定される。

京・信楽系 F11は平底で体部内面に型作りの菊花文を貼り付ける。内面から口縁部外間にかけて透明釉を施釉する。京・信楽系の灯明皿で19世紀前半代に比定される。

急須 F13は体部が中位で「く」の字状に大きく屈曲する。口縁部外側から体部外側下半にかけて灰釉を施釉する。京焼系陶器で、19世紀前半代に比定される。

向付 F14は高台を浅く削りだし、体部は下位で屈曲して、斜め上方に延びる。内外面とも灰釉を施釉し、外面の体部下半以下は露胎である。内面に凹部をもち、鉄釉で簡単な草花文を施釉する。肥前系統唐津向付で17世紀初頭に比定される。

ひょうそく F5は体部に灯芯立てと把手を貼り付け、内面から体部外側にかけて灰釉を施釉する。19世紀前半代に比定される。

E 白 磁

F1は型作り成形で、内面に型押して菊花文・葉脈を施文する白磁皿である。瀬戸・美濃系の製品で19世紀前半代の時期が考えられる。

F 青 磁

F17は高台は断面台形状で低く、底部の器壁は非常に厚い。底部内面にヘラ描きと櫛描きで草花文をえがく。龍泉窯系青磁碗で14世紀後半から15世紀代の時期が考えられる。

G 染付磁器

F7は外面に牡丹唐草文、内面に草花文を描く碗蓋である。瀬戸・美濃系の製品で19世紀前半以降の時期が考えられる。F15は直立する脚には直立する体部をもつ仏具碗である。外面に淡い呉須で幾何学文を施文する。肥前系波佐見産の製品で18世紀後半～19世紀前半に比定される。

石 製 品

石製硯が3点(FS1・FS2・FS3)出土している。いずれも包含層からの出土である。

FS1は完存する長方硯で、外縁での規模は6.10×18.2cmを測る。縁の幅は、海部側のみ広く1.40cmを測る。他は4mmである。陸部と海部は比高1cmを測る。陸部の厚さ1.5cmを測り、縁部の高さは、海側で1.9cm、陸側で2.2cmである。また、底部は約2mm抉られている。

FS2も長方硯で、陸部の約1/4の範囲の表面が剥離している。主軸ライン上に土手状をなし、左右対称に区画されている。外縁での規模は4.75×9.25cmを測る。縁の幅は、海部側・側縁部とも同じく4mmを測る。陸部の厚さ1cmを測る。また、底部は平坦である。

FS3は、一部のみの残存である。陸部か海部かは判断できない。幅5.5cmを測り、主軸方向で5.25cm残存する。縁幅は6mmを測り、高さは1cmである。底部は抉られ、高台状をなす。赤間産の可能性が考えられる。

【第2面】

石 製 品

包含層から石硯が1点(FS6)出土している。海部の一部が残存する。長楕円形を呈するものと考えられる。縁部も上部が剥離している。幅5.1cm、長さ5.7cm残存する。

五輪塔2点が出土している。FS5は第2面に伴う包含層から出土したもので、火輪・水輪・地輪部分が残存する。一石からなり、火輪・水輪・地輪それぞれの高さは7.2cm・7.4cm・33.8cmで、全体で48.4cm残存する。FS4は、SK34から出土したもので、火輪・水輪・地輪部分が残存する。一石からなり、火輪・水輪・地輪それぞれの高さは9.0cm・5.2cm・20.7cmで、全体で34.9cm残存する。

【金属製品】(第106図、写真図版127参照)

金属製品は銭貨、飾り金具が出土している。

銭 貨

銭貨のうち、國化できたのは34枚である。本邦銭と渡米銭があり、渡來銭はすべて北宋銭である。

永樂通寶(FI8)、元豐通寶(FI13)、開元通寶(FI14)、元祐通寶(FI25)、紹聖元寶(FI34)が出土している。本邦銭のうち、FI7・FI12・FI21・FI31・FI33は、古寛永に分類される。FI11・FI17・FI19は文銭に分類される。FI23は背文に「元」の文字がある。FI3～FI6、FI9、FI10、FI15、FI16、FI18、FI20、FI22、FI24、FI26～FI30、FI32、FI35は3期の新寛永である。

飾り金具

FI1は花弁をあしらった車輪状の形状をしている。用途は不明である。FI12は筒状の製品で、用途は不明である。

引用・参考文献

- (1) 兵庫県教育委員会 2004 「兵庫津遺跡 II」
- (2) 伊丹郷町研究会 2003 「伊丹郷町の陶磁器の様相」
- (3) 伊野近富 1995 「土師器」「概説 中世の土器・陶磁器」 中世土器研究会
- (4) 兵庫県教育委員会 1992 「下相野窯址」
- (5) 長谷川眞 2003 「中世丹波焼の変遷と技術移入・導入」『中近世土器の基礎研究XⅦ』 日本中世土器研究会
- (6) 長谷川眞 2004 「寛類にみる近世丹波焼」『関西近世考古学研究XⅡ』 関西近世考古学研究会
- (7) 九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の福井」
- (8) 堀内秀樹 1996 「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学埋蔵文化財調査室紀要I』 東京大学文化財調査室

第37表 F地区遺物觀察表1

報告 No	出土場所	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	成形・調整技術等	文様	色調	產地	時期	備考
F1	第1面 廻山	白磁	盤	—	(1.75)	長脚 (10.6) 短脚 (6.2)	高台の平面上形状は稍円形。高台は傾く。 低い。外壁は直線的に斜め上方へ引げ る。内側に凹部をもつ。内側・外側で溝花文・雲筋を拘り。内・外表面とも透明釉施加。	—	白色に發色。	瀬戸・美濃系	19c前半	両面葉付の 輪カキ取り。
F2	第1面 廻山	施釉陶器	皿	(9.7)	2.5	(5)	高台は前面形状で強く傾く。底部外 縁は浅く削り出され、底盤は僅かに内凹 で縁に傾斜をもつて上部に延びる。口 縁部は丸味をもつ。 内・外表面とも全面に灰釉施加。	—	淡黃綠色 に發色。	瀬戸・美 濃系	16c後半	施はガラス質 で人が足の 跡られる。外 縁一部切られ、 内側は口縁部 が深く、大変 難い。
F3	第1面 SK08	土細器	おひそく	5.45	3.5	2.6	分花。体部は下部で僅かに屈曲して、 直線的に斜め上方に延びる。口縁部 は上部で傾斜をもつ。底部内側に狹狭 の口窓立を施りける。 底部外縁に穿孔1ヶ所(竪穴)。内側 一円縁外周に灰釉施加。外表面の体部 下部以下露胎。	—	墨褐色に 發色。	—	19c前半 以降	霧那部 楊 色。
F4	第1面 SK08	施釉陶器	灯明皿	(11.55)	1.9	4.6	平底。体部は傾くやかに斜め上方に延び る。体部内側に断面三連形状の凸部を 1条置らせる。凸部の1ヶ所を斜て 口片形に彫形。 外窓・開窓ケズリ・露胎ナコ網目。内 側・透明釉施加。	—	灰白色に 發色。	京・信濃 系	19c前半 以降	—
F5	第1面 SK08	施釉陶器	かきそく	4.3	3.45	4.5	平底。高台は端正な輪高台。体部は直 立。腹部は短く直立。 各部に立柱と手すをそれぞれ貼付。 内・外表面全面に灰釉施加。底部外周 は露胎。	—	灰白色に 發色。	京・信濃 系	19c前半	内・外間に 重かい貫 入。
F6	第1面 SK08	施釉陶器	天目茶碗	9.8	6.65	3.7	高台は瓶底長方形の比較的頗る低い 高台。体部は内側で斜め上方に張 り、中央で大きく屈曲する。口縁部 は上部で傾斜をもつ。内側 内・外表面とも全面釉を全面施加。高台 縁以下露胎。器蓋に人さし貫入。	体部外縁に輪 の上から短 角・金刹・瓶 形・竹葉文・黑 文。(上絵付)	—	瀬戸・美 濃系	—	飛付天目。
F7	第1面 SK08	角付鏡器	鏡座	8.5	2.8	—	つまみは比較的頗る高い。体部は直 線的に斜め下方に張り出る。口縁部は僅か に外方にDらく。	外 縁・外側唐草 文・足裏。内 面 丸い雲筋・界 目・2条・裏丸 文をそれぞれ やや低い位置で施 す。	有味を帯 びた白 色	瀬戸・美 濃系	19c前半 以降	—
F8	第1面 SK10	無釉陶器	盤	(38.3)	(8.6)	—	体部は僅かに内側向外方に斜め上方に 張り出る。口縁部は下に張り出る。 口縁部は内側に張り出る。 口縁部は内側に張り出る。 内・外表面ともヨコナガアラ彫形。口縁部外周 に沈線2条。口縁部内側に凹窓1ヶ所。 体部外周にカタツミ彫形。体部内側 8条1段の施加式。	—	暗赤褐色	堺・明石 系	18c後半 以降	—
F9	第1面 SK13	無釉陶器	盤	(22.6)	(10.5)	(11.6)	平底。体部は直線的に斜め上方に張 り出る。口縁部は上部に露胎をもつ。口縁 部は内側に張り出る。 口縁部は内側に張り出る。 内・外表面ともヨコナガアラ彫形。体部内側 に張り出る。	—	—	丹波系	—	内側全面に 灰釉仕加。 外側の色調 は面白。外 縁一部灰釉 仕加。
F10	第1面 SK12	土器	灯火具	(6.5)	6.7	4.15	底部は円錐状に直立。 体部は大きく内窓。 内窓に底面上面 鉢脚。(vr鉢底) 施加。底部外周露胎。	—	暗赤褐色 に發色。	—	19c前半 以降	霧那部色調 黒色。底部 外周 立孔 1ヶ所(竪 穴)。回転系 切痕。
F11	第1面 SK15	施釉陶器	灯明皿	(10.6)	(2.45)	—	平底。体部は傾くやかに斜め上方に張り 出る。口縁部は丸味をもつ。 内・外表面ともヨコナガアラ彫形。体部内側 に張り出る。器蓋に人さし貫入。 内部全面に透明釉施加。	—	乳白色に 發色。	京・信濃 系	19c前半	器蓋に細か い貫入。

第38表 F地区遺物観察表2

報告 No.	出土場所	種別	經理	口径 (cm)	深さ (cm)	底径 (cm)	成形・調整技法等	又種	色調	產地	時期	備考	
F12	第2面 面候出	無施陶器	盃	(12.9)	14	15.6	平底。体部は内縫的に斜め上方に延び、体部中央で大きく「く」の字状に屈曲する。口縁部は短く直立。口縁部上間に内縫をもつ。内縫部外側面は下方に閉子字の形態的凹溝を3つ有り、その位置は2ヶ所の内縫部と併ぶ。体部外側上間に口上1-1号、瓶手2+瓶耳を施す。	-	にぶい黃 褐色。	丹波系	-	-	
F13	第2面 面候出	施釉陶器	急須	8.5	4.3	8.9	平底。体部は後縫的に斜め上方に延び、体部中央で大きく「く」の字状に屈曲する。口縁部は短く直立。瓶手外側面の下部と底部外周、ヘラカズリ側壁、口縁部外側・体部外側下半・底施釉。底部外側面に発達した内縫及び体部外側下半以下・底施釉。底部内側中央に水平縫が施まる。	-	灰青褐色	京阪系	19c前半	底部外側に 施土目跡2ヶ所。 底青。	
F14	第2面 候出	施釉陶器	肉付	-	(4)	4.4	高台を浅く押しだすには背青台。体部は丁度2重巻で、斜めトボに延びる。瓶内側に底部をもつ。内縫部とも底施釉。瓶の底部下半に瓶耳を施す。	内青 瓶底で 堅敏な草花文 施す。	淡緑灰褐色	肥前系	17c前頭	底部内側に 施土目跡2ヶ所。 底青。	
F15	第2面 候出	施釉陶器	仏具瓶	(5.7)	6.3	4.15	高台は前ノ目状認別高台。瓶部は比較的の短く、底部は内縫部にはほぼ直線上に延びる。口縫部は尖り気味。	外面 底で 乳頭1 瓶-瓶荷文字 界縫1-1条。	-	肥前系	18c後半 19c前半	高台裏付 の施土目跡。 底青。	
F16	第2面 候出	施釉陶器	碗	8.7	5	3.6	高台は端正な高台。体部は内縫部に斜め上方に延びる。口縫部は尖り気味。	-	灰白色に 毫色。	京・備楽 系	19c前半	小炒碗。	
F17	第2面 候出		青道	碗	-	(1.9)	(5.9)	底部の器壁は非常に高い。高台は瓶面形態の低い高台。	-	灰青色に 毫色。	龍谷系	14~15c 代	高台裏に日 絵1所。
F18	第2面 SK38	土師器	盃	14.35	3.35	-	丸底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直縫で、内縫を上方に延びる。口縫部は尖り気味の広い錐形をもつ。	-	淡黄褐色	京都系	15c代?	-	
F19	第2面 SK38	土縛器	皿	9.35	1.7	4.9	平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は直縫で、内縫を上方に延びる。口縫部は尖り気味の広い錐形をもつ。内縫部外縫ともヨコナテ調整。口縫部内・外縫・外縫ともヨコナテ調整。底部内面・体部外側下半・指オサエによる指張压記。	-	淡黄褐色	京都系	16c代	-	
F20	第2面 SD05	瓦質十唇	羽蓋	-	-	5	口縫部はやや内縮。口縫部下に瓶面台形狀の比較的の広い錐形をもつ。内・外縫ともヨコナテ調整。	-	-	-	16c代?	施土中に砂 粒を含む。 外縫・内縫 等。	
F21	第2面 SD03	無施陶器	横鉢	(25.7)	(6.3)	-	体部は直縫的に斜め上方に延びる。口縫部は下に延びる。縫縫をつくす。内・外縫ともヨコナテ調整。口縫部内・外縫・外縫ともヨコナテ調整。内縫部外縫に指オサエによる指張压記。	-	灰褐色	青森系	15c代	備前燒 N 期	
F22	第2面 SD01	土解器	盃	7.4	1.55	-	平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は端やかに斜め上方に延びる。内・外縫ともヨコナテ調整。口縫部内・外縫・外縫ともヨコナテ調整。体部外縫に指オサエによる指張压記。	-	淡黄色	-	-	先期内面・ 口縫部内・ 外縫とともに 保土多量に 付着。	

第39表 F地区遺物観察表 3

報告 No	出土場所	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	成形・調整技法等	文様	色調	產地	時期	備考
F23	第2面 SD06	土師器	皿	9.35	1.75	-	平底。底部と体部の界は比較的弱弱。 底部は土成形で斜面上に延びる。口 縁部は丸味をもつ。 内・外周ともヨコナガ彫鑿。口縁部外 面・強引ヨコナガ彫鑿。底部外周裏・ 底部外側下半・強い指ササエによる 粗面圧痕。	-	淡黄褐色	京都系	16c代	-
F24	第2面 SD06	土師器	皿	8.2	1.7	-	平底(指ササエによりやや斜面形成 しない)。底部と体部の界は比較的弱弱。 底部は直筒形で斜面や少し前め上方に 延びる。口縁部は丸味をもつ。 内・外周ともヨコナガ彫鑿。山腹部内・ 外周・強引ヨコナガ彫鑿。底部外周裏・ 底部外側下半・強い指ササエによる 粗面圧痕。	-	淡黄褐色	京都系	16c代	-
F25	第2面 SD06	土師器	皿	8.2	1.5	3.55	平底。底部と体部の界は比較的弱弱。 底部は端ややに壊れ的に斜め上方に 延びる。 内・外周ともヨコナガ彫鑿。山腹部内・ 外周・強引ヨコナガ彫鑿。底部外周裏・ 底部外側下半・強い指ササエによる 粗面圧痕。	-	にぶい黄 褐色	京都系	16c代	-
F26	第2面 SD06	土師器	皿	7.8	1.55	-	平底。底部と体部の界は比較的弱弱。 底部は端ややに壊れ的に斜め上方に 延びる。口縁部は丸味をもつ。 内・外周ともヨコナガ彫鑿。山腹部内・ 外周・強引ヨコナガ彫鑿。底部外周裏・ 底部外側下半・指ササエによる粗面 圧痕。	-	にぶい黄 褐色	京都系	16c代	-
F27	第2面 SD06	土師器	羽釜	(16.8)	(11)	-	底部は内側で斜面形成して張り出る。口 縁部はやや内側、外側の山腹部と体部 との間に断面台形状の比較的幅の広い 縁を貼り付け。山腹部外周に浅い凹窓 2ヶ。 山腹部外周裏・ヨコナガ彫鑿。底部外周 ヨコナガ彫鑿か? (実測附のため詳細 は不明) 内底面・底・粗面圧痕。	-	にぶい橙 色	-	-	体部外周 張付窓。
F28	第2面 SK30	熱釉陶器	接体	-	-	(5.75)	体部は壊れ的に斜め上方に延びる。口 縁部は土上に延びる。底部を形成する。 内・外周ともヨコナガ彫鑿。口縁部内・ 外周とも・強いヨコナガ彫鑿。底部内 面・粗面圧痕。	-	灰色	瀬戸焼	15c代	口縁部外周 張付窓・次 破り。瀬戸 燒作。
F29	第2面 P7	施釉陶器	瓶	(11.2)	(4.05)	-	体部は内側で斜め上方に張り出る。口 縁部外周に浅い凹窓1ヶ。口縁部端部は 突起気味。 内・外周とも底施釉施錆。漆灰褐色に染 み入り。 外周の体部下半以下露胎。	体部外周にへ ラで蓋付支 (?) 施文。	-	瀬戸・美 濃系	-	器身に貫 入。瀬戸・ 美濃系底施 釉器の瀬戸 燒系青白釉 のうしか

石製品

報告 No	出土場所	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	成形・調整技法等	文様	色調	產地	時期	備考
FS1	第1面 SK15	石製品	鏡	直径 15.2	厚	6.1	長方形。海潮と底部の界は不規則。中 央に凸巻をつくし視面を2分する。上 部部はほとんど欠損。	-	褐灰色	-	-	底部外周に 「大」字 「上」字 「堅石」款を壓 入。
FS2	第1面 検出	石製品	鏡	直径 9.25	厚	4.75	長方形。海潮と底部の界は不規則。中 央に凸巻をつくし視面を2分する。上 部部はほとんど欠損。	-	灰オリーブ色	-	-	-
FS3	第1面 検出	石製品	鏡	直径 (5.25)	厚	(5.5)	長方形。底部の一部のみ残存。	-	暗赤褐色	-	-	赤銅鏡か?
FS4	第2面 検出	石製品	鏡	直径 (5.75)	厚	(5.1)	平面形態は橢円形か? 海潮は浅い。 背面に擦痕が認められる。	-	赤灰色	-	-	小型の鏡。

第40表 F地区遺物觀察表4

報告書 番号	地区	土層面	遺物名	種別	品目	鉢種	初採取 採取年	時代	測量(cm)			備考
									表8	標準	表8	
F11	第1面	SK08	銅製品	金具					3.4	3.6	0.5	
F12	第1面	SK08	銅製品	鍍鉛製品					11.0	1.5	0.2	
F13	下 第1面	SK15	銅製品	錢	寛永通寶	新			2.4	2.4	0.3	
F14	下 第1面	SK14	銅製品	錢	寛永通寶	新			2.4	2.0	0.3	
F15	F 第1面	SK09	銅製品	錢	寛永通寶	新			2.3	2.3	0.3	
F16	第1面	SK08	銅製品	錢	寛永通寶	新			2.5	2.6	0.3	
F17	第1面	SK08	銅製品	錢	寛永通寶	古			2.4	2.4	0.3	
F18	第2面	SK34	銅製品	錢	寛永通寶		14面	明	2.4	1.9	0.3	
F19	第1面	SK08	銅製品	錢	寛永通寶	新			2.4	2.4	0.3	
F20	第1面	SK08	銅製品	錢	寛永通寶	新			2.2	2.2	0.3	
F21	第1面	SK08	銅製品	錢	寛永通寶	文			2.4	2.4	0.3	
F22	第1面	SK08	銅製品	錢	寛永通寶	古			2.5	2.5	0.3	
F23	第2面		銅製品	錢	元祐通寶		1078	北宋	2.5	2.5	0.3	面積山
F24	下 第1面		銅製品	錢	元祐通寶		960	南唐	2.5	2.5	0.3	面積山
F25	第1面	SK08	銅製品	錢	寛永通寶	新			2.5	2.5	0.3	
F26	第1面	SK08	銅製品	錢	寛永通寶	新			2.3	2.3	0.3	
F27	第1面	SK08	銅製品	錢	寛永通寶	文			2.5	2.5	0.3	
F28	第1面	SK08	銅製品	錢	寛永通寶	新			2.4	2.4	0.3	
F29	第1面	SK08	銅製品	錢	寛永通寶	文			2.5	2.5	0.3	
F30	第1面	SK08	銅製品	錢	寛永通寶	古			2.5	2.5	0.3	
F31	第1面	SK08	銅製品	錢	寛永通寶	古			2.5	2.5	0.3	
F32	第1面	SK08	銅製品	錢	寛永通寶	古			2.4	2.4	0.3	
F33	第1面	SK08	銅製品	錢	寛永通寶	古			2.3	2.3	0.3	
F34	第1面	SK08	銅製品	錢	寛永通寶	古			2.5	2.5	0.3	
F35	第1面	SK13	銅製品	錢	元祐通寶		1086	北宋	2.5	2.5	0.3	
F36	第1面	SK08	銅製品	錢	寛永通寶	新			2.5	2.5	0.3	
F37	第1面	SK08	銅製品	錢	寛永通寶	新			2.2	2.2	0.3	
F38	第1面	SK08	銅製品	錢	寛永通寶	新			2.3	2.3	0.3	
F39	第1面	SK08	銅製品	錢	寛永通寶	新			2.4	2.4	0.3	
F40	第1面	SK08	銅製品	錢	寛永通寶	新			2.2	2.2	0.3	
F41	第2面	SF01	銅製品	錢	寛永通寶	古			2.5	2.5	0.3	下層
F42	第1面	SK02	銅製品	錢	寛永通寶	新			2.2	2.2	0.3	
F43	第1面	SK07	銅製品	錢	寛永通寶	古			2.5	2.5	0.3	
F44	第1面後出		銅製品	錢	昭和元寶		1094	北宋	2.4	2.4	0.3	
F45	第1面後山		銅製品	錢	寛永通寶	新			2.4	2.4	0.3	

第10節 J地区

1. 遺構

J地区は武家地区と町屋地区の境に当たる大溝筋周辺に位置する。前述のとおり本地区は交差点付近に当たることから、調査区を7区に分割して実施せざるをえなかった。ただし、報告では個々の調査区が小規模であるため、記述は一括して行っている。

【第1面】(第115~117図、写真図版128~138参照)

J地区の第1面では1~5区にかけて町屋関連の遺構が検出され、6・7区では酒蔵関連の遺構が検出された。町屋部分では屢敷地が検出され、酒蔵部分では通りに面した蔵の礎石、礎石列などが見つかった。このほか、酒蔵の下層では石組溝が検出され、この下層には(第2面)大溝筋の堀が存在することが、第2面の調査によって明らかにされているが、この石組溝は堀の埋立て後に構築され、大溝筋の語源となった石組溝であることが判明した。

第1面で検出された遺構には町家関係の主な遺構は土坑・礎石・便所・石組溝・建物基礎・井戸・防空壕・陶衣壺などがある。

土坑

調査区の広い範囲で土坑が検出されているが、比較的小型のものが多い。土坑が特に集中するのは調査区東端の1区である。内部に砾を投棄したSK8・15や石仏(地蔵)を割って投棄したSK2・6などがある。遺物の出土は少ないがSK8・9・12・13・15~19は遺物や埋土の状況からすると江戸時代後半の遺構と考えられる。この他、出土した遺物はSK29土製品ミニチュアJ66~J69、SK30陶器水差J71・土製品ミニチュアJ70などがある。

SK5 長方形の土坑である、規模は長さ1m、幅0.6m、深さ0.5mである。地下貯蔵庫などに使われていた遺構と考えられるが廃棄時に多くの遺物が廃棄され廃棄土坑として使われた。出土した遺物は土師器皿J1~J9、同培培J10・J11、焜炉J12、磁器染付碗J13・J14・J16・J17、同皿J20、花瓶J23、陶器碗J15・J18・J19、火入れJ21・J22がある。

便所

2区の屋敷南側前面に便所と考えられる遺構(SK20~24)が並んで検出された。SK21のみに桶が残り、桶の直径は0.6mである。SK20は2つが並ぶもので小型の桶が埋められていたと推定される。SK24は小型の甕が据えられていた。これらには遺物が多量に投棄され、廃棄土坑として使用したと考えられる。石組溝3の下層から検出されたことや、近代の遺物が混入しないことから、これらの便所は近代以前に廃棄されたと考えられる。

出土した遺物はSK21から土師器培培J52・J53、磁器染付碗J54~J57・同皿J58、火入れJ56、丹波焼鉢J61・同甕J64、陶器皿J59・鉢J60・同土鍋J65・同播鉢J62・J63、SK22から土師器皿J45・同培培J46、磁器染付碗J47・J49・J50・同皿J48、陶器皿J51、SK23から土師器皿J27~33、磁器染付碗J35~J38・同青磁甕J39、陶器皿J24~J26・J34・同水差J41・同火入れJ40・同土鍋J43・同蓋J42、瀬戸黑茶碗J44がある。

井戸

井戸1が2区で検出された。平面楕円形を呈する井戸で直径1.0m、深さ1.5mまで掘削した。

防空壕

調査区東側では3・4区に集中して防空壕1～4が検出された。

防空壕1は南側と東側に階段を持ち、小規模な方形の室と北側に伸びるL字形の小室を持つ。方形の室は壁面に杭痕が残ることから、板材などで壁を覆っていたと推定される。南側階段部分は三和土が貼られていた。一方、小室は素堀で壁際に一升瓶（写真図版156上段右側）が置かれていた。内部には豆類が貯蔵され、口部はコルクの栓によって密封する。出土した遺物には瓦質土器火鉢J77・土師質土器火鉢J76・焜炉J78がある。防空壕2は長方形の室を中心に南側に階段、北および東側に拡張が認められる。防空壕4は方形の室が設けられ北側に拡張が認められることから、出入り口は北側と推定される。

これらのはほかに、小型の方形土坑で内部に木質を残す土坑がいくつか検出されたが、これらは貯蔵庫の一種と考えられる。SK5は平面方形で長さ1.45m、幅0.43m、深さ0.34mである。素掘りの土坑であるが底部に若干の木質を観察した。このため木枠などが据えられていた可能性がある。内部からは多くの遺物が出土している。

胞衣壺

2基の胞衣壺が検出された。胞衣壺1はJ72・74の身、J73の蓋が検出された。胞衣壺1のJ72は4区から検出され、付近から丹波焼鉢の破片が出土している。胞衣壺2の身J74・蓋J73は5区から検出された。いずれも屋敷の玄関先に火消壺を転用した壺に胞衣を収めて据えたものである。

酒蔵関係

6・7区では石列と礎石・石列、及び石組溝が検出された。石列はL字形に南辺で5.5m、東辺で7.0mが検出された。これらの石列・礎石は構造からすると酒蔵の建物基礎部と推測される。石列は建物の壁の基礎部、礎石は大型のものであるため大型の建築物に使用された柱の土台石と考えられる。

礎石は6区西端で検出された。上面が1辺0.5～0.7mの規模を持つ。下層には3段の基礎石を据えていた。なお、礎石上面に十字の墨打ちが認められた。

さらに、石列は7区の南辺から東辺を通り、6区を横断して延びていた。西側はさらに交差点の方に延びるようである。これらの遺構は状況から考えて、北側に隣接する万葉藏の一部と考えられ道路拡幅に伴って取り壊された蔵と思われる。蔵の建築は礎石の裏込め等から出土する遺物からすると幕末である。この蔵に重なって石組溝1が、さらにその下層から石組溝2が検出された。石組溝1の構築は切合いから酒蔵の礎石に先行し、遺物から幕末と考えられる。廃絶は溝の埋土出土遺物では時期差が認められないことや、7区南辺の石列が石組溝の上面のみ置かれないことなどから考えると、蔵が建った時期には石組溝1は同時に機能していたと考えて良さそうである。また、調査区の遺構面を被覆してコンクリートが検出され、南に沿って底がモルタル貼りで検出されていた。石組溝3の構築時のものと思われる。最後は軍用道路の拡幅のための工事によってすべて埋められ、こののち、現在まで調査区は道路として利用されている。

石組溝3

調査区南側に沿って石組溝3が検出された。この溝は道路の排水溝で、北側が検出された。溝は側面に石列を配置し、底はモルタルを塗る。石材は東側が人頭大の花崗岩、中程が検地石、西側が凝灰岩製の棒状の切石を使用する。なお、この溝は西端で酒蔵石列と接し、石組溝1を切る。最後はやはり軍用道路拡張工事で埋められ道路は北側に拡幅され、現在の道路幅となった。

【第2面】(第8~13・17図、写真図版128~140参照)

第2面からは伊丹城期以前と有岡城期の遺構が検出された。主な遺構には柱穴・土坑・堀・溝などがある。特に、第2面では調査区西端の6・7区で大溝筋の名称に由来すると思われる堀1を検出した。ただし、本項では記述の都合上堀1と石組溝を一括して報告する。

堀・溝

堀および溝については大小の遺構が検出された。検出されたものは堀1以外では堀2・SD1~7がある。また、堀2・SD1・2は並行して検出されたもので一連の遺構である。SD4・5・6・7もこれに近い方向に軸をもつ。

堀2は幅2.0m、深さ0.9mで、N-20°-W前後に軸を持つ。堀の断面はU字形を呈し、毛抜き堀の形態をもつ。内部から多量の遺物が出土したが、出土した遺物は羽釜や瓦などが多く、時期は16世紀後半頃と考えられる。これに並行するSD1・2も軸方向は同一で、堀2に平行して掘削される。SD1が幅0.5m、深さ0.2m、SD2が幅0.4m、深さ0.15mである。堀2とSD1の幅が1.2m前後、SD1とSD2の間隔が0.9~1.3m前後を測る。

堀2からは土師器皿J99~J103・瓦質羽釜J109~J114・瀬戸美濃焼天日碗J104・初期伊万里焼皿J108・中国製青磁碗J105・J107・同皿J106・備前焼擂鉢J115・J116・丹波焼壺J117などが出土したが、J108は溝上層からの出土で混入と考えられる。

SD7は堀1の東側で検出され、北側で堀1と切り合うと推測される。規模は幅0.5~1.0m、深さ0.15m前後である。遺物は土師器皿J137・瀬戸美濃焼天目碗J138が出土している。

土坑

主として調査区の東側で大小の土坑が検出された。大半が廃棄土坑と考えられる。SK56は1区西端で検出されたが、大半が調査区外に位置する。かなり大型のものと考えられるが遺物の混入は少量で、埋土は段丘の地表面を掘削した土砂が充填されていた。何らかの施設の痕跡を中世末期に埋め立てたものと考えられる。

出土した遺物はSK50が古墳時代の須恵器杯身J118・中世後半の土師器皿J119、SK51土師器皿J120・志野焼碗J121・瓦質土器羽釜J122、SK52唐津焼皿J123・J124、SK53丹波焼擂鉢J125・唐津焼小碗J126・志野焼碗J127、SK54瀬戸美濃焼天日碗J128・唐津焼皿J124・備前焼擂鉢J130、SK55瀬戸美濃焼皿J132、SK52土師器皿J131などが出土した。

このほか、SK56土師器皿J133・備前焼擂鉢J134・J135、SK57丹波焼擂鉢J139、SK60軟質施釉陶器碗J136がある。

井戸1

井戸1は堀1の西肩付近で検出された、上層を土坑によって破壊される。遺物の出土が無かったが、切合いや埋土から中世の遺構と判断される。井戸は直径1.2mで深さ1.7mまで検出した。

堀1・石組溝

調査区の西端では大溝筋の語源となった石組溝と堀が重なって検出された。堀1・石組溝2・石組溝1の順に変遷したことが調査によって明らかになった。

大半が6区で検出された堀1は幅6m、検出面からの深さ2.7mを測る。断面形は逆台形で底はほぼ水平である。ただし、調査地区が交差点付近であることと、共同住宅への出入口に当たることから地区を縦分した調査となつたため、堀を完掘することができず、堀断面を断面調査で確認したにとどまつ

た。一方、堀1の南側である7区では堀が検出されず途切れることが判明し、この部分が虎口に相当することが明らかとなった。調査地点はまさに大溝筋から町屋域への結節点にあたることが確認された。

堀1の埋土は泥質土に多数の瓦片や木材片が混入した状態で、生活ゴミを廃棄しながら徐々に埋まつていった状況であった。このため廃棄時にはほとんど排水機能を果たさなかつたと推定される。堀1が埋まり排水機能を果たさなかつたことから、新たに石組溝が構築される。これが石組溝であるが2段階の改築がおこなわれており下層のものを石組溝2、上層のものを石組溝1とした。

石組溝2は検出範囲の規模は幅0.6m、深さ0.3mである。この溝は6区側が残されていたが、7区側では完全に破壊されて掘方のみが検出された。7区側は溝を通す目的から地山を掘削して石組溝を構築する。なお、石組溝の側面には石仮が転用されていた。

石組溝1は6・7区両側で検出された。軟弱地盤に構築した関係からか石組溝2を廃棄して、直上に石組溝1が構築される。規模は幅0.9m、深さ0.8mを測り、最大5段が確認された。石垣基底部には廻木が据えられ地盤の悪さを補っている。この溝の石組掘方の裏込め、石組み底部周辺から多量の遺物が出土した。また、石組溝の埋土には石炭殻が充填され、ガラス片も投棄されていた。

出土した遺物のうち固化したものはすべて石組溝掘方のものである。遺物には土師器皿、瓦質土器火鉢、瀬戸美濃焼皿、天日碗、唐津焼皿、丹波焼擂鉢、備前焼擂鉢、盤、萩焼小碗、肥前系染付碗、皿、型皿、鉢、関西系陶器碗など様々なものがある。

これらの遺物には瀬戸焼皿や広東碗が含まれることなどから石組溝1は明らかに19世紀前半までとする考えられる。このため、石組溝1の構築は石組溝2を補修し流れを改善するために幕末期に行われたと考えられる。

2. 遺 物

【第1面】(第118~121図、写真図版参照)

第1面の遺物は土師器皿、鍋、火鉢、陶器碗、皿、灯明皿、瓦質土器、磁器、陶器、関西系陶器擂鉢、など多種類のものがある。

土師器・土師質土器

土師器・土師質土器には皿・焰燈・焜炉・火消壺（胞衣壺）などがある。

皿・皿にはロクロ使用のものとロクロ未使用のものがある。さらに、ロクロ未使用のものは手づくねのものと型成型のものがある。口径では10cmを超える中皿と、未満の小皿がある。ただし、中皿はロクロ未使用で手づくねのものが占める。

焜燈は5個体を図化した。EタイプJ10・DタイプJ11・J46・J52・FタイプJ53がある。遺物の様相からするとDタイプに主流があるよう年代としては18世紀後半が主なものである。

焜炉は3個体J12・J78を図化した。火鉢はJ77がある。口が大きく開いたもので大部に高台がつく。J78と共に地下式貯蔵庫から出土した。近代以降のものである。

火消壺は2個体J72・J74の身、J73の蓋があるがどちらも胞衣壺に転用されたものである。J72は両者とも蓋を持つが、J72の蓋は削平によって消失していた。肩の張る個体で脚部は尻すぼみになる。

瓦質土器

瓦質土器には火鉢J76・J79・J216がある。このうち、J76は防空壕からの出土で近代に入る遺物である。J79は中世に見られるものである。口縁部の外面に菊文をスタンプする。

磁 器

磁器は肥前系磁器が大半を占める。肥前系の磁器には18世紀後半以降のものが多い。このほか1点であるがオランダ窯の磁器碗も出土した。

肥前系磁器は碗J38・丸碗J13・J14・J35・J36・J47・J49・J54・J55・J85、筒型碗J16・J17・J50・J22・鐘反碗J37・J223・J218・広東碗J219・蓋J58・皿J86・J87・J88・J226・J227・鉢J220・徳利・火入れJ56などがある。この他、青磁には碗J39・皿J91がある。

陶 器

陶器には関西系陶器・堺・明石焼系・京焼系・瀬戸焼・萩焼・丹波焼などがある。

関西系陶器 関西周辺で生産された関西系陶器にはさまざまなものがある。皿J34・火入れJ21・J22・J40・J56・水差J41・J71・鍋蓋J42・鍋J43・J65などである。堺・明石焼の擂鉢J62・63がある。

京焼系は碗J15・J18・J19・J89がある。半球碗になるもので、J19の底部には墨書が確認される。瀬戸焼は鉢J231がある。萩焼は碗J217のビラかけ碗がある。丹波焼は鉢J61・J75・壺J64・匣鉢J95・徳利J96・擂鉢J97・98がある。

土 製 品

土製の人形・ミニチュア・面子がある。人形・ミニチュアは多数出土した、図化したのはこのうち人形が人物像男性J66・女性J68・僧J67・馬J94、ミニチュアがお堂J69・鳥居J70、面子が渦文を表したJ92と錢貨を模造したJ93、丹波焼擂鉢を打ち欠いて転用したJ240がある。

【第2面】(第122~127図、写真図版141・144~153参照)

第2面からは壠1・壠2・SK50~57・60・61・SD8などから遺物が出土した。また、第1面上層の盛土内からも多量の遺物が出土した。このため、遺構面直上の遺物とこの盛土内の遺物を合わせて報告する。また、石組溝1・2の混入遺物で17世紀後半までのものも第2面で報告する。

土 師 器

土師器には皿J99・J103・J119・J120・J131・J133・J137・J140・J158・J258・壠J159・J241・羽釜J122・火鉢J160などがある。

土師器皿は手づくねのものである。口径12cm代までのものと、10cm未溝のもので占められる。小型のものには底部を隆起させたハソ皿状のものが含まれる。

瓦 貨 器

羽釜J109~114・茶釜J161がある。羽釜は口縁部に段を持ち大きな鋤が付く。外面下半はケズリ、内面には板ナデの痕跡が顕著に残る。

陶 器

陶器には備前焼・丹波焼・瀬戸美濃焼・唐津焼・湧焼がある。

備前焼は擂鉢J115・J116・J134・J135・J184~J189・J215・壺J257・壺J182・J183・花生J180・盤J190~J192・J181・J211・J232・J233・J252がある。

丹波焼は擂鉢J125・J139・J193~J201・J212~J214・J234・J253~J256・J262がある。

瀬戸美濃焼は丸皿J210・J259・鉄釉皿J167・ソギ皿J261・黄瀬戸大皿J249・碗J246・天日碗J138・J168・J169・J238・水滴J170・志野碗J121・皿J235・J260・瀬戸黒茶碗J44などがある。

唐津焼は碗J84・J126・J207・皿J51・J81・J123・J124・J129・J171~J177・J208・J209・J236・J

237・J239・J246・J250・J251がある。J81は絵唐津の大皿である。

漆焼は壺J202がある。口縁部の破片で短い頭部に玉縁状に丸く終える口縁部を持つ。外面に粗い平行タキを施す。

磁 器

磁器は肥前系磁器・中国産染付碗・皿、白磁皿・青磁碗のものがある。

中国産のものには染付小杯J136、碗J242・J243・J244・皿J162・J163・J244・J245、白磁皿J166、青磁碗J105・J107・J164・J165・皿J106がある。

肥前系磁器には初期伊万里碗・皿J108・J178などがある。

【瓦 類】(第128~131図、写真図版154・155参照)

調査区内からは多くの瓦が出土している。主に出土した場所は第1面では調査区東側の土坑群・石組溝1掘方などの周辺である。第2面では塙1の埋土内のものが目立っている。ここでは瓦類として第1面・第2面の順で報告を行う。

第1面のものは軒丸瓦J263~J265、軒平瓦J266、鬼瓦片J267がある。軒丸瓦は左巻の巴文で第2面のものは軒丸瓦がJ268~J270、軒平瓦がJ271~J273、丸瓦がJ274・J277~J282、平瓦がJ276、道具瓦がJ275である。この他、包含層出土のものに軒丸瓦J283・J284、平瓦J285~J290、平瓦J291・J292がある。

【金属製品】(第132~134図、写真図版157・158参照)

金属製品は錢貨、煙管、火箸が出土している。すべて第1面からの出土である。

錢貨 錢貨のうち、図化できたのは54枚である。本邦銭と渡来銭がある。

至元通寶JI1・JI2・皇宋通寶JI3・JI10・聖宋元寶JI4・熙寧元寶JI5・JI8・JI9・景德元寶JI6・紹聖元寶JI7・唐國通寶JI24・天喜通寶JI37が出土している。

本邦銭のうちJI11~JI15・JI18・JI23・JI25・JI26・JI32・JI34~JI36・JI39~JI41・JI45は古寛永に分類される。JI28~JI30・JI48は文鏡である。JI16・JI17・JI19~JI22・JI27・JI31・JI33・JI38・JI42~JI44・JI46・JI47・JI53は3期の新寛永である。JI50・JI51は1銭銅貨でJI50は昭和9年のJI51は大正10年鑄造の銘がある。JI52は5銭銅貨である。大正10年の銘がある。JI54は寛永通寶の鉄錢である。喫煙具 JI55は雁首である。火皿の下には袖補帶があり、脚部と雁首の間に段がある。胴部は断面が6角形に面取りされている。JI56・JI57は吸い口である。JI56は胴部から吸い口にかけて細くなる。JI57は、肩部に4条の凹線が巡る。

火箸 全長は23.2cmを測る。頭部は、断面が6角形で先が丸くなっている。

【石 製 品】(第134・135図、写真図版156参照)

石製品には砥石JS1、五輪塔JS3・JS5・JS6、一石五輪塔JS4、宝篋印塔JS7、石仏JS8~11・不明品JS2がある。JS2は端部に穿孔が認められ温石の可能性があるが滑石製ではないため結論できなかった。JS3は空・風輪、JS5は火輪、JS6は水輪である。JS6には南無阿彌陀仏が刻まれる。

3. 小 結

本地区的調査は伊丹停車場線に伴う最後の調査となった。この間、有岡城主郭南端および侍町と推定

されている大溝筋東側について調査をおこない、稠密に遺構が広がることを確認した。

以下、本地区の成果について遺構変遷の概略を述べてまとめとしたい。調査は前述のように2面に分けて実施したが、このうち第1面では1～5区で町屋、6・7区で酒蔵に関連する遺構を検出し、18世紀後半から近代まで継続して使用された生活面を検出した。この面の最終時期は昭和20年の軍用道路拡幅による道路接取期である。第2面は伊丹段丘地山面で検出した。土坑・溝・柱穴・堀などが検出され、西端では大溝筋として知られてきた有岡城期の堀（堀1）を始めて検出した。以上の経過を述る。ここでは第1面・第2面有岡城期以降～近世初頭・第2面伊丹城期・第2面中世段階・中世以前の段階の順で調査成果を概観する。

第1面（江戸時代後半～近代） 第1面は江戸期から近代まで継続しているが、面が形成されたのは盛土内に混入した遺物の様相から17世紀代で、これ以降、同一面で遺構が形成される。先に述べたように18世紀後半には町場化が進み、東側の大半で町屋、西端に酒蔵が検出されたが、この姿が近代まで継続したようである。特に酒蔵は蔵内部に大溝筋の石組溝1を取り込むこと、石組溝1の堀方内から近代の遺物が出土しないことから、成立は江戸期後半と推定される。建て替えなどを考慮に入れると、周辺の遺物の状況からは18世紀後半以降に建てられたと推定できる。

町屋から検出された遺構は近代に下るものと、近世後半のものが混在している。なかでも調査区東堀で検出された便所遺構は何度かの造り替えが見られるが近世後半から近代にかけて存続している。このうち、SK23などの埋桶のものは廐棄時に廐棄土坑として利用され多くの遺物を投棄していた。これらの遺物は18世紀後半から19世紀初頭のものが大半で、近世のものであることがわかっている。この中に瀬戸黒茶碗などの伝世品も投棄されていた。

このほか、近代に下るが4基の防空壕が検出された。これらは状況から屋敷の庭先に構築された小型の防空壕である。

調査区周辺には屋敷の建物に関連する遺構は検出されないため、道筋に面した屋敷地の前庭に位置した可能性がある。また、調査区の南端には棒状に加工した石材を使用するモルタル塗りの石組溝3が検出されているがこれは大手筋の旧道路の側溝と考えられる。

第2面（有岡城期～近世初頭） 第2面は柱穴など屋敷地内の遺構が多数検出されるとともに、堀1・2や溝などの区画施設が検出された。区画施設には大きく2時期が想定され、堀2・SD1・2などを中心とするものと堀1の時期が想定される。これらの堀・溝は前者が伊丹城期、後者が有岡城期と考えられる。有岡城期6・7区の堀1は南北方向に延びるが、7区の北端で途切れていた。規模は幅6m、深さ2.7mを測り、断面は箱型状で、堀底は水平であるが、側壁は急傾斜となる。堀の埋土は泥土が厚く堆積しており、上層には疊混じりのシルトが充填されていた。このため、堀は徐々に埋まっていたと考えられるが、最終期には堀浚えを行うことなく石組溝2が構築され、完全に埋められたと考えられる。堀埋土内の遺物の最終時期は17世紀後半である。このため堀埋没後に石組溝2が設置されたのは、堀の排水機能を継承するためであったと思われる。さらに、前述のようにその上層には19世紀代に石組溝1が構築され石組溝2が作り替えられる。堀1は、有岡城の侍町と町屋を区画する大溝筋に比定されるもので、今回が初めての検出となった点で注目される。大溝筋は南北に有岡城を区切り、外郭の惣構えに次ぐ有岡城の防衛ラインである。

第2面（伊丹城期） 16世紀代の遺構である堀2は調査区東寄りで検出された。西側に斜行する堀で、中世段階の区画と考えられる。調査区内の区画溝は（SD1・2・4・5・7）は大半がこの方向に近い

軸を持つ。これらのうちSD7は北側で掘1に切られる。のことから区画溝に沿う遺構群は有岡城期よりも古い一群と評価でき、16世紀代と考えられる。

堀2と5区のSD02までの間隔からすると屋敷地は1辺20m前後で区画される。一方、伊丹市教委調査の第151次調査ではこれにつながる堀2の南辺および東辺が検出され1辺40m前後の区画を開む溝があることが確認されている。この他、堀2内からは多くの中世瓦が出土したが、これらは付近の寺院を破壊して投棄した可能性が考えられる。

このように、調査地点周辺の伊丹城期には区画溝で囲まれた屋敷地が展開すること、多数の柱穴出土から内部には掘立柱建物が多数建っていたことが明らかにできた。調査区の制約から屋敷の規模や様相を明らかにすることはできなかったが、今回の調査によって16世紀代の遺構が広がり、有岡城期以前に周辺が屋敷地化していたことが明らかになった。

第2面（中世以前）以上の他、第2面には古墳時代の埴輪・須恵器、中世前半（13~14C）の遺構・遺物も出土した。中世前半では瓦器や東播系須恵器が出土し、古墳時代のものとしては埴輪や須恵器杯身などが出土している。

第41表 J地区遺物觀察表 1

土器・陶磁器								
第1面								
番号	出土地点	種別	基種	法 量 (cm)			成型・調整技法の特徴・文様	備考
				口径	部高	底径		
J1 SK 5	土師器	瓶	6.60	1.20	2.30	私部斜切り盤、体剖を斜め上方に立ち上げる		
J2 SK 5	土師器	瓶	6.40	1.30	3.25	私部斜切り盤、体剖を斜め上方に立ち上げる		
J3 SK 5	土師器	瓶	(7.00)	1.60	3.80	手づくね皿、外側に唇頭痕跡	灯明皿	
J4 SK 5	土師器	瓶	(7.25)	(1.70)	—	手づくね皿、外側に唇頭痕跡		
J5 SK 5	土師器	瓶	7.35	1.55	—	手づくね皿、外側に唇頭痕跡		
J6 SK 5	土師器	瓶	12.00	2.60	—	手づくね皿、外側に唇頭痕跡	灯明皿	
J7 SK 5	土師器	瓶	(11.70)	(2.85)	—	手づくね皿、外側に唇頭痕跡	灯明皿	
J8 SK 5	土師器	瓶	11.45	2.85	—	手づくね皿、外側に唇頭痕跡		
J9 SK 5	土師器	瓶	(11.60)	2.30	—	手づくね皿、外側に唇頭痕跡		
J10 SK 5	土師器	壺	(29.40)	(5.20)	(31.00)	酒呑タイプ		
J11 SK 5	土師器	壺	(31.10)	(6.20)	—	壺Gタイプ		
J12 SK 5	土師器	壺	—	(11.40)	(12.10)	麻縫目で		
J13 SK 5	埴輪馬	馬	9.40	5.10	4.10	丸輪、外面に窓のスタンプ文		
J14 SK 5	埴輪馬	馬	(9.80)	(5.00)	(3.80)	丸輪、外面に窓のスタンプ文		
J25 SK 5	青磁	瓶	—	(3.45)	(4.65)	薄緑の光沢のある青磁		
J16 SK 5	埴輪馬	馬	(8.20)	(5.50)	—	精型馬		
J17 SK 5	青磁樂付	杯	—	(5.10)	(4.10)	白磁の内面に四方唐文		
J18 SK 5	馬陶馬	馬	(10.40)	5.30	4.20	羊蹄張		
J19 SK 5	施釉馬	馬	—	(2.20)	(4.40)	高台に墨書き	京焼系	
J20 SK 5	青磁	瓶	(13.10)	3.79	(7.60)	内面シニヤク印押の五弁花と体部に墨書き、外面松枝文	肥前系	
J21 SK 5	青磁	大入れ	—	(6.40)	(5.80)	角型	國內系	
J22 SK 5	青磁	大入れ	—	(6.40)	(5.80)	角型	國內系	
J23 SK 5	埴輪樂付	花瓶	—	(11.30)	4.80	額部に墨書き	肥前系	
J24 SK20	施釉陶器	皿	5.80	1.10	2.10	底部斜切り	灯明皿	
J25 SK20	施釉陶器	皿	6.80	1.35	3.30	底部斜切り	灯明皿	
J26 SK20	施釉陶器	皿	(6.80)	1.15	3.30	底部斜切り	灯明皿	
J27 SK20	施釉陶器	皿	6.95	1.25	3.70	底部斜切り	灯明皿	
J28 SK20	施釉陶器	皿	6.95	1.30	3.85	底部斜切り	灯明皿	
J29 SK20	施釉陶器	皿	(11.90)	(2.10)	—	体部外面の水巻き底部斜切り		
J30 SK23	美濃燒	小皿	(7.60)	(1.40)	—			
J31 SK23	十郎部	皿	9.65	1.90	—	手づくね		
J32 SK23	十郎部	皿	13.10	2.25	—	手づくね		
J33 SK22	十郎部	皿	(9.20)	(1.70)	—	手づくね(今手)		
J34 SK22	信生焼	皿	(11.80)	(2.70)	(4.50)	内面ヨリズヒ上面半まで施釉。内面に海綿き		
J35 SK22	染付磁器	碗	10.10	4.85	4.05	丸輪、外周朱吹文	肥前系	
J36 SK22	染付過濾器	器	10.30	5.25	4.00	丸輪、外周朱吹文	肥前系	
J37 SK22	染付過濾器	器	8.90	4.90	3.70	蓮口・網、見込み文字	肥前系	
J38 SK22	染付過濾器	器	—	—	外周朱吹文	肥前系		
J39 SK22	青磁	碗	(9.30)	7.40	(5.40)	薄緑の光沢のある青磁		
J40 SK22	施釉陶器	大入れ	5.95	3.10	5.85	薄作り、口に縁通しを内面に少し作る	関西系	
J41 SK22	施釉陶器	水差	6.90	9.10	7.35	達がねと取手を持つ、脚部は筒状で内縁部は巻受けを持つ	関西系	
J42 SK22	施釉陶器	盆	(16.00)	3.69	4.20	堀吹。輪状の取手、園庭に囲まれた施釉	関西系	
J43 SK22	施釉陶器	土鍋	13.30	7.50	6.00	底部に小さな3足。口縁部に巻受けを持つ	関西系	
J44 SK22	土器	茶碗	11.00	7.55	4.70	厚い褐色の施釉を施す。高台辺には青筋(12世紀前半)	関西系	
J45 SK22	土器	皿	(11.60)	(1.65)	—	手づくねで内面の低い乳頭	灯明皿	
J46 SK22	土器	壺	(30.00)	(8.40)	—	底部斜くらり、壺Gタイプ		
J47 SK22	土器	壺	(9.20)	(4.00)	—	外周に直樹枝文	肥前系	
J48 SK22	土器	壺	—	—	内面シニヤク印押の五弁花と体部に墨書き、外面アラベスク文	肥前系		
J49 SK22	土器	壺	(9.90)	5.30	(4.00)	丸輪、外周朱吹文、高台に巻葉	肥前系	
J50 SK22	土器	壺	(8.00)	(5.20)	—	筒脚、外周朱吹文、内周巻葉に高台棒文	肥前系	
J51 SK22	青磁	皿	(14.80)	2.50	(5.10)	薄い褐色の施釉を施す。口縁部を外方につむり		
J52 SK22	土師器	壺	(28.70)	(4.48)	(28.20)	底部斜くらり、壺Gタイプ		
J53 SK22	土師器	壺	27.40	(6.40)	—	底全体巻出作り、壺Gタイプ		
J54 SK22	土師器	壺	9.50	5.10	3.75	丸輪、外周草花文、高台に巻葉	肥前系	
J55 SK22	土器	壺	10.65	5.75	4.45	丸輪、外周朱吹文、高台に巻葉	肥前系	
J56 SK22	施釉陶器	火入れ	(10.15)	7.15	4.60	外周に巻葉と巻葉	肥前系	
J57 SK22	陶器	壺	9.80	5.90	4.40	半段繩	京焼系	
J58 SK22	陶器	壺	9.60	3.30	4.20	口縁部内面に五弁花、底部周間に二重垂繩、体部に回文脚文	肥前系	
J59 SK22	東洋造貝	皿	—	7.00	—	底脚部		
J60 SK22	施釉陶器	鉢	—	(4.80)	(6.95)	底部斜くらり、体部は腰から外側を内方に立ち上げる		
J61 SK22	丹波燒	鉢	23.00	9.60	13.95	片口鉢、体部ない外側に水巻き底部斜切り		
J62 SK22	陶器	壺	(27.50)	10.00	(14.00)	蜜な脚部と強化して脚部	唐・明石系	
J63 SK22	陶器	壺	39.50	14.40	16.60	蜜な脚部と強化して脚部	唐・明石系	
J64 SK22	丹波燒	壺	18.10	21.30	12.60	内外共に施釉。口縁に脚部を持つ		
J65 SK22	施釉陶器	鉢	(20.80)	(7.85)	—	茶色の施釉。口縁部に取手を出す穴を持つ	関西系	

第42表 J地区遺物観察表2

土器・陶磁器								
第1面								
番号	出土地点	種別	器種	法 量 (cm)			成型・調整技術の特徴・文様	備考
				口径	高さ	底径		
J66	SK29	土製品	人形	長(5.60)	幅3.50	厚さ2.10	壓押し成型、人形	
J67	SK29	土製品	人形	高(5.85)	幅2.90	厚さ2.10	壓押し成型、透無施	
J68	SK29	土製品	人形	高(6.60)	幅3.65	厚さ2.20	壓押し成型、人形	
J69	SK29	土製品	ミニチュア	高2.15	幅2.60	厚さ1.20	製作ミニチュア計量	
J70	SK30	土製品	ミニチュア	高4.30	幅6.50	厚さ1.50	製作ミニチュア	
J71	SK30	透無施器	人形	(11.60)	6.10	4.70	内面および外腹に平まで施施。高台肩刃は露胎	開口系
J72	透無施1	土師器	透無施	11.65	16.50	12.25	口が張り、口縁部は受け盡になる	火消し窓
J73	透無施2	土師器	透無施	13.95	4.05	—	角ばった形態で火消にはまみが付く	火消し窓
J74	透無施2	土師器	透無施	11.20	17.70	11.40	肩が張り、口縁部は受け盡になる	火消し窓
J75	透無施1	火鉢	鉢	20.00	13.80	10.80	砂色の陶器を泥で掛けする。口縁上端に圓孔をつける	
J76	透無施1	瓦質土器	火鉢	(27.75)	(25.30)	(25.00)	駆状の高さを持つ。口縁部は内面し厚くなる	
J77	透無施1	土師器	鉢	17.90	10.30	14.30	駆状の高さに透孔小丸機、底部内面に突出物をもつ	
J78	透無施1	土製品	透無施	(23.95)	21.65	22.25	内面2重底。漏止めをもたらし、前面に方形の窓を開ける	
J79	透無施	瓦質土器	火鉢	—	(4.70)	(32.90)	口縁外側に範文のスタンプ。中段の火鉢	直火火鉢
J80	透無施	土如器	羽釜	—	(6.45)	—	弱の破片	
J81	透無施	唐津焼	皿	—	(3.30)	—	透青深井、内面に抽象化した植物文	
J82	透無施	唐津焼	皿	(10.25)	3.60	(3.40)	動輪台や舟形は透青する。直火火鉢	
J83	透無施	唐津焼	皿	12.00	3.65	4.75	内面に織目を持つ。高台脚輪	
J84	透無施	唐津焼	碗	(8.80)	6.10	(4.40)	脚付だら高台、高台脚沼露胎	
J85	透無施	鳥付透器	碗	—	(4.90)	3.85	外面一重柄子	肥前系
J86	透無施	鳥付透器	皿	9.80	3.00	5.50	壓押し直し、口縁部に花弁、内面に舟弁化、体部にコンニャク印押	肥前系
J87	透無施	青磁付透器	皿	(9.50)	(2.75)	(3.60)	内面五乳頭、山形圓窓	
J88	透無施	染付透器	皿	(13.70)	3.90	8.30	内面花弁文、外面アラベスク文、鶴の日高台	
J89	透無施	無地透器	碗	—	(2.30)	(5.00)	裏蓋片、内面に幾層山田水園	京焼系
J90	透無施	釉付透器	碗	(12.00)	(5.85)	—	内外面に植物文	オランダ家
J91	透無施	青磁	棒	(15.30)	4.50	(6.00)	壓押し直し、刷毛で表表	肥前系
J92	透無施	土製品	妻子	透2.00	—	厚さ0.85	壓押し成型、直火。瓶	
J93	透無施	土製品	妻子	長(3.10)	幅(3.80)	厚さ0.80	壓押し成型、直火。瓶	
J94	透無施	土製品	ミニチュア	高(4.30)	幅(4.90)	—	壓押し成型、馬	
J95	透無施	丹波焼	鉢	11.85	6.20	10.35	碧眼の御用品	
J96	透無施	丹波焼	利器	2.40	14.40	7.30	外面上に施施。体部下平削り	
J97	透無施	丹波焼	利器	(33.30)	(8.85)	—	上方に壓押し、縫合に凹線。即日は密な縫接さ	
J98	透無施	丹波焼	棒体	(34.50)	(14.75)	(17.30)	上方に圧押し、縫合に凹線。即日は密な縫接さ	
第2面								
J99	第2	土師器	皿	6.50	1.40	2.50	へ皿。手づくね、内面および口縁部を擦ナデ	
J100	第2	土師器	皿	(9.40)	1.35	—	手づくね、内面および口縁部を擦ナデ。外面部指痕跡	灯明系
J101	第2	土師器	皿	7.20	1.10	—	手づくね、内面および口縁部を擦ナデ	灯明系
J102	第2	土師器	小皿	7.65	1.25	—	手づくね、内面および口縁部を擦ナデ。外面部指痕跡	
J103	第2	土師器	小皿	8.30	2.95	3.70	手づくね、内面および口縁部を擦ナデ。ナデ抜き跡	
J104	第2	唐津焼	天日碗	(10.50)	6.20	4.40	露胎焼	
J105	第2	青磁	碗	(15.00)	(4.00)	—	露胎文鏡。露胎片	
J106	第2	磁器	皿	(12.15)	3.10	(5.00)	口縁部外側、露胎の露胎	
J107	第2	青磁	皿	—	(2.90)	(4.50)	露胎文鏡。露胎片	
J108	第2	染付透器	皿	—	(2.05)	4.60	内面植物文。高台に押付	
J109	第2	瓦質土器	羽釜	(21.10)	(8.20)	(27.60)	有段羽釜、内面ガタガタ、外面下平ケズリ露胎	初期伊万里
J110	第2	瓦質土器	羽釜	(20.30)	(7.16)	—	有段羽釜、内面ガタガタ、外面下平ケズリ露胎	
J111	第2	瓦質土器	羽釜	(19.70)	(9.26)	—	有段羽釜、内面板ナデ、外剝下平ケズリ露胎	
J112	第2	瓦質土器	羽釜	(20.20)	(7.30)	(36.60)	有段羽釜、内面ガタガタ、外面下平ケズリ露胎	
J113	第2	瓦質土器	羽釜	(20.30)	(11.50)	—	有段羽釜、内面板ナデ、外面下平ケズリ露胎	
J114	第2	瓦質土器	羽釜	(20.30)	(6.45)	(39.00)	有段羽釜、内面ガタガタ、外面下平ケズリ露胎	
J115	第2	須燒他	種鉢	(31.70)	(10.40)	—	口縁部を下方に張張する	NB型
J116	第2	無地物	種鉢	(29.60)	(6.70)	—	口縁部を下方に張張する	NB型
J117	第2	須燒他	器	(25.70)	(7.80)	—	口縁部を外側に拡張を上方につむる。内面に粗粒合部露胎が残る	
J118	SK30	須燒他	種鉢	—	(3.05)	(14.00)	体部下平削軋アズメ	古墳時代
J119	SK30	土如器	小皿	6.55	1.45	—	手づくね、内面および口縁部擦ナデ	
J120	SK31	土如器	皿	(13.70)	1.90	—	手づくね、内面および口縁部擦ナデ。底部部焼明透	
J121	SK31	志野焼	碗	(10.60)	(5.20)	(4.70)	気泡の目立つ低火度陶質を施粘。器の尻より露胎	
J122	SK31	土如器	碗	(24.70)	(7.30)	(33.00)	背段羽釜、内面板ナデ、外面下平ケズリ露胎	
J123	SK32	摩�	皿	(12.10)	3.50	5.10	脚點。体部は中央で二の字に折れる	
J124	SK33	摩�	碗	—	—	—	内寄しながら立ち上がる体部	
J125	SK33	舟波焼	種鉢	—	(5.70)	—	口縁部は方型になる	
J126	SK33	舟波焼	碗	—	(2.75)	(4.00)	露胎片	
J127	SK33	施釉透器	皿	—	(2.15)	(7.30)	裏い黄色釉	
J128	SK34	施釉透器	瓦質碗	(10.80)	(5.40)	(3.90)	強い器底	
J129	SK34	宿泊	碗	—	(2.40)	5.55	底脚部	

第43表 J地区遺物観察表 3

土器・陶器類				法 量 (cm)			成形・調整技術の特徴・文様	備 考
番号	出土地点	種別	器種	口径	器高	底厚		
第 2 面								
J130	SK54	骨前鏡	縦鉢	—	(5.25)	—	口縁部が拡張し、内面に面を持ち、縁寄せに凹線	16c末
J131	SK59	土器群	灯明皿	8.70	1.80	—	手づくね、内面および口縁部を櫛ナラ。外面部鏡痕跡	
J132	SK58	唐戸高臺鏡	杯	(16.40)	(2.60)	(5.10)	ソギ窓。口縁部が外反し、縁寄せを上方につける	
J133	SK56	土器群	皿	(9.20)	(1.72)	(4.70)	手づくね、内面および口縁部を櫛ナラ。外面部鏡痕跡	
J134	SK56	骨前鏡	縦鉢	(26.00)	(4.35)	—	口縁部を上方に拡張する	VB期
J135	SK56	骨前鏡	縦鉢	(27.80)	(7.30)	—	口縁部を上方に拡張する	VB期
J136	SK60	朱付追尋	小杯	—	(1.40)	(2.40)	手づくね、内面および口縁部を櫛ナラ。外面部鏡痕跡	中國唐
J137	SD 7	土器群	小皿	(8.00)	(1.60)	—	厚手で内面および口縁部を櫛ナラする	
J138	SD 7	唐戸高臺鏡	天日杓	(11.80)	4.30	—	外面部褐色の鏡面。体部は外開き気味で口縁部は直立する	
J139	SK57	内後鏡	縦鉢	(25.40)	(8.80)	—	一本指の御印。口縁部は丸く見える。外面部鏡痕跡	
J140	包含層	土器群	小皿	7.50	1.60	—	手づくね、内面および口縁部を櫛ナラ	
J141	包含層	土器群	小皿	(7.10)	1.30	—	手づくね、内面および口縁部を櫛ナラ。底部やや丸がる	
J142	包含層	土器群	小皿	(7.40)	1.80	—	手づくね、内面および口縁部を櫛ナラ。外面部鏡痕跡	打明星
J143	包含層	土器群	小皿	(7.40)	1.40	—	手づくね、内面および口縁部を櫛ナラ。外面部鏡痕跡	
J144	包含層	土器群	小皿	(8.40)	1.80	—	手づくね、内面および口縁部を櫛ナラ。外面部鏡痕跡	
J145	包含層	土器群	小皿	7.40	1.85	—	手づくね、内面および口縁部を櫛ナラ。外面部鏡痕跡	
J146	包含層	土器群	小皿	(8.90)	(1.60)	(4.00)	手づくね、内面および口縁部を櫛ナラ。底部やや丸がる	
J147	包含層	土器群	小皿	(9.80)	(1.50)	—	手づくね、内面および口縁部を櫛ナラ。底部やや丸がる	
J148	包含層	土器群	小皿	8.70	1.70	—	手づくね、内面および口縁部を櫛ナラ。底体部略明瞭	
J149	包含層	土器群	小皿	8.96	1.80	5.20	手づくね、内面および口縁部を櫛ナラ。底体部略明瞭	
J150	包含層	土器群	皿	8.45	2.00	3.50	手づくね、内面および口縁部を櫛ナラ。外面部鏡痕跡	
J151	包含層	土器群	皿	9.10	1.55	—	手づくね、内面および口縁部を櫛ナラ。外面部鏡痕跡	
J152	包含層	土器群	皿	9.65	1.75	—	手づくね、内面および口縁部を櫛ナラ。外面部鏡痕跡	
J153	包含層	土器群	皿	9.70	2.30	—	手づくね、内面および口縁部を櫛ナラ。外面部鏡痕跡	
J154	包含層	土器群	皿	(16.40)	(2.00)	—	手づくね、内面および口縁部を櫛ナラ。底体部略明瞭	
J155	包含層	土器群	灯明皿	(11.65)	(2.30)	—	手づくね、厚手の製品。内面および口縁部を櫛ナラ。底体部略明瞭	
J156	包含層	土器群	皿	(11.40)	(2.00)	(7.20)	手づくね、内面および口縁部を櫛ナラ。底体部略明瞭	
J157	包含層	土器群	皿	(12.80)	(2.60)	—	手づくね、内面および口縁部を櫛ナラ。外面部鏡痕跡	
J158	包含層	土器群	皿	(12.80)	2.45	—	手づくね、内面および口縁部を櫛ナラ。外面部鏡痕跡	
J159	包含層	土器群	皿	(26.75)	(4.80)	—	外面部に平手アタリ	
J160	包含層	土器群	火鉢	(25.30)	(5.20)	—	直立する体形。口縁部は侈外側に貼り付ける	
J161	包含層	瓦束上器	茶釜	(17.30)	(10.40)	—	外面部に背を持ち、双手の経過で穴を持つ。口縁部は対立する	
J162	包含層	安付透透	皿	—	(1.30)	(9.20)	渦!無、内面芯文	中國唐
J163	包含層	安付透透	皿	—	—	渦!無、内面芯文	中國唐	
J164	包含層	青磁	碗	(16.40)	(4.40)	—	講義文、網目、波打綺で簡略化した審美を表現	中国宋
J165	包含層	青磁	碗	(14.00)	(4.40)	—	講義文、網目、波打綺で進歩を表現	中国宋
J166	包含層	白磁	瓶	(10.20)	3.05	(4.85)	雄反り頭	中国宋
J167	包含層	唐戸高臺鏡	皿	(11.10)	2.40	(5.80)	鉄脚部。外反し外開きになる体部	
J168	包含層	唐戸高臺鏡	火口瓶	(35.30)	(8.85)	—	鉄脚。口縁部	
J169	包含層	唐戸高臺鏡	天日杓	—	(1.95)	5.30	鉄脚。底部部片	
J170	包含層	唐戸高臺鏡	水滴	—	(2.80)	3.40	鉄脚。袋状の唇形	
J171	包含層	陶器	皿	—	(2.00)	4.30	半透墨縫	肥前系
J172	包含層	陶器	皿	—	(2.20)	4.60	半透墨縫	肥前系
J173	包含層	唐戸鏡	皿	(13.30)	4.05	4.80	—	
J174	包含層	唐戸鏡	皿	—	(1.60)	(5.00)	—	
J175	包含層	吉洋鏡	皿	11.70	6.40	4.70	雄店津	
J176	包含層	吉洋鏡	碗	—	(4.20)	5.95	雄店津	
J177	包含層	尼山高臺鏡	碗	(13.30)	4.05	(3.65)	—	
J178	包含層	吉付透透	皿	—	(2.10)	4.30	—	
J179	包含層	吉付透透	盤	(16.90)	6.45	7.40	口縁部をやや尖らし気味に上方に立ち上げる	東播磨
J180	包含層	内前鏡	火入れ	—	(6.15)	10.80	体部を屈曲させる	
J181	包含層	青磁	盤	—	3.20	—	口縁部を梅花にする	
J182	包含層	青前鏡	盤	(10.50)	(5.35)	—	肩部に波打綺をなし、口縁部は短く玉縁が付く	V期
J183	包含層	青前鏡	盤	(10.20)	(10.25)	—	肩部に波打綺をなし、口縁部は短く玉縁が付く	V期
J184	包含層	瓦束上器	縦鉢	—	(4.60)	—	三角形の口縁部	VA人類
J185	包含層	青前鏡	縦鉢	—	(3.90)	—	三角形の口縁部	VA人類
J186	包含層	青前鏡	縦鉢	(36.00)	(6.20)	—	口縁部は上方に屈曲し縁巻状になる	VB期
J187	包含層	青前鏡	縦鉢	(34.40)	(5.60)	—	口縁部は上方に屈曲し縁巻状になる	VB期
J188	包含層	青前鏡	縦鉢	(36.00)	(9.35)	—	口縁部は上方に屈曲し縁巻状になる。縁巻にナラによる凹凸がある	V期
J189	包含層	青前鏡	縦鉢	(33.40)	13.90	(11.20)	口縁部は上方に屈曲し縁巻状になる。縁巻にナラによる凹凸がある	V期
J190	包含層	青前鏡	縦	(33.30)	5.65	(25.95)	体部は外方に開き、口縁部は小さな丸錐状になる	V期
J191	包含層	青前鏡	盤	(33.30)	6.10	(24.40)	体部は外方に開き、口縁部は小さな丸錐状になる	V期
J192	包含層	青前鏡	盤	(31.20)	5.20	(25.00)	体部は外方に開き、口縁部は小さな丸錐状になる	V期
J193	包含層	丹波鏡	縦鉢	(31.60)	(8.00)	—	1本脚の御印。口縁部は丸く見える	16c
J194	包含層	丹波鏡	縦鉢	(34.30)	(6.90)	—	1本脚の御印。口縁部はやや尖らし気味におえる	16c

第44表 J地区遺物類容表 4

土器・陶器									
第2面									
番号	出土地点	種別	器種	法 量 (cm)			成形・調製法の特徴・文様	備 考	
				口径	器高	底径			
J196	包含層	丹波造	壺体	長(3.10)	幅(3.80)	厚(0.80)	1本挽の跡目。口縁部はやや角ぼり、内縫する	16c	
J196	包含層	丹波造	壺形	—	(10.80)	—	1本挽の跡目。口縁部は丸くおえる	16c	
J197	包含層	丹波造	壺形	(30.50)	(5.25)	—	帶縫の跡目。口縁部は下位に凹窓	17c前半	
J198	包含層	丹波造	壺形	—	(8.00)	—	帶縫の跡目。口縁部内側下位に凹窓	17c前半	
J199	包含層	丹波造	壺形	—	(8.10)	—	帶縫の跡目。口縁部内側下位に凹窓	17c前半	
J200	包含層	丹波造	壺形	(30.20)	(7.50)	—	帶縫の跡目。口縁部内側下位に凹窓	17c中頃	
J201	包含層	陶器	壺形	(35.30)	(7.70)	—	帶縫の跡目。口縁部内側下位に凹窓	17c中頃	
J202	包含層	陶器	壺形	(33.70)	(7.10)	—	外縁に低い平行なタキ。口縁部は丸縦状になる	憑依	
J203	石垣南1	施釉陶器	壺	5.40	0.90	—	いわゆる施釉壺。透明釉をかける	灯明皿	
J204	石垣南1	施釉陶器	壺	5.60	1.05	—	いわゆる施釉壺。透明釉をかける	灯明皿	
J205	石垣南1	土器	壺	(6.40)	1.60	—	手づくぬ形。外縁に微細鉢底	灯明皿	
J206	石垣南1	土器	壺	(11.45)	2.40	—	手づくぬ形。外縁に微細鉢底	灯明皿	
J207	石垣南1	唐津陶	壺	—	(3.60)	(4.20)	施鉢片。西台窯系青釉		
J208	石垣南1	唐津陶	壺	—	(1.75)	(1.80)	施鉢片。西台窯系青釉		
J209	(超深奥)	夷奈陶	壺	—	(2.50)	4.85	施鉢片。麻白刷毛施釉		
J210	石垣南1	夷奈陶	壺	(10.70)	2.10	(6.20)	丸底。外縁引きの跡目で口縁部を玉縁状にする	16c	
J211	石垣南1	備前陶	盤	(27.35)	(5.25)	—	口縁部は内側に内向きで丸くおえる	16c	
J212	石垣南1	丹波造	壺形	—	(4.80)	—	口縁部は内側に内向きで丸くおえる	16c	
J213	石垣南1	丹波造	壺形	—	(8.60)	—	1本挽の跡目。口縁部は丸くおえる	16c	
J214	石垣南1	丹波造	壺形	(31.90)	(6.65)	—	1本挽の跡目。口縁部は丸くおえる	16c	
J215	石垣南1	備前陶	壺形	(37.30)	(6.00)	—	口縁部は内側に内向きの放状の跡目	16c末	
J216	石垣南1	瓦戸井	火鉢	(20.00)	(4.50)	—	口縁部火鉢。底立ての口部		
J217	石垣南1	萩焼	壺	(7.75)	(4.40)	—	ビラ剥け網		
J218	石垣南1	染付磁器	碗	(10.40)	(4.00)	—	堆疊引き。内縁部開口文	肥前系	
J219	小船塚1	舟付	廣口瓶	(9.80)	5.15	(5.00)	底突起。外縁に乳突物		
J220	小船塚1	舟付	廣口瓶	(13.20)	5.89	(3.70)	堆疊引き。外縁開口文。円窓		
J221	石垣南1	吉備	壺	(14.20)	(3.80)	—	外縁に織目模様の人字		
J222	石垣南1	吉備	壺	—	(2.10)	3.20	施飲み柄。外縁開口文。内縁部開口文、外縁花文		
J223	石垣南1	染付磁器	壺	(6.00)	5.15	(3.40)	堆疊引き。口縁部開口文、外縁花文		
J224	石垣南1	染付磁器	壺	(12.70)	6.70	(5.20)	輪花面	肥前系	
J225	石垣南1	吉備	壺	(13.35)	6.05	6.00	底花を基盤し型壓	肥前系	
J226	石垣南1	舟付磁器	壺	(14.80)	3.85	(10.20)	外縁アラベスク文、内面山水画	肥前系	
J227	石垣南1	舟付磁器	壺	(9.40)	2.80	5.40	口縁部内側に花文	肥前系	
J228	石垣南1	舟付磁器	壺	(20.70)	7.90	—	内縁部に豪華な花文	肥前系	
J229	石垣南1	舟付磁器	壺	(14.80)	2.80	—	型壓し方角。内面窓にコンニャク印押	肥前系	
J230	石垣南1	舟付磁器	壺	(13.50)	4.90	(2.30)	型壓しで口縁部方角、外縁アラベスク文、内面山水画	肥前系	
J231	石垣南1	萩	壺	(28.30)	6.90	(13.00)	型壓し方角。内面窓にコンニャク印押	肥前系	
J232	石垣南1	舟付	盤	(35.40)	5.90	—	綴め上方に立ち上る花がる千鳥	肥前系	
J233	石垣南2	前田虎	盤	(40.80)	7.75	(3.60)	口縁部に勝手文。引半手		
J234	石垣南2	丹波造	壺形	—	(12.65)	—	1本挽の跡目。口縁部は彎曲する		
J235	石垣南2	舟付	盤	—	(1.80)	(6.60)	底鉢片。白濁した釉を拘飾		
J236	石垣南2	舟付	盤	—	(13.30)	4.10	5.05	底鉢片。砂目	
J237	石垣南2	舟付	盤	—	(1.85)	4.85	底鉢片。砂目		
J238	石垣南2	舟付	天日鏡	—	(5.10)	—	华部片		
J239	石垣南2	舟付	鏡	—	(3.80)	4.60	口縁部に勝手文。引半手		
J240	石垣南2	舟付	鏡	長(6.15)	幅(6.00)	厚(0.60)	口縁部。底鉢片。内側花文を鏽く。黑色の絞を掛ける。舟付鏡		
J241	新1中層	土器	壺	(17.40)	(4.20)	—	外縁に古びがりの平行なタキがわざりに解離される	中国製	
J242	新1中層	舟付磁器	壺	(9.75)	(2.70)	—	口縁部。外縁に花文を鏽く	中国製	
J243	新1中層	舟付磁器	壺	(14.60)	(4.20)	—	底鉢片。外縁に墨文を鏽く	中国製	
J244	新1中層	舟付磁器	壺	—	(1.70)	(5.10)	底鉢片。底鉢片に團彌	中国製	
J245	新1中層	舟付	壺	—	(2.65)	—	内縁に墨山文	中国製	
J246	新1中層	舟付	壺	(12.30)	2.45	(4.00)	変形口部	中国製	
J247	新1中層	舟付	壺	(2.10)	(6.30)	—	底鉢片。底鉢片を持つ	中国製	
J248	新1中層	舟付	壺	—	—	—	底鉢片。凹向い高台を持つ	中国製	
J249	新1中層	舟付	壺	(27.30)	4.60	(3.60)	内縁に花文。墨物底で口縁部は外方に折る。黄腹丹大		
J250	新1中層	舟付	壺	(11.75)	3.40	3.90	混合底に青釉		
J251	新1中層	舟付	壺	—	(2.55)	(4.60)	混合底に青釉		
J252	新1中層	唐津陶	盤	(27.30)	5.15	(16.10)	内縁しながら立ち上る体部	V期	
J253	新1中層	丹波造	壺形	(27.50)	(8.10)	—	1本挽の跡目。口縁部はやや角ぼり	16c	
J254	新1中層	丹波造	壺形	(52.80)	15.10	(12.60)	1本挽の跡目。口縁部は丸くおえる	16c	
J255	新1中層	丹波造	壺形	(29.00)	6.95	—	1本挽の跡目。口縁部はやや角ぼり	16c	
J256	新1中層	丹波造	壺形	(36.20)	7.00	—	1本挽の跡目。口縁部は丸くおえる	16c	
J257	新1中層	便	便	—	(7.65)	—	絞被した玉縁。外縁に花文を施す	V期	
J258	新1下層	土器	小皿	(8.20)	(2.00)	—	内外壁に横ナギ。外縁に指痕痕跡		
J259	新1下層	陶器	小皿	—	—	—	丸皿		
J260	新1下層	野付	皿	(10.50)	1.90	(5.70)	内側した釉。器表に气泡が立つ		
J261	新1下層	漁舟南燒	皿	(10.80)	2.60	5.90	サギ皿		
J262	新1下層	丹波造	壺形	(27.35)	(8.40)	—	寶縫の跡目。口縁部は丸くおえる	16c	

第45表 J地区遺物観察表5

瓦類										備考			
番号	出土場所	種別	器種	測量 (cm)	測定・調査法の特徴・又種	測量	幅	高さ	幅				
J263	SK01	瓦	軒丸瓦	長(3.20) 幅(14.25)	高 6.50 左巻き巴文、12個の珠文	高 6.50	左巻き巴文、12個の珠文	高 6.50	2.5	近世瓦			
J264	SK02	瓦	軒丸瓦	長(2.60) 幅(14.70)	高 2.70 左巻き巴文、12個の珠文	高 2.70	左巻き巴文、12個の珠文	高 2.70	2.5	近世瓦			
J265	SK34	瓦	軒丸瓦	長(4.30) 幅(15.00)	高 13.20 左巻き巴文、12個の珠文	高 13.20	左巻き巴文、12個の珠文	高 13.20	2.5	近世瓦			
J266	SK01	瓦	軒丸瓦	長(5.15) 幅(13.45)	高 1.89 宝珠の中心飾りと左巻き文様	高 1.89	宝珠の中心飾りと左巻き文様	高 1.89	2.5	近世瓦			
J267	熱々塙 1	瓦	一	長(6.40) 幅(15.95)	高 2.35 左巻き巴文、16個の珠文	高 2.35	左巻き巴文、16個の珠文	高 2.35	2.5	近世瓦			
J268	塙 2	瓦	軒丸瓦	長(2.20) 幅(13.30)	高 3.25 左巻き巴文、16個の珠文	高 3.25	左巻き巴文、16個の珠文	高 3.25	2.5	近世瓦			
J269	塙 2	瓦	軒丸瓦	長(4.00) 幅(15.00)	高 1.50 一	高 1.50	左巻き巴文、30個の珠文	高 1.50	2.5	中世瓦			
J270	塙 2	瓦	軒丸瓦	長(3.50) 幅(8.95)	高 2.30 左巻き巴文、周囲は珠文	高 2.30	左巻き巴文、周囲は珠文	高 2.30	2.5	中世瓦			
J271	塙 2	瓦	軒丸瓦	長(3.60) 幅(11.20)	高 2.70 突の手筋文の中心飾りと水波紋	高 2.70	突の手筋文の中心飾りと水波紋	高 2.70	2.5	中世瓦			
J272	塙 2	瓦	軒丸瓦	長(7.20) 幅(11.30)	高 7.00 突の手筋文の中心飾りと水波紋	高 7.00	突の手筋文の中心飾りと水波紋	高 7.00	2.5	中世瓦			
J273	塙 2	瓦	軒丸瓦	長(3.80) 幅(8.00)	高 4.70 突の手筋文の中心飾りと水波紋	高 4.70	突の手筋文の中心飾りと水波紋	高 4.70	2.5	中世瓦			
J274	塙 2	瓦	丸瓦	長(3.05) 幅(11.40)	高 6.30 コビキハ、軒丸	高 6.30	コビキハ、軒丸	高 6.30	2.5	中世瓦			
J275	塙 2	瓦	丸瓦	長(3.60) 幅(14.80)	高 9.65 聖範瓦	高 9.65	聖範瓦	高 9.65	2.5	中世瓦			
J276	塙 2	瓦	平瓦	長(3.70) 幅(20.00)	高 5.00 ケズリ調査	高 5.00	ケズリ調査	高 5.00	2.5	中世瓦			
J277	塙 2	瓦	丸瓦	長(3.85) 幅(13.45)	高 6.65 コビキハ	高 6.65	コビキハ	高 6.65	2.5	中世瓦			
J278	塙 2	瓦	丸瓦	長(3.70) 幅(16.80)	高 7.20 コビキハ	高 7.20	コビキハ	高 7.20	2.5	中世瓦			
J279	塙 2	瓦	丸瓦	長(2.80) 幅(11.30)	高 6.00 コビキハ	高 6.00	コビキハ	高 6.00	2.5	中世瓦			
J280	塙 2	瓦	丸瓦	長(3.00) 幅(14.70)	高 7.10 コビキハ	高 7.10	コビキハ	高 7.10	2.5	中世瓦			
J281	塙 2	瓦	丸瓦	長(3.45) 幅(11.05)	高 6.40 コビキハ	高 6.40	コビキハ	高 6.40	2.5	中世瓦			
J282	塙 2	瓦	丸瓦	長(3.20) 幅(14.80)	高 7.00 コビキハ	高 7.00	コビキハ	高 7.00	2.5	中世瓦			
J283	SK21	瓦	軒丸瓦	長(9.60) 幅(12.30)	一 左巻き巴文、周囲は珠文	高 9.60	左巻き巴文、周囲は珠文	高 9.60	2.5	中世瓦			
J284	SK21	瓦	軒丸瓦	長(3.20)	一 左巻き巴文、周囲は珠文	高 3.20	左巻き巴文、周囲は珠文	高 3.20	2.5	中世瓦			
J285	佐倉寺	瓦	軒平瓦	長(5.60) 幅(12.80)	高 4.00 宝珠の中心飾りと三反ねじる門草文	高 4.00	宝珠の中心飾りと三反ねじる門草文	高 4.00	2.5	中世瓦			
J286	佐倉寺	瓦	軒平瓦	長(12.90) 幅(18.80)	高 4.90 宝珠の中心飾りと三反ねじる門草文。芯面に帶唐	高 4.90	宝珠の中心飾りと三反ねじる門草文。芯面に帶唐	高 4.90	2.5	中世瓦			
J287	佐倉寺	瓦	軒平瓦	長(3.60) 幅(9.20)	高 5.80 宝珠の中心飾りと三反ねじる門草文	高 5.80	宝珠の中心飾りと三反ねじる門草文	高 5.80	2.5	中世瓦			
J288	佐倉寺	瓦	軒平瓦	長(3.40) 一	高 4.30 宝珠の中心飾りと三反ねじる門草文	高 4.30	宝珠の中心飾りと三反ねじる門草文	高 4.30	2.5	中世瓦			
J289	佐倉寺	瓦	軒平瓦	長(3.40) 幅(9.80)	高 4.80 宝珠の中心飾りと三反ねじる門草文	高 4.80	宝珠の中心飾りと三反ねじる門草文	高 4.80	2.5	中世瓦			
J290	佐倉寺	瓦	軒平瓦	長(7.30) 幅(9.85)	一 宝珠の中心飾りと三反ねじる門草文	高 7.30	宝珠の中心飾りと三反ねじる門草文	高 7.30	2.5	中世瓦			
J291	佐倉寺	瓦	平瓦	長(35.40) 幅(21.90)	草 2.40 種方向のケズリ調査	高 4.90	種方向のケズリ調査	高 4.90	2.5	中世瓦			
J292	佐倉寺	瓦	平瓦	長(30.90) 幅(22.75)	草 2.40 種方向のケズリ調査	高 4.90	種方向のケズリ調査	高 4.90	2.5	中世瓦			
金属製品													
製造者番号	地図	土質	表面	調査名	理 液	品 性	器種	測量年 調査年	時代	測量 幅	幅	高さ	備考
J11	1区	匂合帶		鋼製品	銅質	束元通寶	1285	元	2.6	2.5	0.3		
J12		匂合帶		鋼製品	銅質	束元通寶	1285	元	2.4	2.4	0.3		
J13	1区	下層匂合層		鋼製品	銅質	束元通寶	1058	北宋	2.4	2.5	0.3		
J14	1区	下層匂合層		鋼製品	銅質	聖宋元宝	1101	北宋	2.4	2.4	0.3		
J15	2区	上面		鋼製品	銅質	聖宋元宝	1068	北宋	2.4	2.4	0.3		
J16	1区	匂合帶		鋼製品	銅質	聖宋元宝	1094	北宋	2.4	2.4	0.3		
J17	3区	上海浜浦南		鋼製品	銅質	紹熙元宝	1094	北宋	2.4	2.4	0.3		
J18	4区	下層疊壓層		鋼製品	銅質	熙寧元宝	1068	北宋	2.5	2.5	0.3		
J19	6区	匂合帶		鋼製品	銅質	熙寧元宝	1068	北宋	2.5	2.5	0.3		
J210	6区	匂合帶		鋼製品	銅質	皇宋通寶	1038	北宋	2.5	2.5	0.3		
J211	1区	匂合帶		鋼製品	銅質	皇宋通寶	古		2.4	2.5	0.3		
J212	1区	匂合帶		鋼製品	銅質	寛永通寶	古		2.4	2.4	0.3		
J213	1区	匂合帶		鋼製品	銅質	寛永通寶	古		2.4	2.4	0.3		
J214	1区	匂合帶		鋼製品	銅質	寛永通寶	古		2.6	2.5	0.3		
J215	2区		SK02	鋼製品	銅質	寛永通寶	古		2.5	2.5	0.3		
J216	2区	匂合帶		鋼製品	銅質	寛永通寶	新		2.9	2.9	0.3		
J217	3区	上層疊壓層	SK02	鋼製品	銅質	寛永通寶	新		2.3	2.3	0.3		
J218	3区	上層疊壓層	SK02	鋼製品	銅質	寛永通寶	古		2.4	2.4	0.3		
J219	4区	匂合帶		鋼製品	銅質	寛永通寶	新		2.3	2.3	0.3		
J220	4区	匂合帶		鋼製品	銅質	寛永通寶	新		2.5	2.5	0.3		
J221	4区	匂合帶		鋼製品	銅質	寛永通寶	新		2.3	2.3	0.3		
J222	4区	匂合帶		鋼製品	銅質	寛永通寶	新		2.3	2.3	0.3		
J223	4区	匂合帶		鋼製品	銅質	寛永通寶	吉		2.5	2.5	0.3		
J224	4区	匂合帶		鋼製品	銅質	建康通寶	959	南宋	2.3	2.3	0.3		
J225	4区		SK03	鋼製品	銅質	寛永通寶	古		2.5	2.5	0.3		
J226	4区		SK03	鋼製品	銅質	寛永通寶	古		2.5	2.5	0.3		
J227	4区		SK03	鋼製品	銅質	寛永通寶	新		2.4	2.4	0.3		
J228	4区		SK03	鋼製品	銅質	寛永通寶	文		2.6	2.6	0.3		
J229	4区		SK03	鋼製品	銅質	寛永通寶	文		2.6	2.6	0.3		
J230	4区		SK03	鋼製品	銅質	寛永通寶	文		2.6	2.6	0.3		

第46表 J地区遺物観察表 6

金属製品											
報告書 番号	地区	土 壤 帯	遺構名	種 別	品 目	銘 標	初推定 調査年	時代	法 量 (cm)		備 考
									長さ	幅	
J131	4 区		SK03	銅製品	銅貨	寛永通寶 新		2.6	2.5	0.3	
J132	4 区		SK03	銅製品	銅貨	寛永通寶 古		2.5	2.6	0.3	
J133	4 区	石垣溝内		銅製品	銅貨	寛永通寶 新		2.3	2.3	0.3	
J134	4 区			銅製品	銅貨	寛永通寶 古		2.5	2.4	0.3	
J135	4 区	下層遺構面露出		銅製品	銅貨	寛永通寶 古		2.5	2.4	0.3	
J136	5 区	包含層		銅製品	銅貨	寛永通寶 古		2.5	2.5	0.3	
J137	5 区	包含層		銅製品	銅貨	人種通寶	1017	北宋	2.5	2.6	0.3
J138	5 区	包含層		銅製品	銅貨	寛永通寶 新		2.4	2.4	0.3	
J139	5 区	上層イコウ塗	SK02	銅製品	銅貨	寛永通寶 古		2.6	2.6	0.3	
J140	5 区	上層イコウ塗	SK02	銅製品	銅貨	寛永通寶 古		2.4	2.4	0.3	
J141	7 区	上層		銅製品	銅貨	寛永通寶 古		2.5	2.5	0.3	
J142	7 区	上層		銅製品	銅貨	寛永通寶 新		2.9	2.9	0.3	
J143	7 区	上層		銅製品	銅貨	寛永通寶 新		2.4	2.4	0.3	
J144	7 区	上層		銅製品	銅貨	寛永通寶 新		2.4	2.4	0.3	
J145	7 区		SK01	銅製品	銅貨	寛永通寶 古		2.5	2.5	0.3	
J146	7 区	包含層		銅製品	銅貨	寛永通寶 新		2.3	2.3	0.3	
J147	7 区	包含層		銅製品	銅貨	寛永通寶 新		2.5	2.5	0.3	
J148	5 区	上層イコウ塗	SK01	銅製品	銅貨	寛永通寶 文		2.5	2.5	0.3	
J149	7 区	上層		銅製品	銅貨	寛永通寶 文		2.3	2.3	0.3	
J150	2 区		防空壕	銅製品	銅貨	-	9	昭和	2.3	2.3	0.3
J151	7 区	上層		銅製品	銅貨	一錢	10	大正	2.3	2.3	0.3
J152	7 区	上層		銅製品	銅貨	五銭	10	大正	1.9	1.9	0.3
J153	7 区	包含層		銅製品	銅貨	寛永通寶 銀		2.3	2.3	0.3	
J154	4 区	包含層		銅製品	銅貨				2.6	2.6	0.5
J155	5 区	上層包含層		銅製品	履 直				7.6	0.9	0.9
J156	4 区		SK01	銅製品	吸口				8.1	0.9	0.9
J157	6 区	上層遺構面露		銅製品	吸口				5.1	1.1	1.1
J158	4 区		SK01	銅製品	火口?				23.2	1.2	1.2
J159	2 区	道 (注 0)		銅製品	スラッダ				5.7	5.4	2.6
石製品											
番号	出土場所	種別	器種	法 量 (cm)			成型・調整技術の特徴・文様				備 考
				長さ	幅	厚さ					
JS 1	包含層	石製品	砾石	(14.00)	(8.30)	6.20	使用痕跡認				
JS 2	右側壁 1	石製品	墨石?	(8.50)	(6.40)	0.95	先端に穿孔。両面を磨く				
JS 3	包含層	小砾	五輪等	(22.75)	(15.65)	15.25	空気隙				
JS 4	包含層	石砾	五輪等	(42.70)	18.10	-	一万石五輪等				
JS 5	包含層	石砾	五輪等	18.50	22.00	-	五輪等火輪、花崗岩製				
JS 6	SK11	石砾	五輪等	20.30	19.35	19.10	五輪等火輪、玄武岩製の形				
JS 7	SK11	石砾	石輪 等身	43.40	-	25.75	柱頭、周囲に墨弁を施す				
JS 8	SK 2	石砾	石仏	(19.15)	25.60	9.40	地蔵像。花崗岩製				
JS 9	包含層	石砾	石仏	(42.70)	18.10	9.50	地藏尊。花崗岩製				
JS10	石組床 2	石砾	石仏	(45.00)	26.00	16.10	地藏尊。花崗岩製				
JS11	SK 6	石砾	石仏	(38.65)	25.90	12.05	地藏尊。花崗岩製				

第4章　まとめ

1. はじめに

伊丹停車場線舗装修繕工事の発掘調査は10年に及び、諸般の事情から調査区を細分しての調査となつた。しかし、市街地において城郭中枢域を東西に横断する調査を行った点では、遺跡の様相を把握する上で大きな意義があったといえる。本項では今回の調査成果について簡単に整理しまとめとしたい。

調査は基本的に第1面（上層）を有岡城期、第2面（下層）を近世と想定して調査を行ったが、実際には第1面が18世紀～近代まで、第2面は17世紀後半までの面をおおむね調査している。ただし地点ごとに、盛土層の薄い部分や全く確認されない地点などが見られ、条件は各地点で大きく異なる。このため、H・G地区ではさらに時期設定が可能であるので小期の設定を行った。

ただ、調査区の分離から各地点の土層や遺構の全体像について詳細を把握することが必ずしも正確に行えなかつた部分がある。この点では今後周辺調査を検討し欠を補う必要があろう。

一様ではないが広い範囲で盛土が行われたが、調査地区は17世紀後半ごろに大きな変更がみられた。この前後に大溝筋の堀の埋め立ても行われており、都市の大きな面積と期を一にするようである。

なお、有岡城は主郭・内部・外郭の3重構造をもつとされるが^[1]、調査区周辺はこのうち内部部分に当たり、侍町が構築されたと考えられる地区にあたる。主郭は城郭の主要部とされ、大溝筋西側は町屋がひらがり段丘地形に沿って築構が構築されたといわれている。

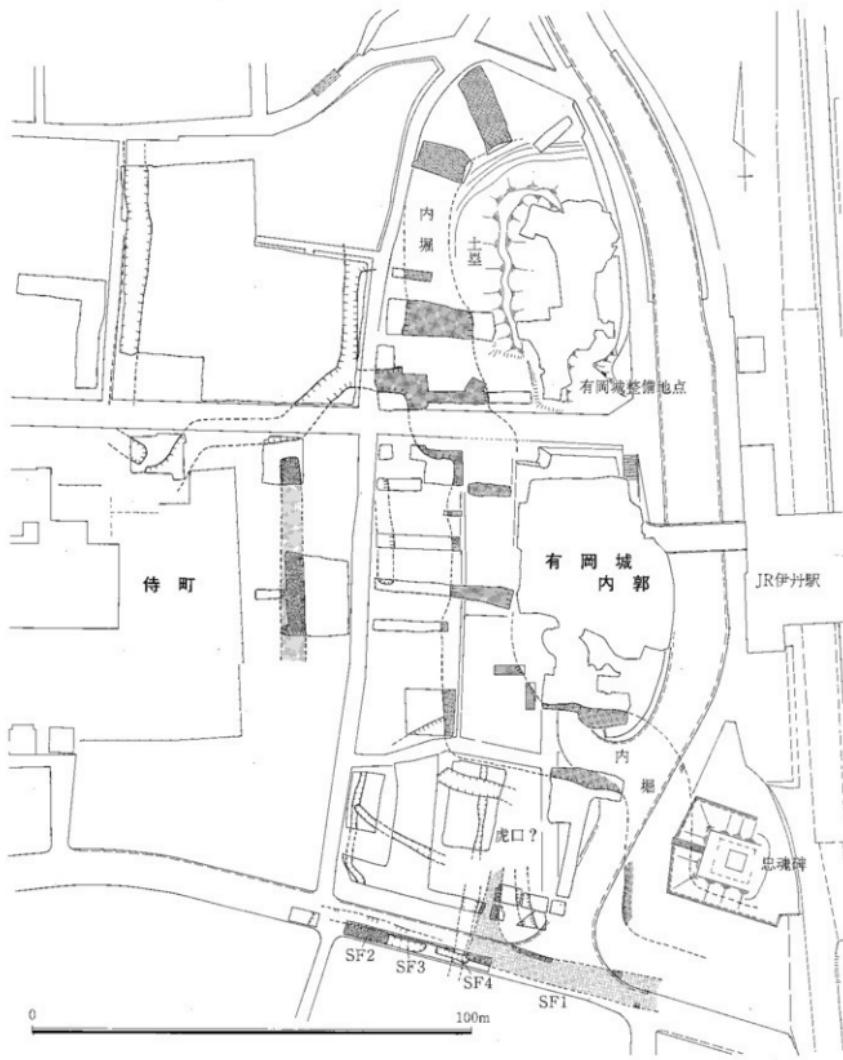
2. 各面の概要

【第1面】

第1面は前述したとおり18世紀～近代までの期間の面をおおむね調査している。この面の最終時期は昭和20年の軍用道路用地接続時点^[2]までである。客土によって面が形成されたと考えられるが、前述したとおり客土上面は必ずしも一様ではない。例えば、A・C地区堀（以後SF1）は18世紀後半にはまだ上層が埋まらずに残されていたことや、G地区では盛土が確認されていないなどからみると、盛土は部分的に行われていたものが、18世紀後半頃におおむね完了したと考えられる。

各調査区から検出した遺構は埋植（便所を含む）・廐棄土坑（ゴミ穴）・陶衣壺・井戸などが中心で、状況からすると、調査区は大半が屋敷内部の遺構と考えられる。廐棄土坑や埋植はおおむね18世紀後半から19世紀のものが大半でこの時期に町屋の拡大が進んだと推測される。また、陶衣壺の検出が各地点で確認されることから調査区周辺は屋敷の前庭に当たると推定された。さらに、埋植には2・3基が一列に並ぶものが多くこれらは便所の可能性がある。便所も18世紀後半から19世紀前半の陶磁器を廐棄したものが多く、町屋が形成された初期に屋敷の前部に便所を作ったが、その後見られなくなるため屋敷の背後に便所を移した可能性がある。いずれにしても、調査地周辺は道筋に面した町屋として第2面形成後長く機能したようである。

ただし、町屋の形成は全体が一様ではない。比較的西側のほうが古く、東側は18世紀後半になって形成されているようである。一方、現産業道路に面したJ地区西端は古くからの郷町の中心街路に面する部分である。この地点では酒造を行うための蔵が検出された。磚石や土台石列の形状から18世紀段階のものと考えられるが、下層からは町屋的な遺構は検出されない。このため同地点のみは早い段階から、通りに面して酒蔵や店舗などの建物が建っていた可能性が高い。さらに、J・B地区では瀬戸黒茶碗・志



野焼向付などが出土し、他の地点とはやや様相を異にしている。このため、西端の通りに面した地点では町場化が早くから進み、店舗あるいは酒蔵が建ったことが推定される。

さらに、各地区の遺物を見ると18世紀前半は希薄で、この時期は少なくとも東側（D・I地区より東側）には町屋などの施設が建っていない。特に、A・C地区では堀の上層がまだ田地として残された土地利用は進んでいない。

一方、近代も引き続き道路に面した町屋の景観が残されるが、やはり調査地区の大半は屋敷の前庭であったようであまり顕著な遺構は見つかっていない。興味がもたらされるのはJ地区の防空壕である。いずれも小型のものであるがJ地区防空壕1では一升瓶に豆を貯蔵した（写真156）ものが出土しており、当時の緊迫した状況が伝わる。政府が普及させた防空壕¹⁾には屋内床下に造るものと、庭先に造る2タイプが説明されているが、調査で見つかったものは後者のタイプである。ただし、空襲が激化すると屋敷地内外の小型防空壕は誰も使用しなくなったという。

調査区の南端では切石の道路側溝である石組溝を検出したが、これは屋敷地と道路との境にある側溝と考えられ、この検出地点が屋敷地と道路の境となっている。J地区ではこの溝（石組溝3）が調査区南端で見つかり、D・H地区でも南側調査区の南端で検出されている。のことから現道路の南側が旧大手筋の通路にあたる。

この他、I地区では内窓の破片が検出されたが、これによって調査地区周辺で小規模な窓業生産が行われていたことが確認された。第216次調査・第93次調査同様に付近に小型の連窓が存在する可能性がある。

【第2面】

第2面は伊丹段丘の地山面に形成される。この面は部分的に表土が検出されるが、両面からは17世紀後半までの遺物が検出されるため、この時期まで存続したようである。時期的には古墳時代・中世・伊丹城期・有岡城期・伊丹郷町期などの段階の遺構・遺物が見つかっており、周辺は継続して遺跡が形成されていたことが確認できた。また、江戸時代初期の伊丹郷町期についても遺物が多数出土しており、調査地点周辺の町形成を考える上で重要である。各段階について見ていく。

古墳時代は各地点でわずかであるが須恵器・埴輪などの遺物出土が確認され、H地区では埴輪棺が検出された。段丘面の削平が中世以来継続して行われたため古墳の墳丘などはすでに削平されていると考えられるが、第20次調査などの成果から調査区西側で古墳の存在が指摘されており、周辺は古墳群の存在した可能性がある¹⁾。この他、古墳では有岡城南端の鶴塚古墳が確認されている。

中世段階の遺構ではD地区土坑・H地区柱穴群などが検出されている。限られているが、周辺調査（第151次）などでも検出されており広く当該時期の遺構が広がっていた可能性がある。

伊丹城段階の遺構は有岡城期の遺構と細分が困難な部分があるが、遺物が多数出土しており、遺跡の広がりを確定させる。J地区の堀2やSD1～8などは伊丹城期の屋敷区画と考えられる。この時期の全体的な姿は検証が難しいが、区画溝はJ地区周辺ではやや西に振る軸方位を持ち、東側では南北方向に近い軸を持っていたと考えられる。なお、J地区的堀1は第151次調査の区画溝につながるもので、全体で1辺40mほどの屋敷区画を持つと推定される。のことから伊丹城期の調査地周辺には屋敷区画が広がっていた可能性がある。隣接地の調査事例が少なく明確ではないが、各地区からは区画溝のほか柱穴、土壙などが検出されていることから、稠密な遺構の広がりが推測される。

有岡城期はJ地区の堀1（大溝筋）、I・H地区の堀、A・C地区のSF1⁽³⁾によって大きく分断される。さらにD・H地区的横列などの区画が確認され、A地区SF2～5のように虎口状の構造を持つ遺構も検出された。SF1の規模は不明であるがA地区から東に逸れて大きく主郭域を囲む堀の一部と推定されているもので、主郭域に深く関わる堀と考えられる。残念ながら全形を知ることはできなかったが、主郭城の南西隅を区画した堀であろう。ただ、主郭周縁の堀は北側（挿図第3図、5次調査）に検出されているところから、この堀を主郭城前部に張り出した小区画（虎口専有空間）のものと推定し、SF3～5の開口部分は規模を小規模で、西側がD・H地区横列につながる。このため、区画が城郭虎口の大手にしては規模が小さく貧弱である上、西側の区画が明確でない点は疑問が残る。これらのことから、虎口については周辺調査の再検討が必要だろう。

次に第2面の遺構から出土した土器は各地点とも意外に少ない点が注意される。これは、主郭内部の土器の量に比べると大きな差である。さらには段丘面直上に堆積する土壤層も検出される地区と、未検出の地区があり、全体に直上の包含層が薄い傾向がある。これに対して上層の盛土からは多くの遺物が出土している。一方、有岡城期前後は城郭遺構では礎石建物が検出される時期で、有岡城の主郭の本丸地区でも礎石建物が検出されている。しかし今回調査を行った各調査区ではほとんど検出されず、さらに検出された遺構の深度が全体的に浅い。これらのことから、郷町の復興工事に伴って有岡城廃城後に周囲の削平が行われた可能性が考えられる。これは、周囲の大きな改変に伴って行われたと推測されるもので、織豊期に伊丹郷町成立のための大改変が行われたのであろう。

16世紀代の遺物は中国産の染付磁器が比較的多く、青磁が少ない傾向が見られた。このため16世紀後半以降に遺物の盛行期があると考えられる。ただし、威信材的なものが少なく、この点有岡城の主郭内とは様相を異にしている。やはり、侍町であるために様相が異なったと推定される。

江戸初期段階の明確な遺構は不明であるが、盛土内から多数の当該期の遺物が出土した。特に17世纪代は唐津焼製品が多く、初期伊万里や瀬戸美濃焼製品も含んでいる。その他、丹波焼も多数出土するが、17世纪前半から後半にかけての遺物が含まれる。量的には擂鉢が多く壺など他の器種は少量の出土にとどまっている。また、中国製の磁器は染付磁器を中心に出土し、備前焼は擂鉢・壺などに慶長期の製品を見る。これらからすると調査区周辺は少なくとも17世纪前半に宅地化していたと考えられる。ただし、停車場線周辺ではこの時期の著しい成果が見られないため、開発は調査区周辺に限られた可能性がある。

このうち、大溝筋の堀などが埋められる17世紀後半段階で、盛土が始まり周辺の景観は大きく改変を受けた可能性がある。

3. 絵図との対応⁽⁴⁾

江戸期になると伊丹郷町を描いた地図が多数作成される。最も古いとされるものが「寛文9年伊丹郷町絵図」である。これによれば調査区周辺には西側に新町が開かれ道路を中心両側に町が伸びていたことがわかる。しかし、現在の大手町に当たる範囲はまだA・C地区SF1の堀が存在し、主郭城内部に描かれている。また、大溝筋も新町の北側（J地区5区側以北）は残され、敷地の存在から土塁が残るといわれている。調査成果からはこれらの堀が埋まるのは17世紀後半頃と考えられるので、寛文9年（1669）直後にこの景観は失われ、周辺は大きな改変があったことが推定される。なお、この絵図の記述

に従えば、新町から入るこの道路は城郭城南寄りからまっすぐに「天守土台」と「二之丸金の間」（現在の忠魂碑が建つあたりにあった郭と推定されている）に向かっており、まさに大手と呼ぶにふさわしい城道となる。さらにこの道からは、新町東寄りから南側に大阪街道が分岐しており現在の伊丹郷町の大きな骨格をなした地点にあたる。

次に「寛政8年伊丹絵見図」では大手町が成立し、「二之丸金の間」を含む周辺が町屋になっており、「天守跡」が主郭域の南端に描かれる。東側のJR伊丹駅南交差点の東側にあるカーブが大手町の通りに沿って描かれ、この部分のSF1などはすでに埋め戻される。東側は中ノ町と材木町から入る現在の伊丹郵便局前交差点から、新町に入る。新町の東端では屈曲が見られるがここでは、I地区の胞衣塗が出土した。このことからD地区周辺が道路で、I地区が壁敷の前庭であったと推定できる。また、大溝筋は溝の表現が町の背後に残され排水溝として機能していたことが窺われる。

最後に天保年間（1830～1844）の成立といわれる「文禄伊丹之図」ではさらにこのあたりが整理され、主郭内部は古城としてまとめられている。ただし、天守台は敷地の表現からするとまだ残存していた可能性が大きい。

以上のように絵図から見ると有岡城跡の主郭南側「二の丸金之間」は江戸時代寛政8年（1796）までに切り崩しが始まり町屋が構築されたようである。また、絵図との対比でみると、A・C地区SF1は主郭の南隅区画の堀にあたる。さらに、東側は主郭域内「二の丸金之間」に当たると推定される。

4. まとめ

有岡城の大溝筋の存在は絵図に描かれた大溝筋の検討から浅岡俊夫^[7]が初めて指摘したもので、これによって内郭（侍屋敷）と外郭（町屋域）を区画した戦国期有岡城城下の姿が定着した。先に鈴木充^[8]が有岡城外郭に懇構構造を持つことを発表したこととあわせて、これらの分析が以後の同城の構造を規定してきた。つまり有岡城は西日本の戦国末期城館の中でも懇構えをもち、侍町のみならず町屋をも開いた込んだ発達した構造を持つもつ城郭というイメージが定着したのである。さらにこれらを受ける形で前川要^[9]は猪名野神社門前の調査成果を用いながら、短冊形地割の存在を指摘し、戦国城下町発達の指標とした。

今回の調査はこれらの成果が出され、有岡城のイメージを追認するような形で行われてきた。多くの点でこの一連の分析に調査成果は符合する。たとえば、大溝筋および虎口の検出などがそれである。ただし、侍屋敷といわれる調査区内部の様相や、区画施設の全体的な構造把握には調査区の制約から積極的に分析を行うには至らなかった。

註

1. 鈴木充「伊丹城」「伊丹地域史研究 第4号」伊丹市立博物館 昭和50年浅岡俊夫「伊丹城〈付、有岡城〉」「日本城郭体系第12巻大坂・兵庫」新人物往来社 昭和56年などの研究による伊丹郷町研究会・猪名の中世を考える会・1617会などで考古学・地理学・歴史学などの分野の検討が行われ有岡城跡の構造については議論が進んでいる。
2. 伊丹市の伊丹茂氏の証言によると調査地区周辺は昭和20年7月に軍用道路のために拡幅用地が接収された。当時工事車両が来て用地内の建物を撤去したという。しかし、その後数年の間は工事が行われず、終戦後暫くしてから工事が行われ、ようやく道路が拡幅されたという。(証言内容は伊丹市立博物館小長谷正治氏にご教示いただいた。)また、周辺は伊丹の空襲からかろうじて免れており防空壕は被災しなかった。防空壕の埋め立ては終戦後の道路工事に伴って実施された可能性が大きい。(伊丹の空襲に関しては「夏季企画展 戦争と伊丹の人々」伊丹市立博物館2005による。)
3. 防空壕に関しては「写真周報第15巻 改定时局防空必携写真解説」内閣印刷局昭和18年によった。
4. 古墳時代については西側に上篠塚古墳が知られており、南端の鶴塚磐の小丘も古墳であることが判明(第217次調査)している。このように伊丹郷町の段丘上には多数の古墳の存在が知られている。
5. 大溝筋についてはその後、富士山藏の調査(第276次調査)・第151次調査が行われ多くの知見が得られている。
6. 藤本史子「中世伊丹の考古学的研究」「ヒストリア第188号」大坂歴史学会2004などによって指摘されている。
7. 絵図に関しては八木哲浩編「伊丹古絵図集成」「伊丹史料叢書6」伊丹市役所昭和57年が刊行され同書のほか、和島恭仁雄「原点に返る——「寛文九年伊丹郷町絵図」の再検討——」「地域研究伊丹第三一号」伊丹市立博物館2003・小長谷正治「有岡城大溝筋埋跡と地割——態構え成立過程の検討——」「地域研究いたみ第三四号」伊丹市立博物館2005などの研究がある。
8. 前掲文献1による。
9. 前川要「有岡城懸構の再検討」「有岡城跡・伊丹郷町1」大手前女子学園有岡城跡調査委員会1987
前川要「都市考古学の研究」柏書房1991などがある。

伊丹郷町遺跡出土埴輪の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社 矢作 健二

はじめに

伊丹市に所在する伊丹郷町遺跡は、大阪平野北西部を流下する猪名川の中流域右岸に形成された伊丹台地上に位置する。これまでの発掘調査では、戦前から古墳時代前期末までに至る合計7時期の遺構・遺物が検出されている。ただし、そのうちの3時期は江戸時代であり、ゴミ穴とされる遺構とそれに伴う多量の遺物が確認されている。また、最も古い時期の古墳時代前期末とされた遺物および遺構は、埴輪円筒棺とそれを納めた墓壙であるが、後世の遺構により搅乱、損壊されている。発掘調査では、他にも円筒埴輪片が複数出土しており、複数の埴輪円筒棺があったとされている。

本報告では、伊丹郷町遺跡から出土した埴輪円筒棺を対象としてその材質（胎土）を分析し、その特徴を明らかにする。伊丹郷町遺跡の周辺では、これまでにも多数の埴輪が出土していることから、今回の分析は、その基礎的データとなるものである。

1. 試 料

試料は、伊丹郷町遺跡から出土した埴輪円筒棺の破片1点である。長辺約6cm、短辺約4cmほどの四角形を呈し、表面の色調は褐色、径1mmほどの白色粒の散在が認められる。

2. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法がある。前者は粉碎による重鉱物分析や薄片作製など为主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。今回の試料のように比較的粗粒の砂粒を含み、低温焼成と考えられる土器の分析では、前者の方が、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。さらに前者の方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類などを捉えることが可能であり、得られる情報が多い。したがって、ここでは薄片観察法による胎土分析を行う。データの呈示は、松田ほか（1999）が示した仕様に従う。以下に手順を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレバラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度層における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

なお、今回の分析では、1試料における部位の違いによるデータのばらつきも検証することとし、試料を5片に分割し、4箇所の断面についてそれぞれ薄片を作製し、4点のデータを呈示する。ここでは4箇所の断面を断面1～断面4とし、その位置を図版1に示す。断面1は長辺に平行な方向、断面2～3は短辺に平行な方向の断面である。

3. 結 果

分析結果を表1、図1～3に示す。試料は、いずれも石英、カリ長石、斜長石の鉱物片と多結晶石英(おそらく花崗岩類に由来する)および花崗岩類の岩石片を碎屑物の主体とする。他に、鉱物片では黒雲母を少量伴い、岩石片では凝灰岩と火山ガラスを少量伴う。また、鉱物片では、角閃石が断面1以外の3点に、不透明鉱物が断面2、3に少量認められ、岩石片では、チャートが断面3以外の3点に、流紋岩が断面3と4に、破碎状花崗岩が断面1以外の3点に、それぞれ少量認められた。さらに、断面1以外の3点には植物珪酸体も認められた。

上述の種類構成に粒径組成も加味すると、4点ともに中粒砂と粗粒砂従において、石英、斜長石、多

表1 薄片観察結果

断面	砂粒区分	砂粒の種類構成												合計		
		鉱物片						岩石片								
		石英	カリ	斜長石	角閃石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	凝灰岩	流紋岩	多結晶石英	花崗岩類	破碎状花崗岩	火山ガラス	珪藻	植物珪酸体
1	細粒	1	1	1				4				2				0
	極粗粒砂	1	1	1												9
	粗粒砂	9	1	11	2			3	2		4	13		1		46
	中粒砂	6	4	13	2			4	1		5	13		1		49
	細粒砂	9	3	4	1						1	1		1		20
	極細粒砂	9	4	7	1									1		22
	粗粒シルト	10	4	6												20
	中粒シルト	5	2	4												6
2	基質															363
	孔隙															7
	細粒															0
	極粗粒砂				1				1		2	5				9
	粗粒砂	4	3	14		3		2	2		5	14	1			48
	中粒砂	9	4	13	2						2	6	1			37
	細粒砂	3	3	3	1									1		11
	極細粒砂	7	2	5	1											15
3	粗粒シルト	11	3	6		1									2	21
	中粒シルト	5	3	4												12
	基質															296
	孔隙															8
	細粒															0
	極粗粒砂	1		2							1	3	2			9
	粗粒砂	7	3	13		1			1		4	14				43
	中粒砂	13	6	11	3				1	1	3	3	2			43
4	細粒砂	5	1	1									1			8
	極細粒砂	5	3	5			1							1		15
	粗粒シルト	11	5	4											1	20
	中粒シルト	7	6	5												18
	基質															238
	孔隙															14
	細粒															0
	極粗粒砂	1									2	4				7
5	粗粒砂	8	1	9		1		2		1	4	11	2			39
	中粒砂	5	4	9	1			3	3		5	5	2			37
	細粒砂	1	1	1	1						1		2			7
	極細粒砂	4	2	2									1			9
	粗粒シルト	13	3	4											1	20
6	中粒シルト	7	2	4												13
	基質															213
	孔隙															4

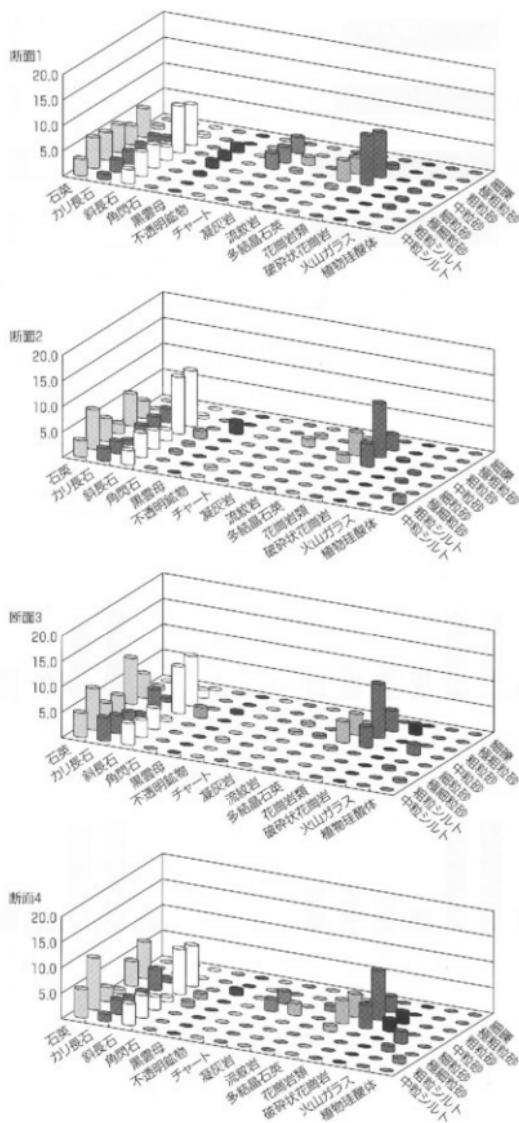


図1 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

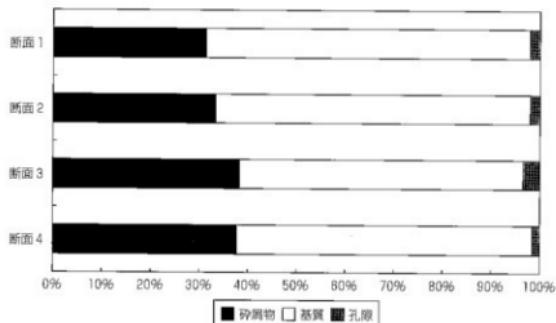


図2 孔隙・砂粒・基質の割合

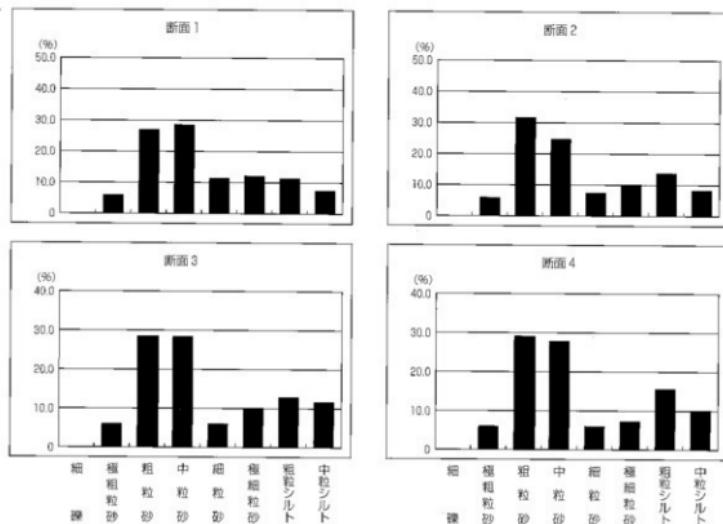


図3 胎土中の砂の粒径組成

結晶石英および花崗岩類が最も多い割合を示し、粗粒シルトにおいて石英が第二のピークを示す。これは、砂粒全体の粒径組成ともなっており、図2では、中粒砂と粗粒砂が突出して多く、粗粒シルトに小さなピークがある（断面1では明瞭ではないが）というパターンが明瞭である。なお、孔隙・砂粒・基質の割合では、4点間で数%の違いが認められる。

4. 考 察

(1)部位の違いによるデータの差について

結果述べたように、今回の分析では、主体となる砂粒の種類構成およびその粒径組成は、4断面ともほぼ同様の結果を示す。すなわち、本分析法では、今回の試料における半径数cm程度の範囲での胎土の違いは検出されなかったことになる。このことは、逆に、1箇所の断面のデータは、少なくとも半径数cmの範囲全体を代表するデータとして捉えても良いといえる。ただし、少量しか含まれない鉱物片および岩石片の評価については、それが認められることは特徴の一つとしてよいが、それが認められないことは必ずしも特徴とはならない。例えば、今回の分析では、角閃石やチャートは少量ではあるが、それらは主体となる鉱物片・岩石片に次いで、明らかに胎土の特徴を示す要素となるが、これらが認められない断面もあった。この場合は、おそらく分布密度によるものであると考えることができる。しかし、通常多く行われている1試料1断面という分析の場合には、少量の鉱物あるいは岩石片の有無を有意とするか否かの判断は難しい。これには、多数の試料を分析し、その傾向を捉えることで、評価を行う必要がある。

(2)胎土の由来について（地質との比較から）

伊丹郷町遺跡の位置する伊丹台地は、その地理的位置から、武庫川水系および猪名川水系の河川により運ばれた碎屑物から構成されていると考えられる。日本の地質近畿地方福集委員会（1987）や藤田・笠岡（1982）などの記載に従えば、武庫川流域では、下流域に白堊紀後期～古第三紀に貫入した黒雲母花崗岩である六甲花崗岩が広がり、それに接して中流～上流域には白堊紀の主に凝灰岩層からなる有馬層群が広く分布している。一方、猪名川流域では、大阪平野に臨む山地は上述の有馬層群と古生代の堆積岩とされている丹波層群から構成され、川西市付近の山地には右切山花崗岩と呼ばれる六甲花崗岩とほぼ同時期に形成された花崗閃緑岩の岩体も分布する。伊丹台地周辺の堆積物は、概ねこれらの地質に由来する碎屑物により構成されていると考えて良い。

今回の試料に認められた胎土中の砂粒のうち、主体となる鉱物片の石英、カリ長石、斜長石はいずれも、主体となる岩石片の花崗岩類に由来すると考えられる。したがって、その胎土は、花崗岩の分布地域を背景とする。さらに、鉱物片には角閃石と黒雲母が含まれることから、由来する花崗岩類は花崗閃緑岩あるいは石英閃緑岩などである可能性がある。花崗岩類以外の岩石片ではチャートと凝灰岩が特徴となるから、胎土の背景としては、花崗岩の分布域にさらに古生層と凝灰岩層の分布域が混在することが想定される。このように考えると、今回の胎土から推定される地質学的背景は、猪名川下流域の地質学的背景と非常によく一致する。現時点では、1点の試料から得られた分析結果のみであり、また、猪名川流域の河川砂等の自然堆積物に関する分析例もないことから、胎土の地域性を限定するものではないが、猪名川流域およびその周辺域で採取された材料が使われている可能性があるといえる。なお、今回の試料とは時代も種類も異なるが、芦屋市の弥生時代の遺跡から出土した在地性の高いとされる土器の胎土分析例（辻ほか、2003）では、今回の試料と類似する花崗岩の分布域を背景とする組成であった

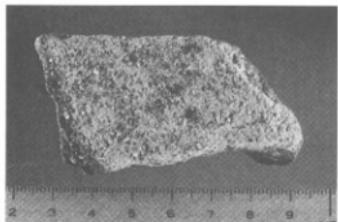
が、詳細にみれば、花崗岩以外の岩石片ではチャートは認められるものの凝灰岩は認められていない。前述のように、少ないものが認められないことの評価に関する問題はあるが、凝灰岩の有無は芦屋市域との地質学的背景を示唆している可能性がある。

冒頭に述べたように近畿地域における埴輪の胎土分析例は、ほとんどないため、今回の分析結果が、この地域における埴輪の生産や供給において、どのように評価されるかは不明である。今後、分析例が蓄積されれば、例えば矢作ほか（2003）の古市古墳群における分析のように、古墳の場所や時期と埴輪の胎土との関係を検討することにより、生産と供給について、有意な資料を作成することも可能になると期待される。

引用文献

- 藤田和夫・笠間太郎, 1982, 大阪西北部地域の地質、地域地質研究報告（5万分の1図幅）、地質調査所, 112p.
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高, 1999, 瓢生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の概察
—岩石学的・堆積学的による—、日本文化財科学会第16回大会発表要旨集, 120-121.
- 日本の地質「近畿地方」編集委員会, 1987, 日本の地質 6 近畿地方、共立出版, 297p.
- 辻 康男・矢作健二・辻木裕也・田中義文, 2003, 声屋市内に所在する考古遺跡の自然科学分析。
- 芦屋市文化財調査報告第47集平成12・13年度国庫補助事業寺山遺跡（第128地点）発掘調査報告書, 135-163.
- 矢作健二・辻 康男・辻木裕也, 2003, 古市古墳群とその周辺古墳出土の埴輪胎土分析、藤井寺市文化財報告第23集石川流域遺跡群発掘調査報告 XVIII, 157-176.

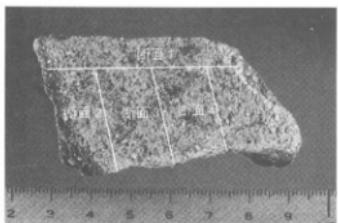
図版1. 試料



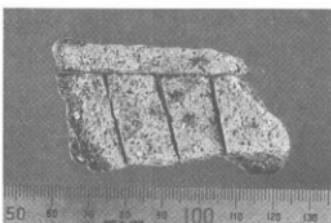
表



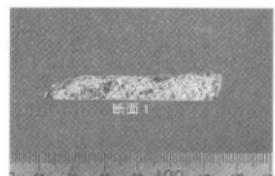
裏



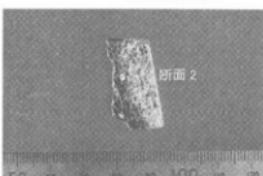
切断箇所



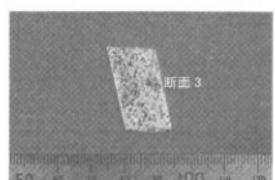
切断後の状況



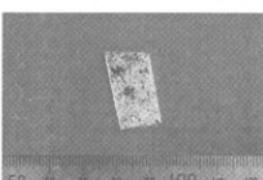
切断片 1



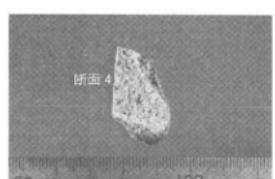
切断片 2



切断片 3

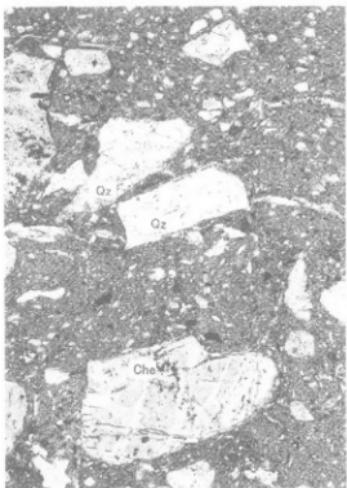


切断片 4

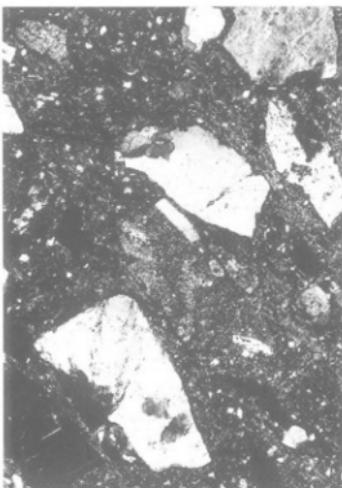
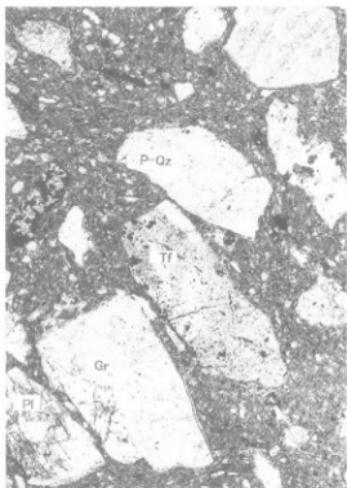


切断片 5

図版2. 胎土薄片



1. 断面 1



1. 断面 2

Qz: 石英, Pl: 斜長石, Ch: チャート, Tf: 凝灰岩, P-Qz: 多結晶石英, Gr: 花崗岩.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

図 版



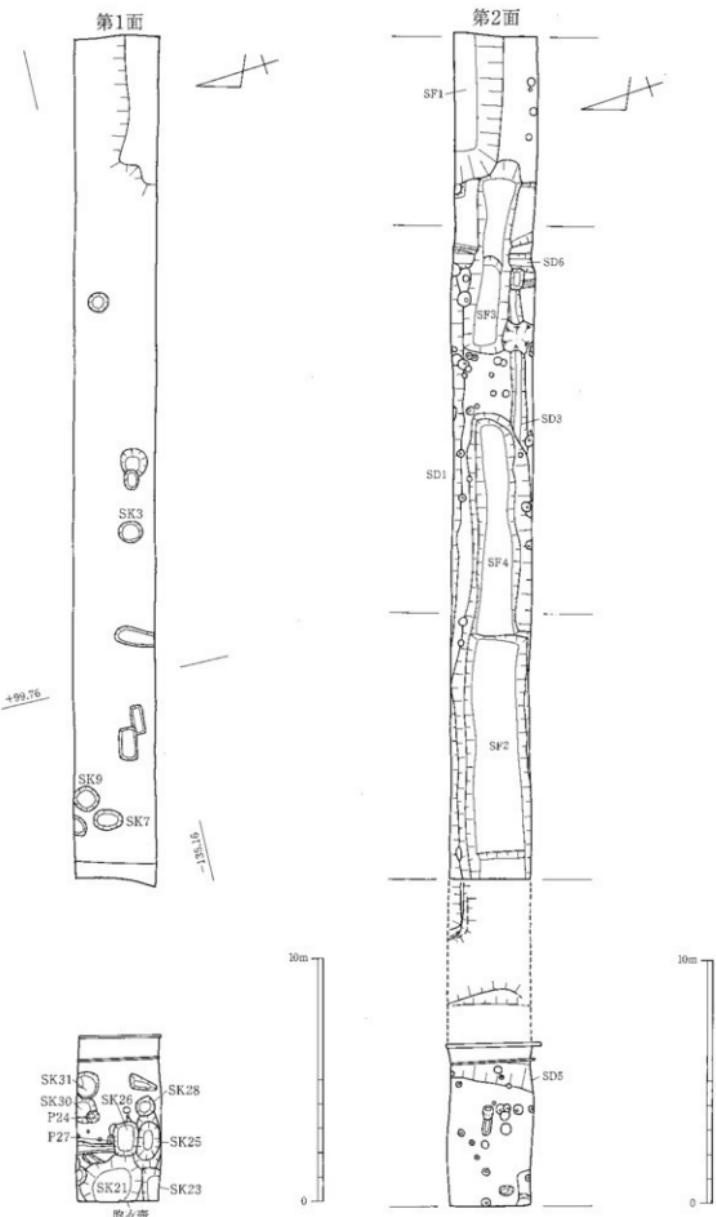
第1図 有岡城跡・伊丹郷可周辺地形環境図



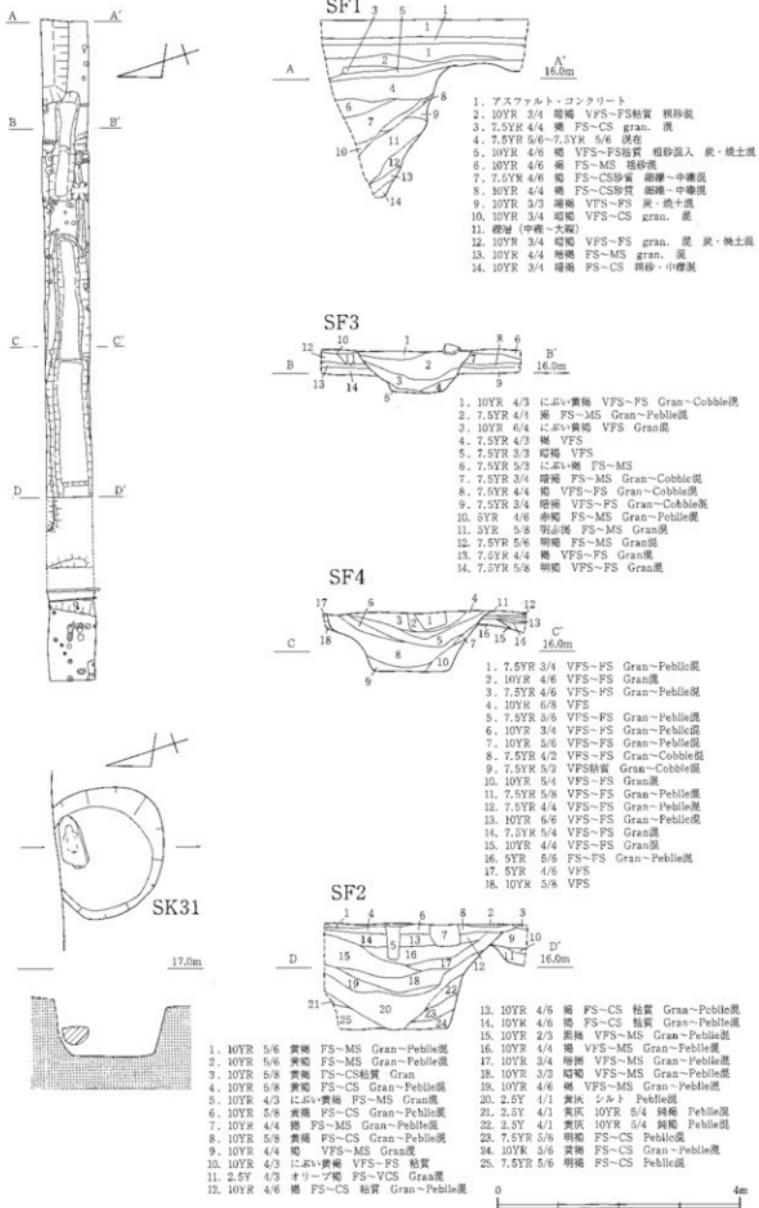
第2図 第1面 調査区全体図



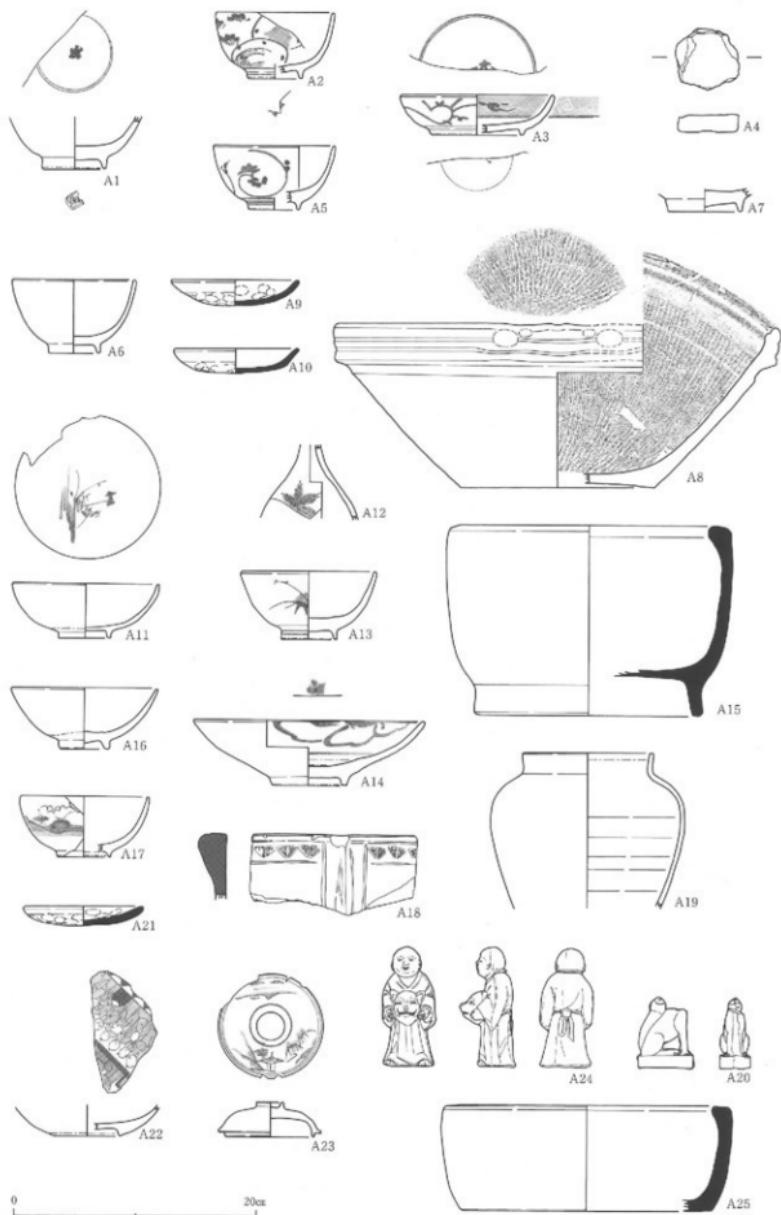
第3図 第2面 調査区全体図



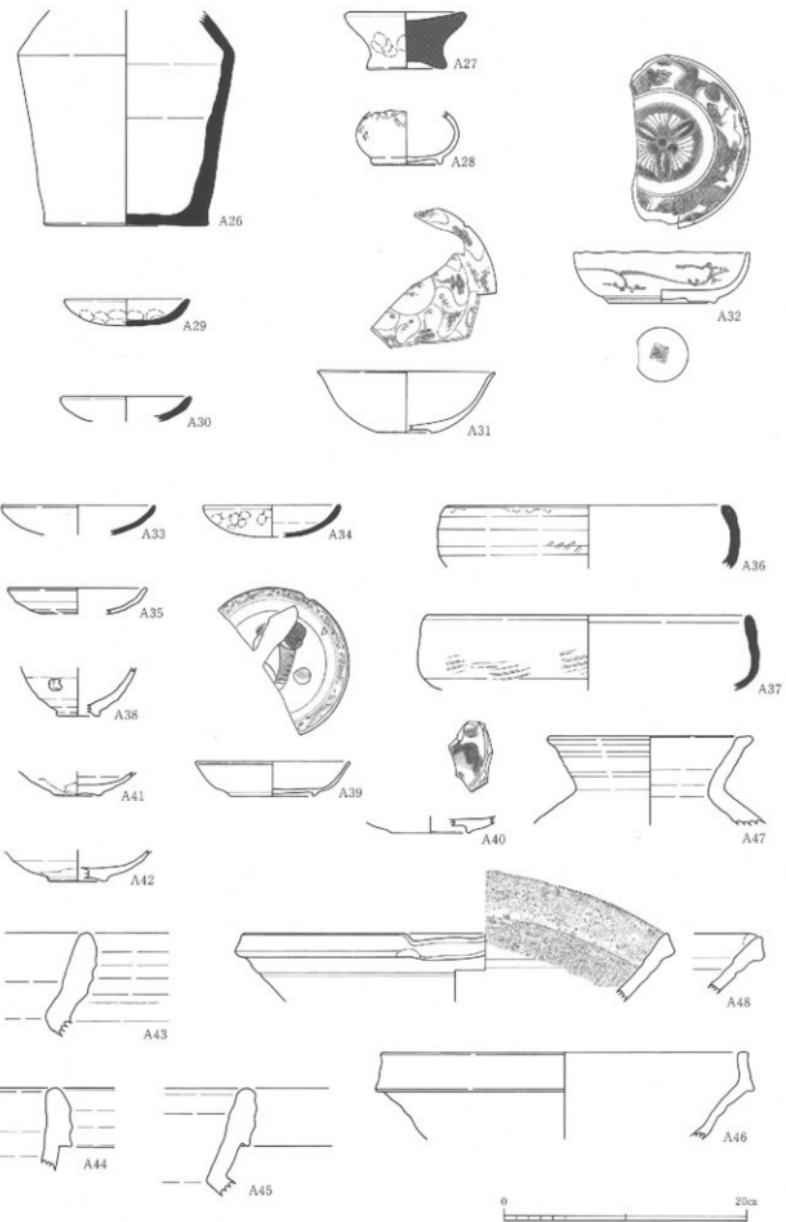
第4図 A地区 調査区平面図



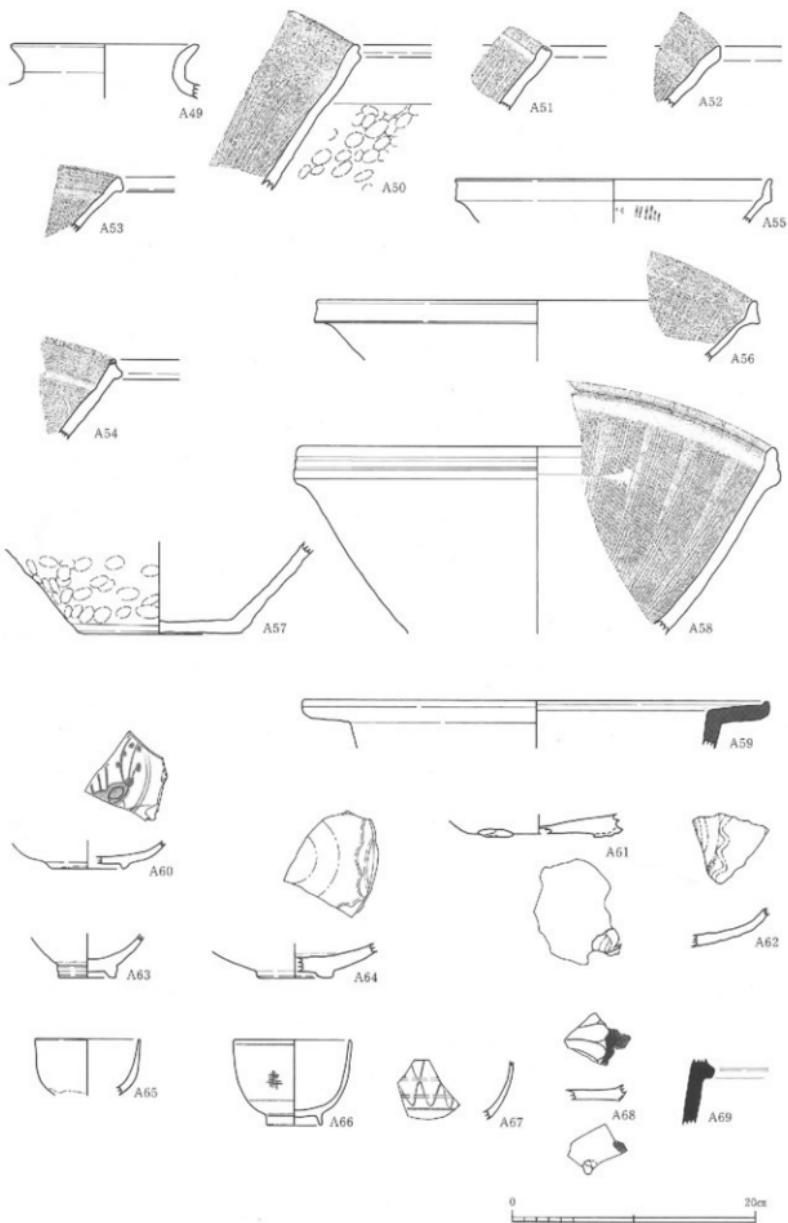
第5図 A地区 埋断面図・SK31平・断面図



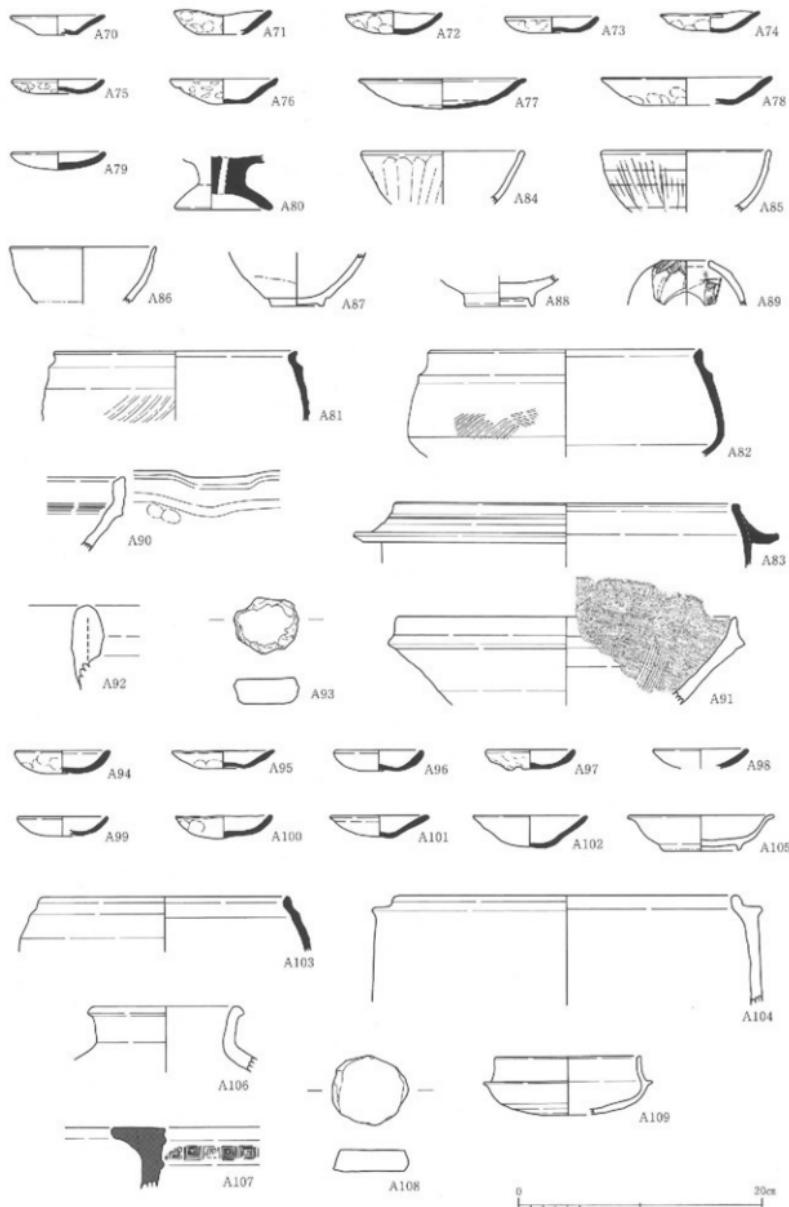
第6図 A地区 第1面 出土土器1



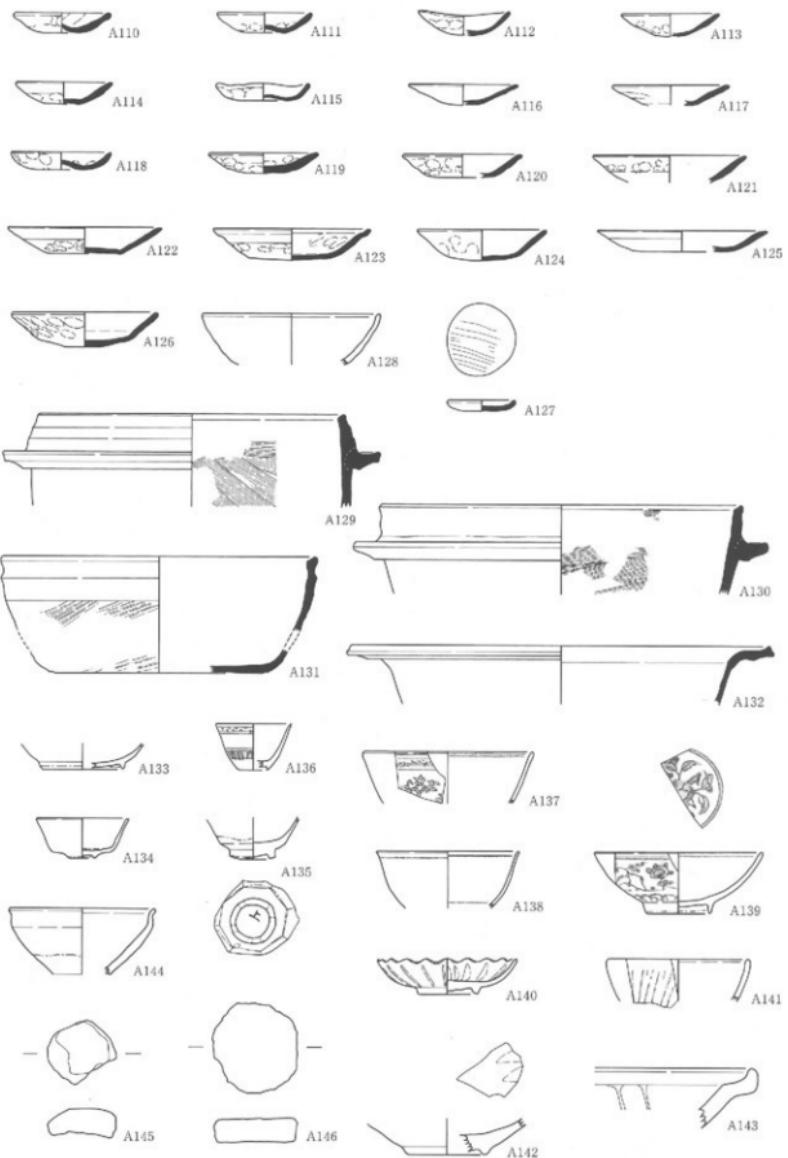
第7図 A地区 第1面 出土土器 2



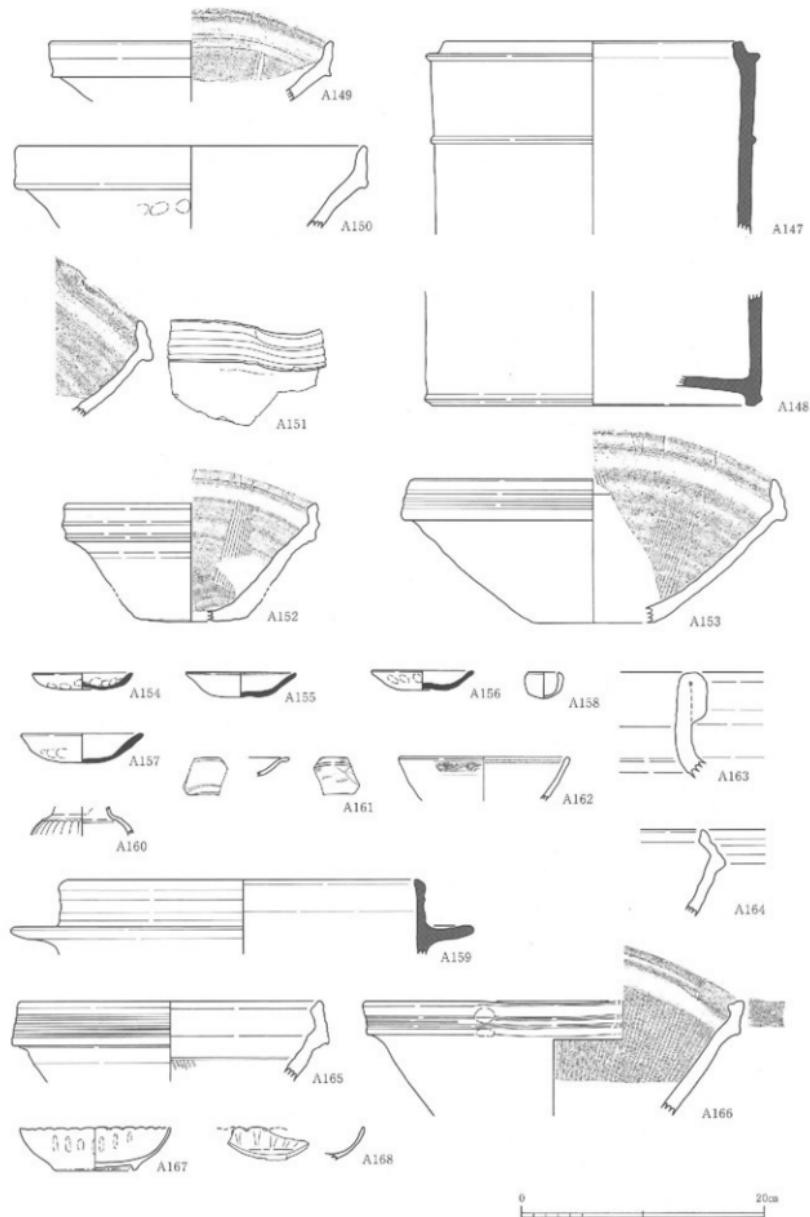
第8図 A地区 堀出土土器1



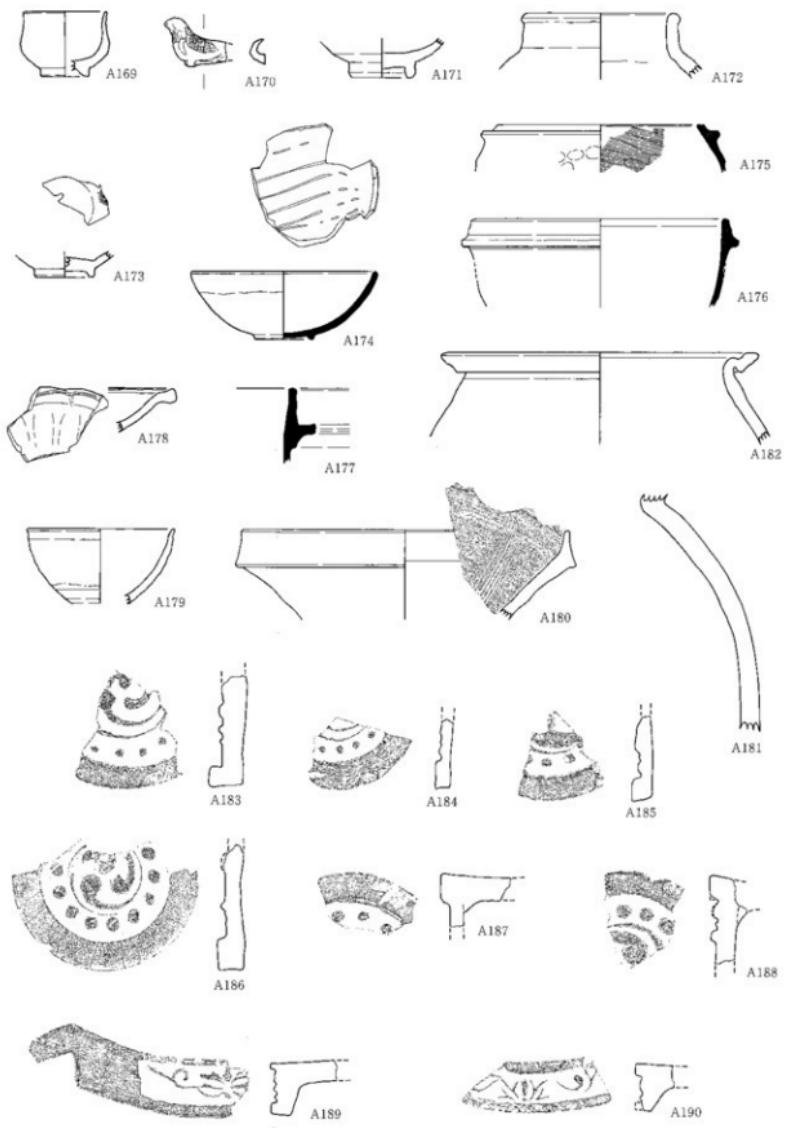
第9図 A地区 堀出土土器2



第10図 A地区 堀出土土器 3



第11図 A地区 塚出土土器 4



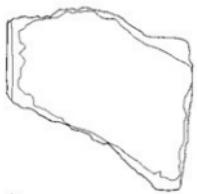
0 20cm

第12図 A地区 第2面 出土遺物・瓦 1



A193

A194



0 20cm

第13図 A地区 瓦2

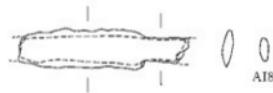


A198



A199

0 10cm



A18

0 5cm



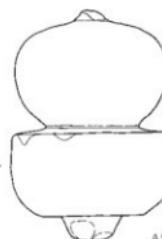
A11



A12



A13



AS1



A14



A15

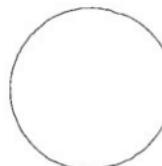


A16



A17

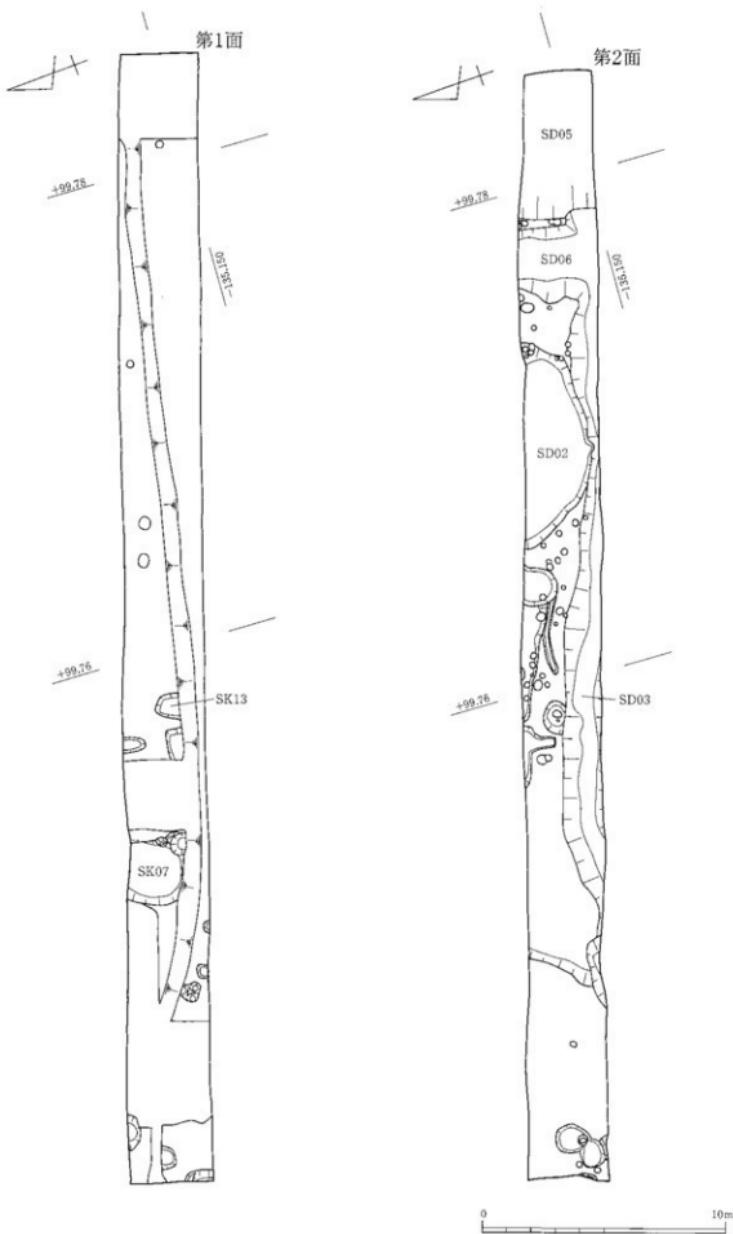
0 3cm



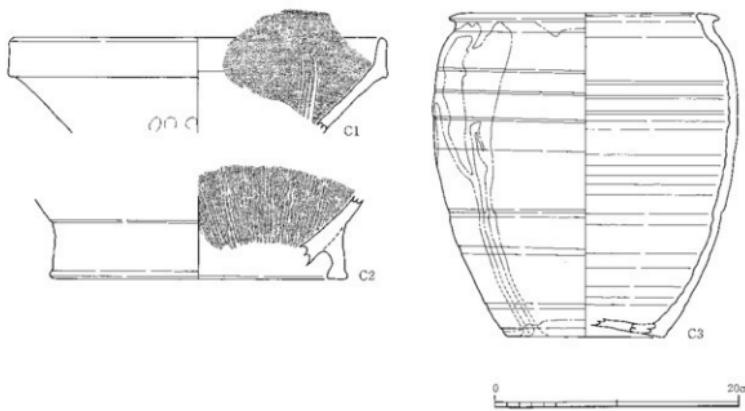
AS2

0 20cm

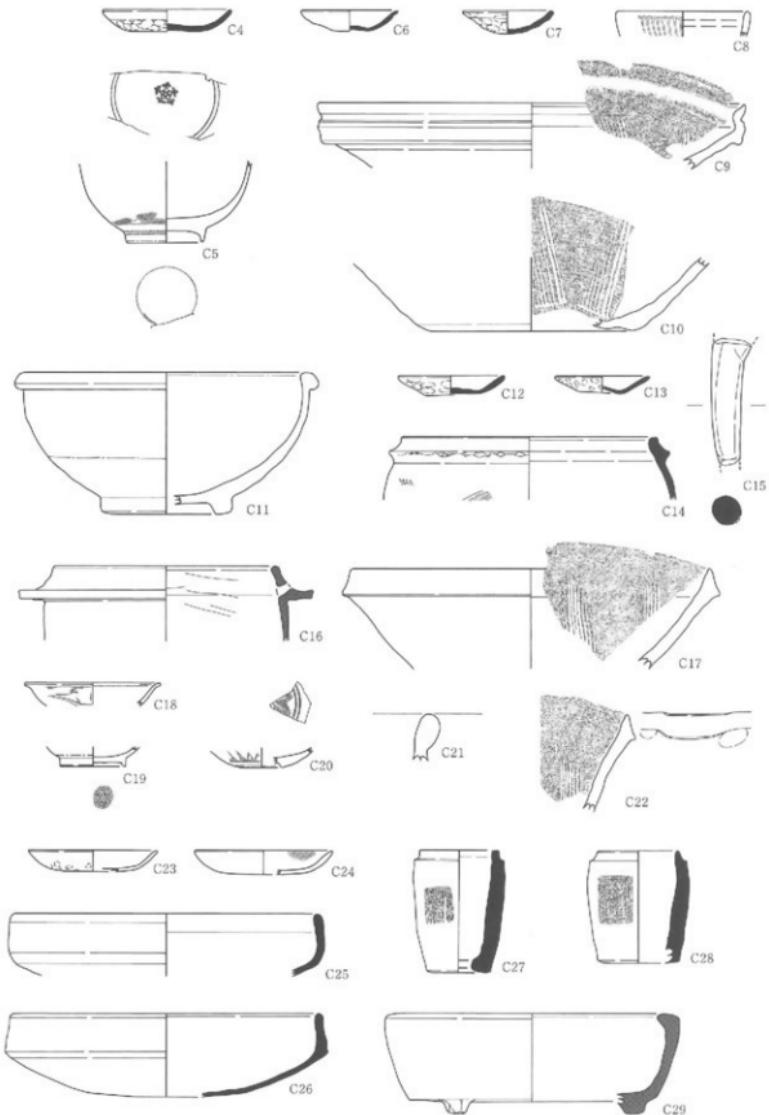
第14図 A地区 瓦 3・銭貨・金属製品・石製品



第15図 C地区 調査区平面図

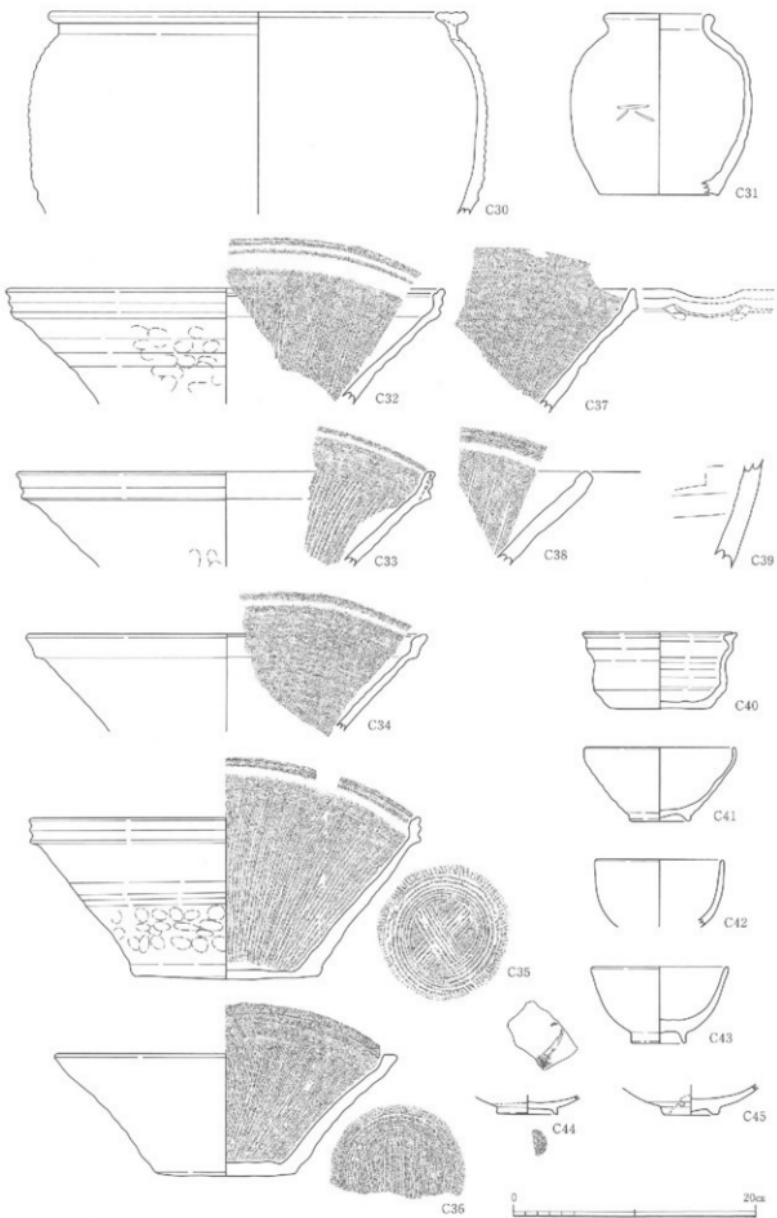


第16図 C地区 出土土器 1

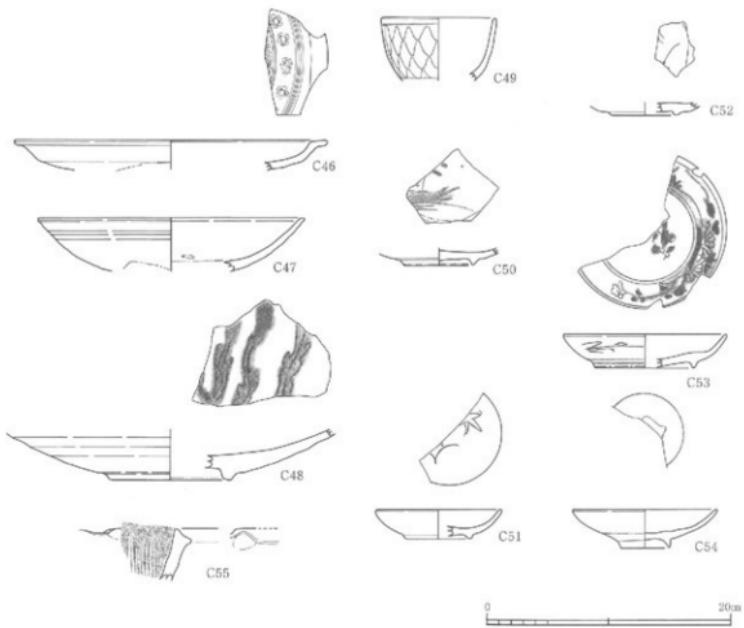


0 20cm

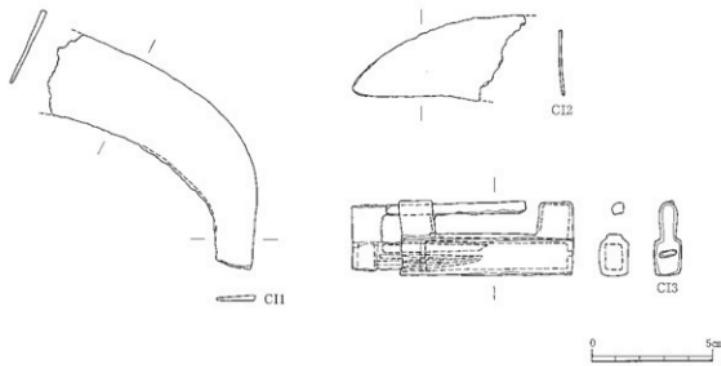
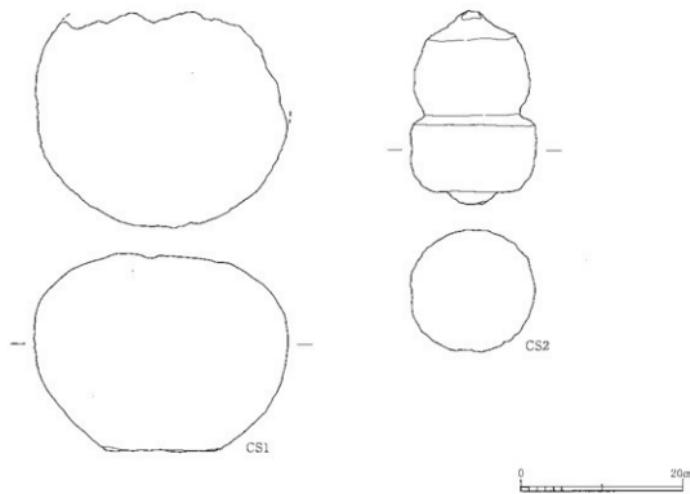
第17図 C地区 出土土器 2



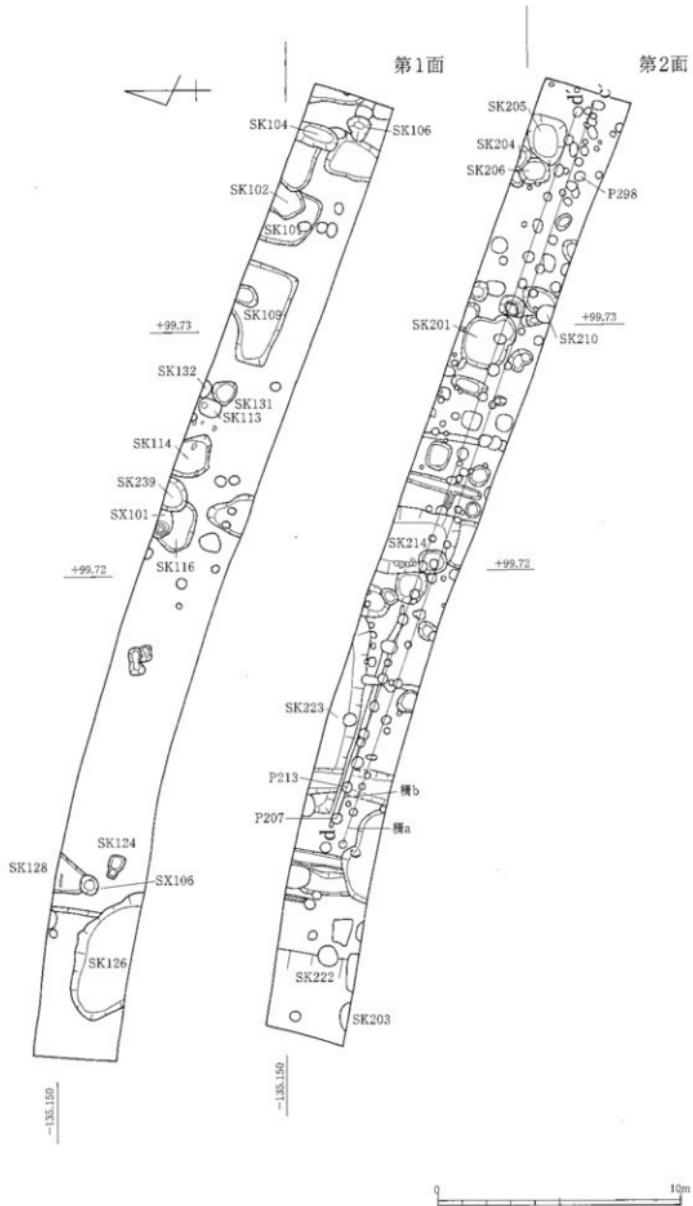
第18図 C地区 出土土器 3



第19図 C地区 出土土器 4

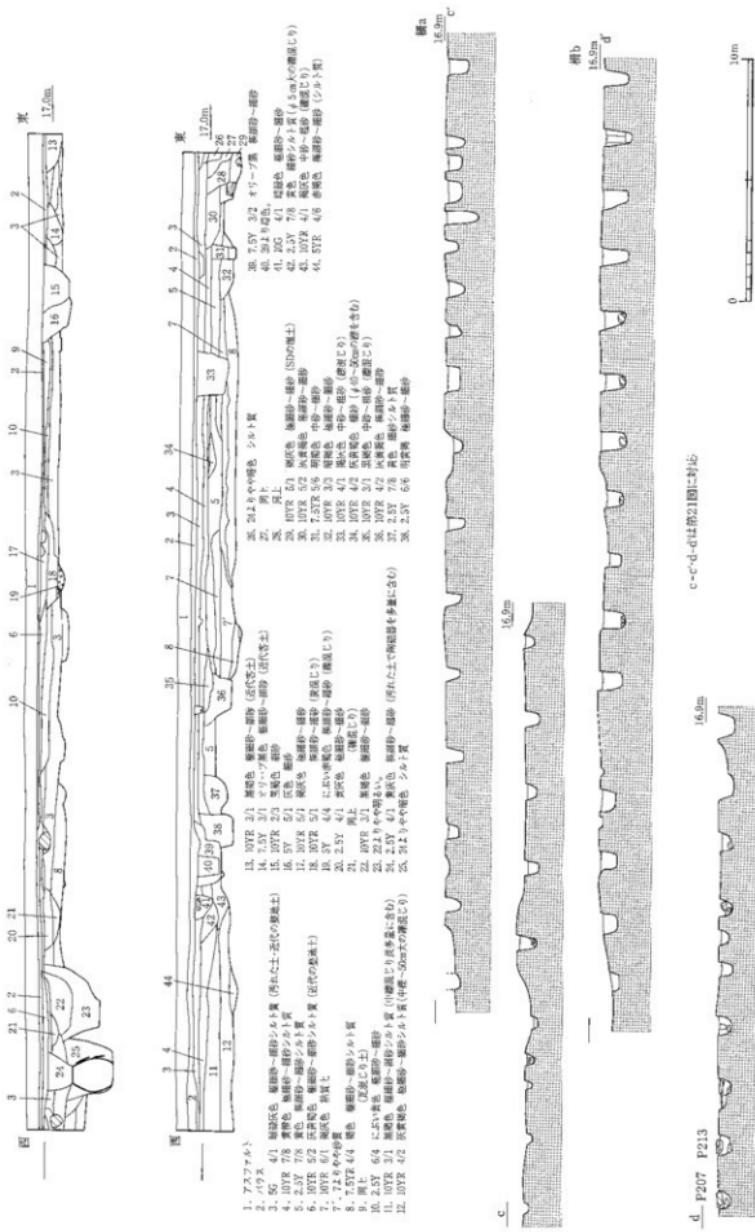


第20図 C地区 石製品・金属製品

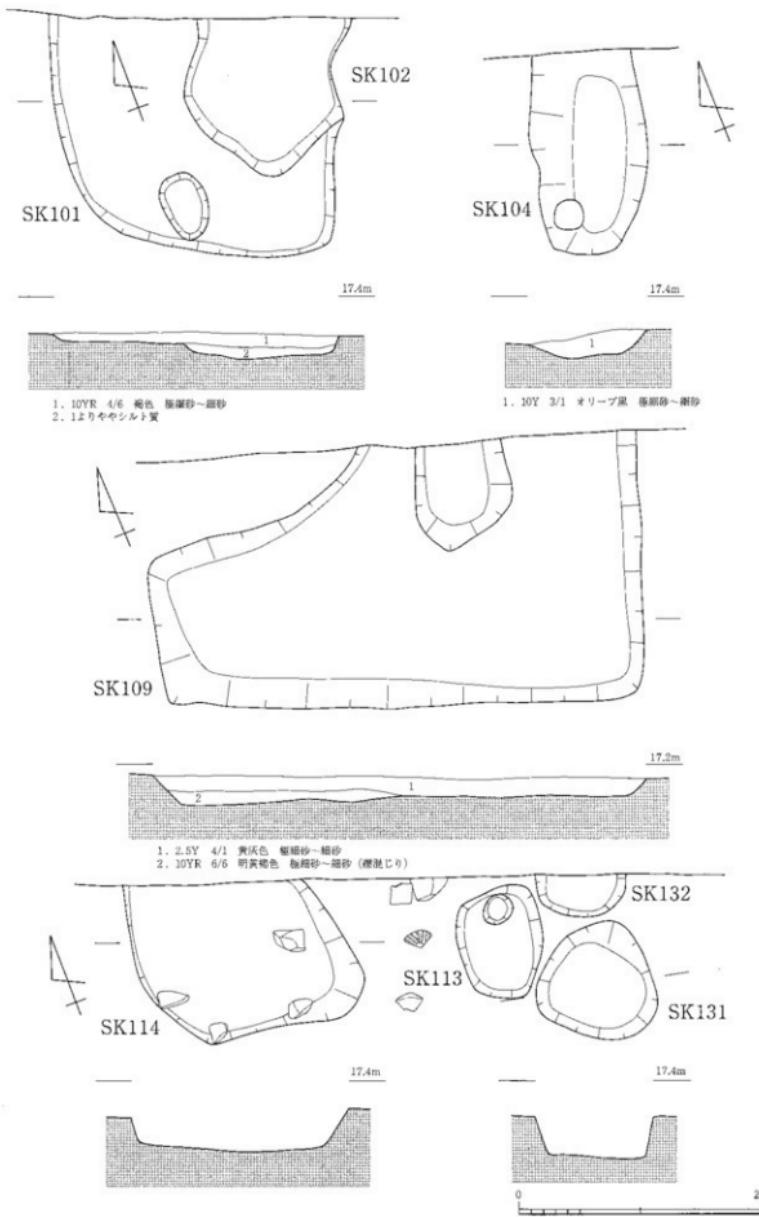


第21図 D地区 調査区平面図袋

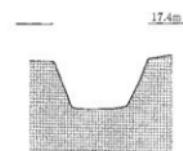
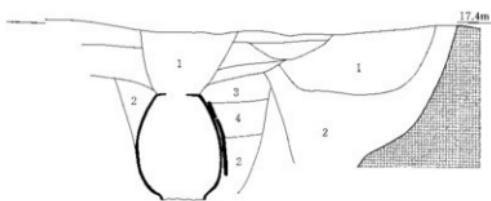
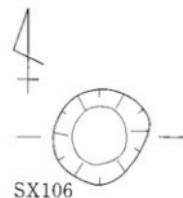
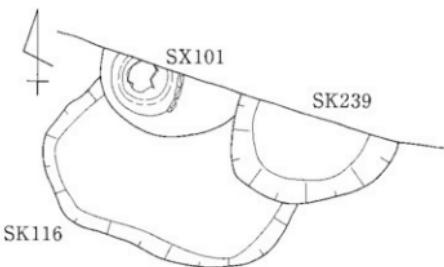
調査区北壁(縦1/20、横1/100)



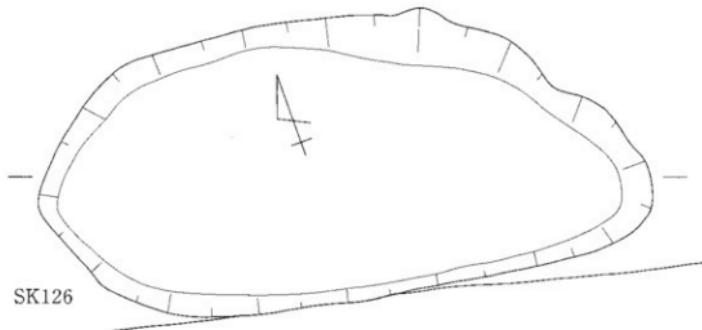
第22図 D地区 調査区断面図・柵列平、断面図



第23図 D地区 第1面 遺構平・断面図1

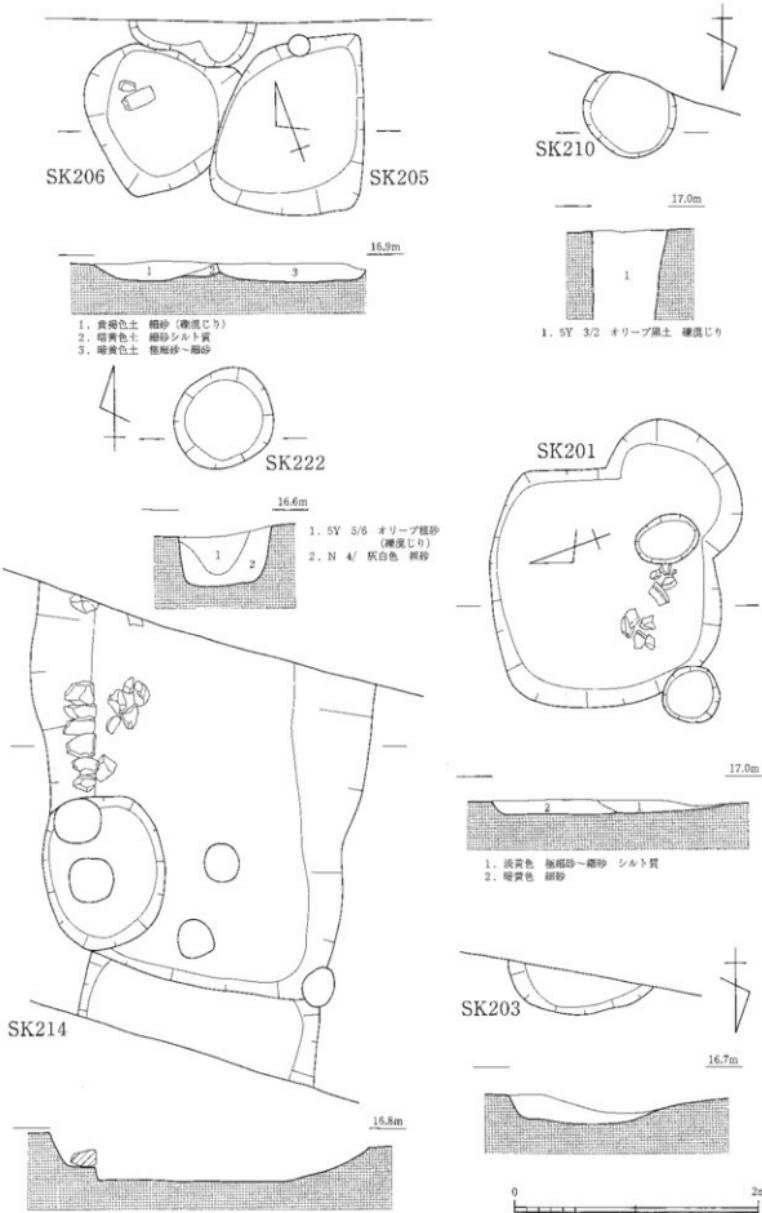


1. ブリ穴
 2. 砂土
 3. 2.5Y 5/3 黄褐色 沈砂シルト質
 4. 2.5Y 6/3 にふい青色 細粒シルト質

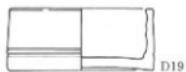
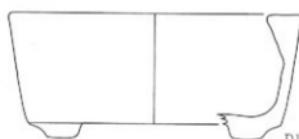
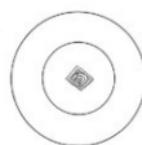
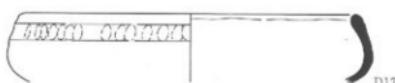
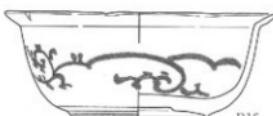
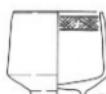
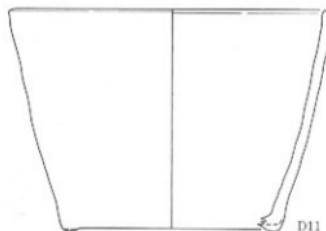


0 2m

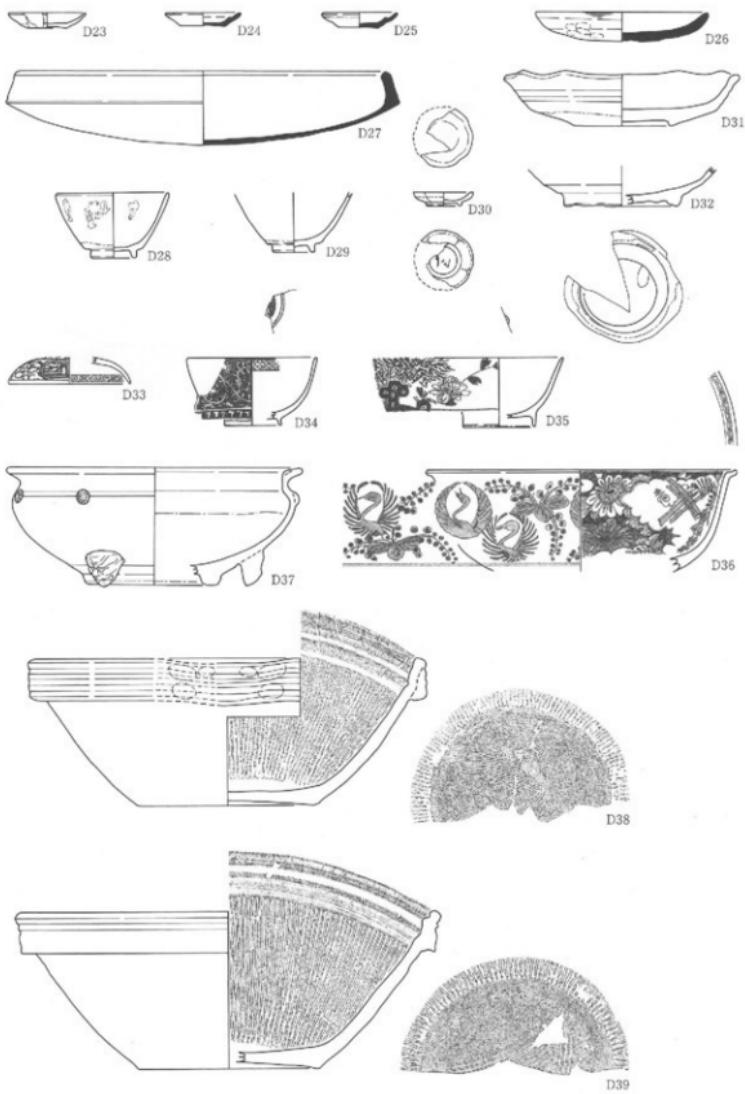
第24図 D地区 第1面 漢構平・断面図2



第25図 D地区 第2面 遺構平・断面図 1

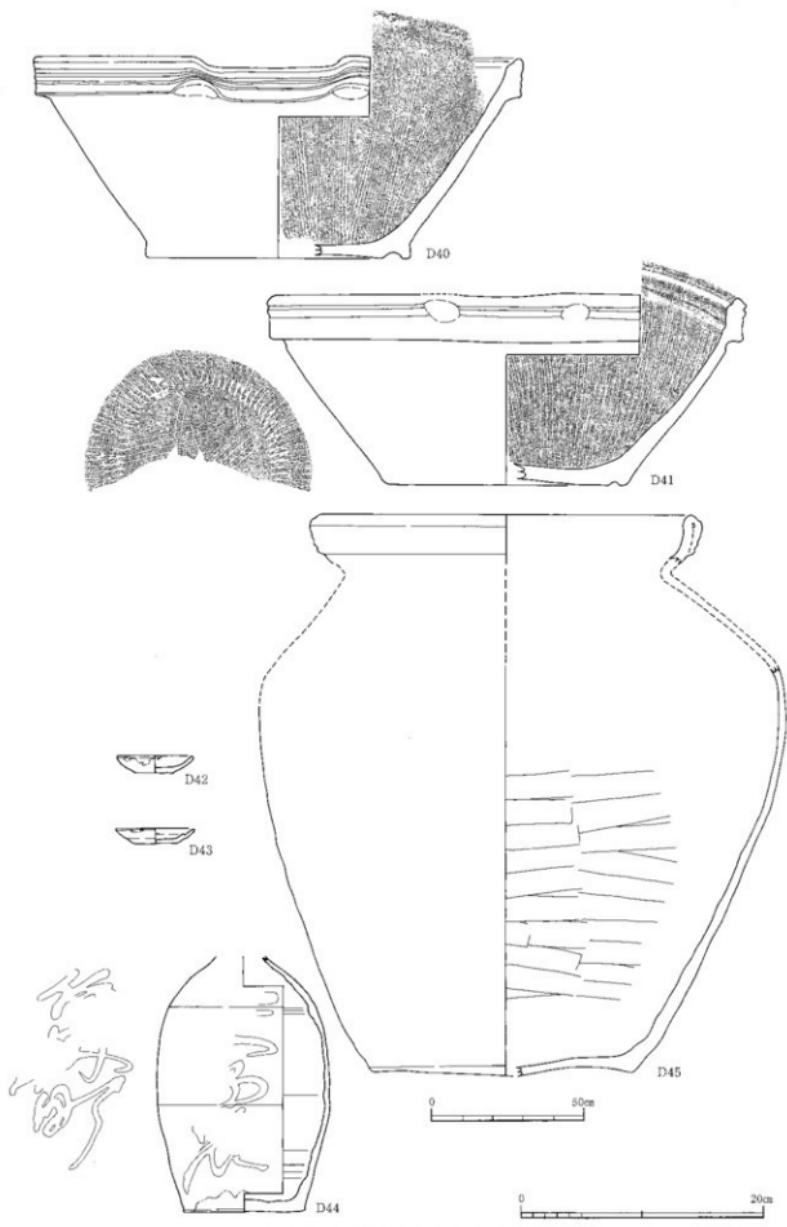


第26図 D地区 第1面 出土土器 1

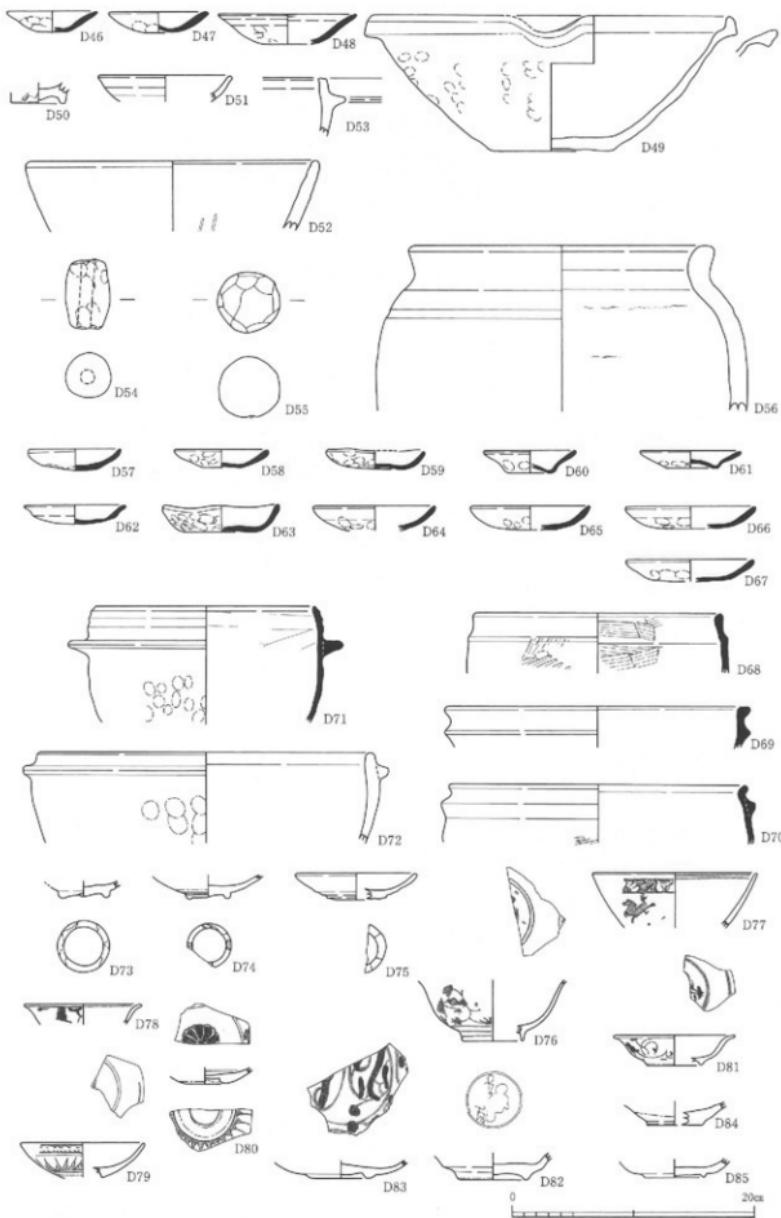


0 20cm

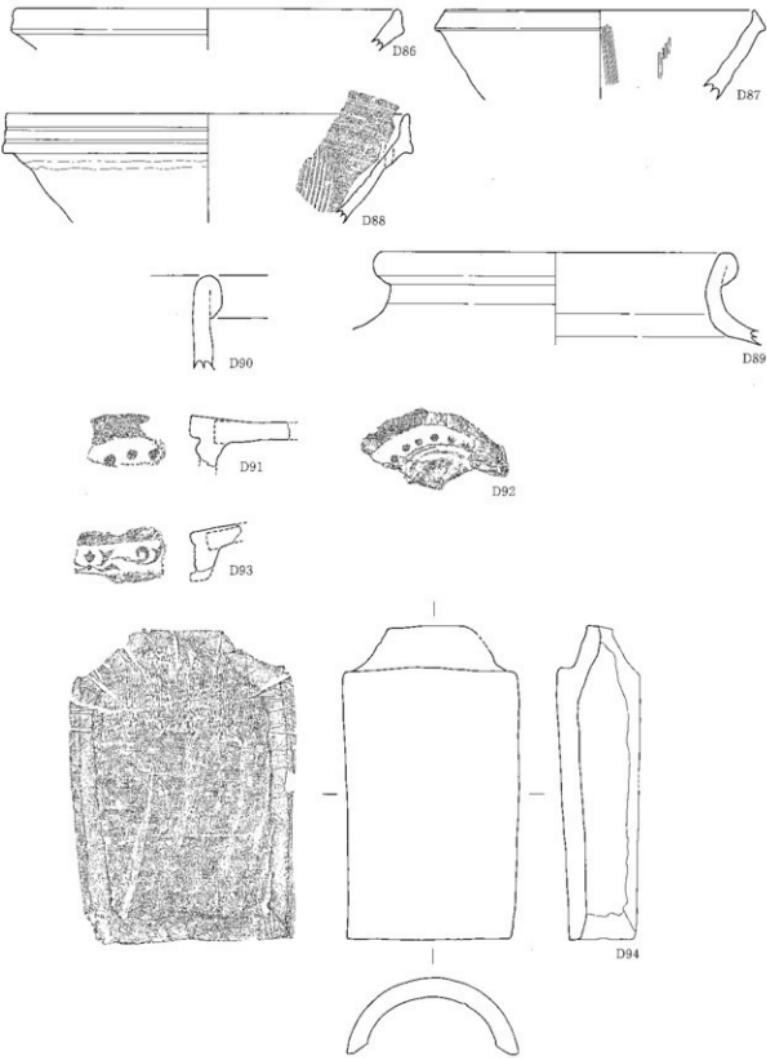
第27図 D地区 第1面 出土土器 2



第28図 D地区 第1面 出土土器 3

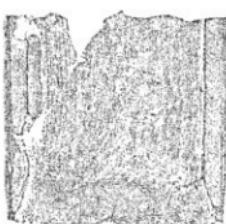
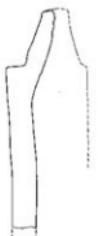


第29図 D地区 第2面 出土土器 1



第30図 D地区 第2面 出土土器2・瓦1

0 20cm



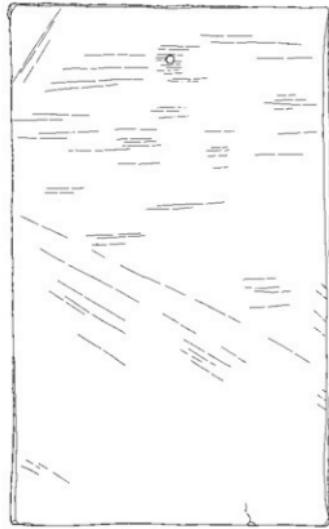
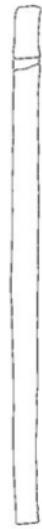
D95



D96



D97



D98



第31図 D地区 第1・2面 瓦2



DI1



DI2



DI3



DI4



DI5



DI6



DI7



DI8



DI9



DI10



DI11



DI12



DI13



DI14



DI15



DI16



DI17



DI18



DI19



DI20



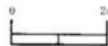
DI21



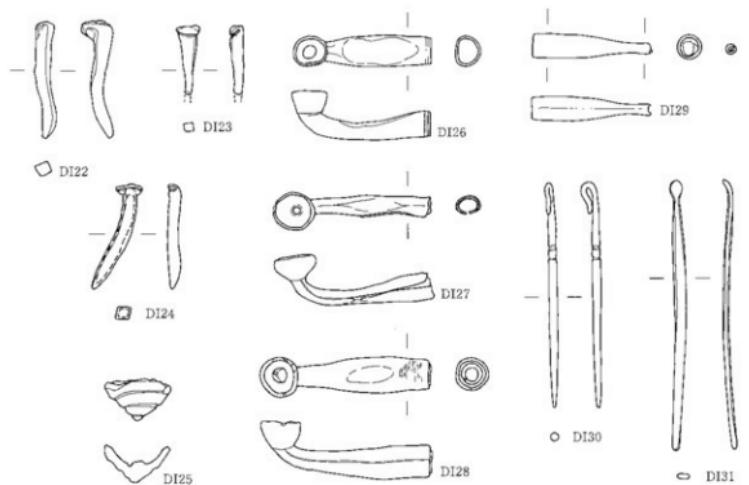
DI22



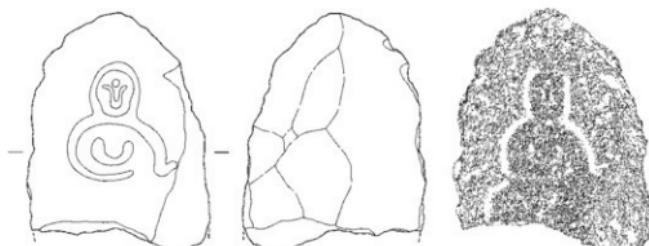
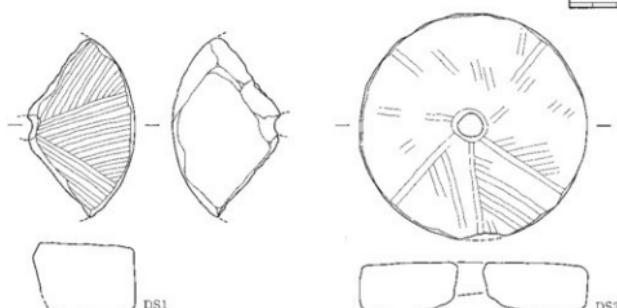
DI23



第32図 D地区 錢貨



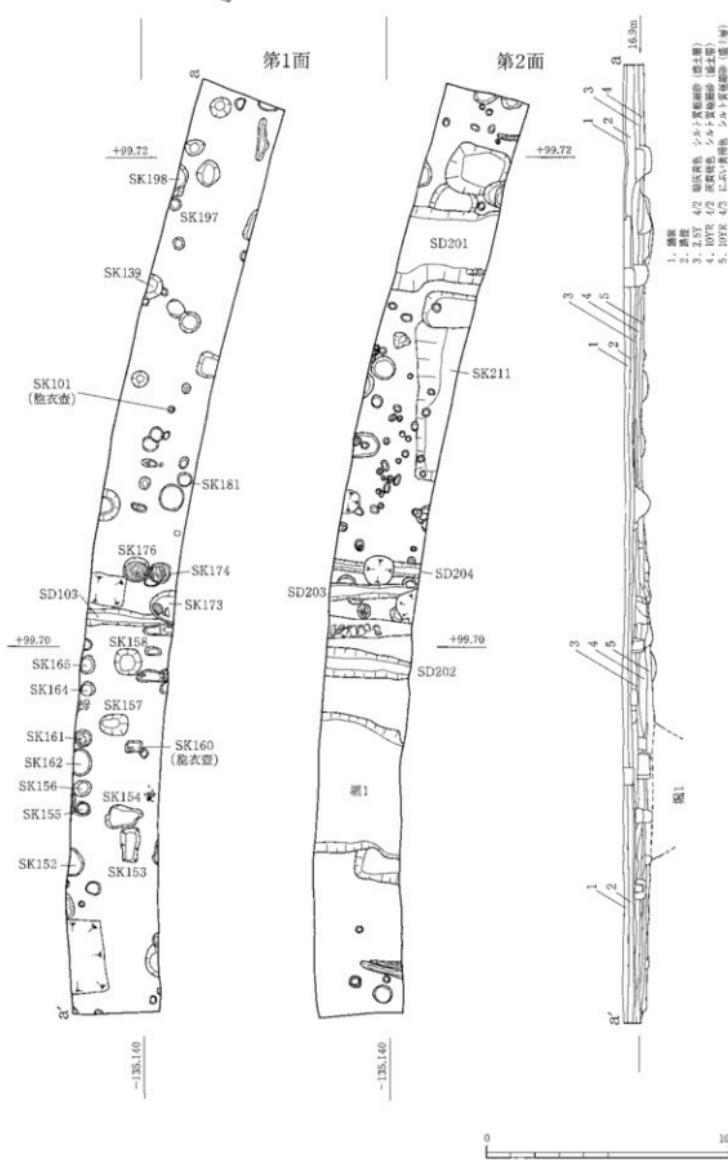
0 5cm



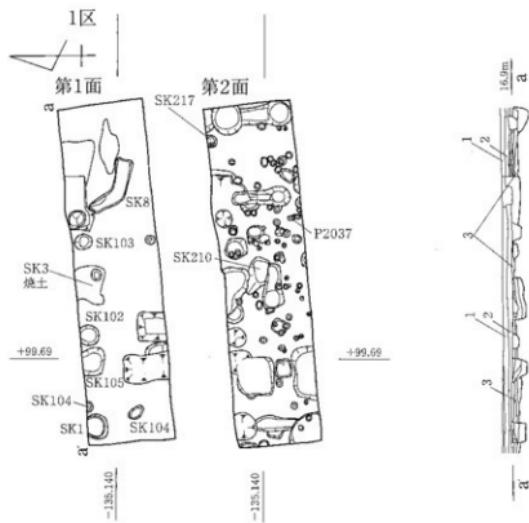
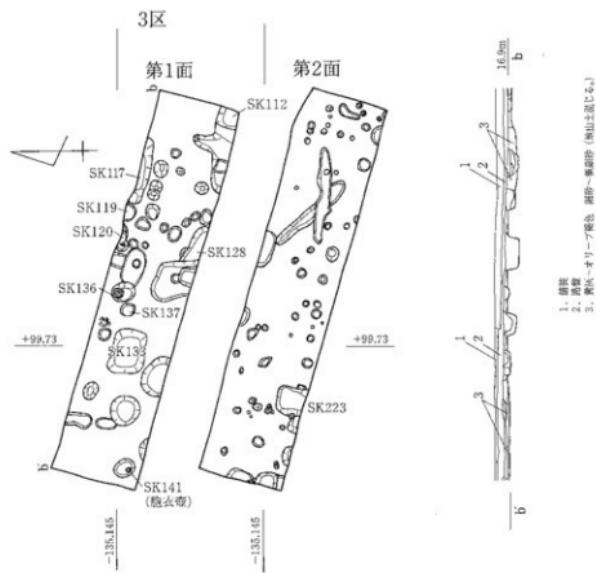
0 20cm

第33図 D地区 金属製品・石製品

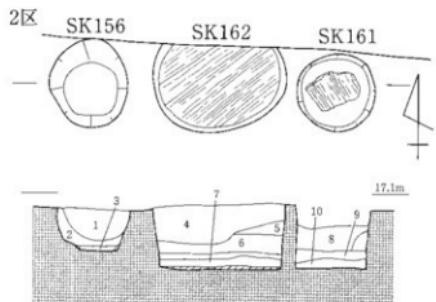
2区



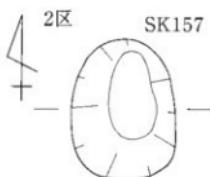
第34図 I地区 調査区平面図(2区)



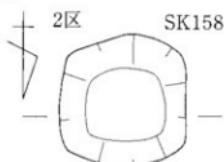
第35図 I地区 調査区平面図（1・3区）



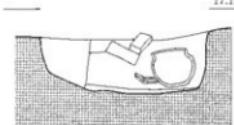
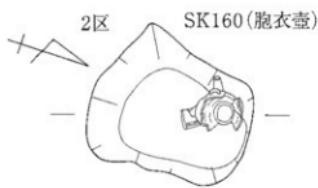
1. 2.5Y 4/2 黄灰色 細繊砂 (瓦含む)	6. 10YR 5/1 塗灰土 細砂
2. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色 シルト質 細繊砂	7. 10YR 3/4 塗灰土 細砂
3. 2.5Y 6/4 にぶい黄褐色 シルト質 細繊砂	8. 2.5Y 6/2 淡黄色 シルト質 細繊砂
4. 2.5Y 6/2 黄褐色 シルト質 細繊砂	9. 2.5Y 7/4 淡黄色 シルト質 砂質土 細砂
5. 10YR 5/8 黄褐色 シルト質 細砂	10. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色 細繊砂



1. 2.5Y 4/2 黄灰色 細砂 (大量的瓦を含む)



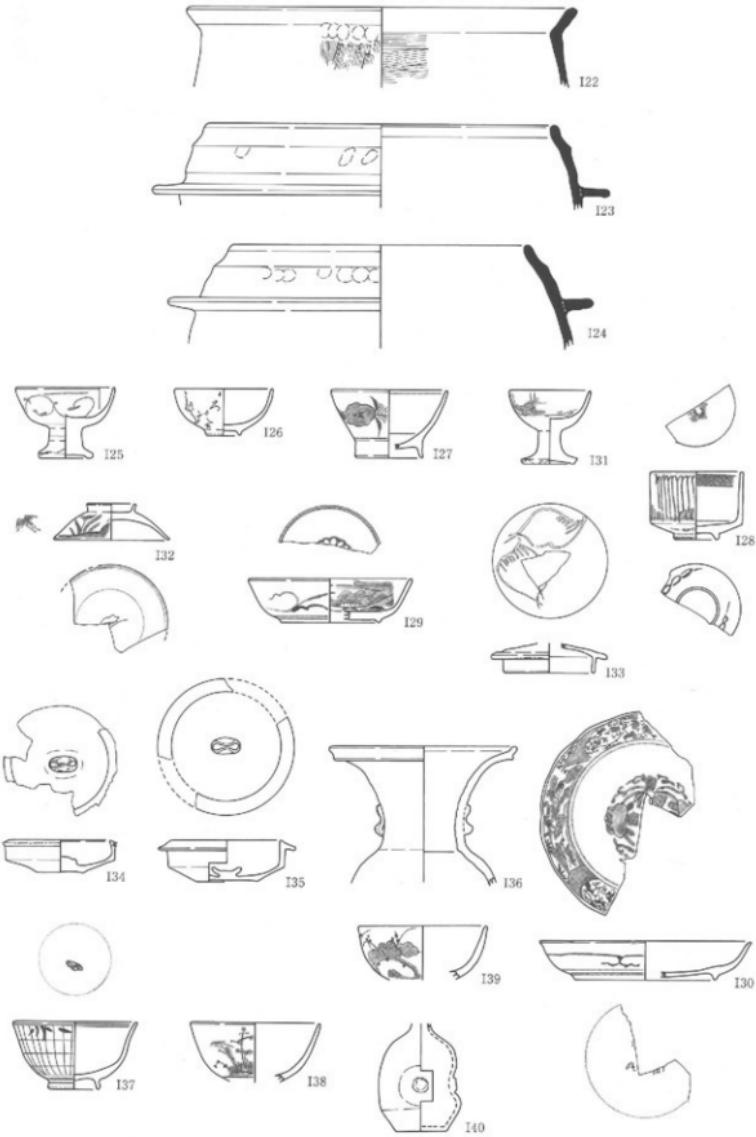
1. 2.5Y 5/4 シルト 大量の瓦を含む



第36図 I地区 遺構平・断面図

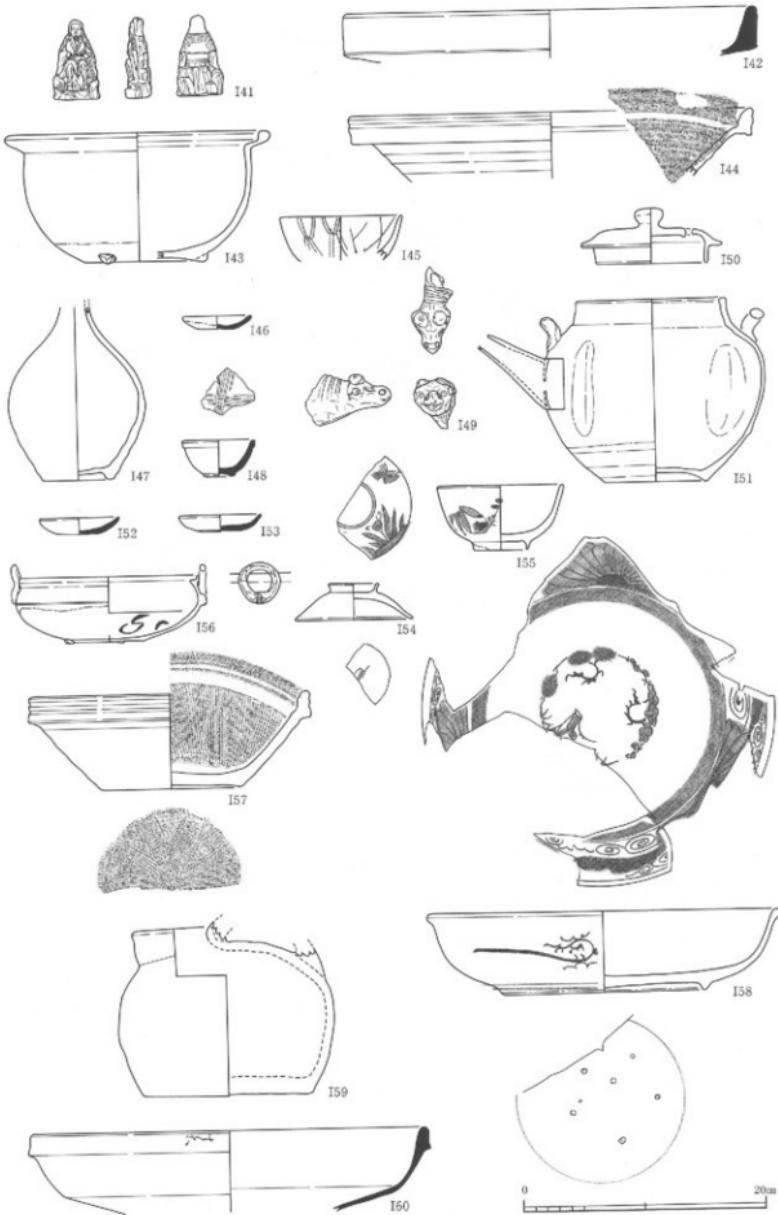


第37図 I地区 出土土器 I (1区)

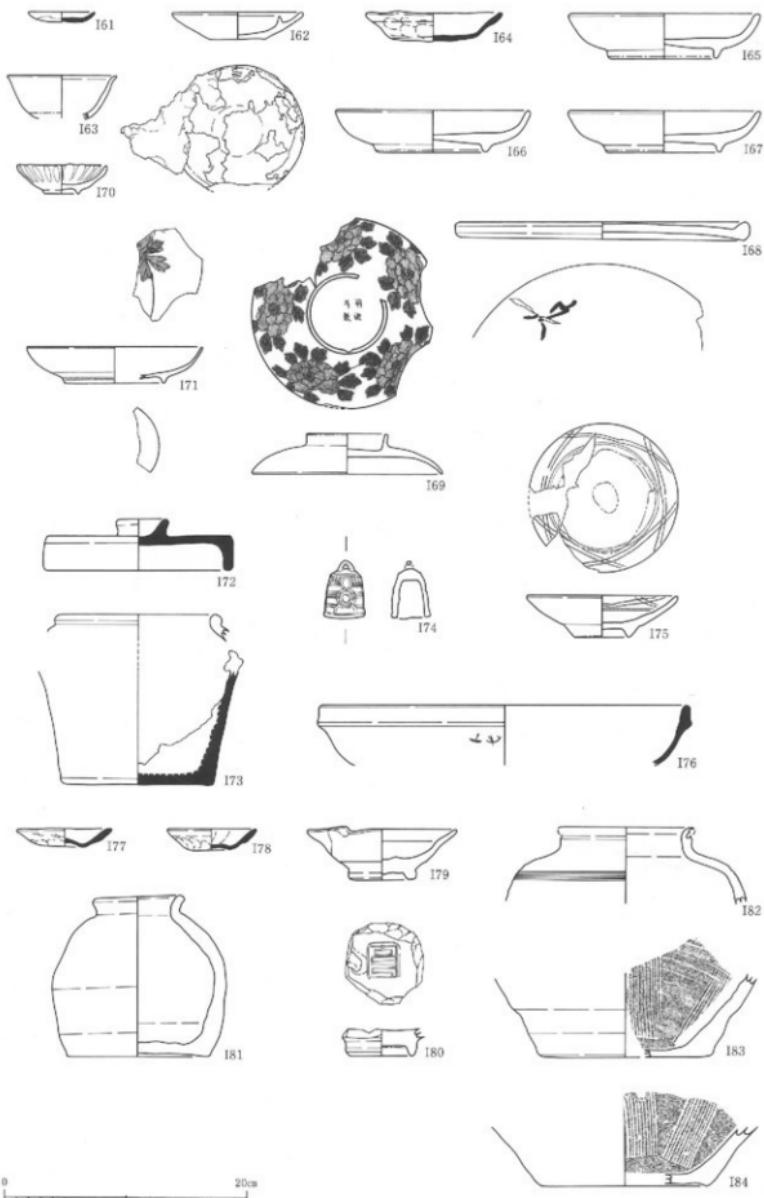


第38図 I地区 出土土器2（1・2区）

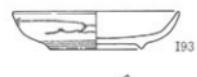
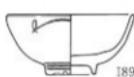
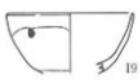
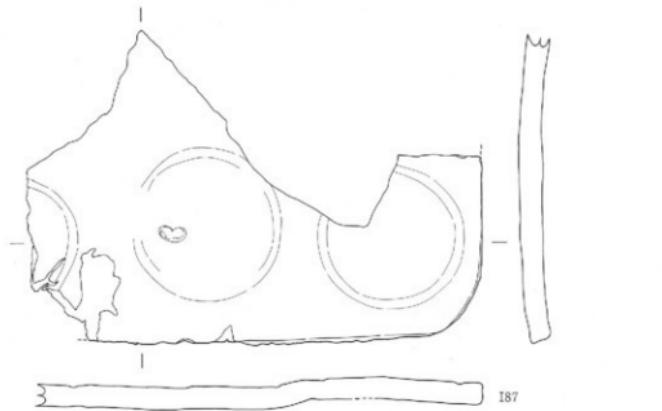
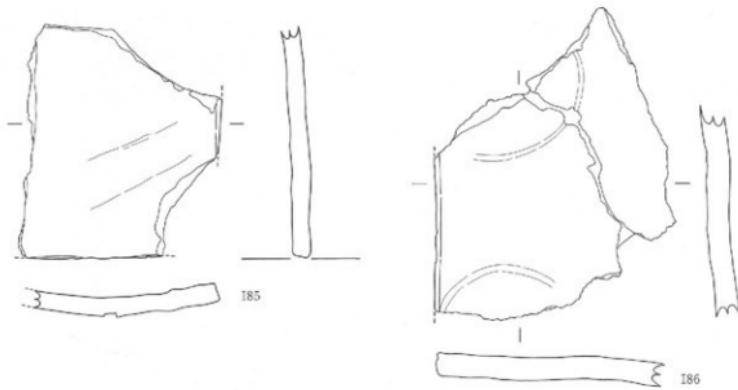
0 20cm



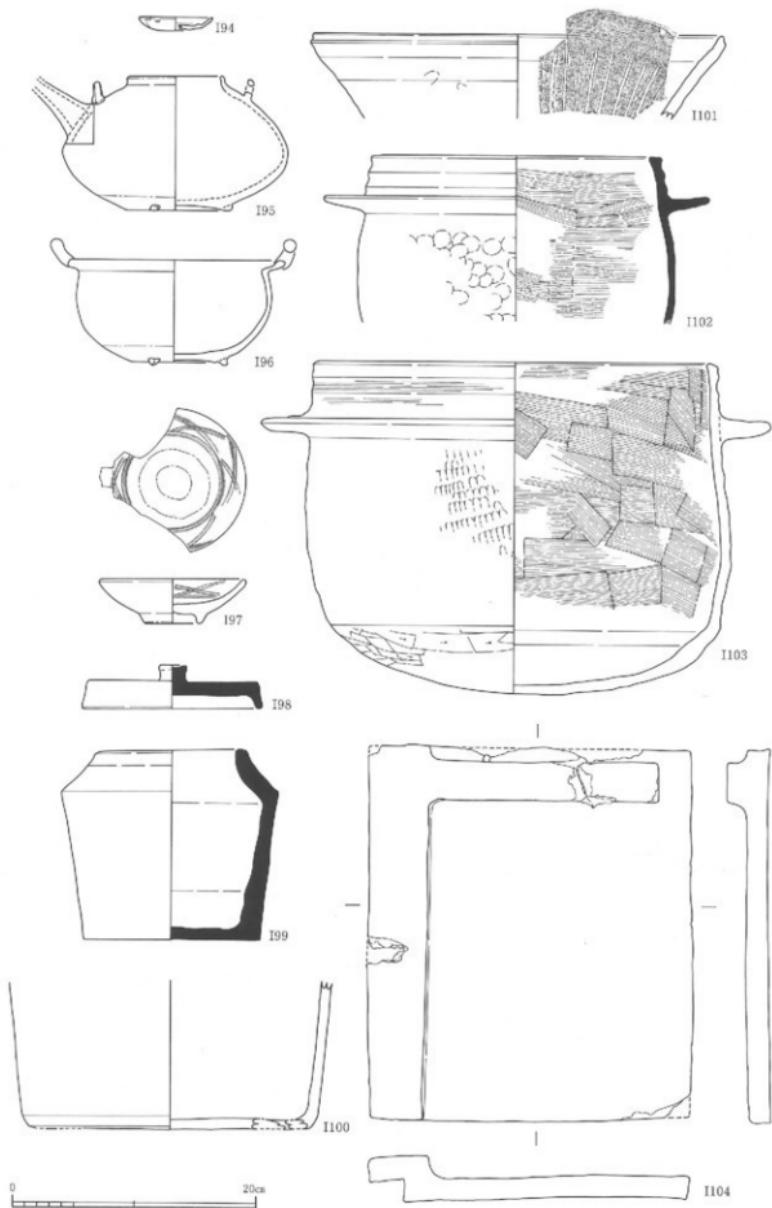
第39図 I地区 出土土器 3 (2区)



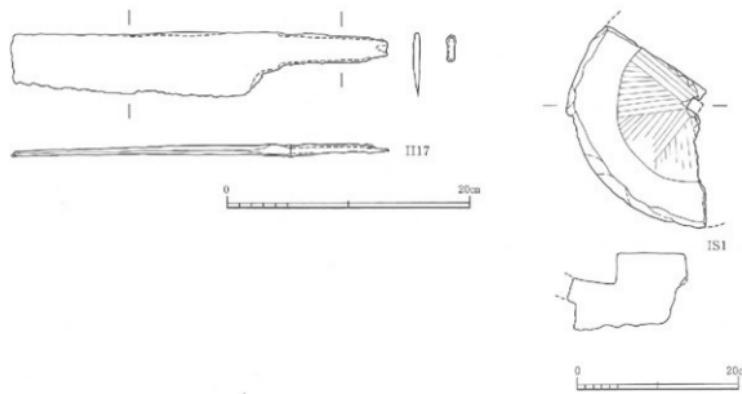
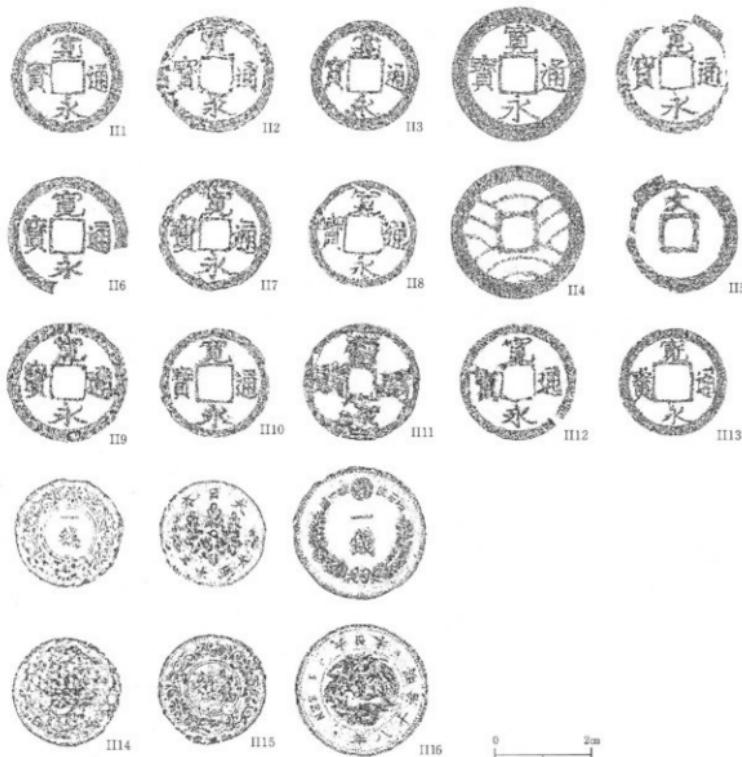
第40図 I地区 出土土器 4 (2区)



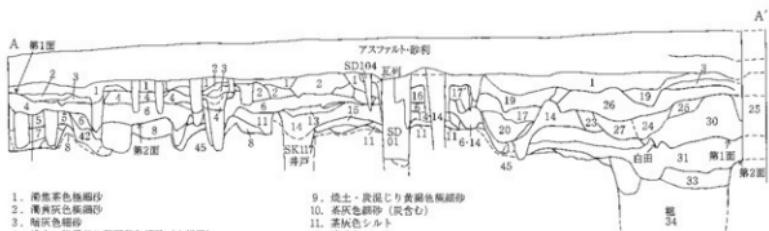
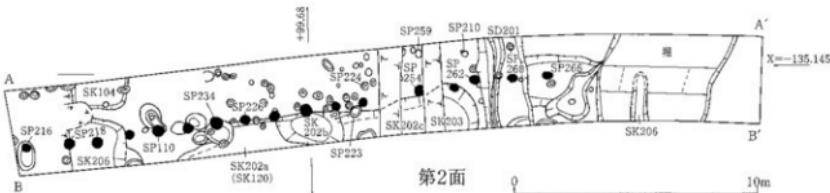
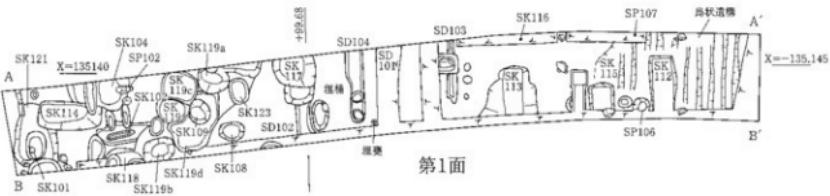
第41図 I地区 出土土器5（2・3区）



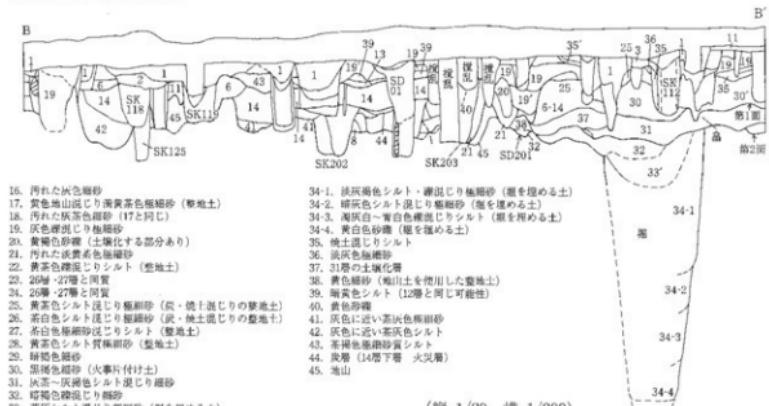
第42図 I地区 出土土器 6 (3区)・瓦



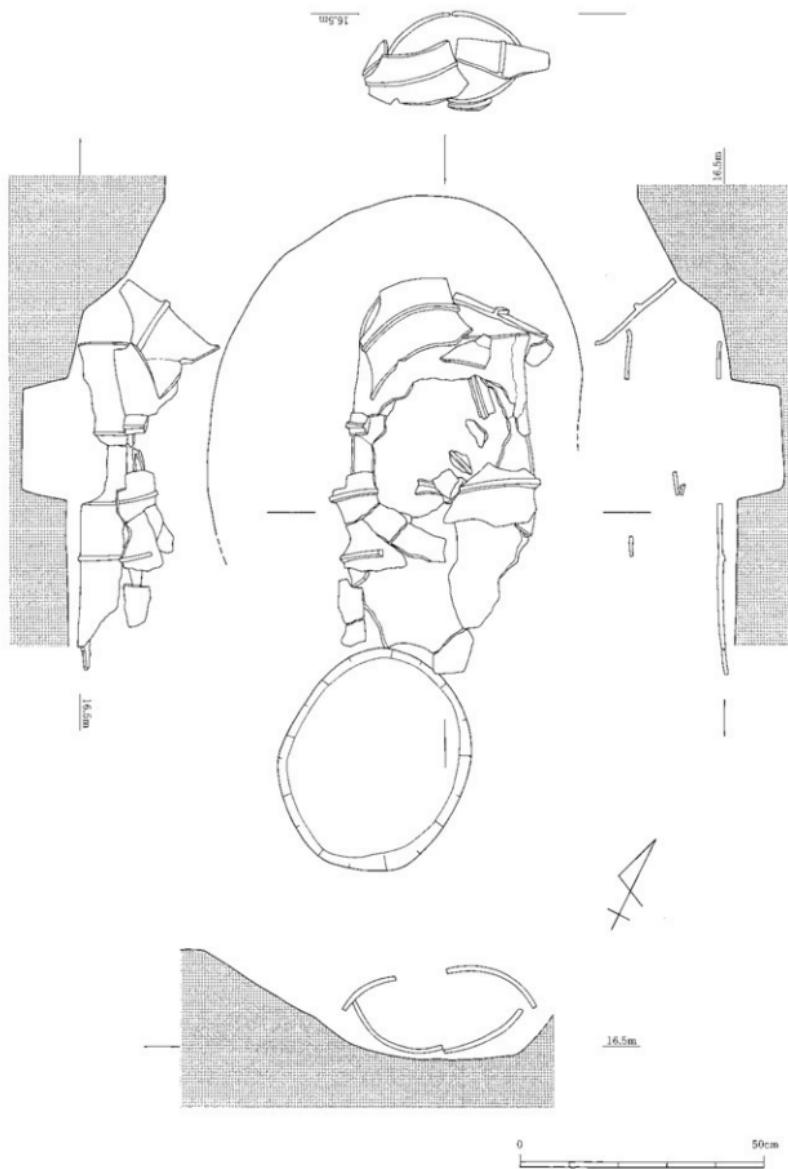
第43図 I地区 銭貨・金属製品・石製品



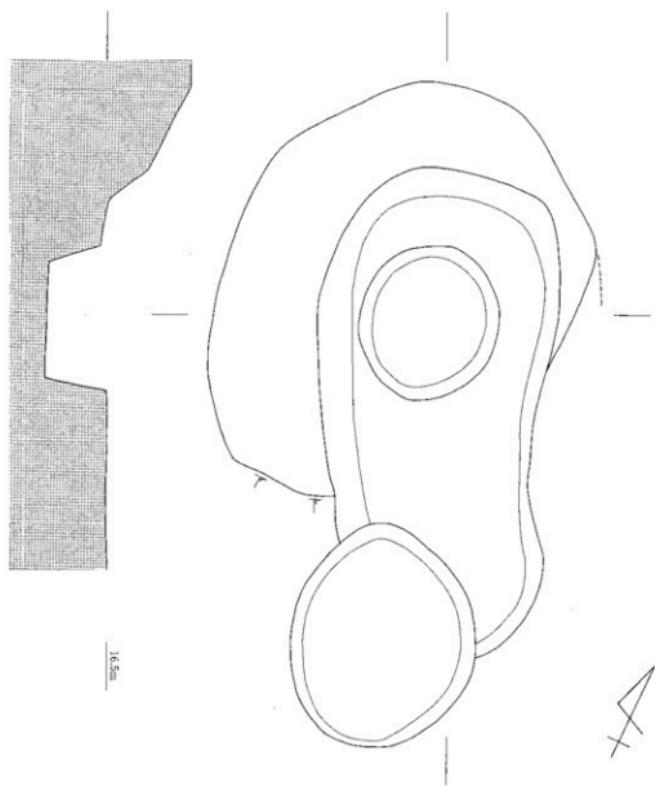
1. 南洋紅茶細胞圖
 2. 青島紅茶細胞圖
 3. 茶葉細胞圖
 4. 烟土・英美毛茶葉細胞圖 (火災葉)
 5. 雪 (雪) 氷のシルエット
 6. 青島紅茶細胞 (上級樹)
 7. 茶葉細胞シート
 8. 茶葉細胞 (茶葉細胞)
 9. 絹土・底凝じり黄葉紅茶細胞
 10. 級茶色細胞 (混合む)
 11. 級茶色シルエット
 12. 級茶色シルエット
 13. 薄葉紅茶細胞 (5層に近い)
 14. 雪色白シルエットじり黄葉紅茶細胞 (整地土・7層に近い)
 15. 黄色茶色地に浅くじり淡茶色細胞



第44図 H地区 調査区平・断面図



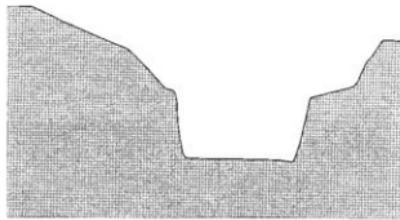
第45図 H地区 塗輪窯平・断面図



16.5cm

—

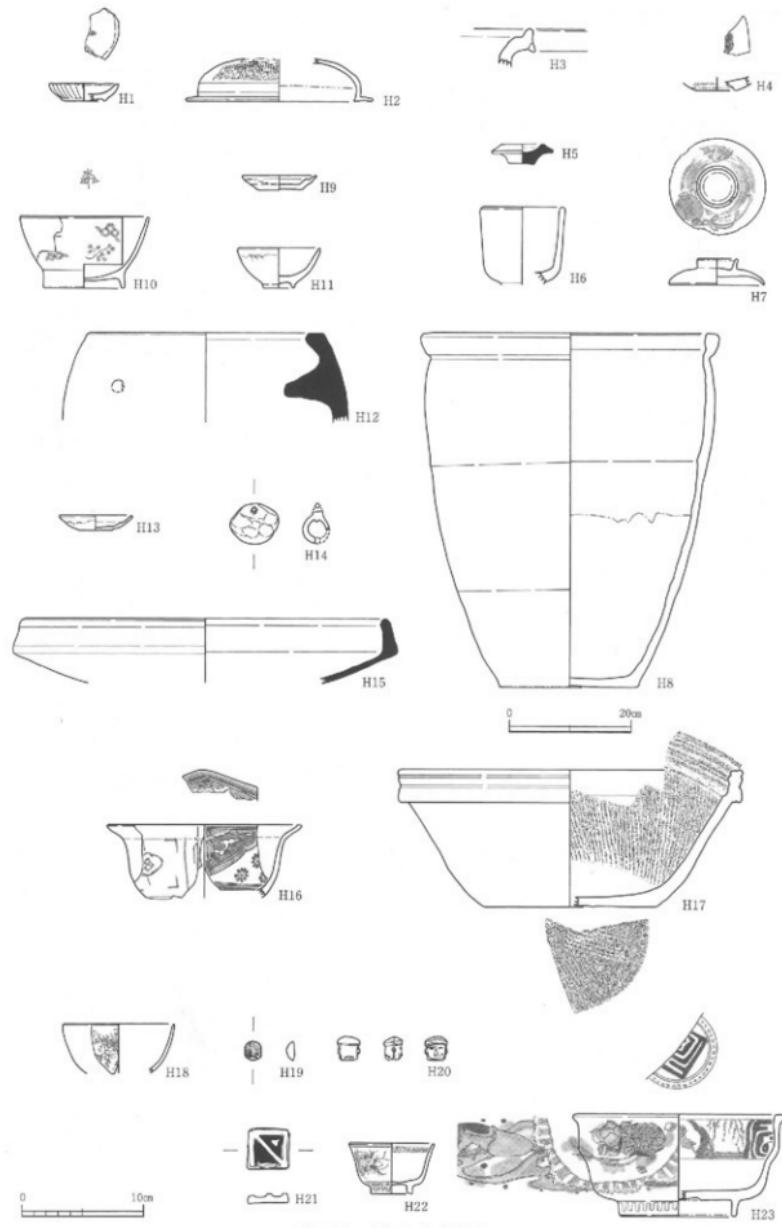
— 16.5cm —



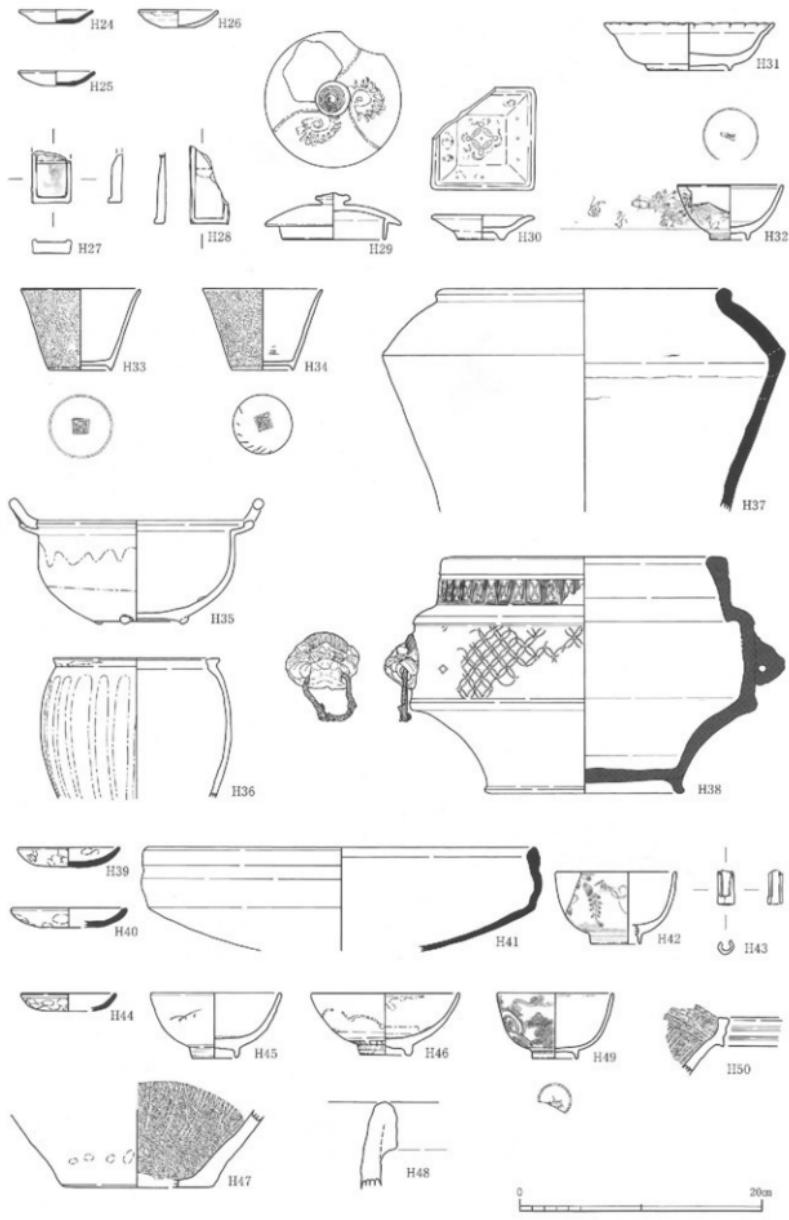
0

50cm

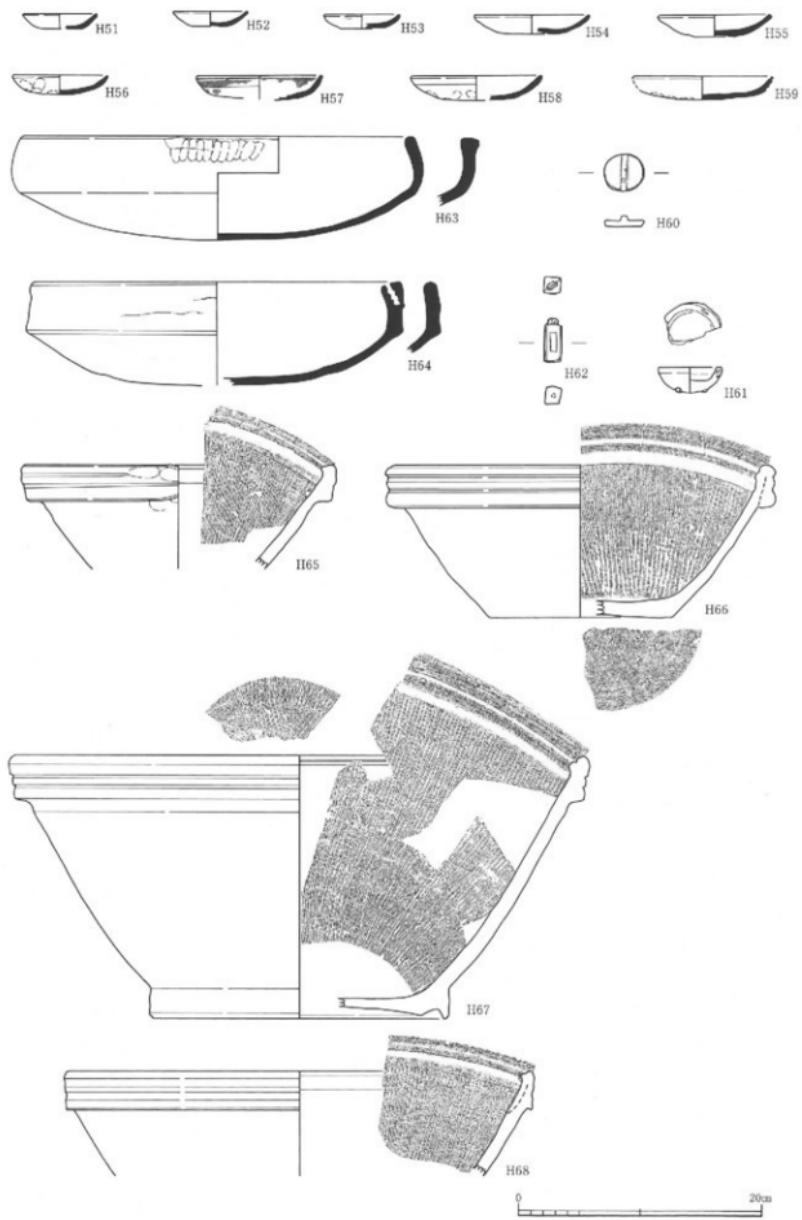
第46図 H地区 墓輪棺掘方平・断面図



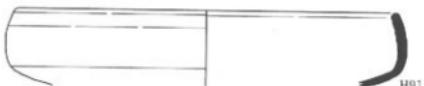
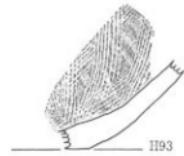
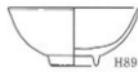
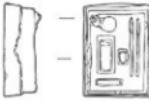
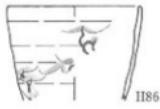
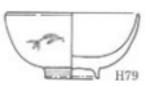
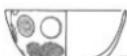
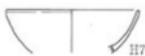
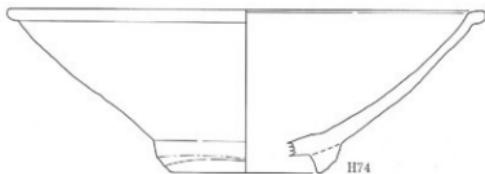
第47図 H地区 出土土器 1



第48図 H地区 出土土器 2

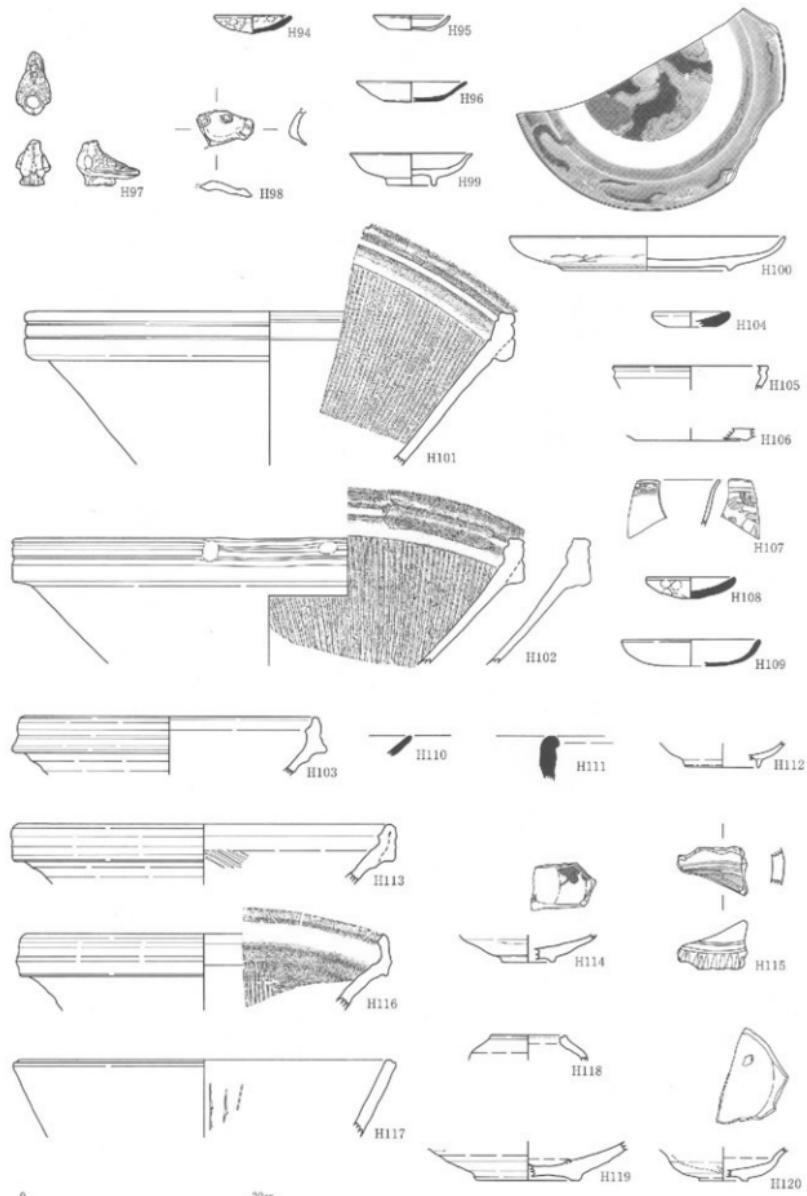


第49図 H地区 出土土器 3

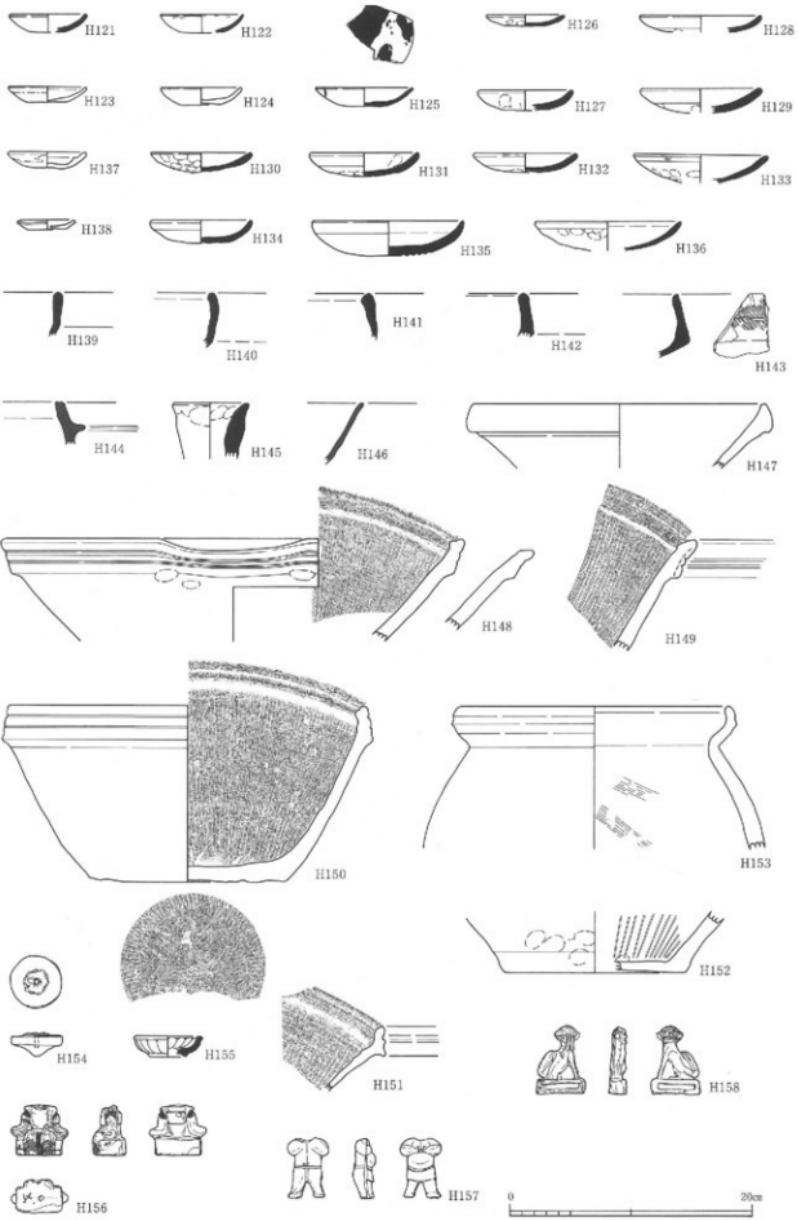


0 20cm

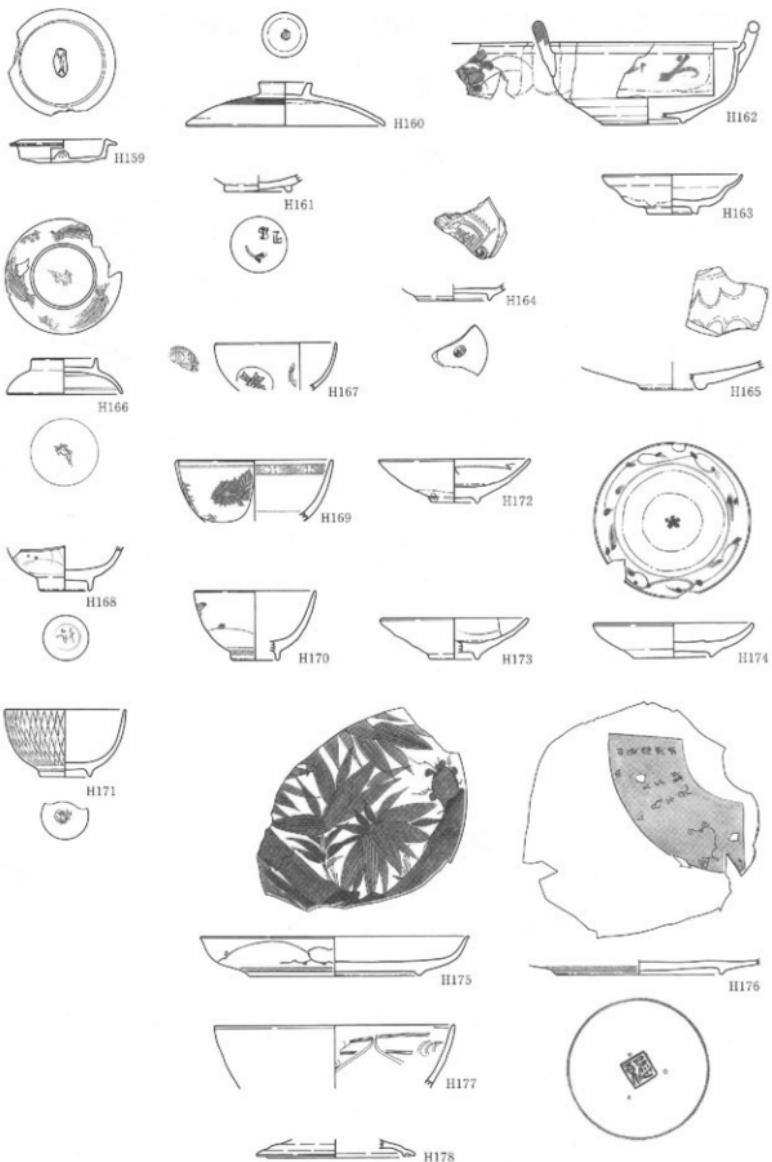
第50図 H地区 出土土器 4



第51図 H地区 出土土器 5

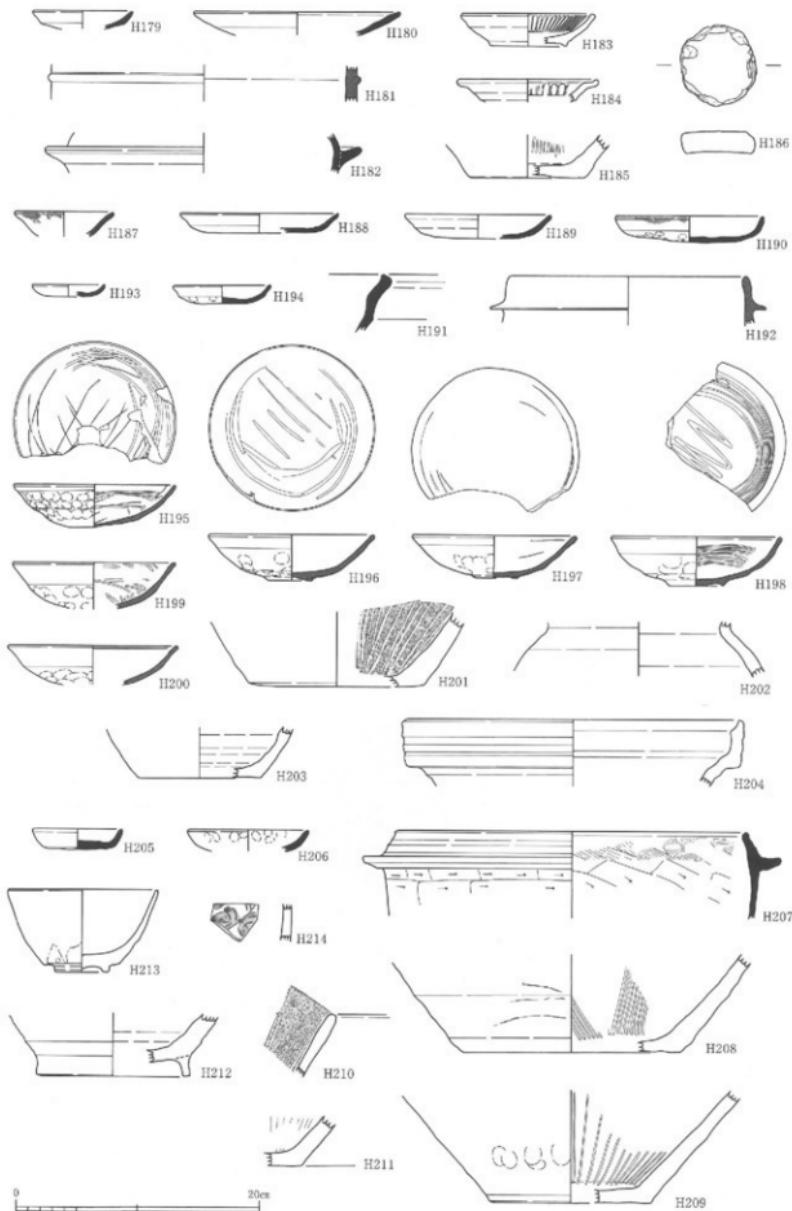


第52図 H地区 出土土器 6

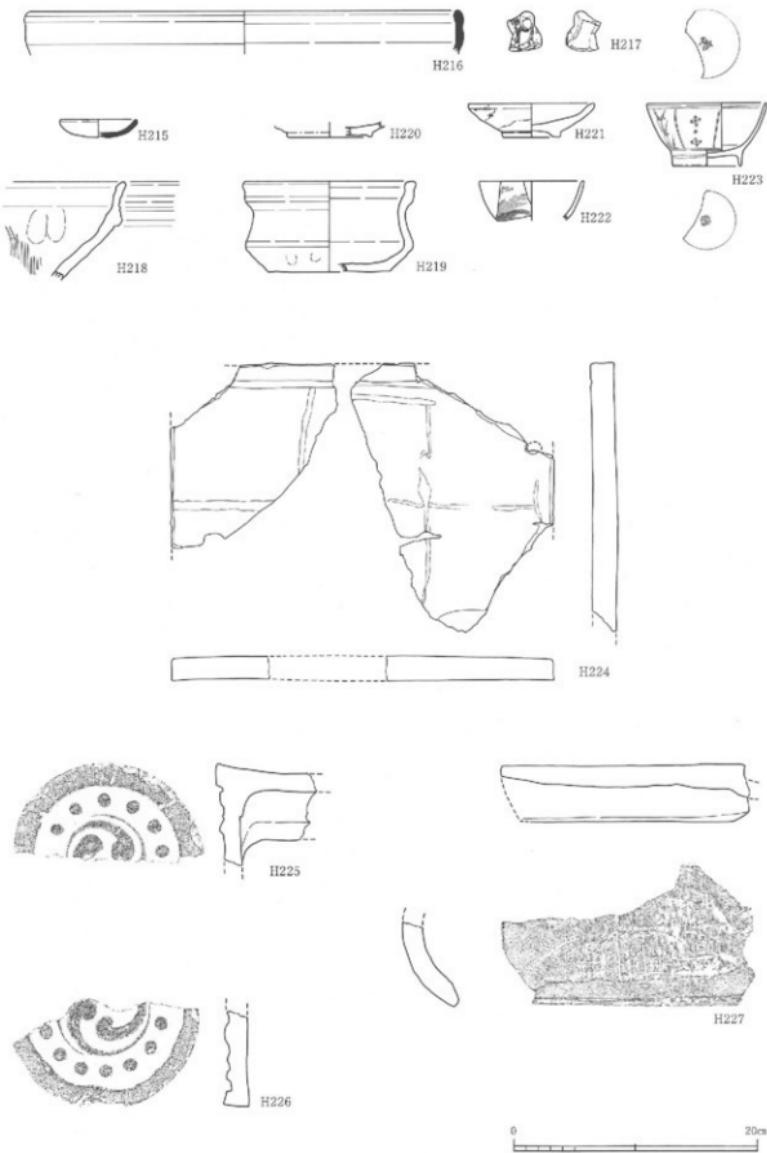


第53図 H地区 出土土器 7

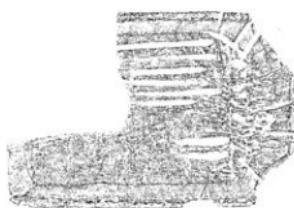
0 20cm



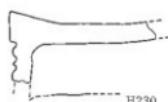
第54図 H地区 出土土器 8



第55図 H地区 出土土器 9・瓦 1



H229



H230



H231



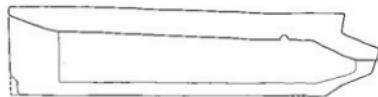
H232



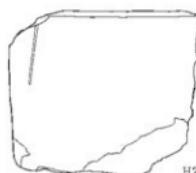
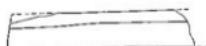
第56図 H地区 瓦2



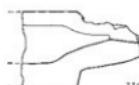
H233



H234



H235



H236



第57図 H地区 瓦 3



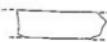
H237



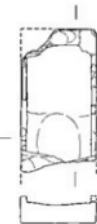
H238



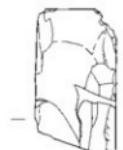
H239



H240



HS1



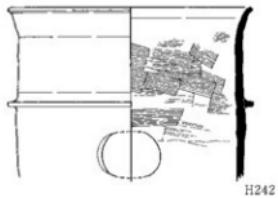
HS2



HS3



第58図 H地区 瓦4・石製品



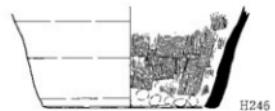
H242



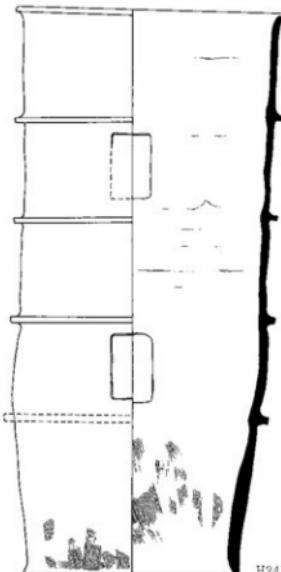
H243



H244



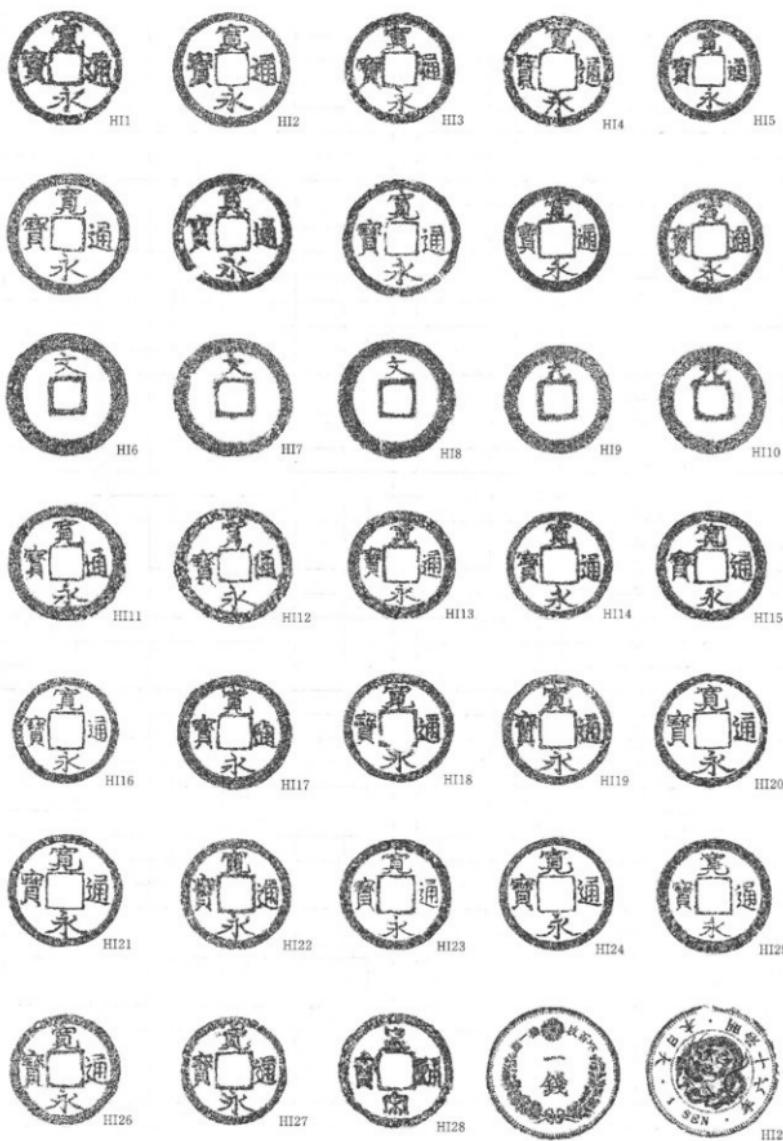
H245



H241

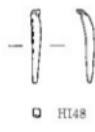
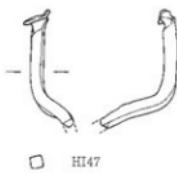
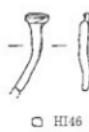
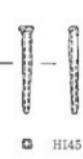
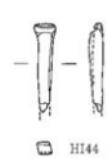
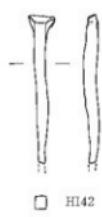
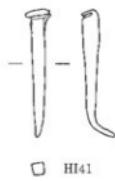
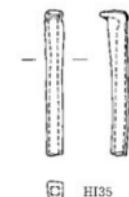
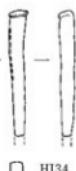
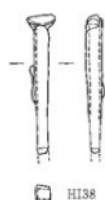
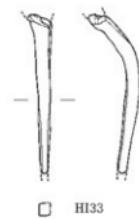
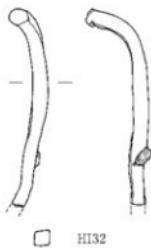
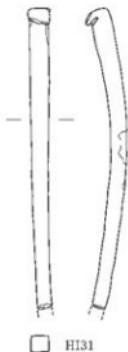
0 20m

第59図 H地区 墓輸

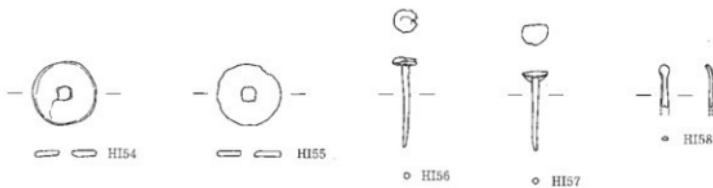
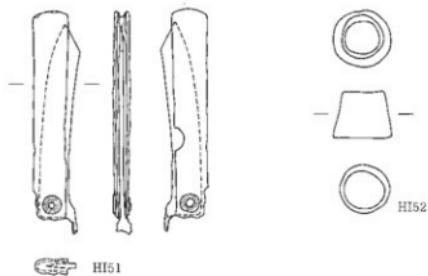
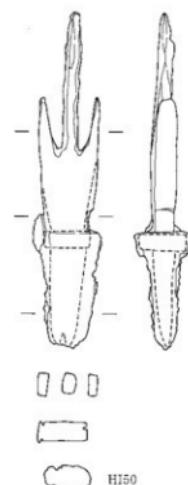
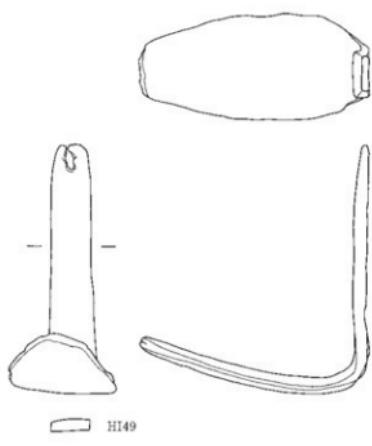


0 2cm

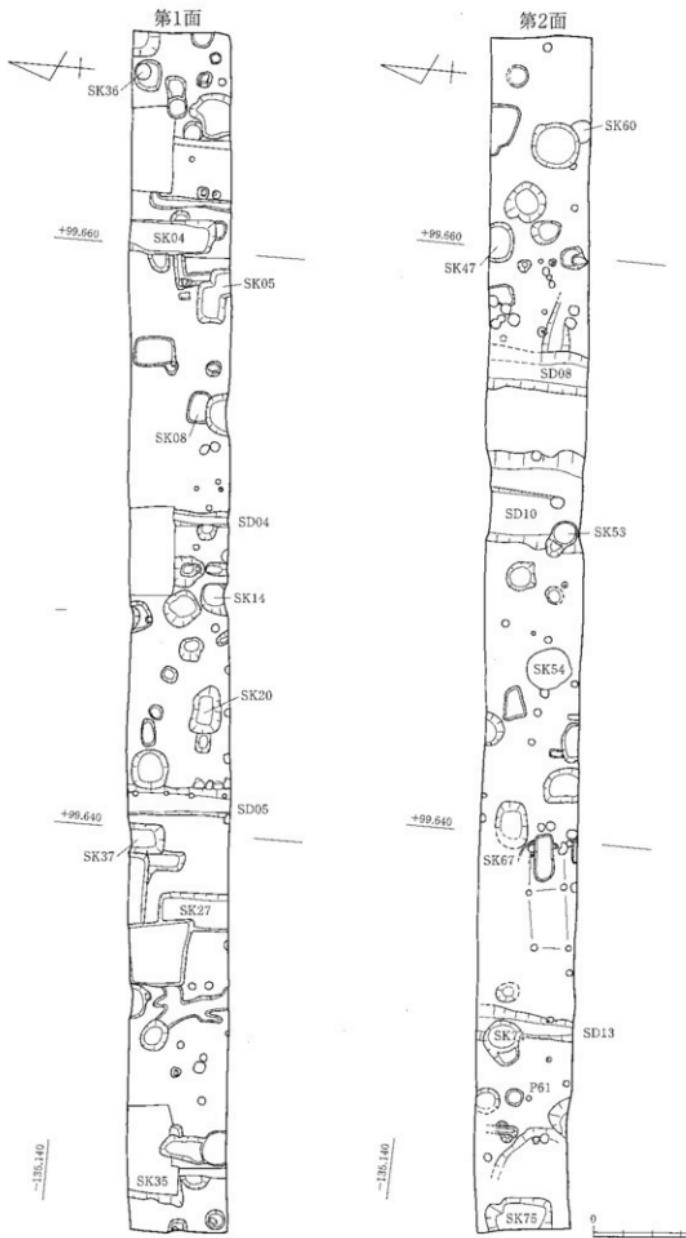
第60図 H地区 錢貨



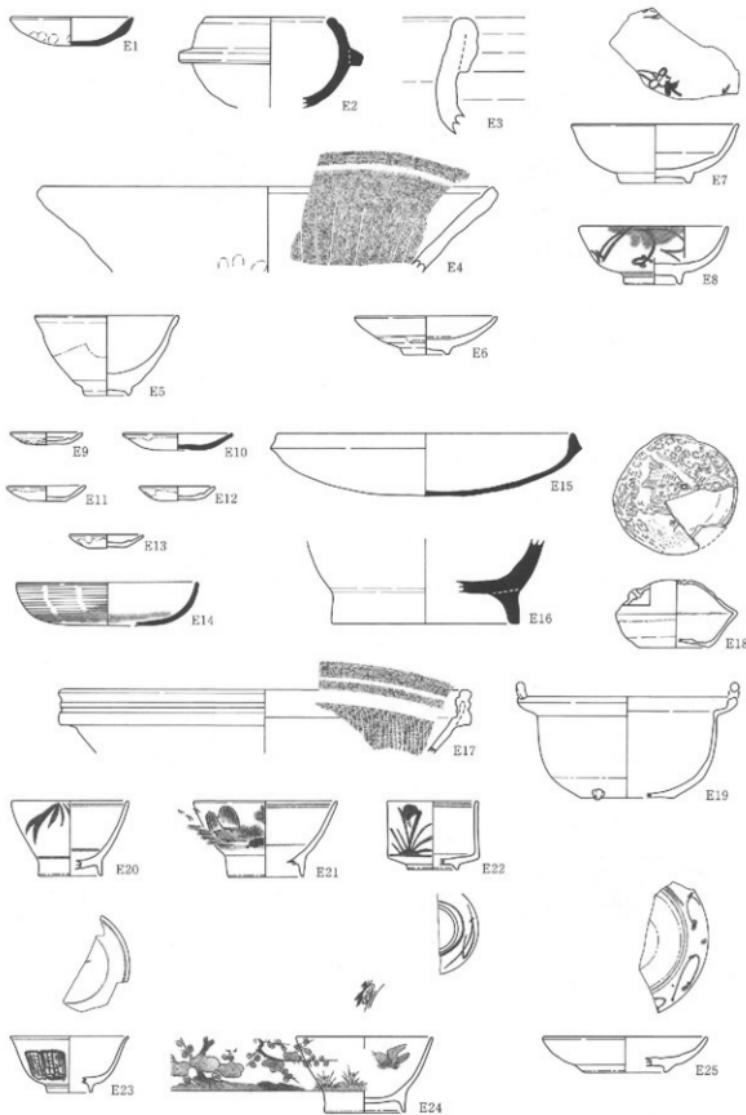
第61図 H地区 金属製品1



第62図 H地区 金属製品2

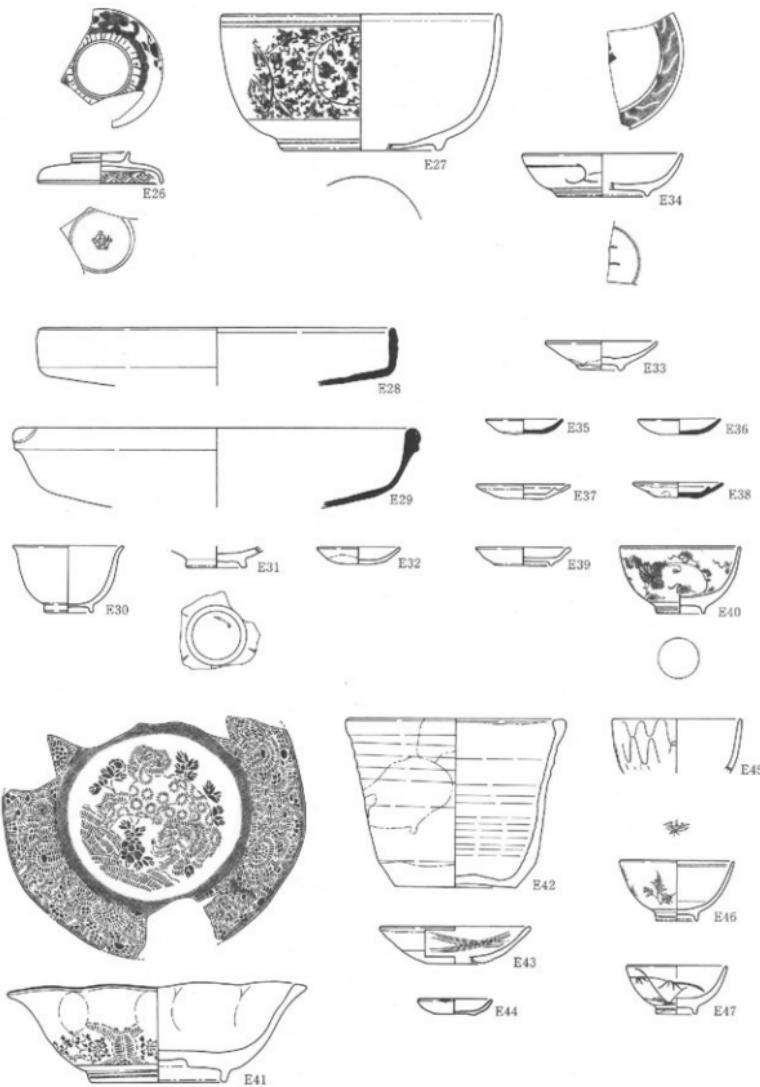


第63図 E地区 調査区平面図



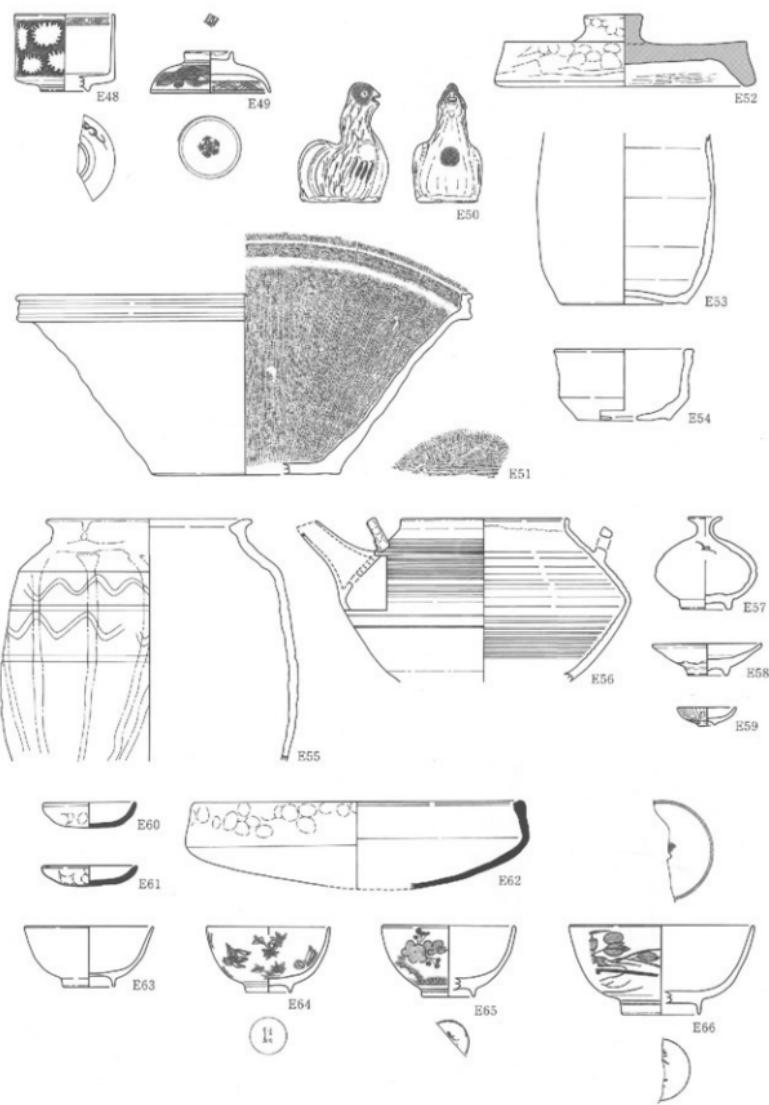
0 20cm

第64図 E地区 出土土器1



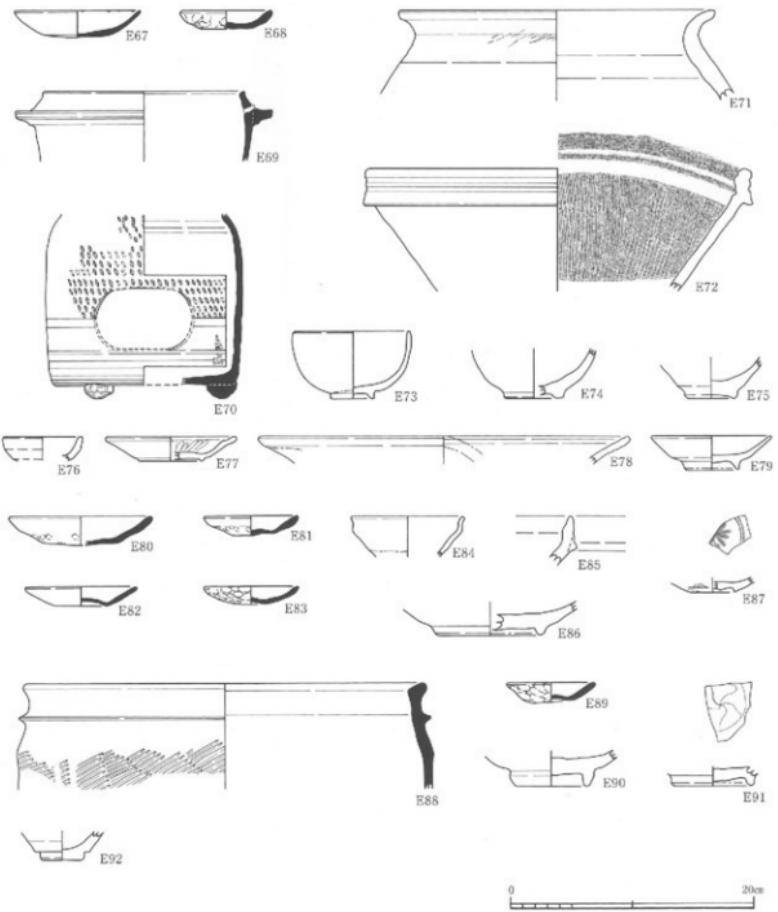
0 20cm

第65図 E地区 出土土器 2

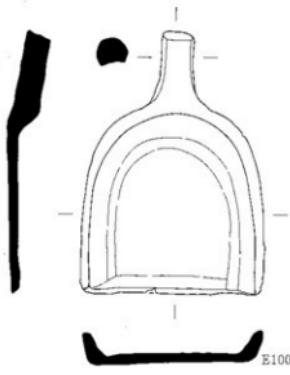
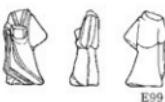
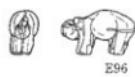


0 20cm

第66図 E地区 出土土器 3

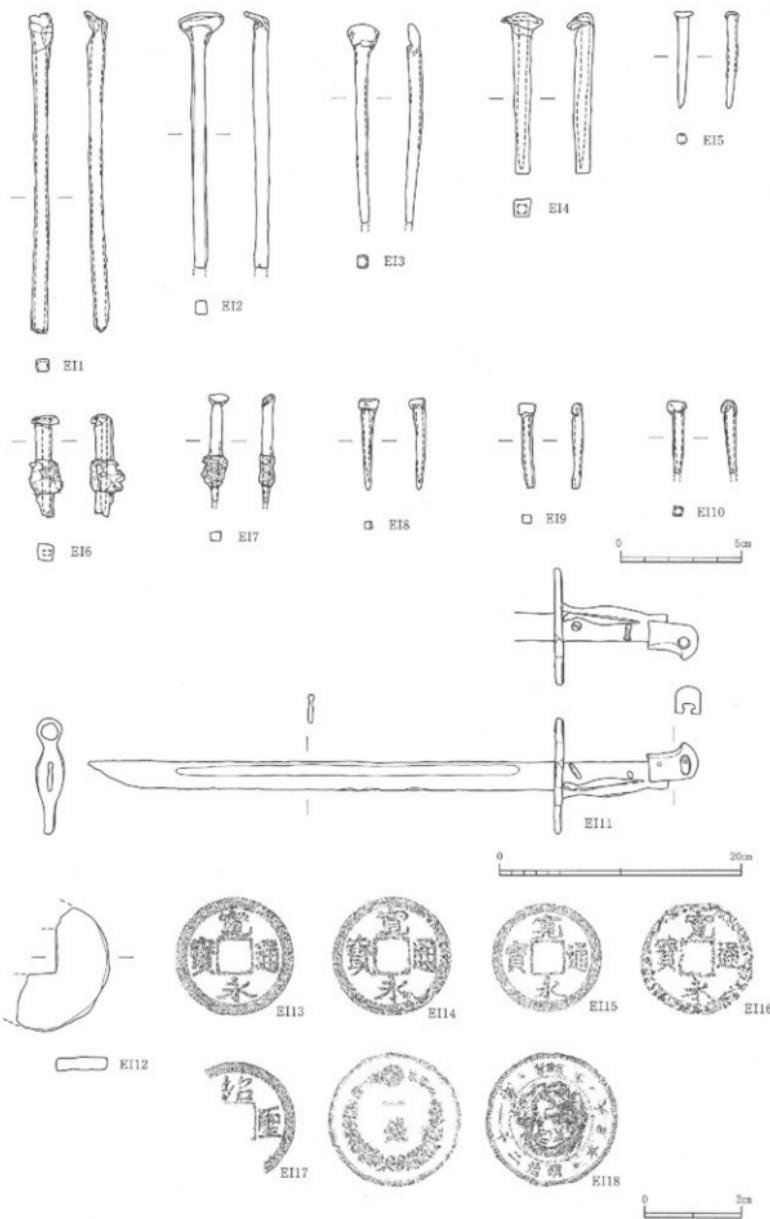


第67図 E地区 出土土器 4

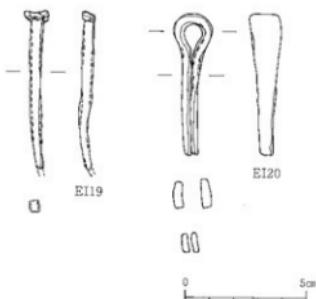
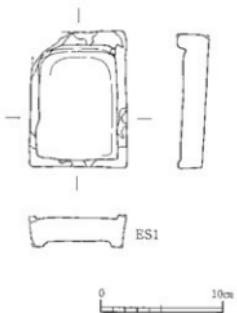


0 20cm

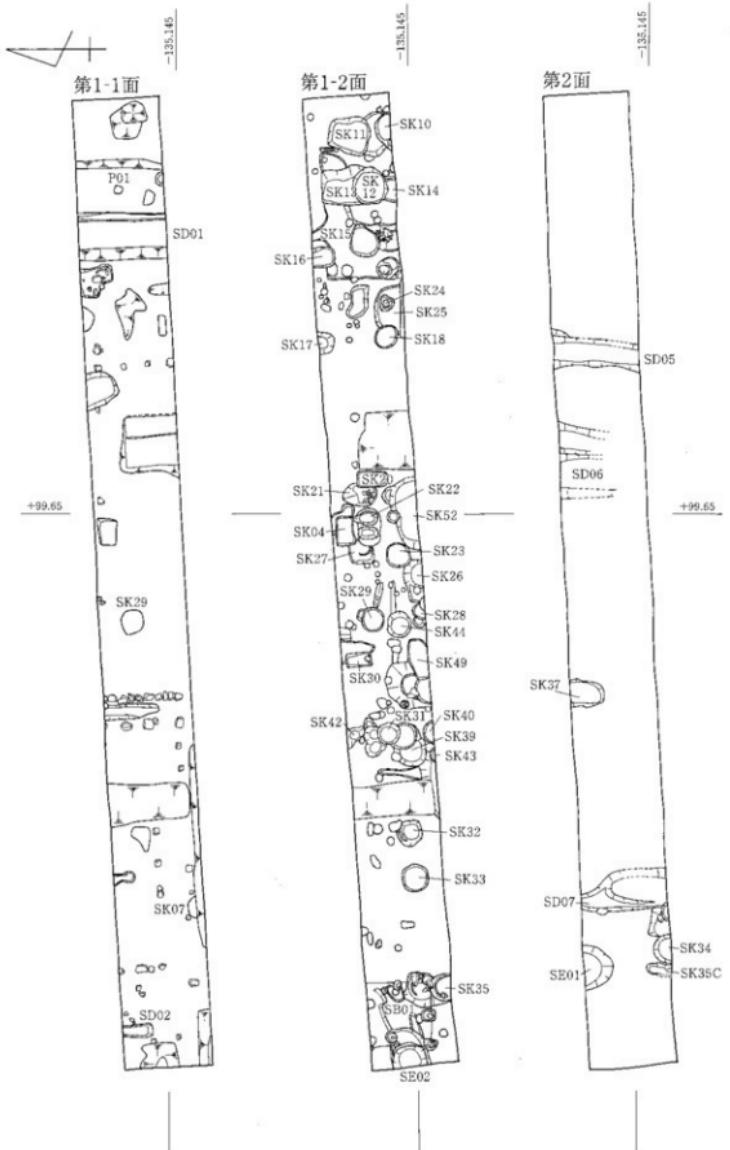
第68図 E地区 出土土器 5



第69図 E地区 金属製品1・錢貨

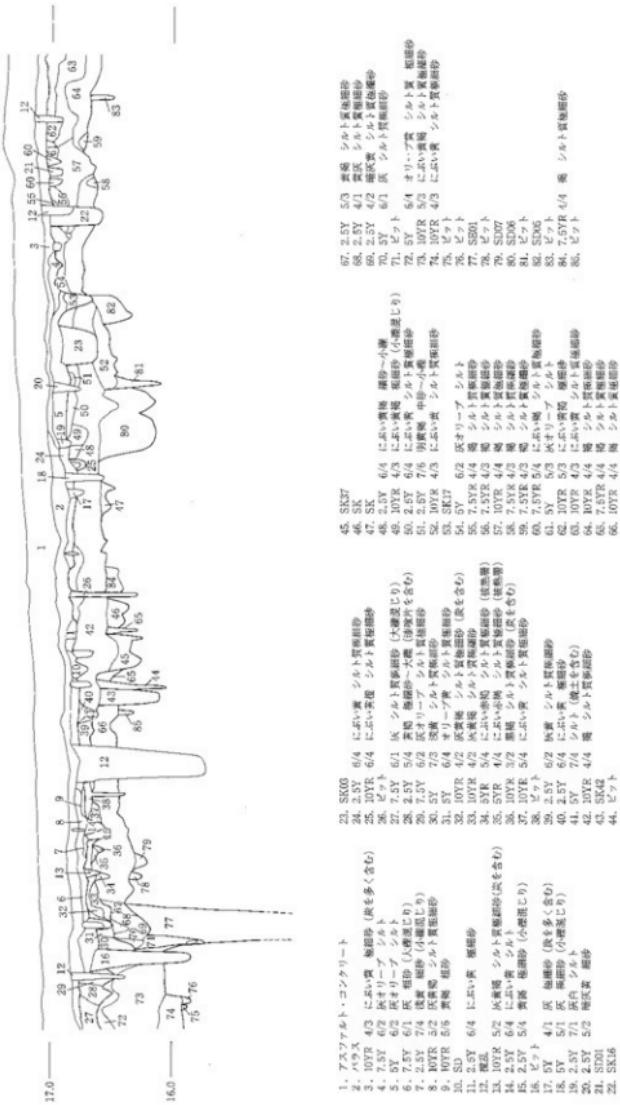


第70図 E地区 金属製品2・石製品

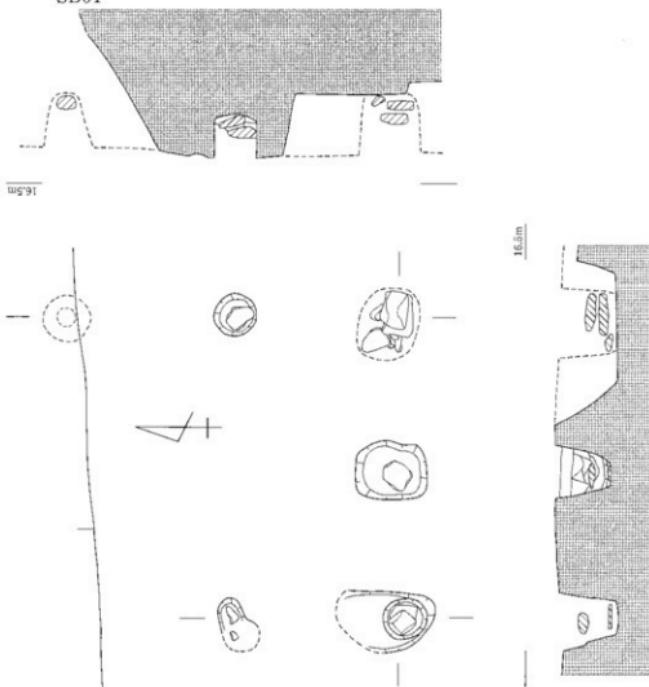


第71図 G地区 調査区平面図

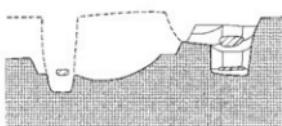
第72図 G地区 調査区断面図



SB01

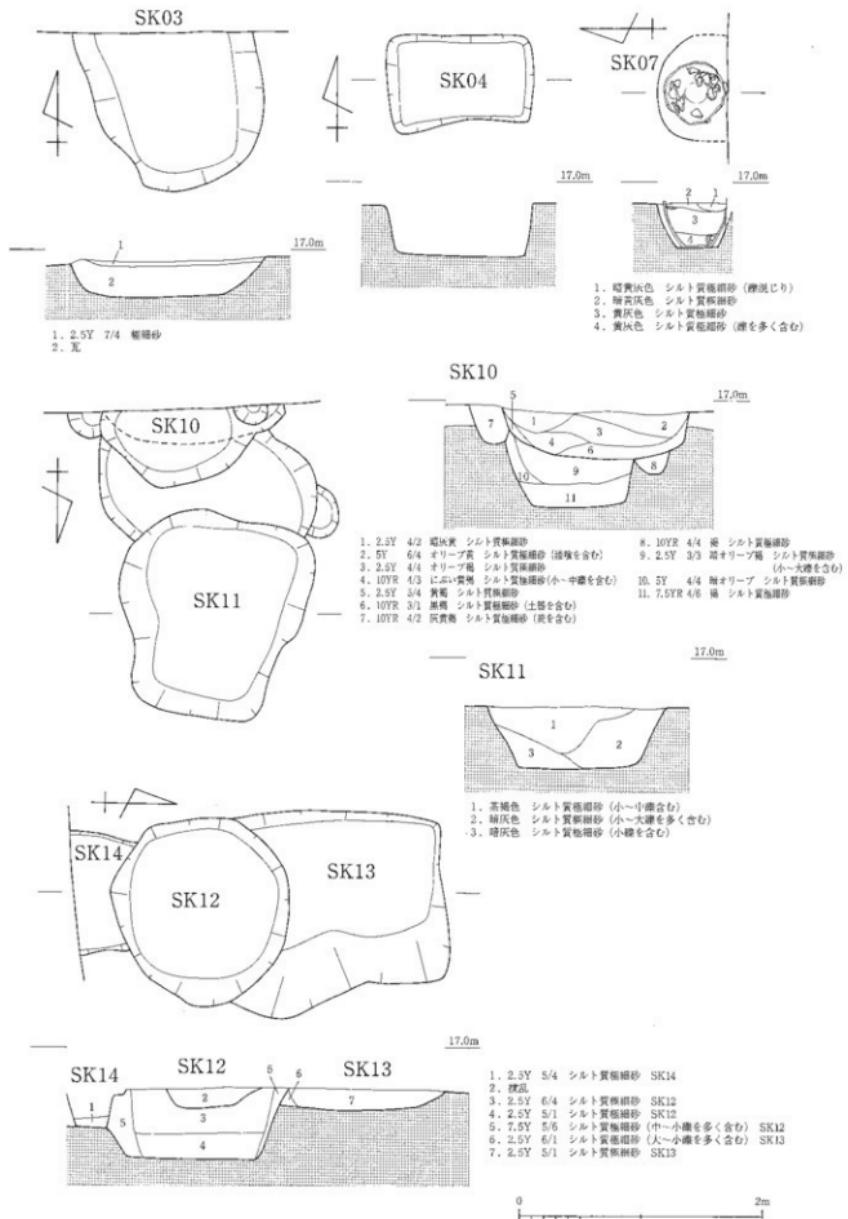


16.5m

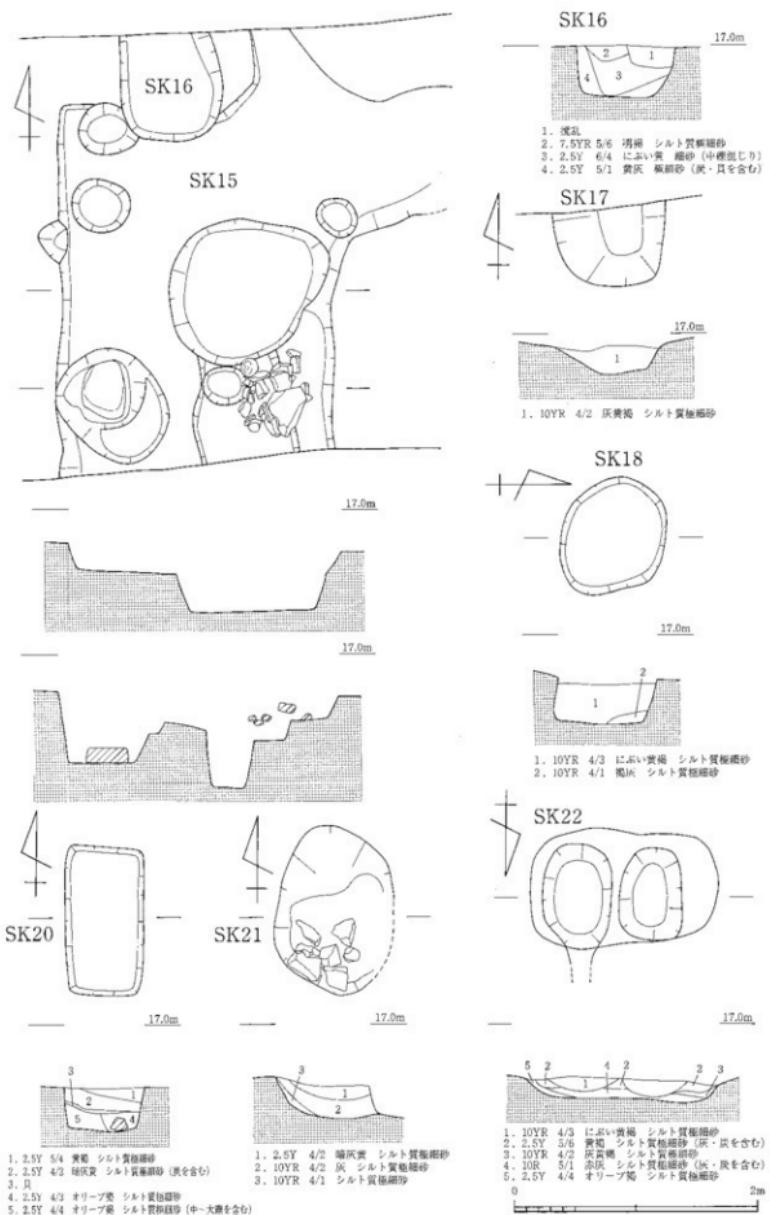


0 2m

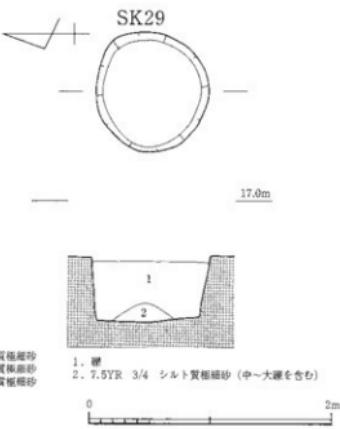
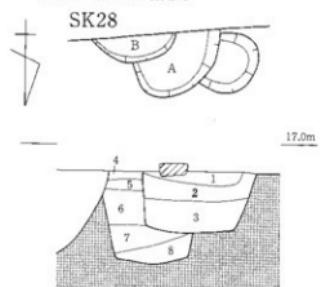
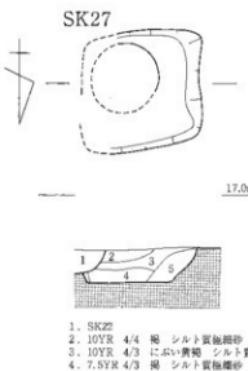
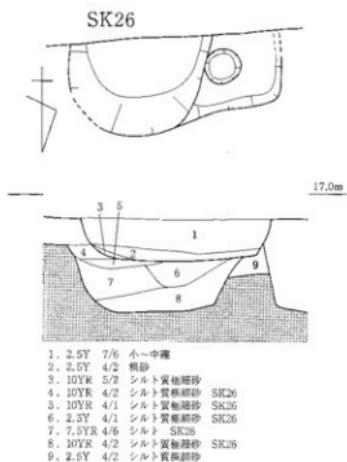
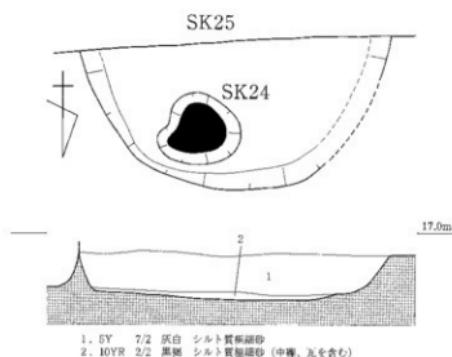
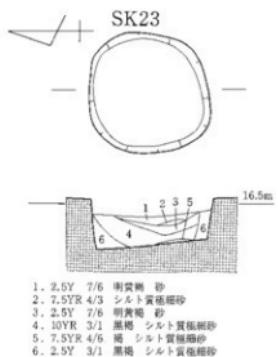
第73図 G地区 地質構造・断面図1



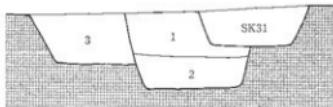
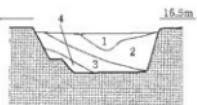
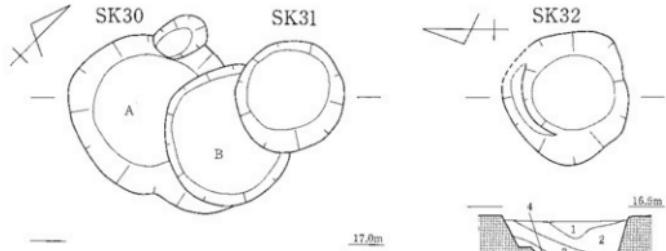
第74図 G地区 遺構平・断面図2



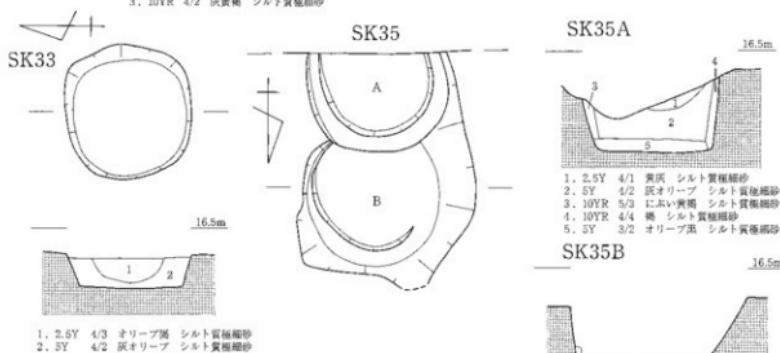
第75図 G地区 遺構平・断面図 3



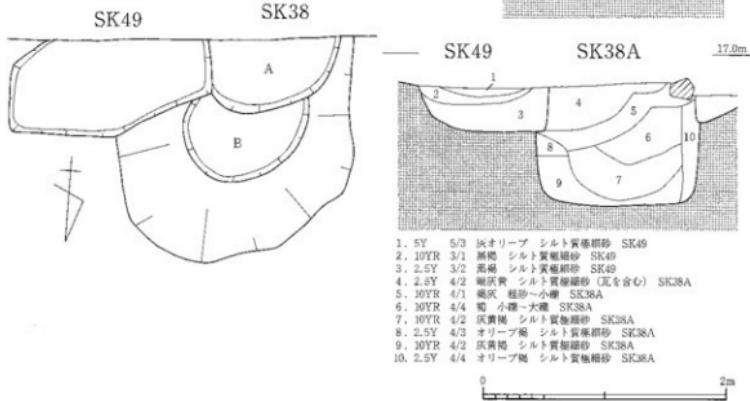
第76図 G地区 遺構平・断面図4



- 1. 2.5Y 3/2 黒褐色 シルト質粘土
- 2. 2.5Y 4/2 塗灰青 シルト質粘土
- 3. 10YR 4/2 沢青褐 シルト質粘土

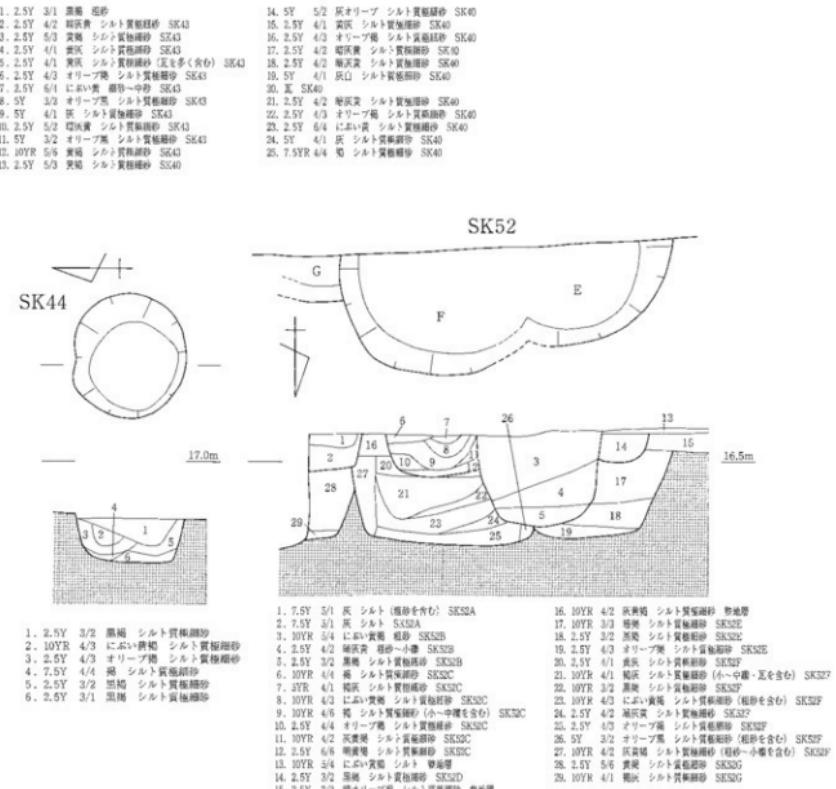
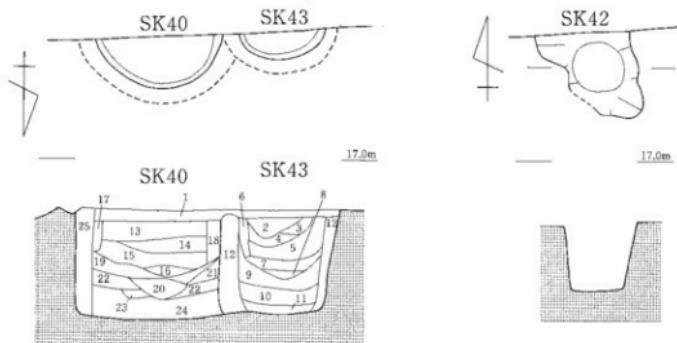


- 1. 2.5Y 4/3 オリーブ褐 シルト質粘土
- 2. 2.5Y 4/2 沢オリーブ シルト質粘土



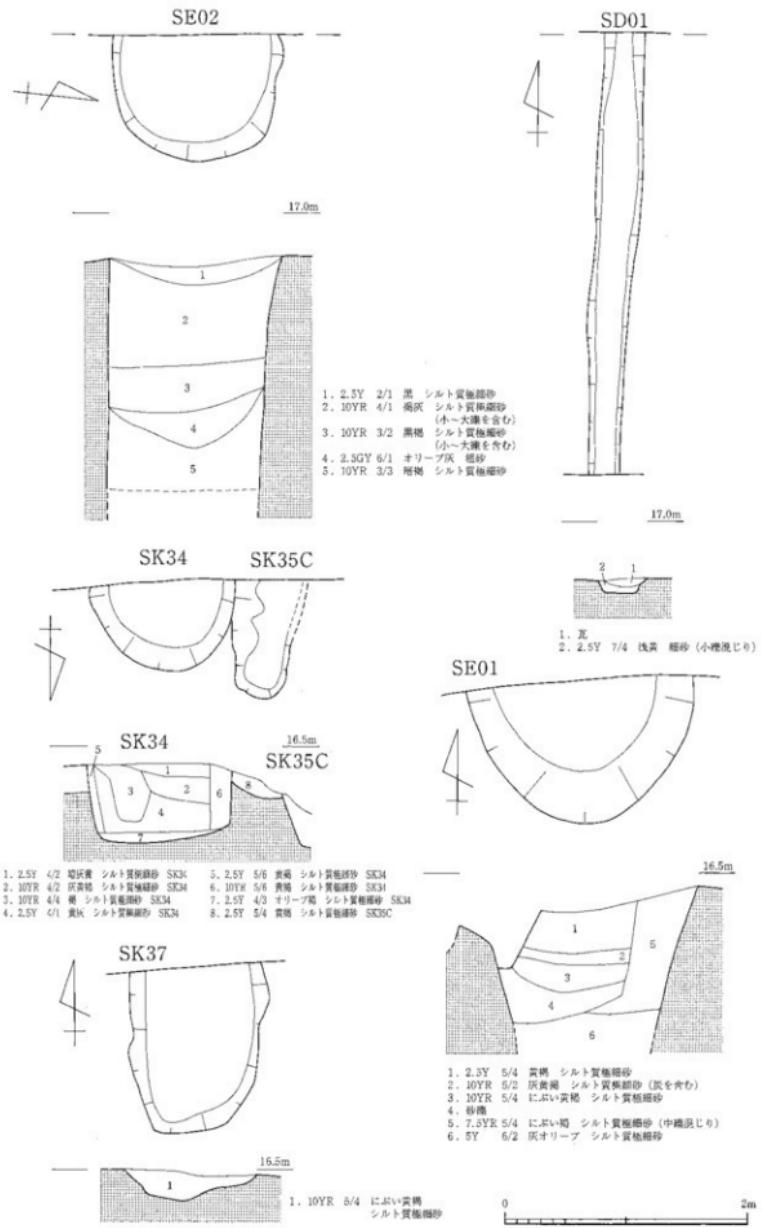
- 1. SY 5/3 沢オリーブ シルト質粘土 SK49
- 2. 10YR 3/1 黒褐色 シルト質粘土 SK49
- 3. 2.5Y 3/2 黒褐色 シルト質粘土 SK49
- 4. 2.5Y 4/2 塗灰青 シルト質粘土 (瓦を含む) SK38A
- 5. 10YR 4/1 黑褐色 小礫～大礫 SK38A
- 6. 10YR 4/2 黑褐色 小礫～大礫 SK38A
- 7. 10YR 4/2 底黄褐色 シルト質粘土 SK38A
- 8. 2.5Y 4/3 オリーブ褐 シルト質粘土 SK38A
- 9. 10YR 4/2 底黄褐色 シルト質粘土 SK38A
- 10. 2.5Y 4/4 オリーブ褐 シルト質粘土 SK38A

第77図 G地区 遺構平・断面図 5

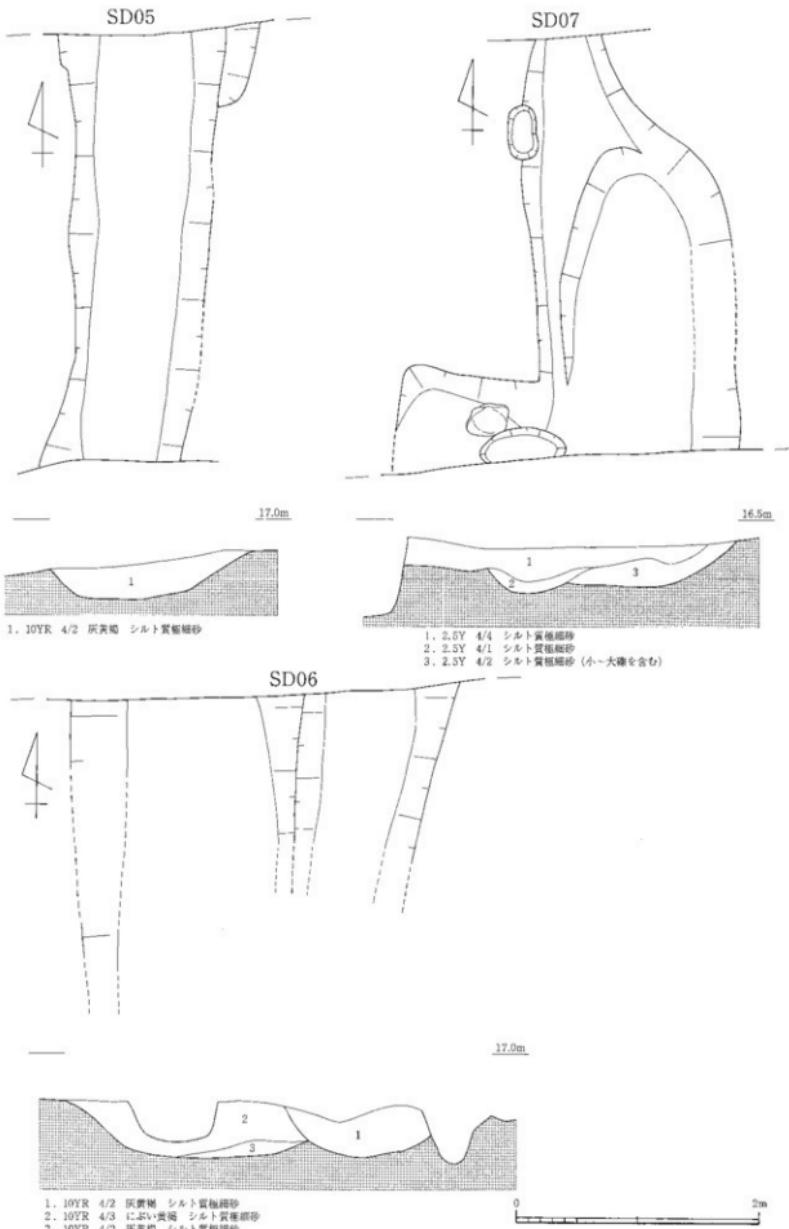


第78図 G地区 遺構平・断面図 6

0 2m



第79図 G地区 遺構平・断面図7



第80図 G地区 造構平・断面図 8



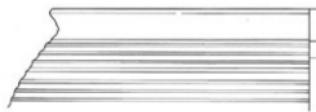
G2



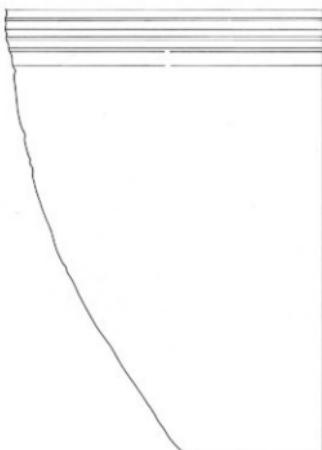
G3



G4



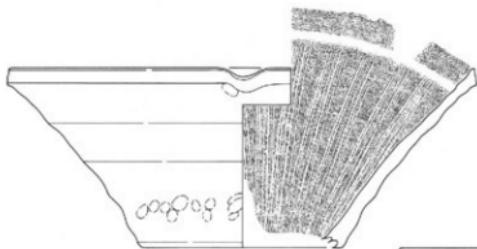
G5



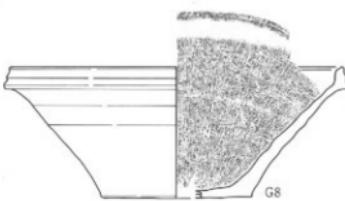
G6



G7



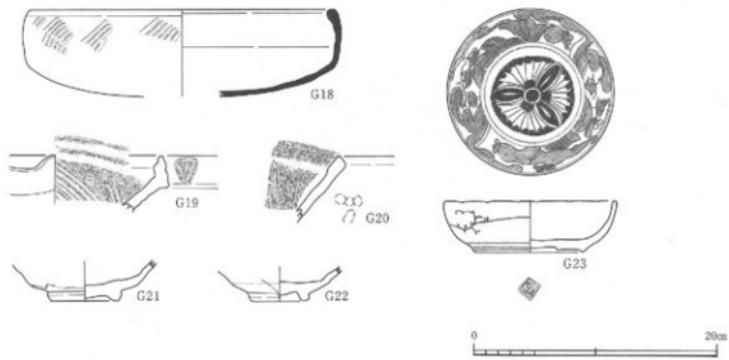
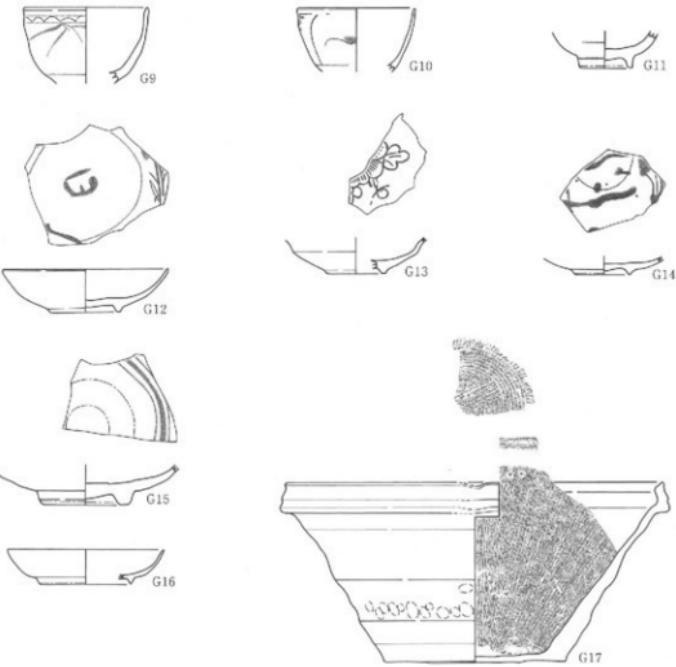
G7



G8

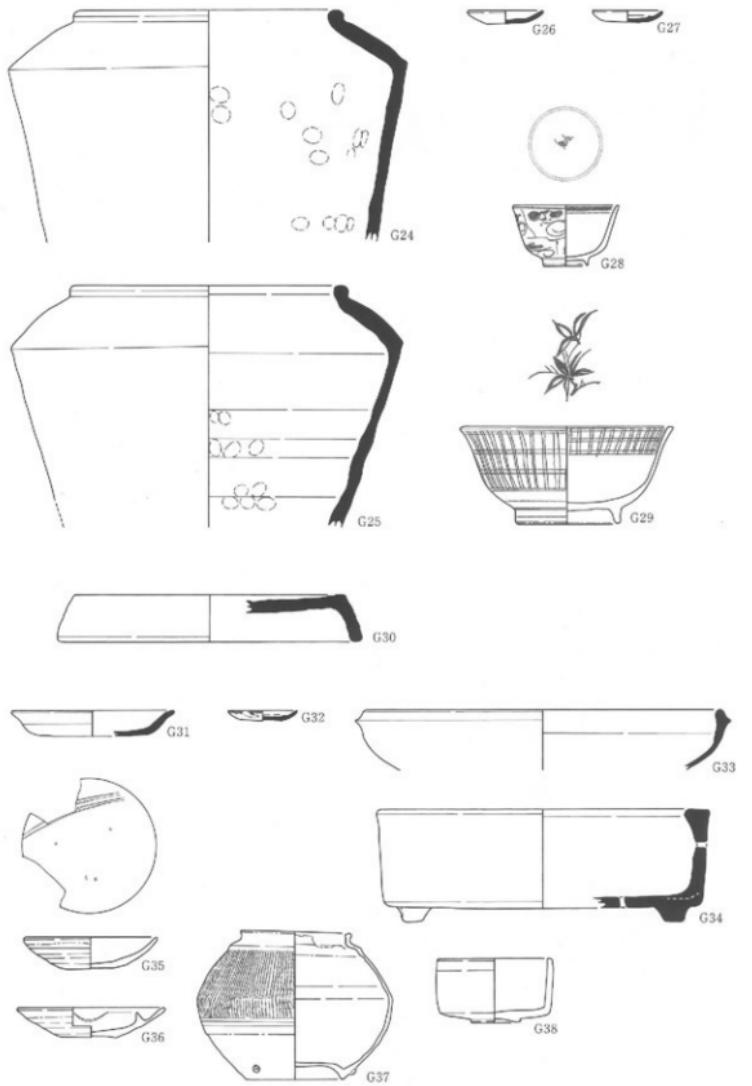
0 20cm

第81図 G地区 出土土器 1

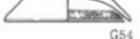
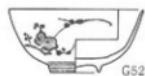
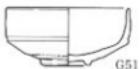
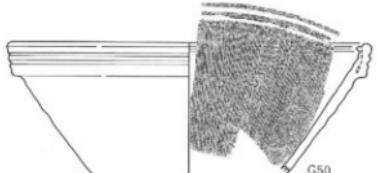
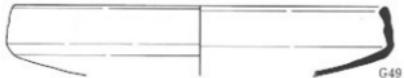
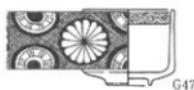
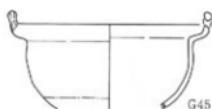
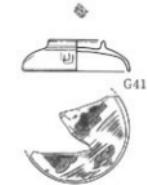
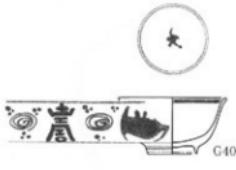
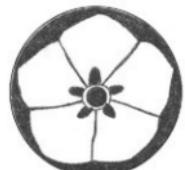


0 20cm

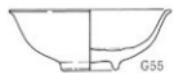
第82図 G地区 出土土器 2



第83図 G地区 出土土器 3



第84図 G地区 出土土器 4



G55



G56



G57



G58



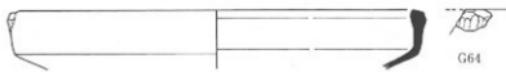
—

G60

G61

G62

G63



G64



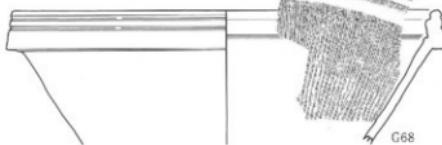
G66



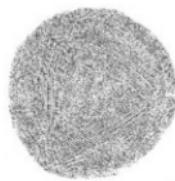
G65



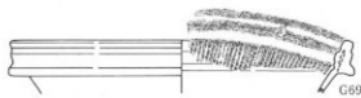
G67



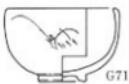
G68



G69



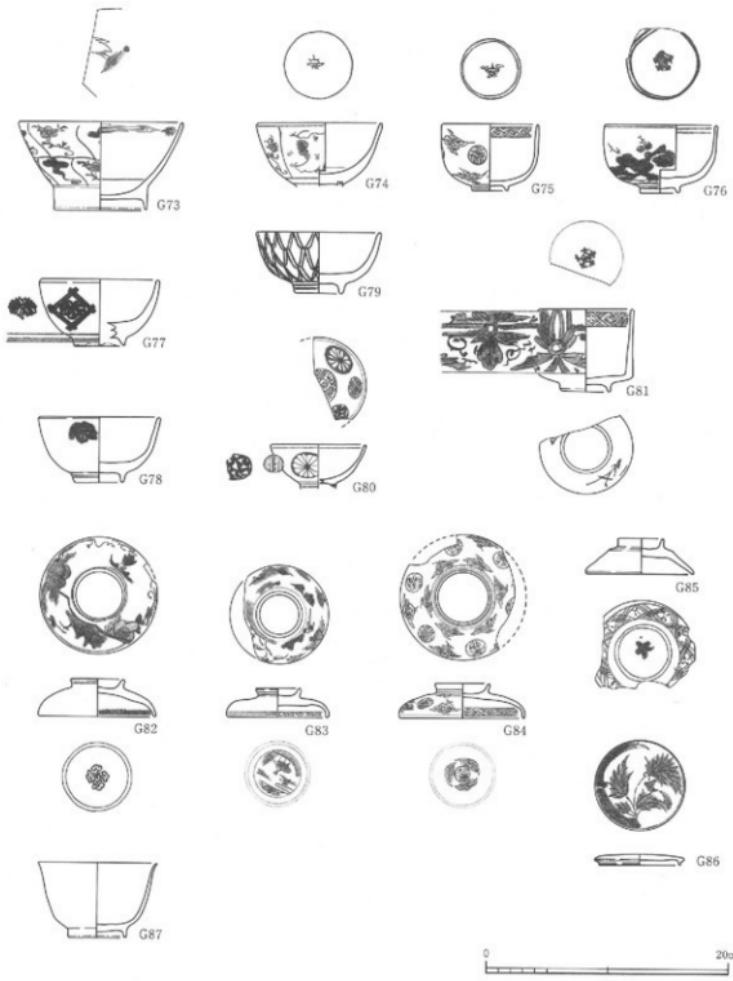
G70



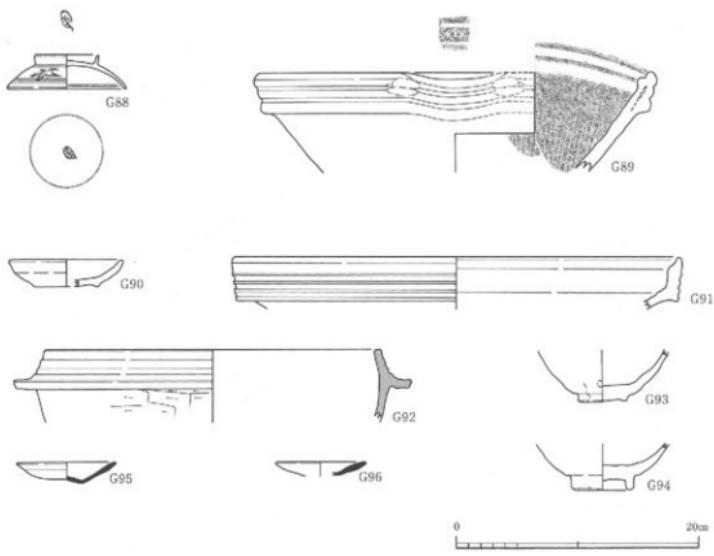
G71



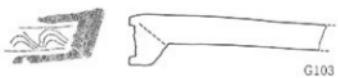
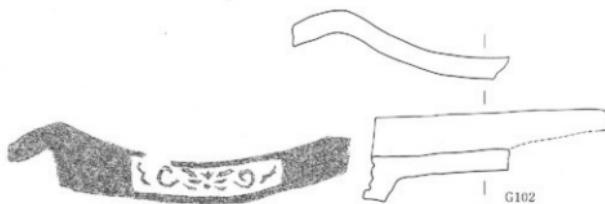
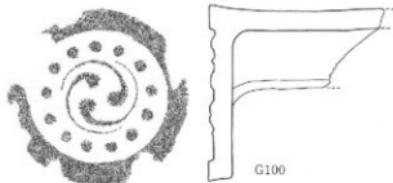
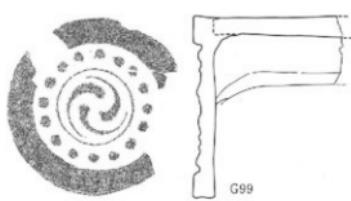
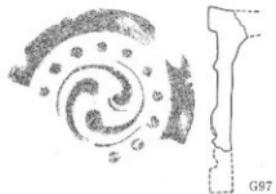
第85図 G地区 出土土器 5



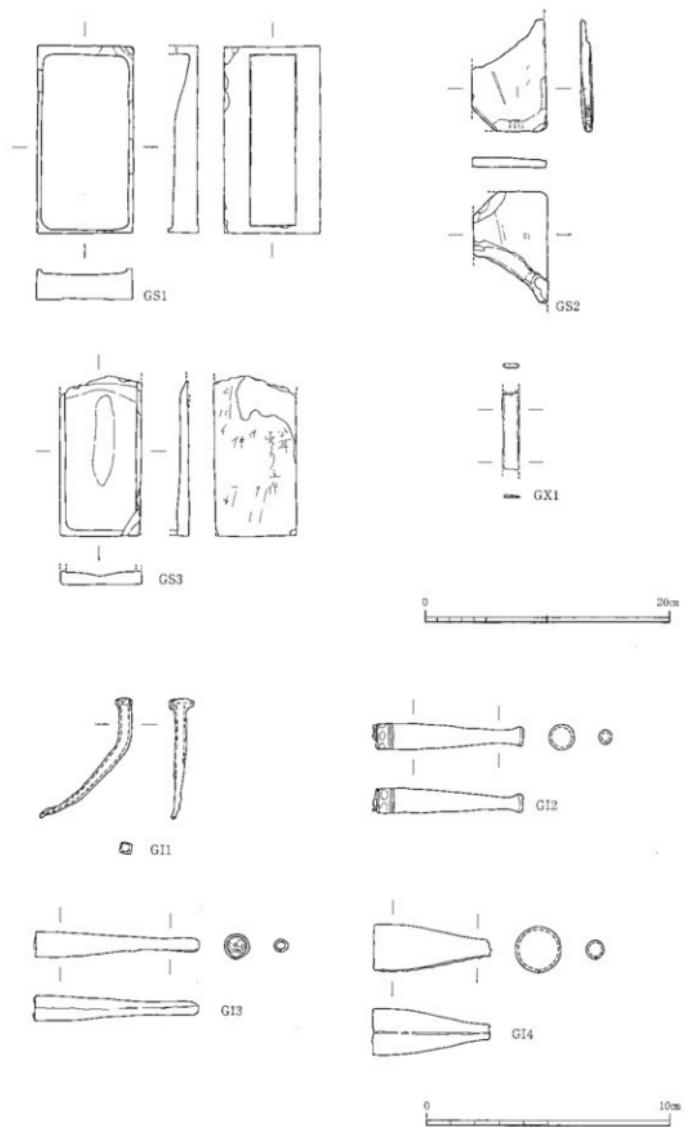
第86図 G地区 出土土器 6



第87図 G地区 出土土器 7



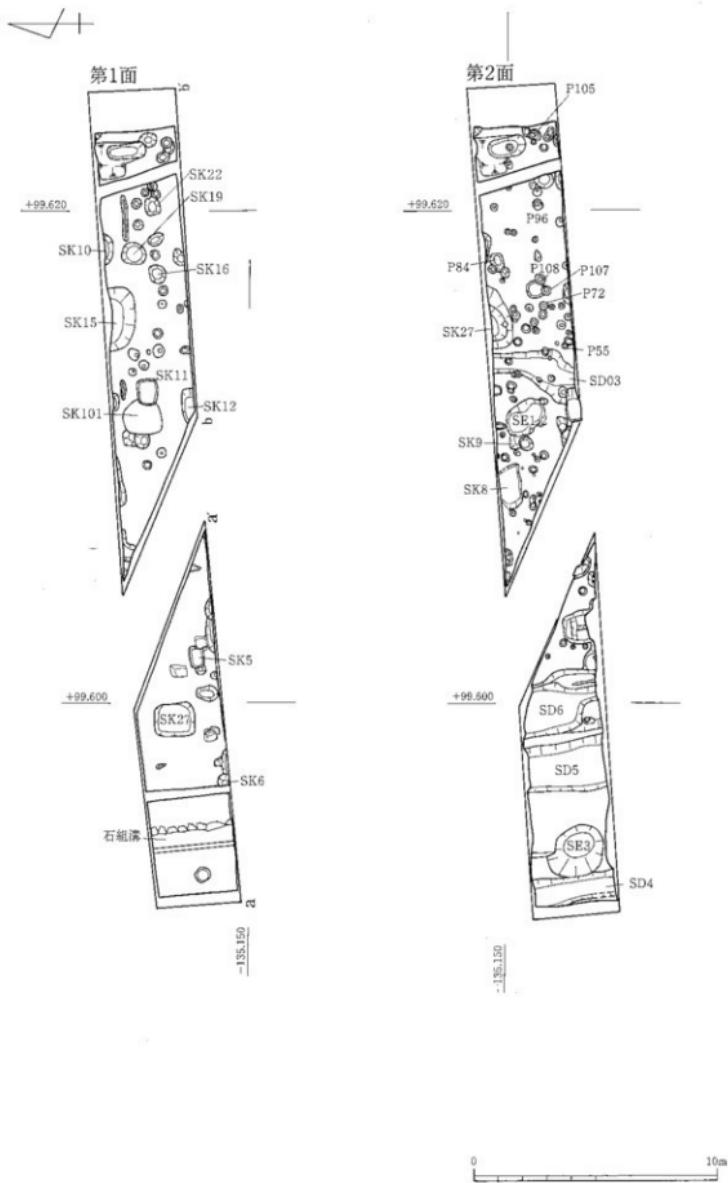
0 20cm



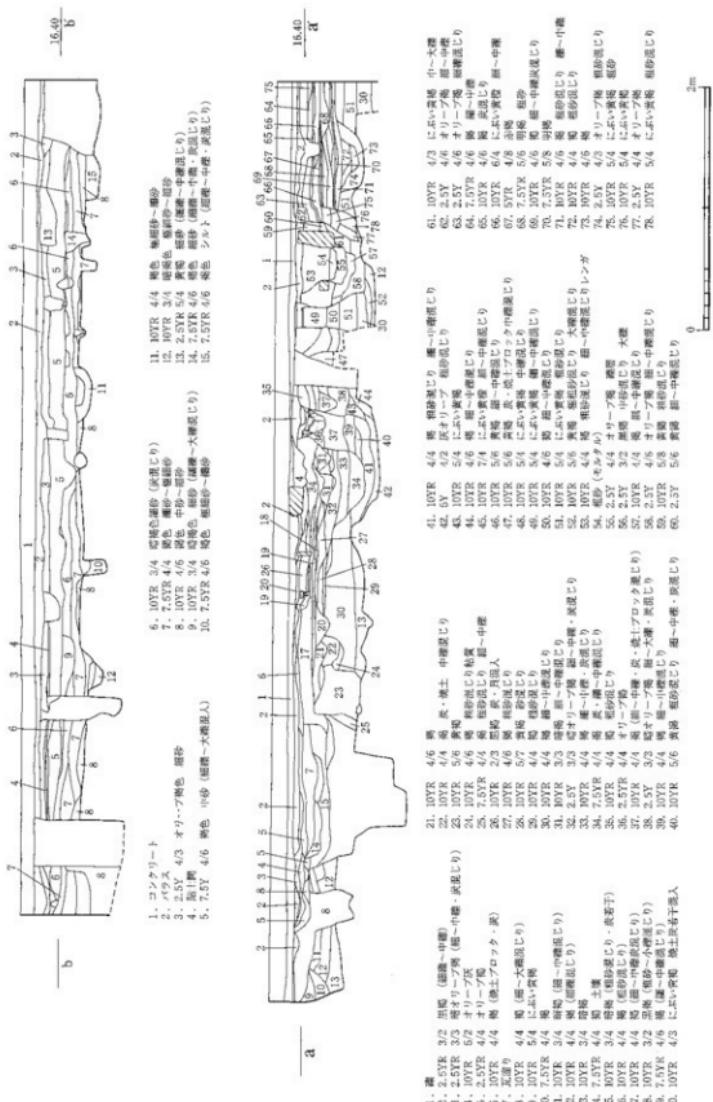
第89図 G地区 石製品・金属製品



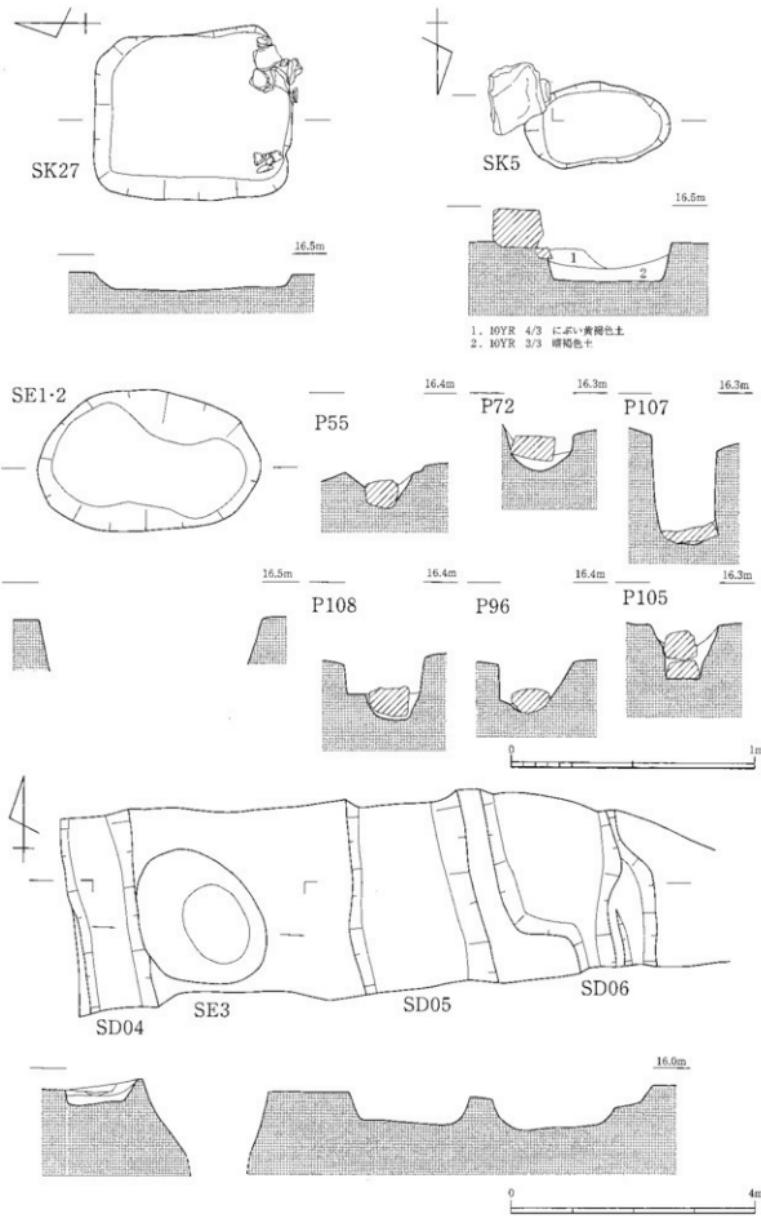
0 2cm



第91図 B地区 調査区平面図



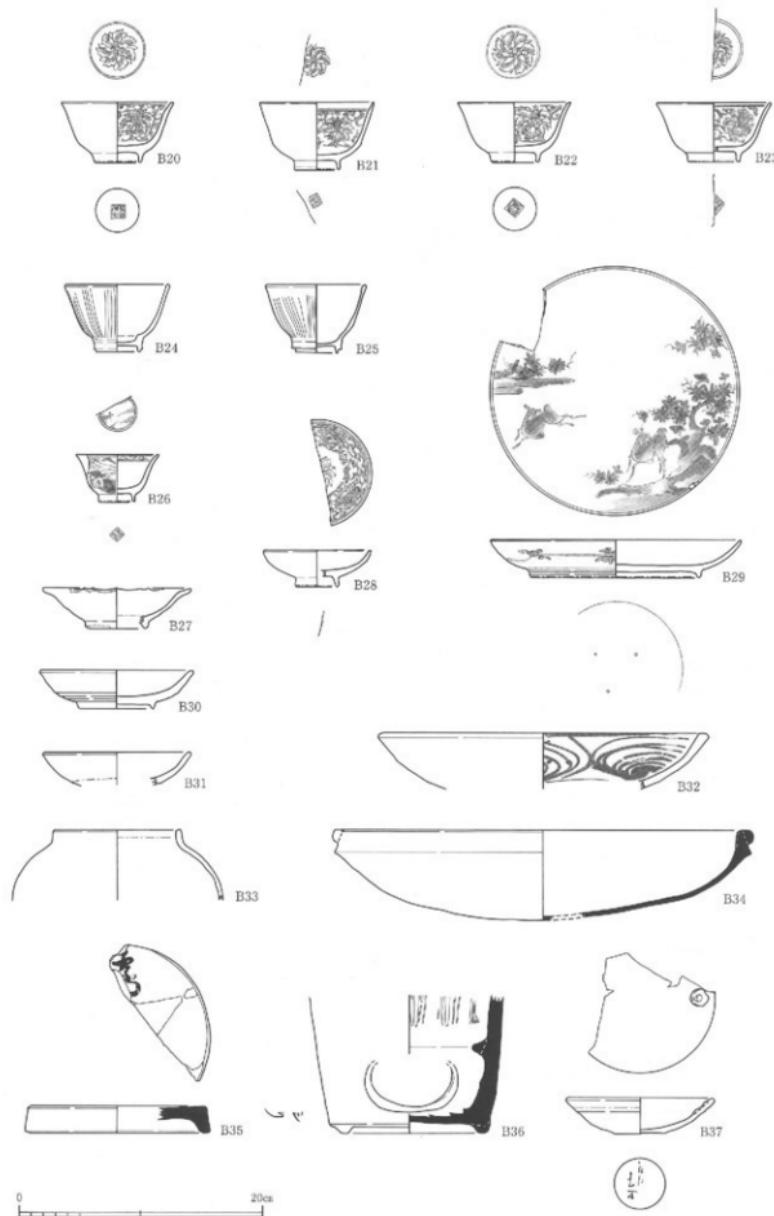
第92図 B地区 調査区断面図



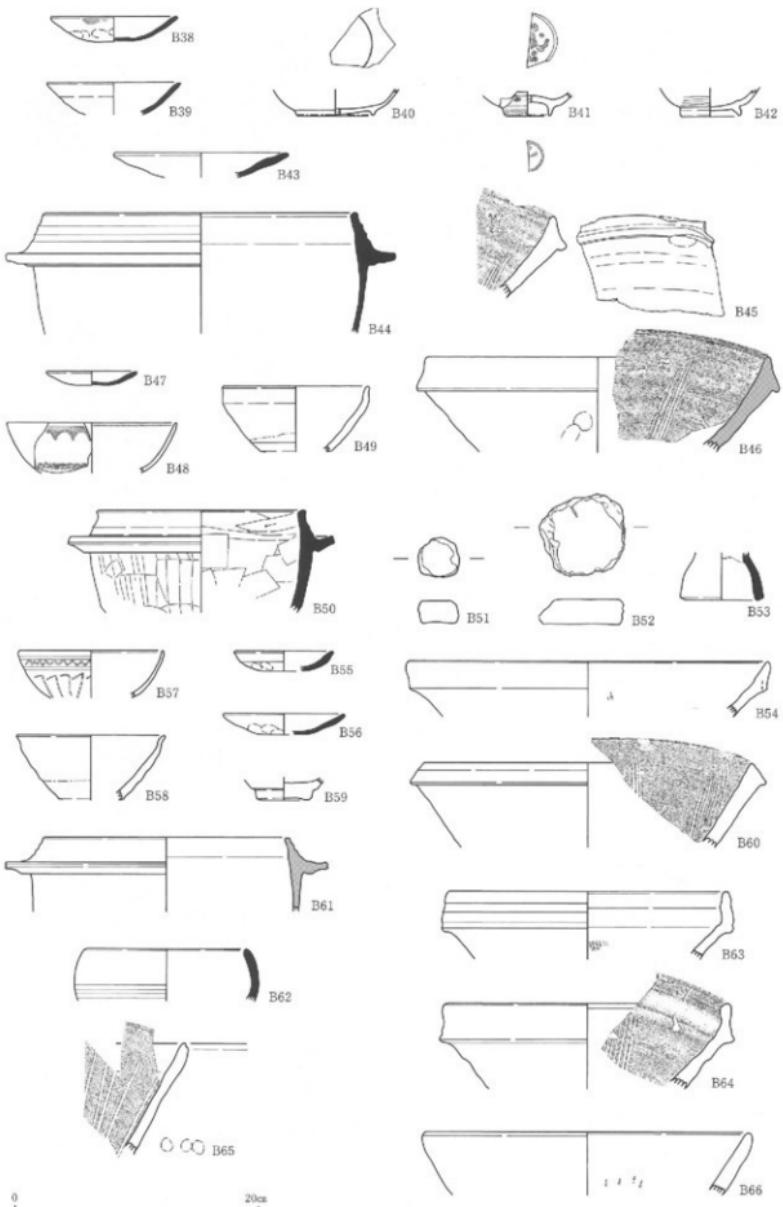
第93図 B地区 遺構平・断面図



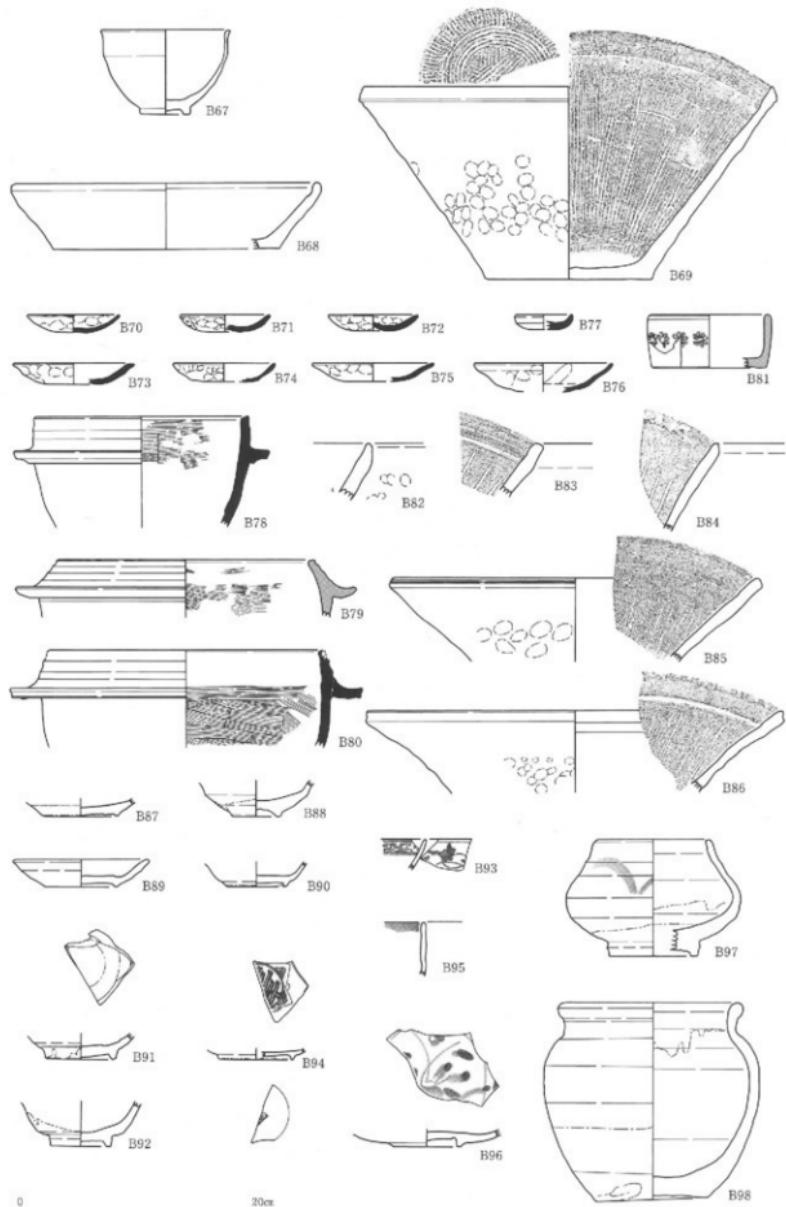
第94図 B地区 第1面 出土土器 1



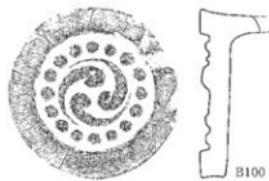
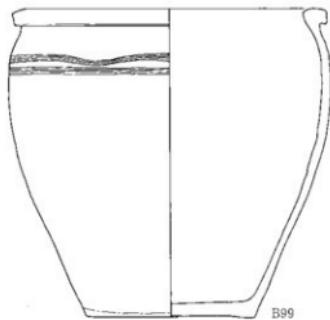
第95図 B地区 第1面 出土土器 2



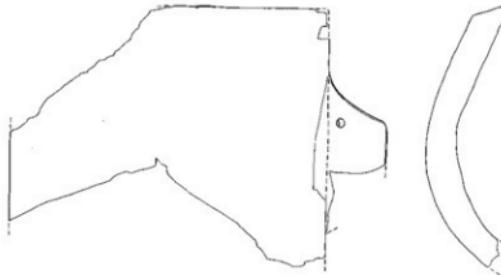
第96図 B地区 第2面 出土土器 1



第97図 B地区 第2面 出土土器 2

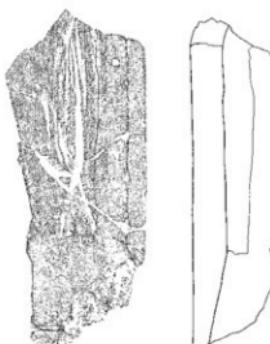
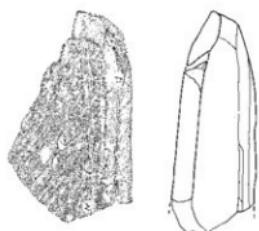
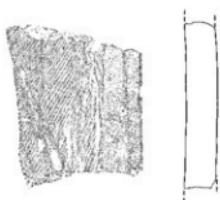
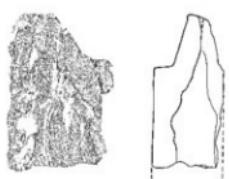
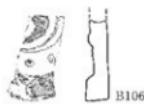
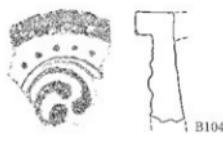
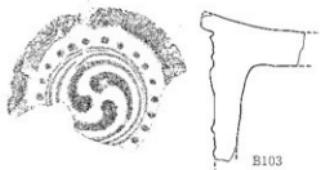


0 20cm



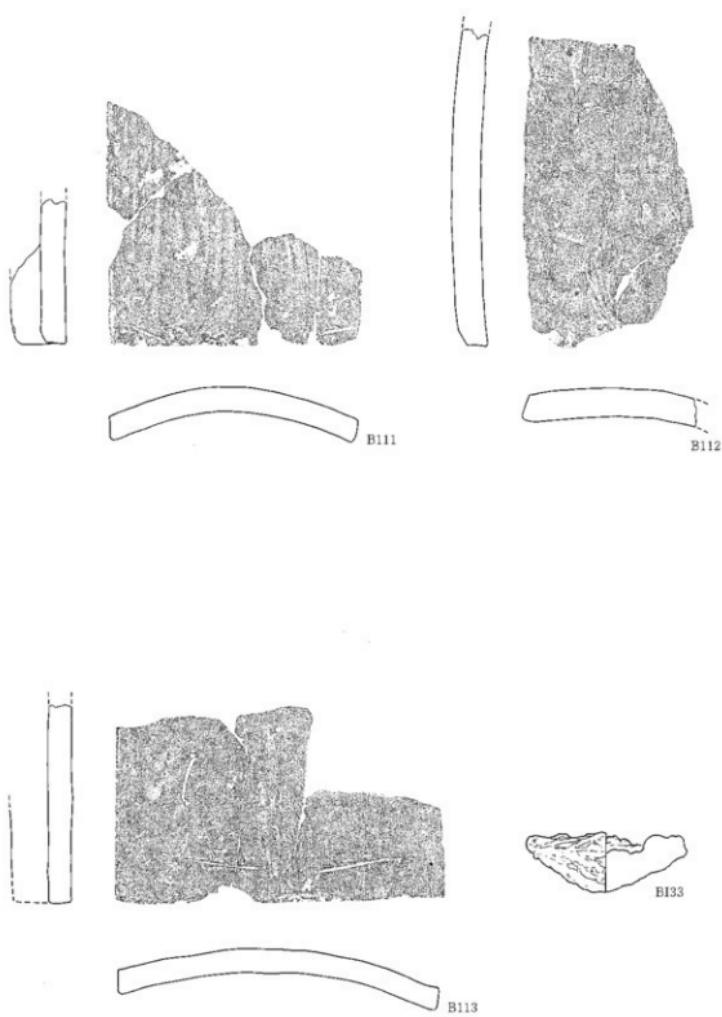
0 20cm

第98図 B地区 第1面 出土土器3・瓦1



0 20cm

第99図 B地区 瓦 2

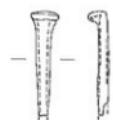
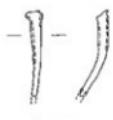
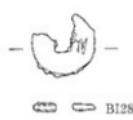


0 20cm

第100図 B地区 瓦3・金属製品1

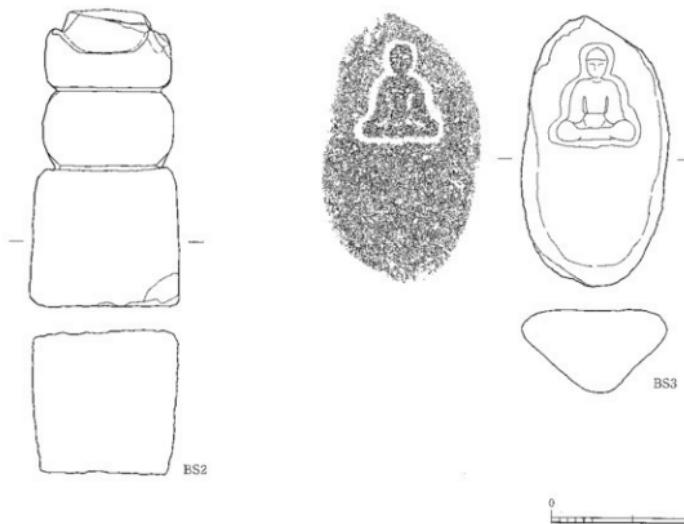
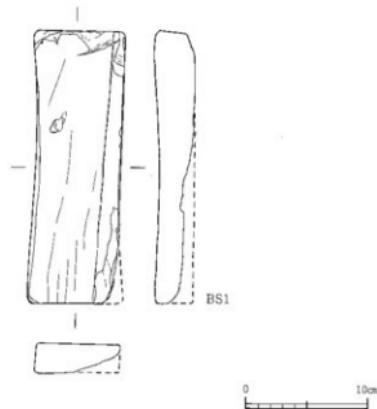


0 2cm

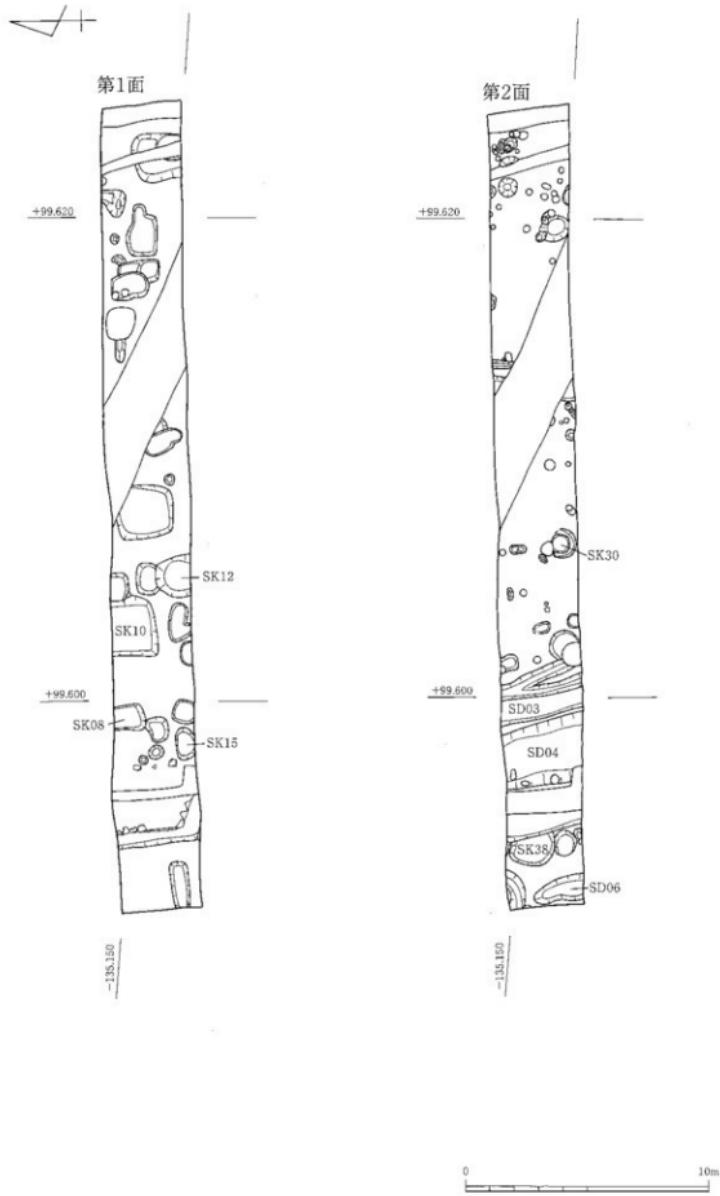


0 5cm

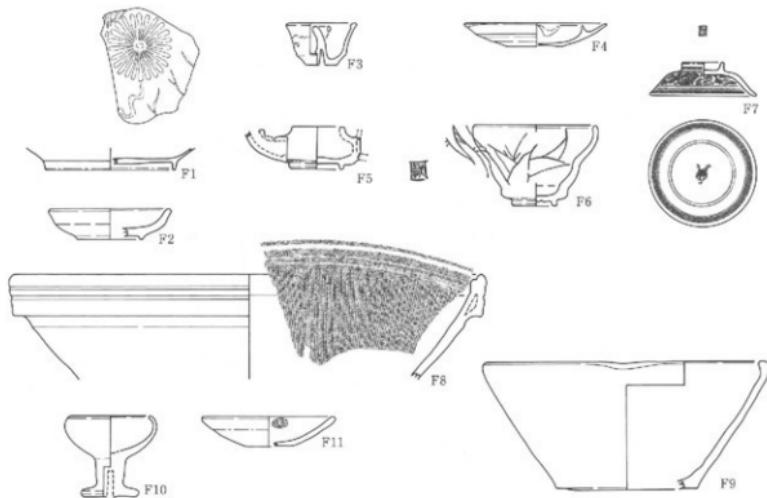
第101図 B地区 銭貨・金属製品2



第102図 B地区 石製品

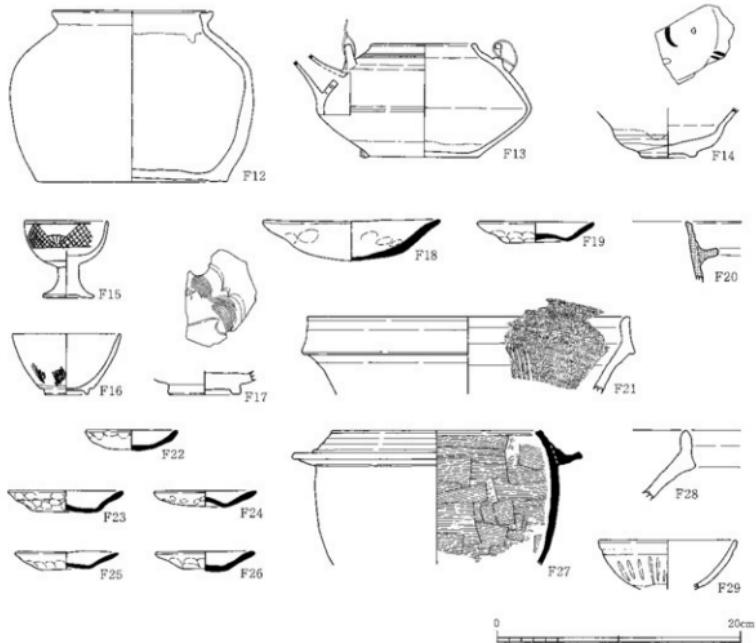


第103図 F地区 調査区平面図

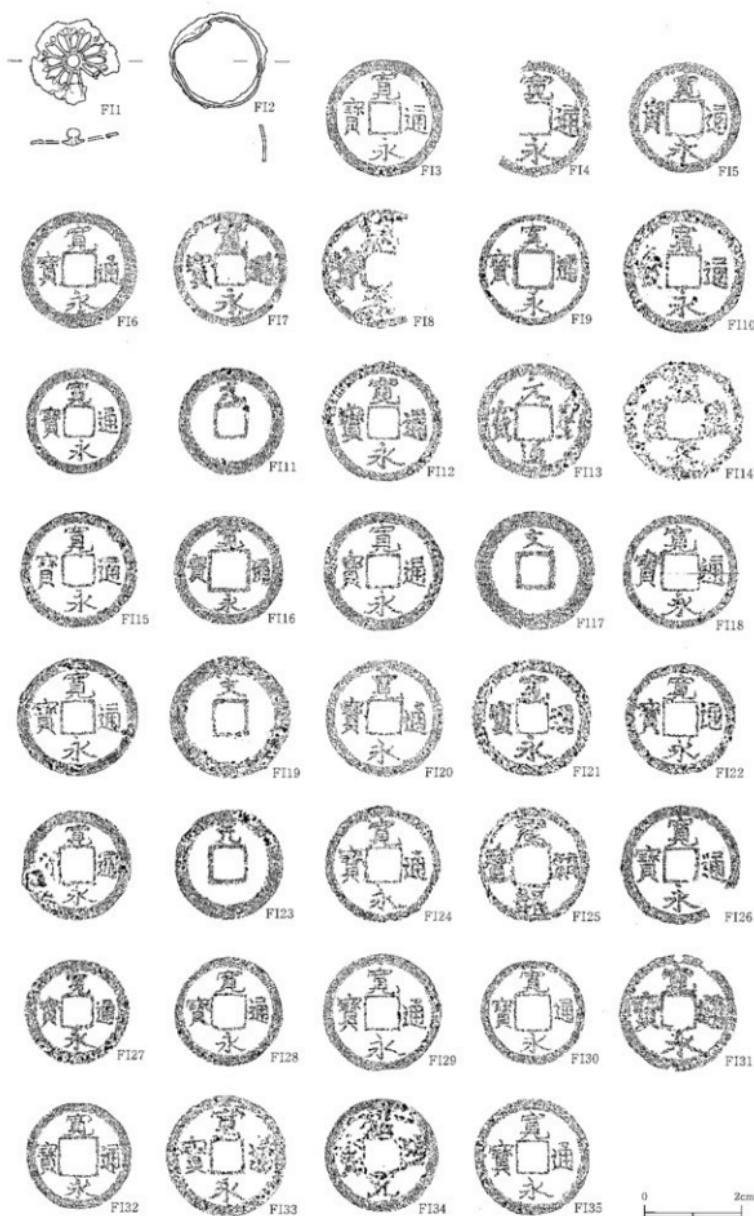


0 20cm

第104図 F地区 出土土器 1

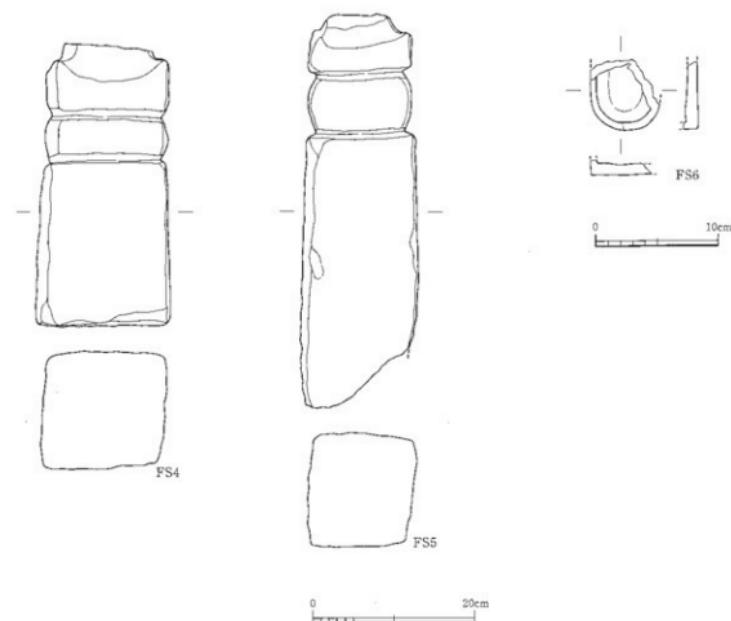
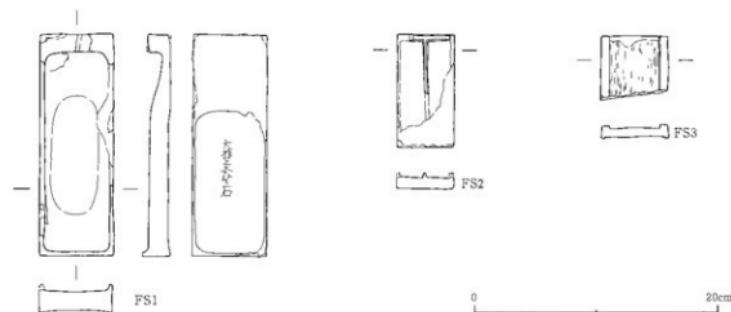


第105図 F地区 出土土器 2



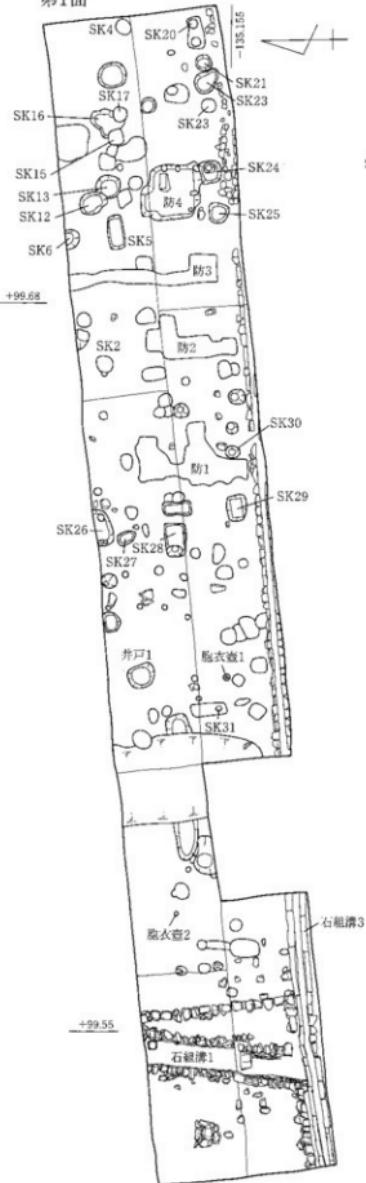
第106図 F地区 錢貨

0 2cm

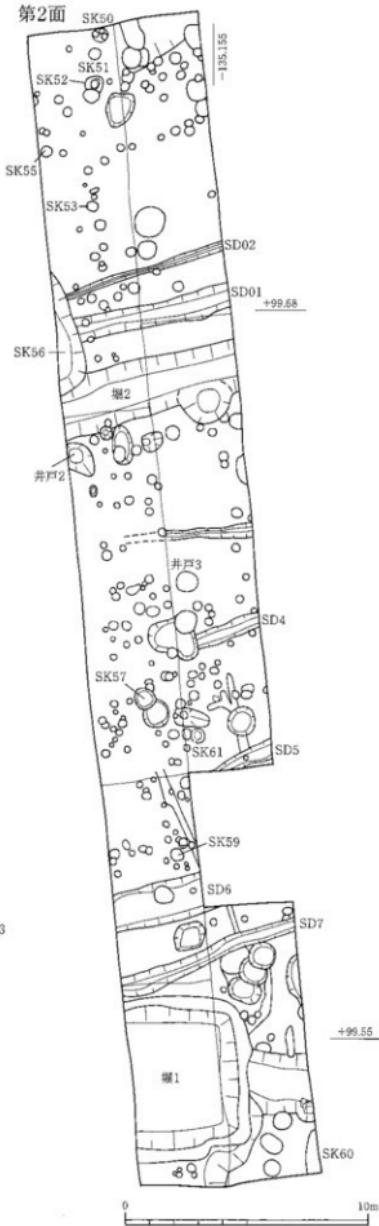


第107図 F地区 石製品

第1面

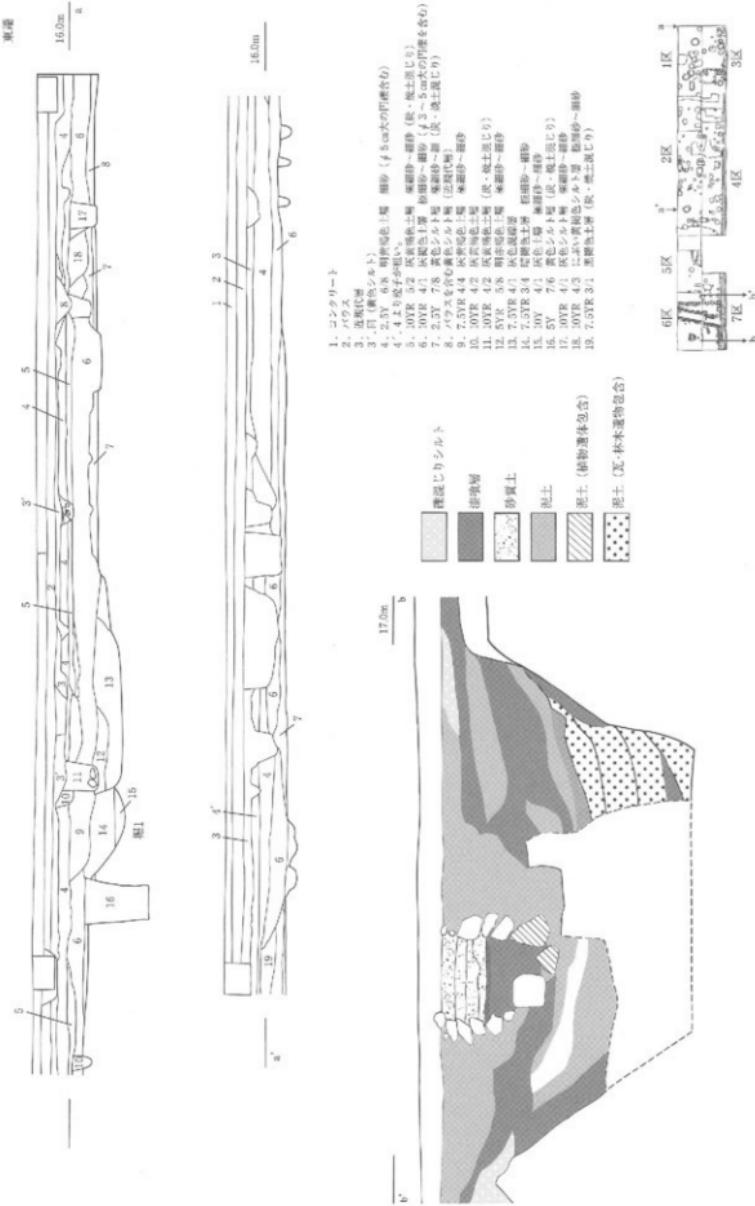


第2面

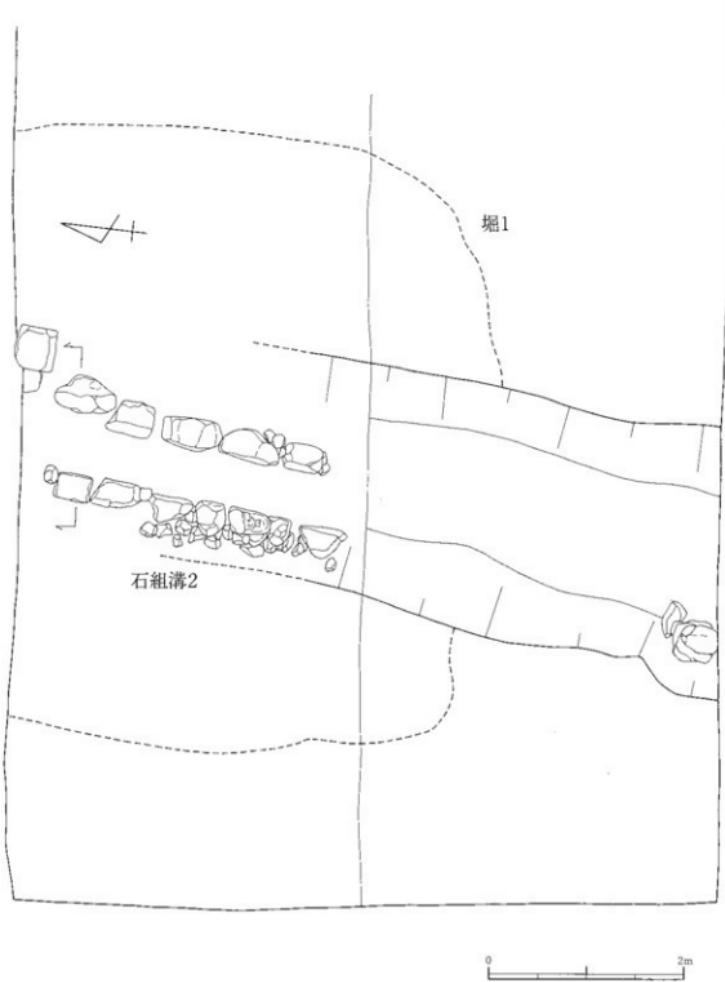


第108図 J地区 調査区平面図

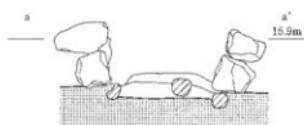
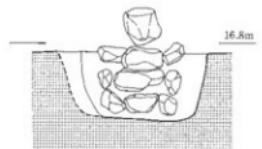
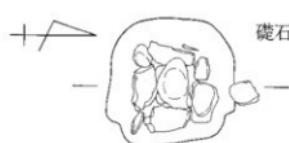
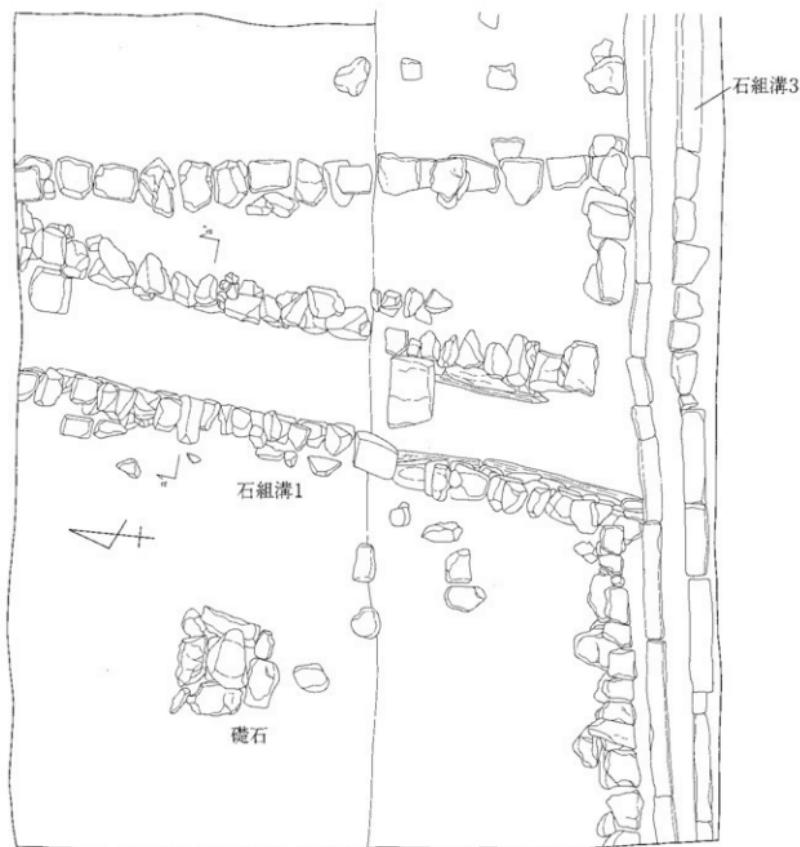
0 10m



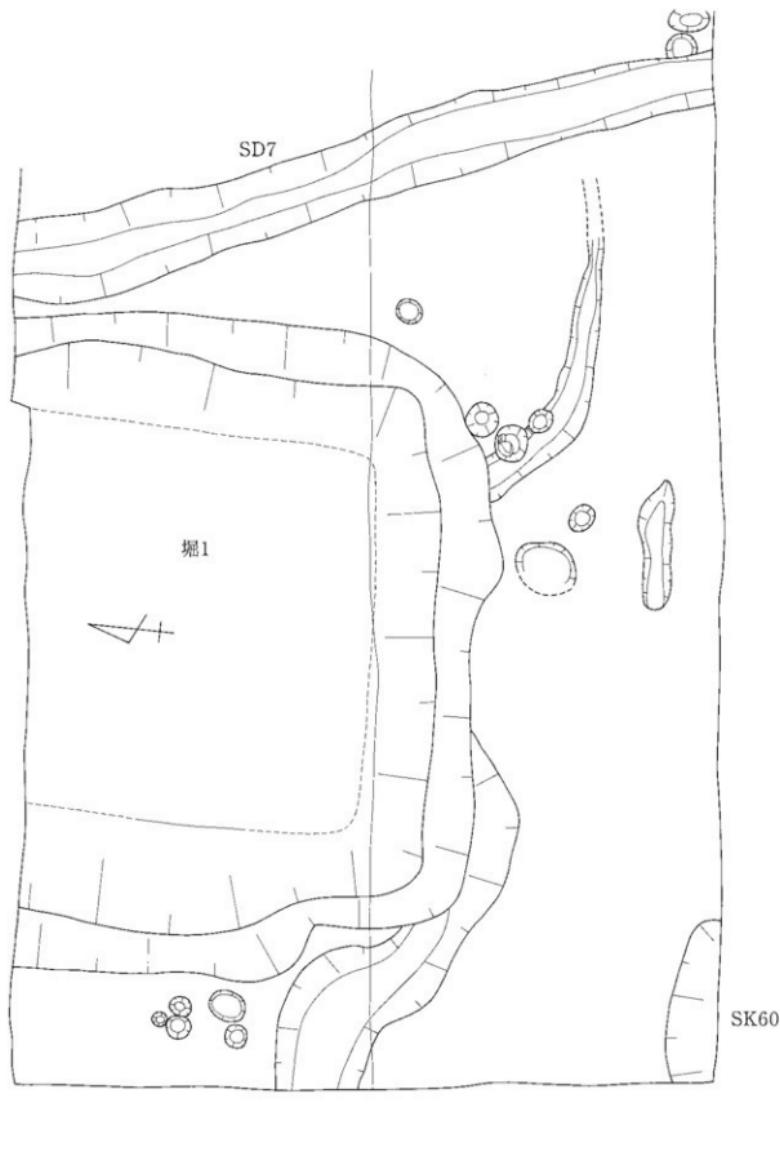
第109図 J地区 調査区断面図



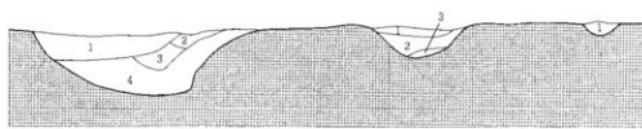
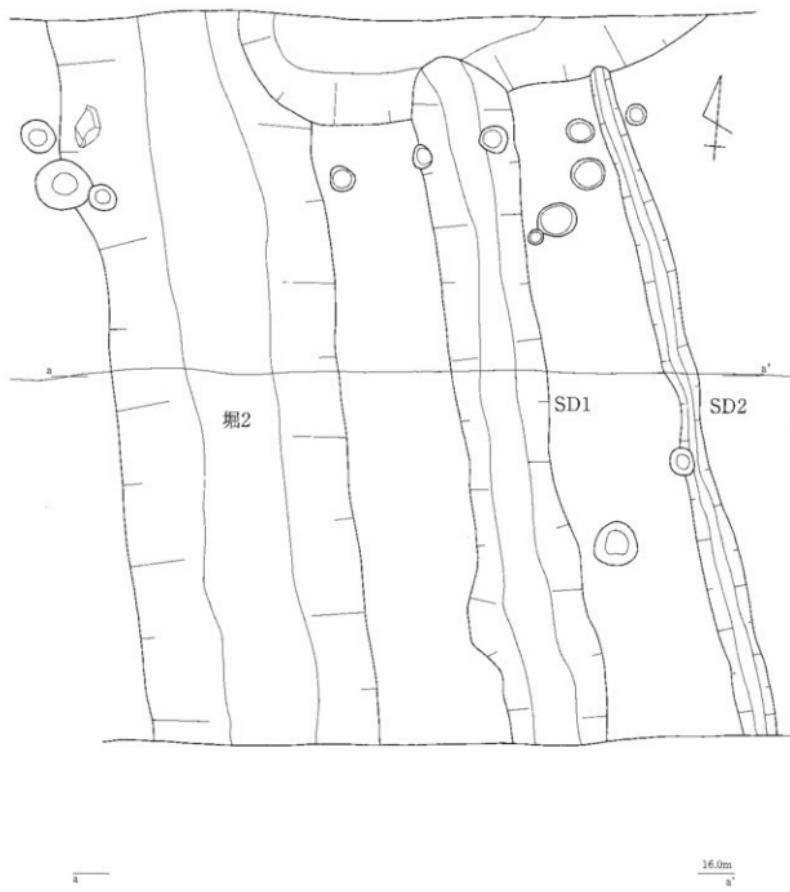
第110図 J地区 石組溝・堀変遷図



第111図 J地区 石組溝・堀変遷図



第112図 J地区 石組溝・堀変遷図

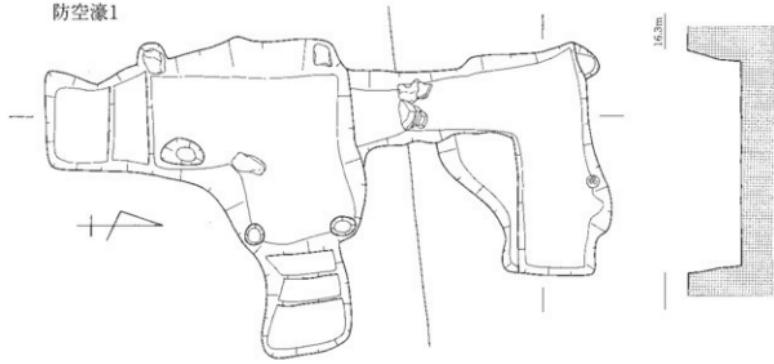


- 1. 7.5YR 4/4 淡色 粗砂～細砂
- 2. 7.5YR 4/3 黄色 細砂～粗砂
- 3. 7.5YR 5/1 淡灰色 シルト質 細砂
- 4. 7.5YR 5/2 底褐色 極細砂～細砂

0 2m

第113図 J地区 第1面 地構平・断面図1

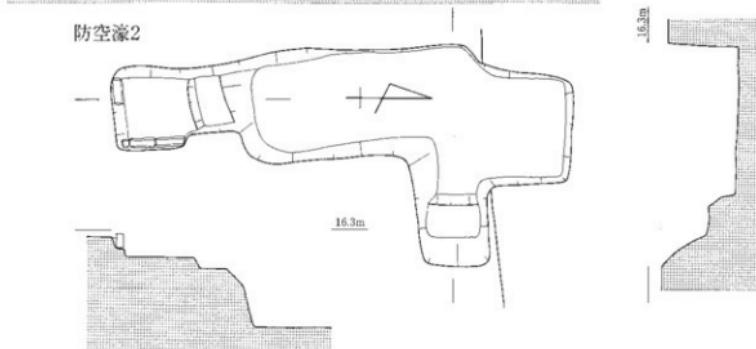
防空壕1



16.3m

16.3m

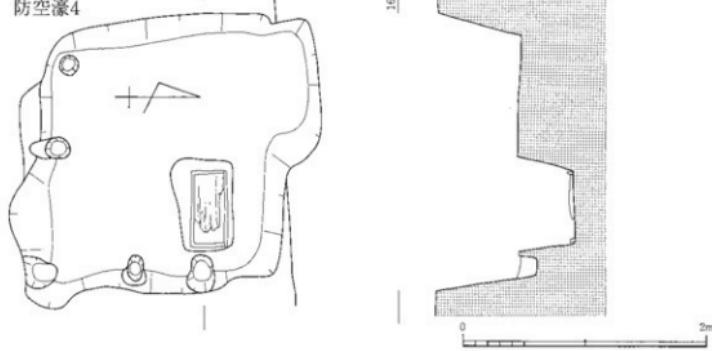
防空壕2



16.3m

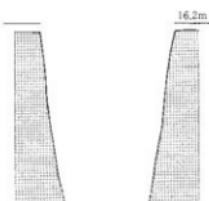
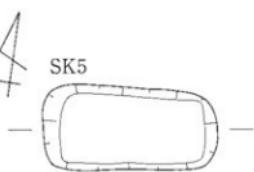
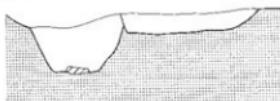
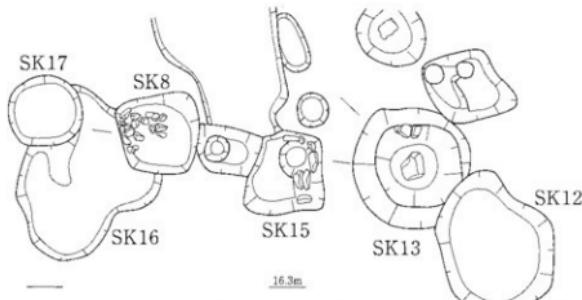
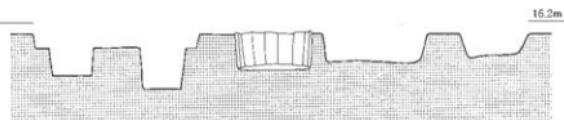
16.3m

防空壕4



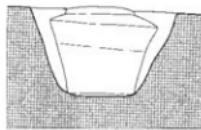
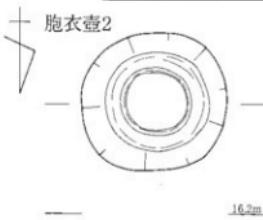
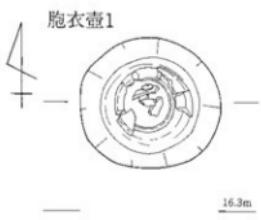
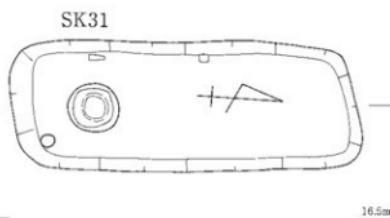
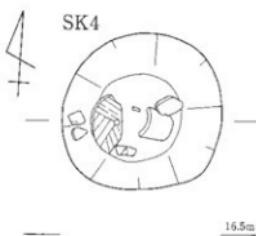
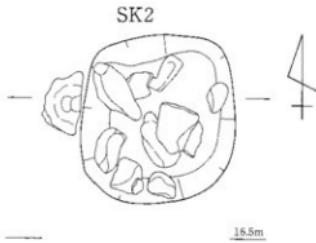
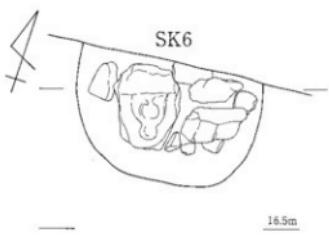
2m

第114図 J地区 第1面 遺構平・断面図2



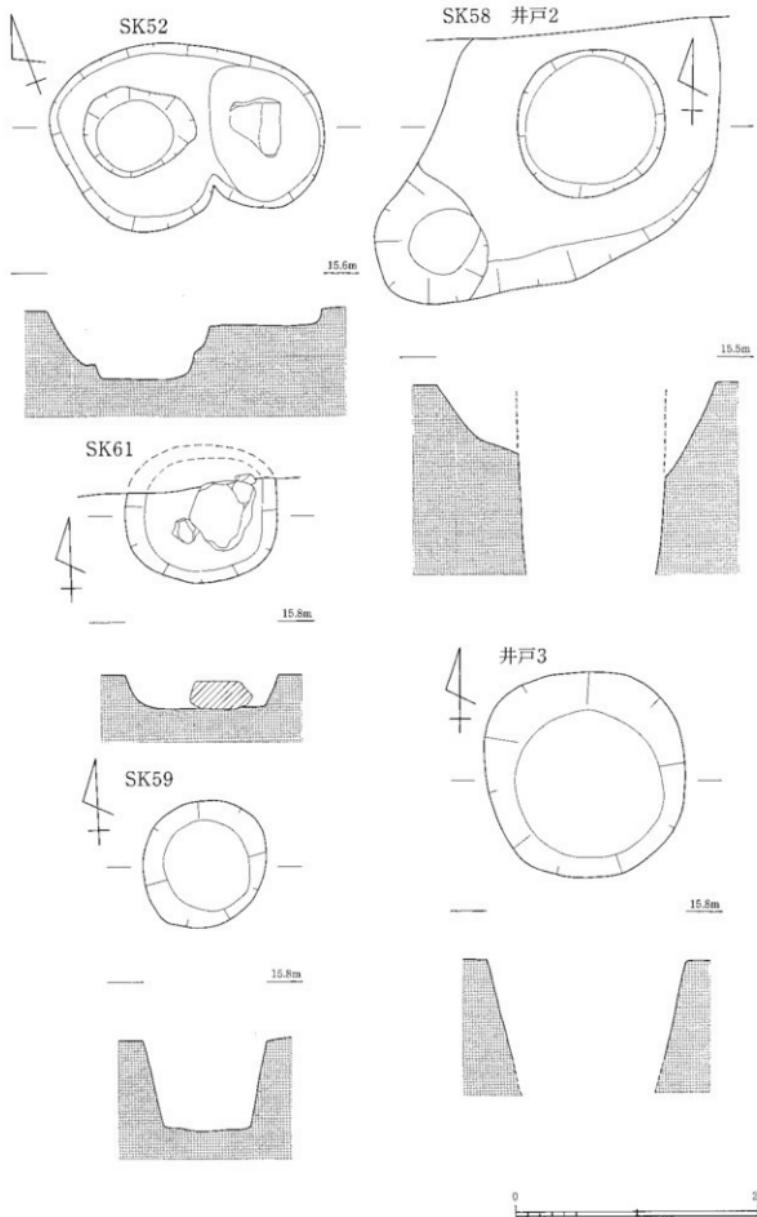
0 2m

第115図 J地区 第1面 遺構平・断面図 3

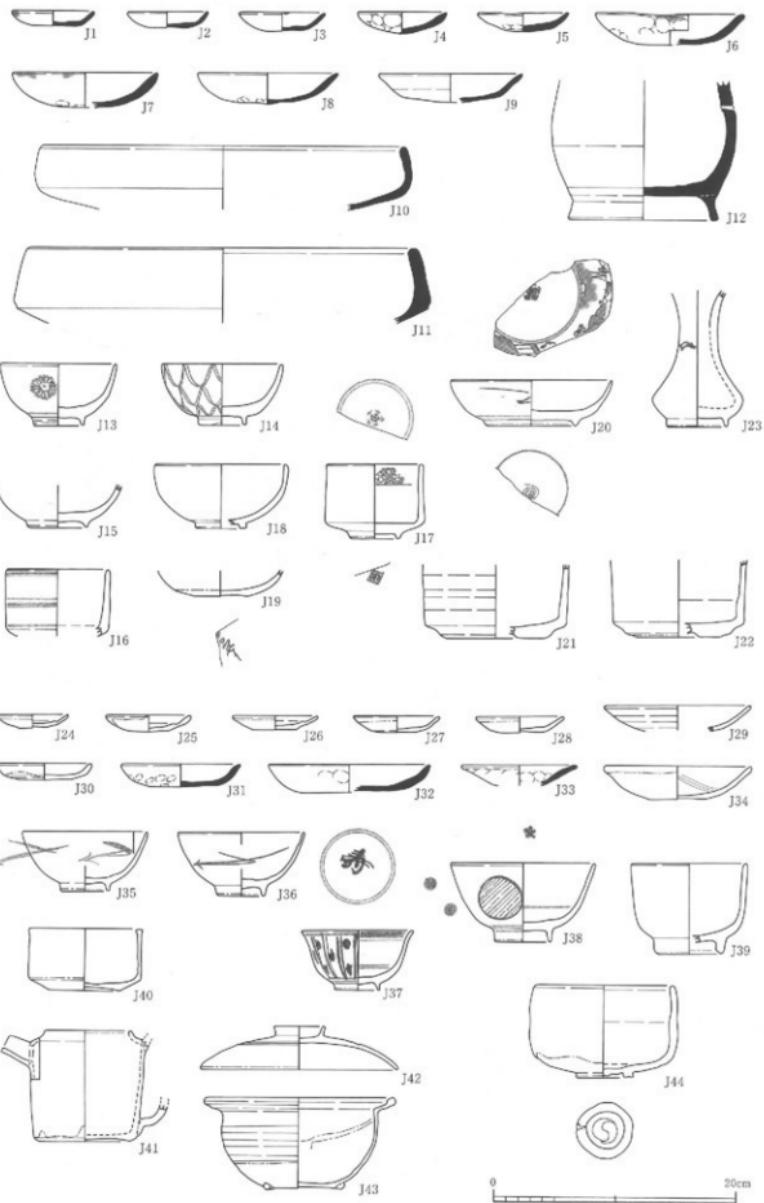


0 50cm

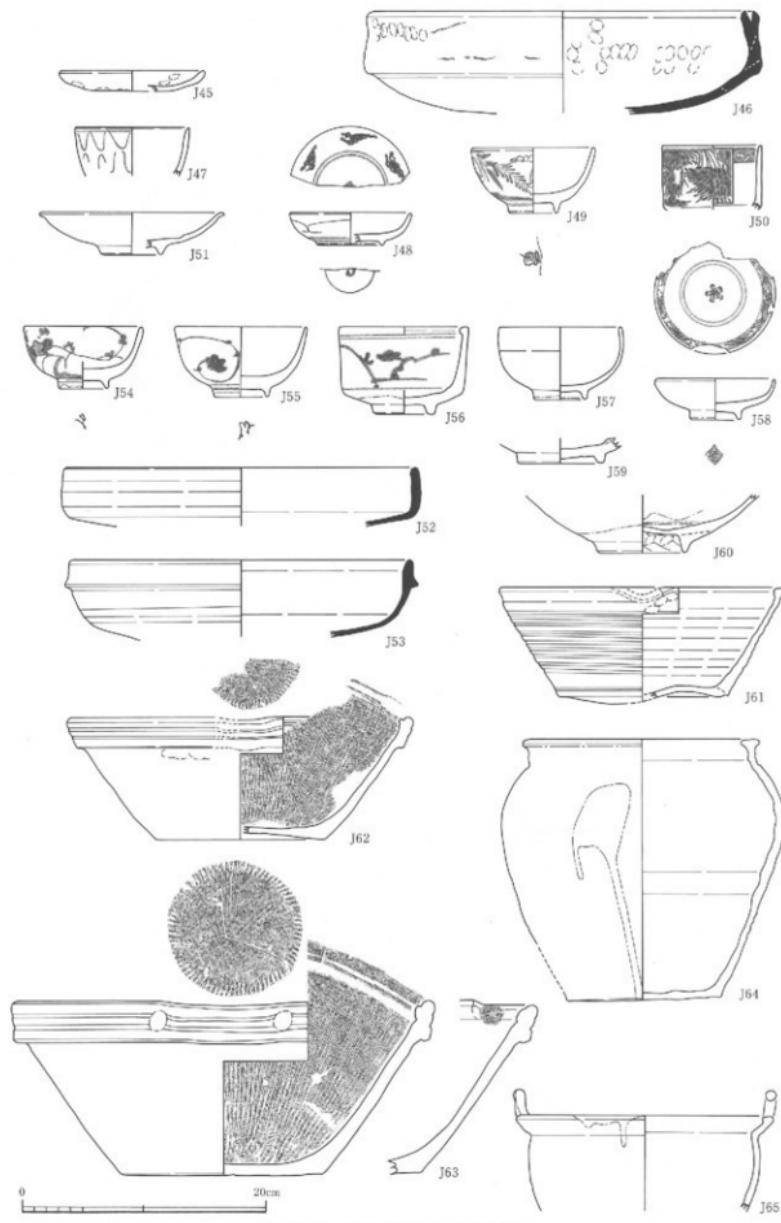
第116図 J地区 第2面 遺構平・断面図1



第117図 J地区 第2面 遺構平・断面図2



第118図 J地区 第1面 出土土器 1



第119図 J地区 第1面 出土土器 2



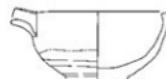
J66



J67



J70



J71



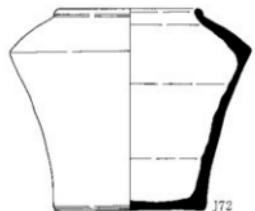
J68



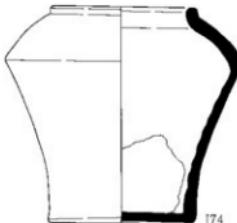
J69



J73



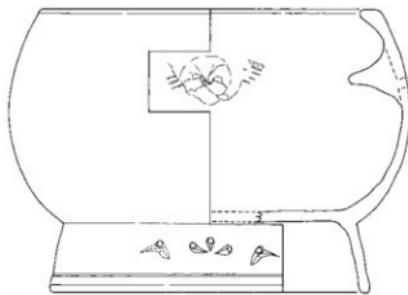
J72



J74



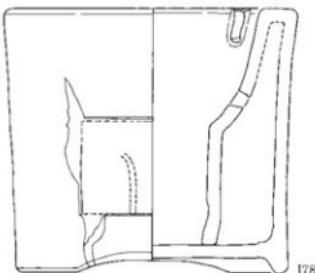
J75



J76



J77



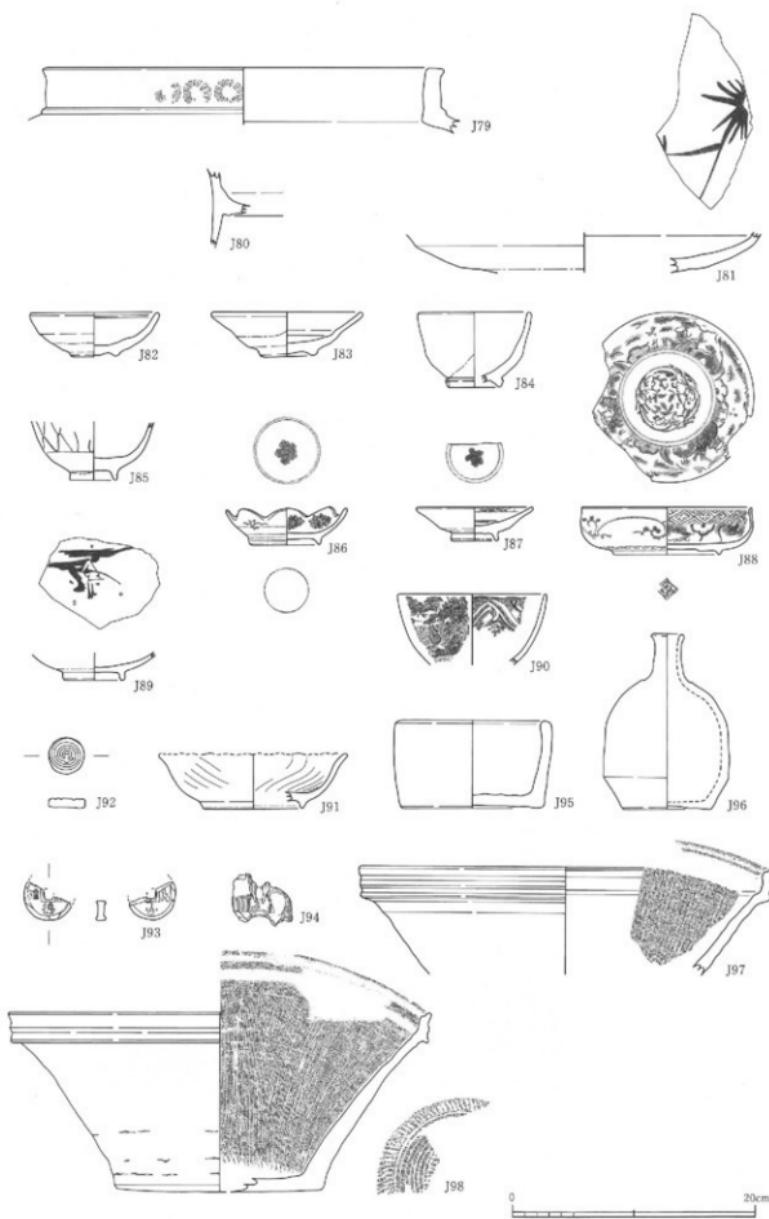
J78

0

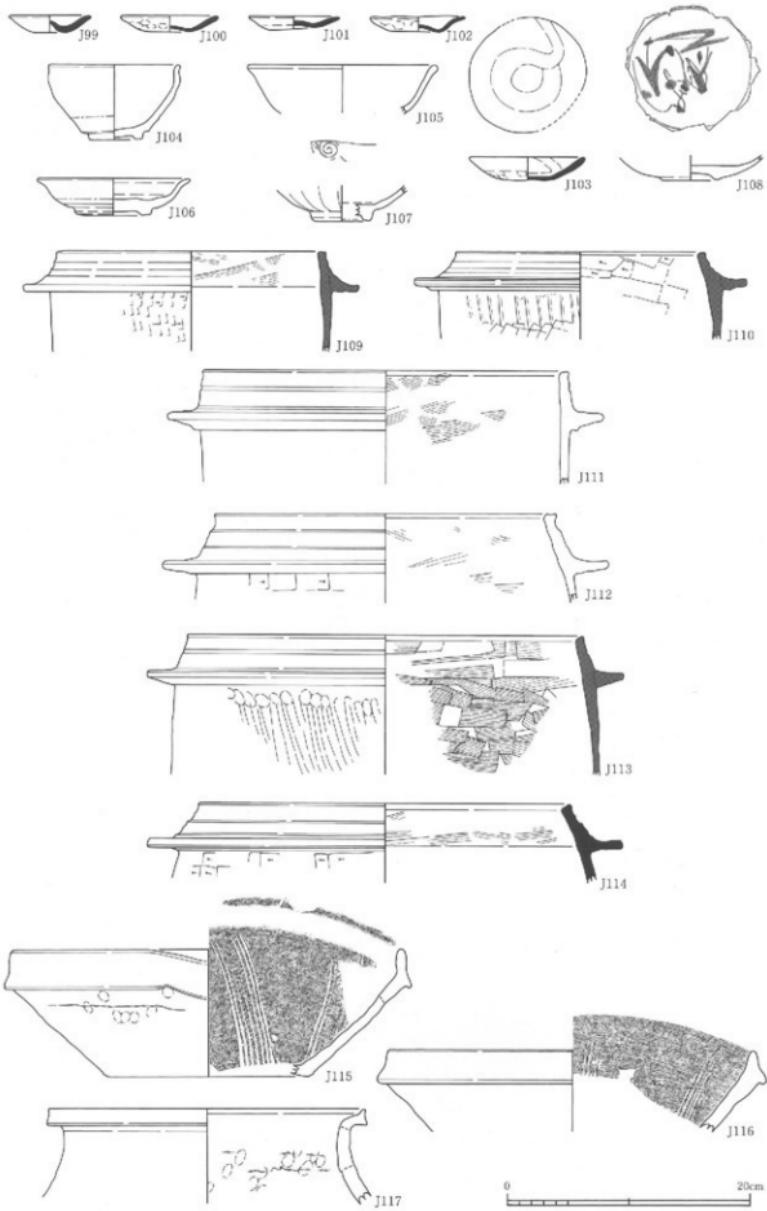
20cm



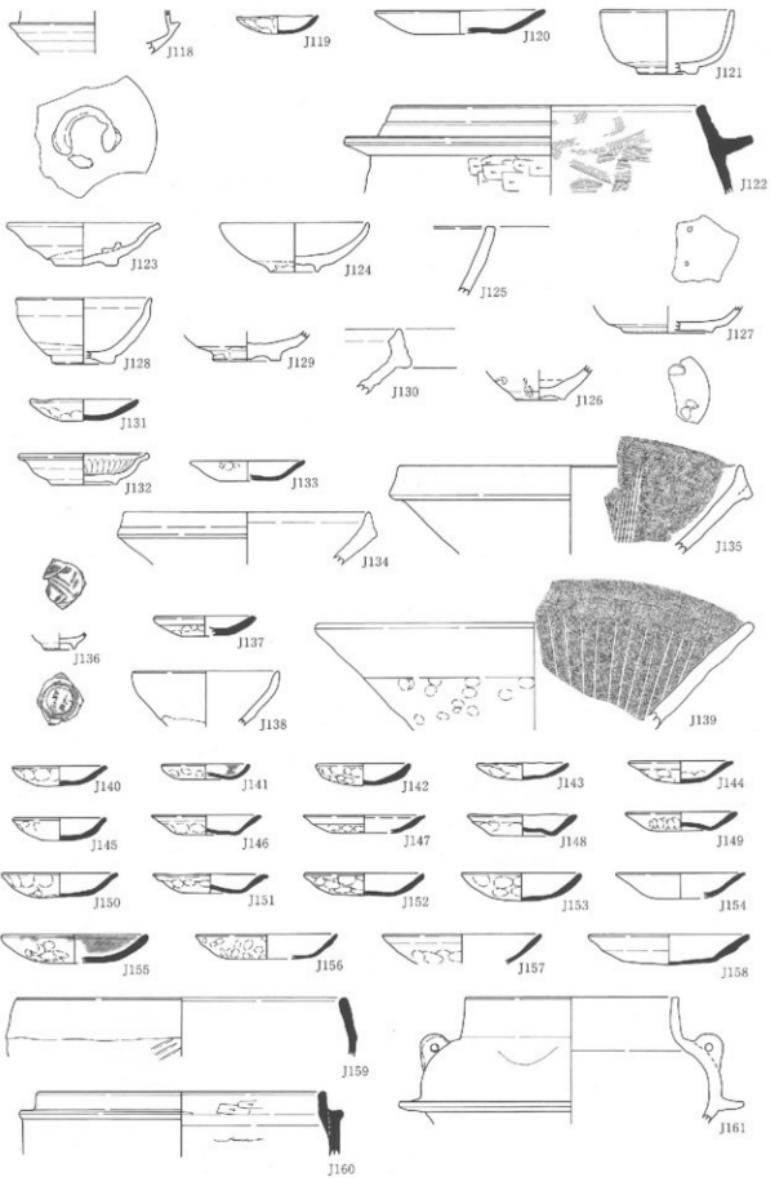
第120図 J地区 第1面 出土土器 3



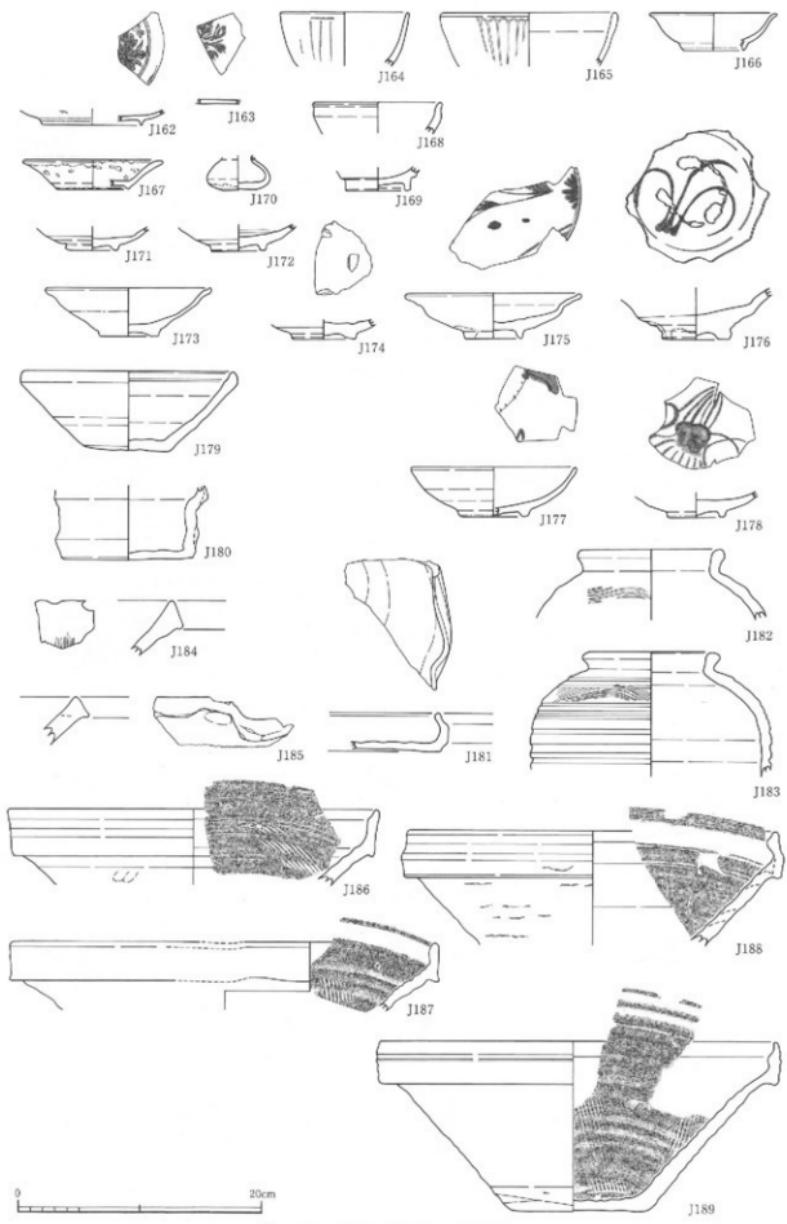
第121図 J地区 第1面 出土土器 4



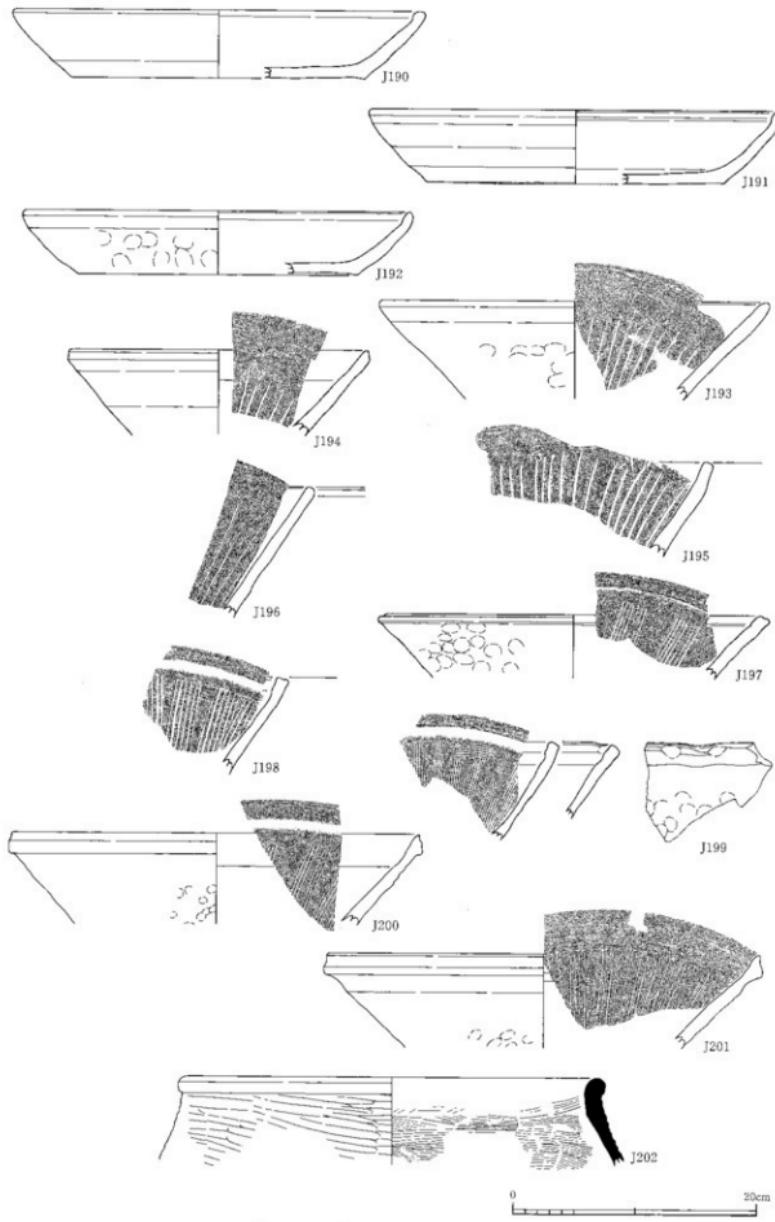
第122図 J地区 第2面 出出土器 1



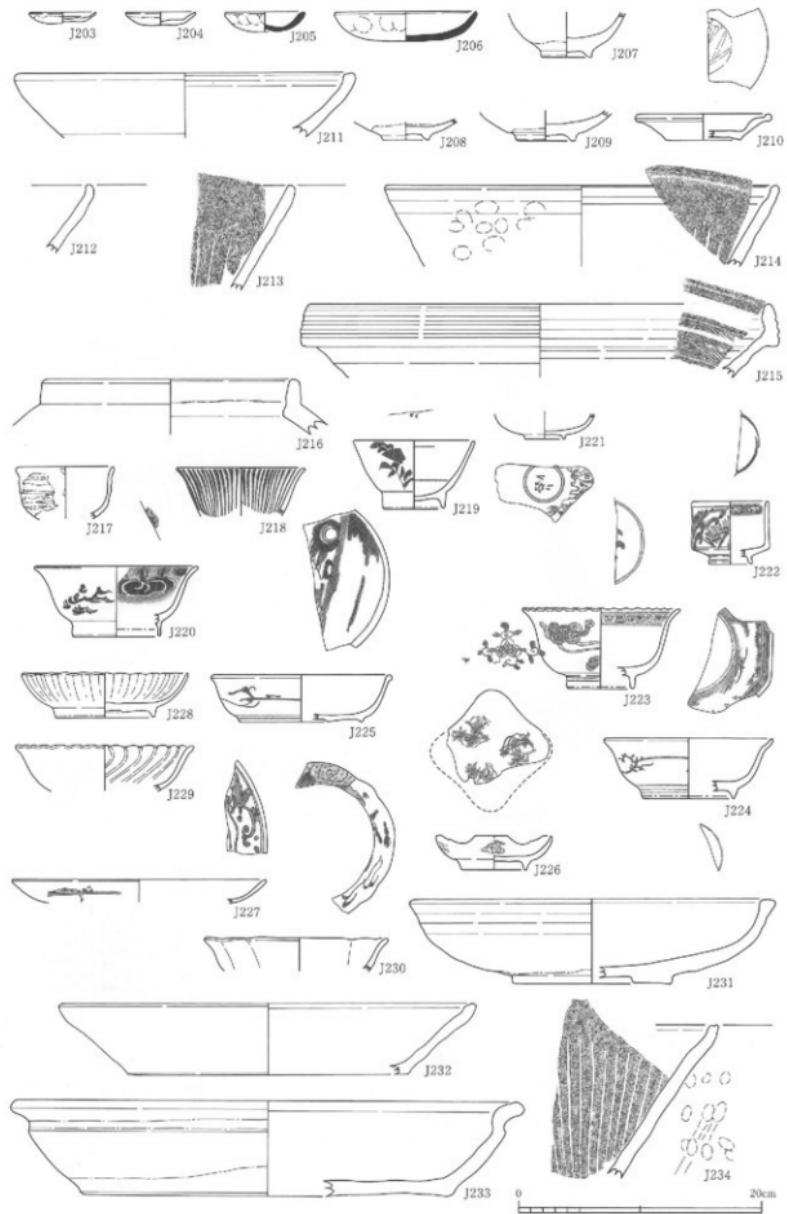
第123図 J地区 第2面 出土土器 2



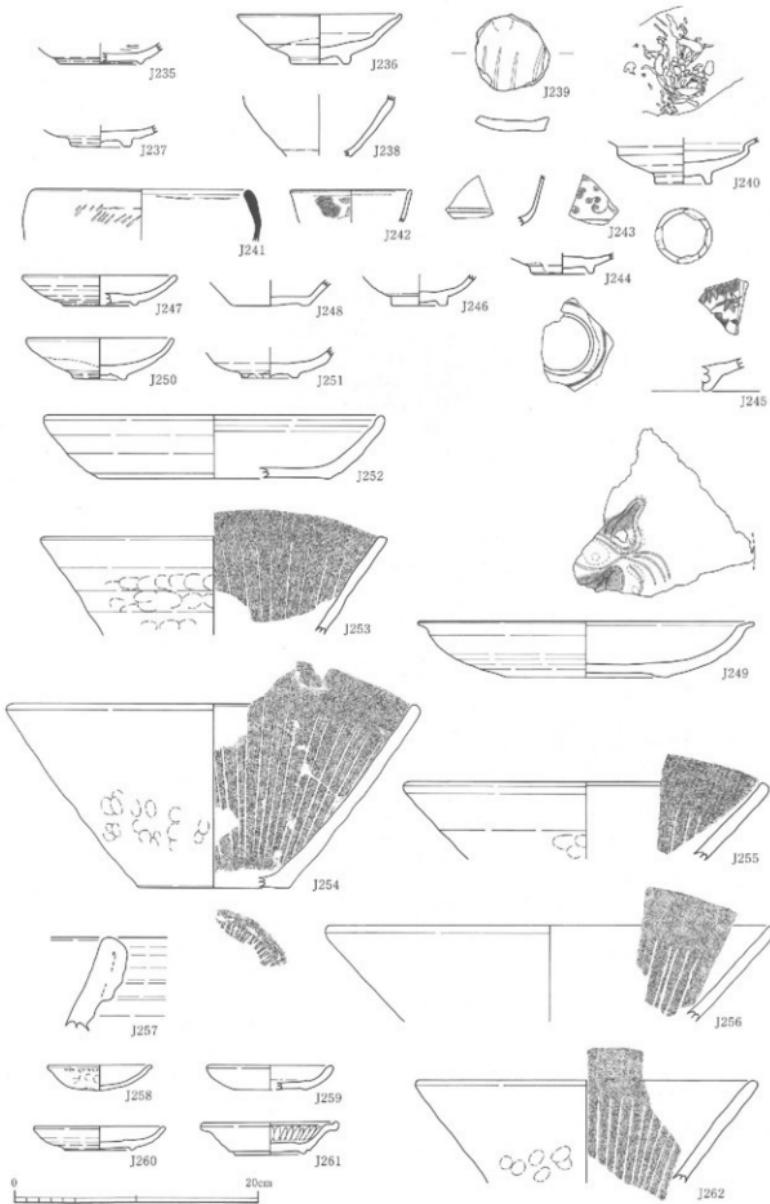
第124図 J地区 第2面 出土土器 3



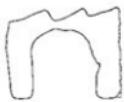
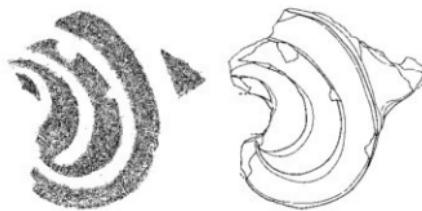
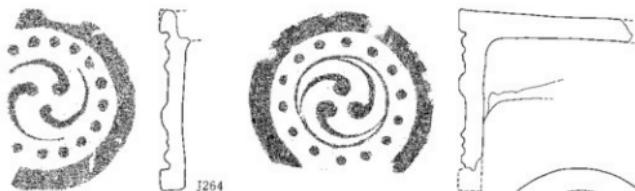
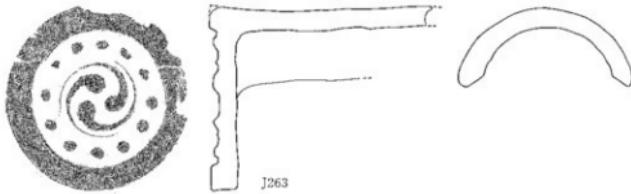
第125図 J地区 第2面 出土土器 4



第126図 J地区 堀1・石組溝 出土土器 1



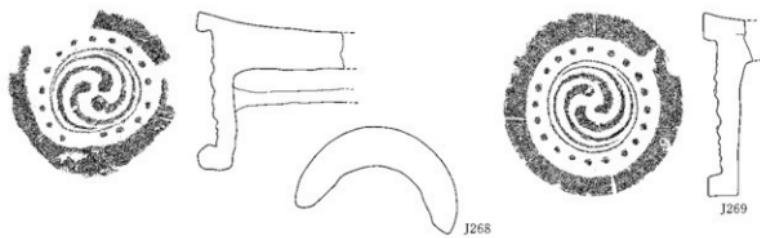
第127図 J地区 坑1・石組溝 出土土器 2



J267



第128図 J地区 瓦1



J268

J269



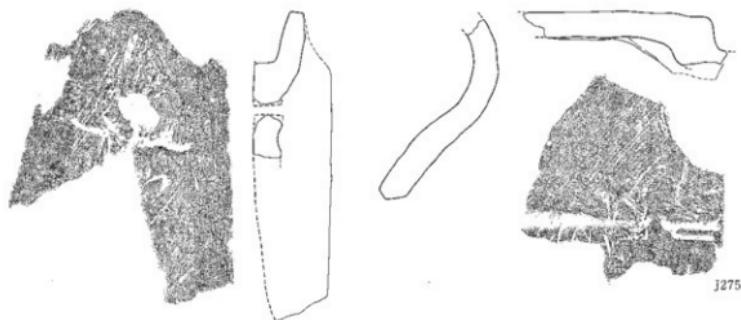
J270

J271



J272

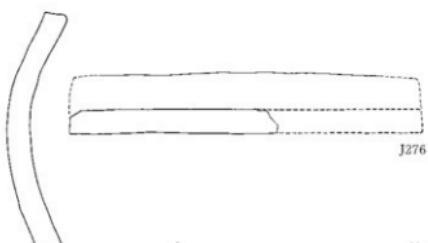
J273



J275



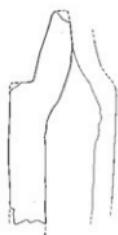
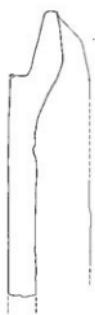
J274



J276

0 20cm

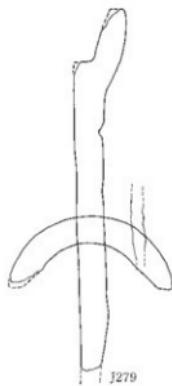
第129図 J地区 瓦 2



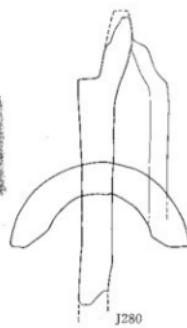
J277



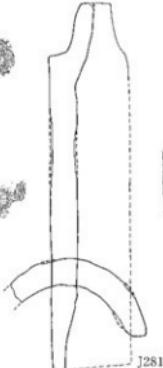
J278



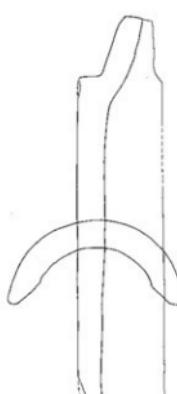
J279



J280



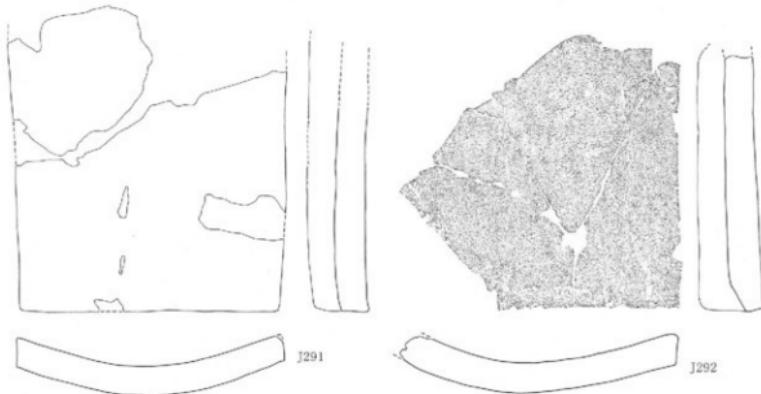
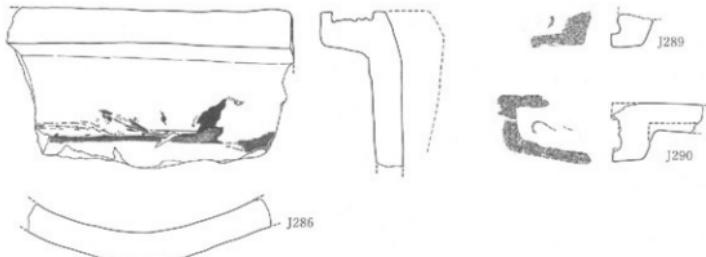
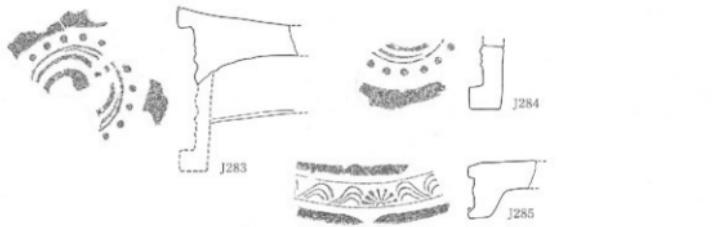
J281



J282

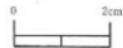
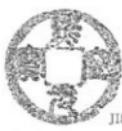
0
20cm

第130図 J地区 瓦 3

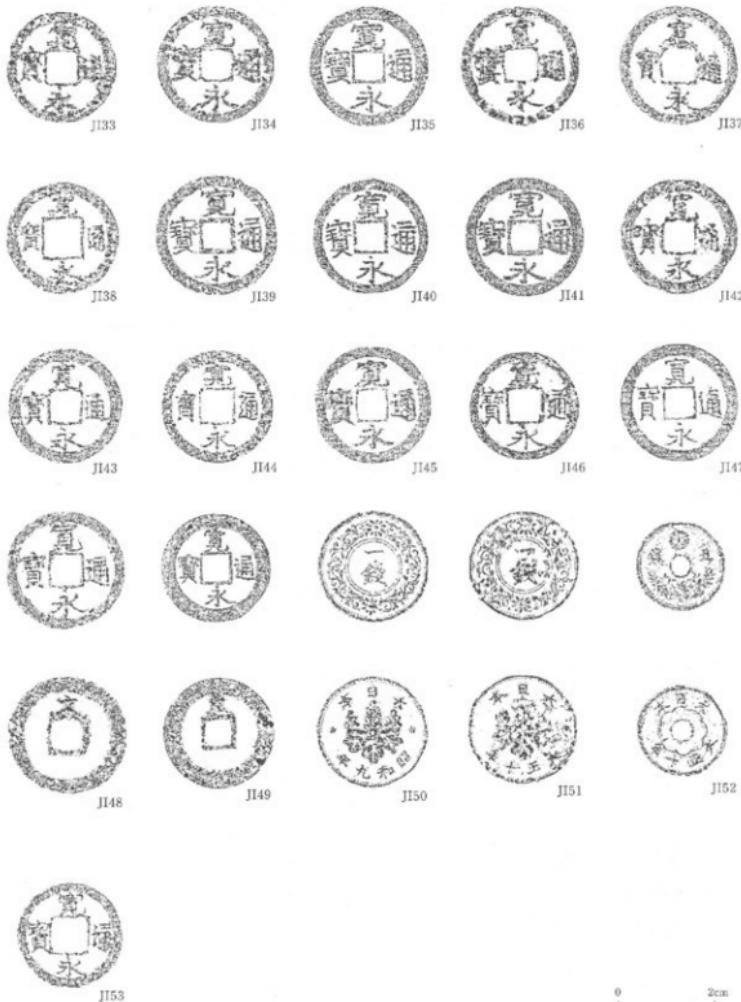


0 20cm

第131図 J地区 瓦 4

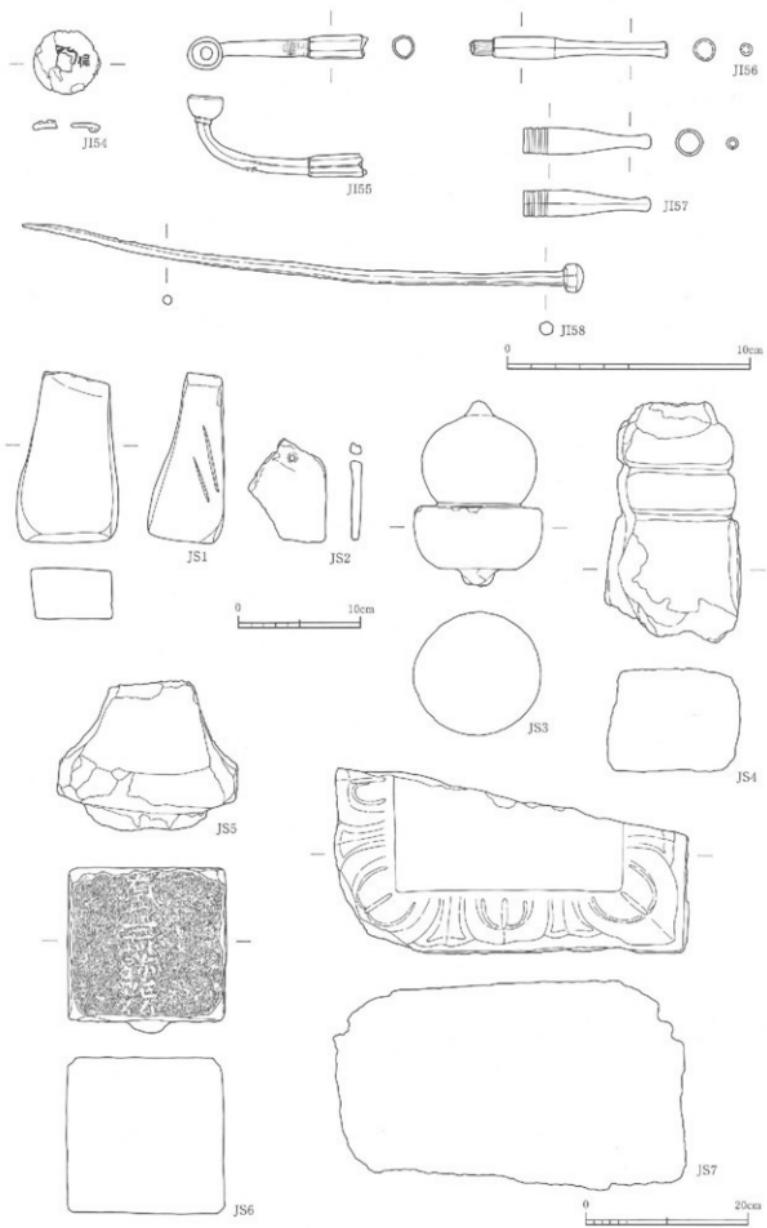


第132図 J地区 銭貨1

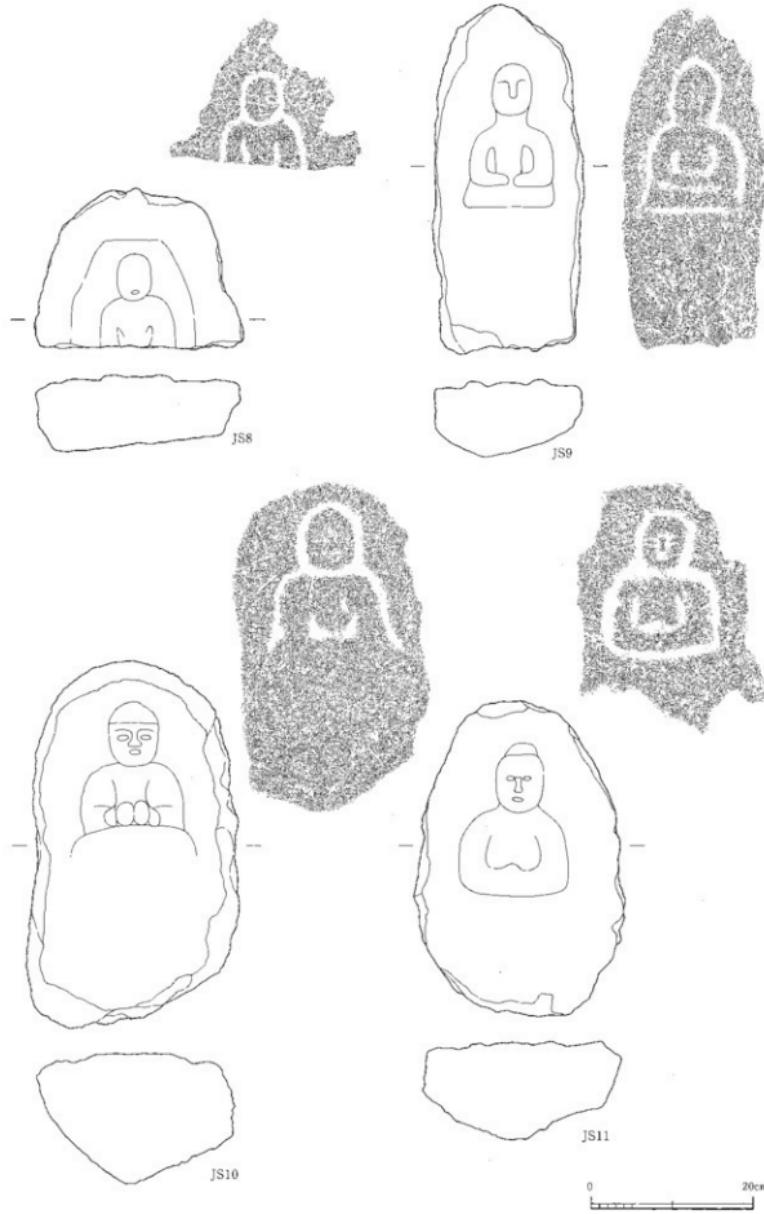


0 2cm

第133図 J地区 錢貨2



第134図 J地区 金属製品・石製品1



第135図 J地区 石製品2

写真図版



伊丹郷町全景（南から）



有岡城跡・調査区遠景（東から）



真上から



北から



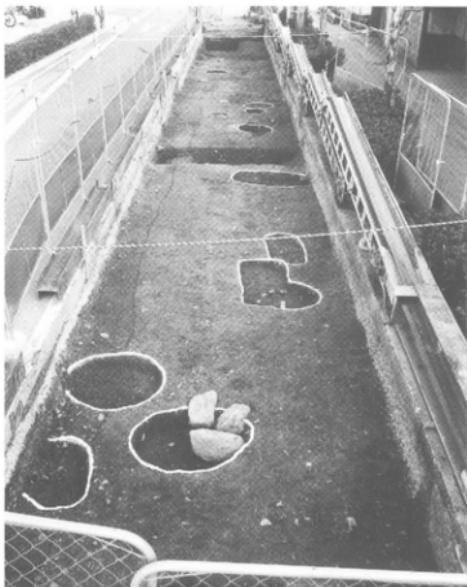
西北から



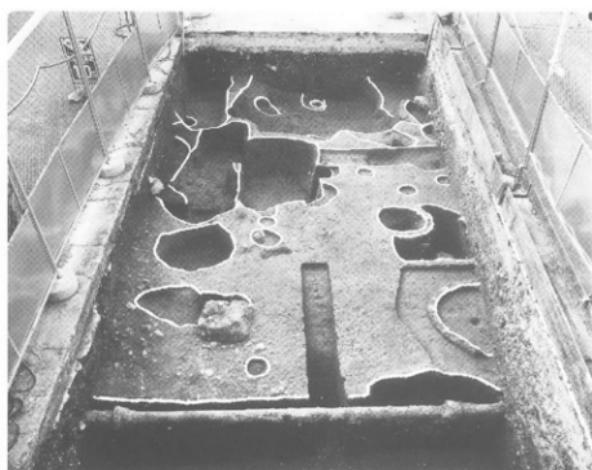
東から



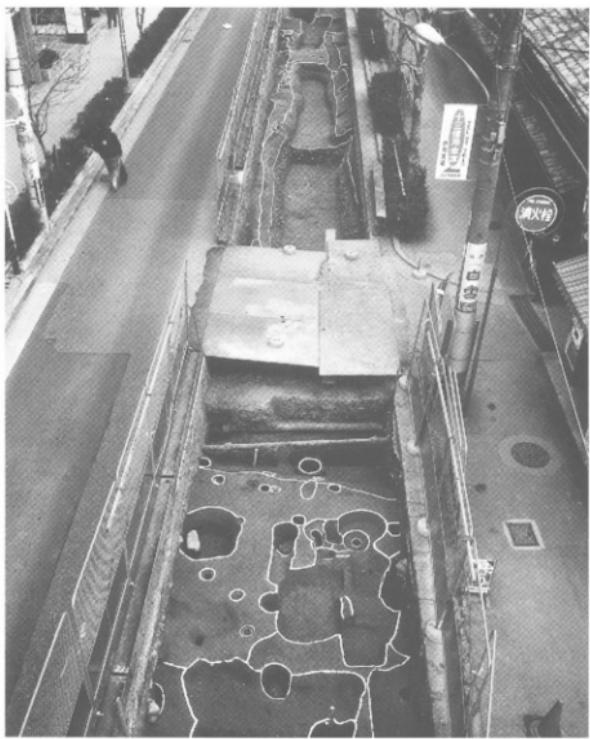
西から



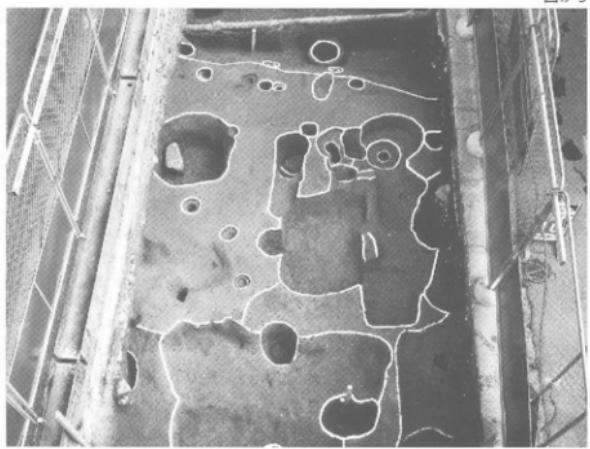
西から



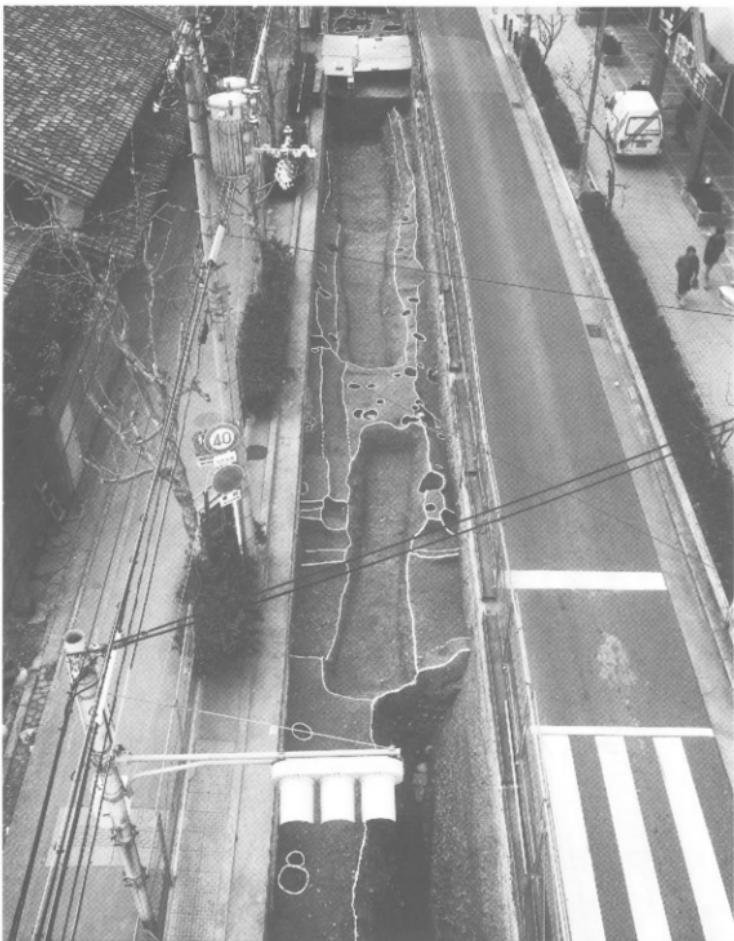
調査区西端
(西から)



西から



調査区西端（西から）



東から



調査風景



SF4



SF1



SF3



SK31石仏



A10



A21



A29



A30



A27



A80



A15



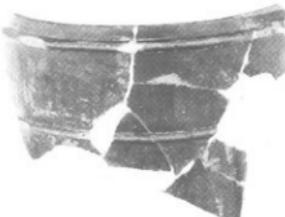
A26



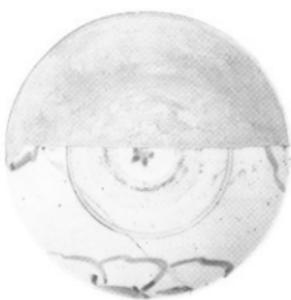
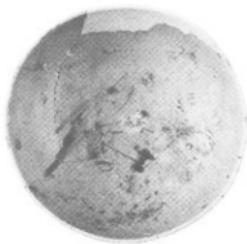
A20



A24



A147



A11

A14



A13



A23



A17



A23



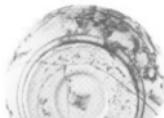
A17



A32



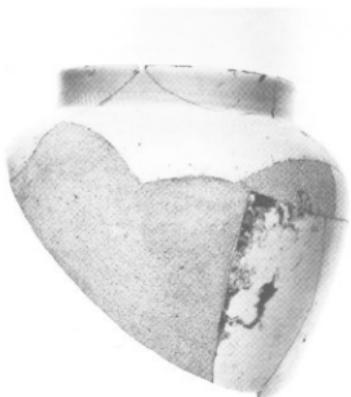
A22



A32



A22



A19



A169



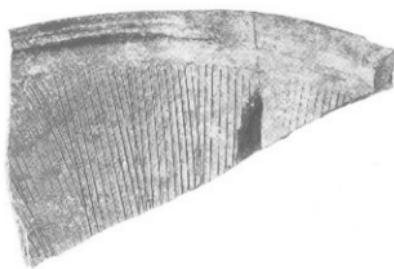
A89



A47



A160



A166



A72



A74



A97



A101



A100



A111



A102



A123



A119



A154



A124



A157



A155



A81



A82



A159



A132



A39



A136



A137



A136



A137



A139



A138



A139



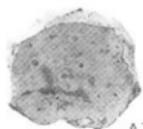
A138



A134



A135



A 7



A38



A42



A41



A60



A134



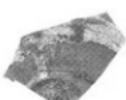
A135



A 7



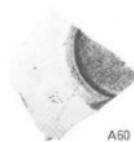
A38



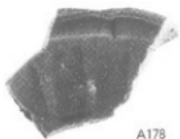
A42



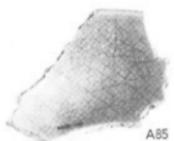
A41



A60



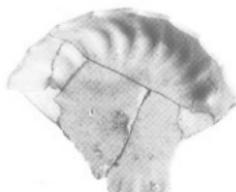
A178



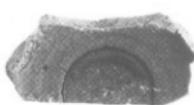
A85



A84



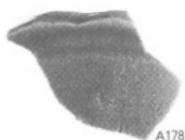
A140



A88



A171



A178



A85



A84



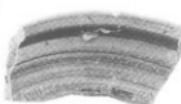
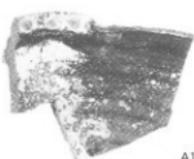
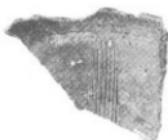
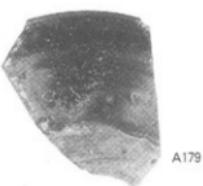
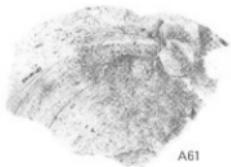
A140

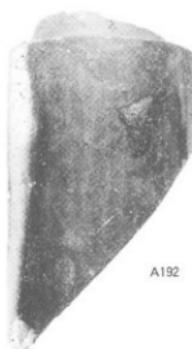


A88



A171





A192



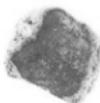
A192



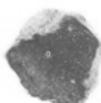
A193



A193



A145



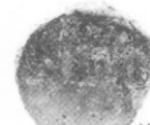
A4



A93



A108



A145



A11



A12



A13



A14



A15



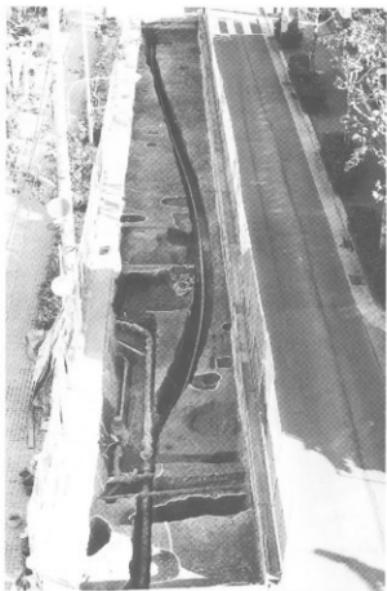
A16



A17



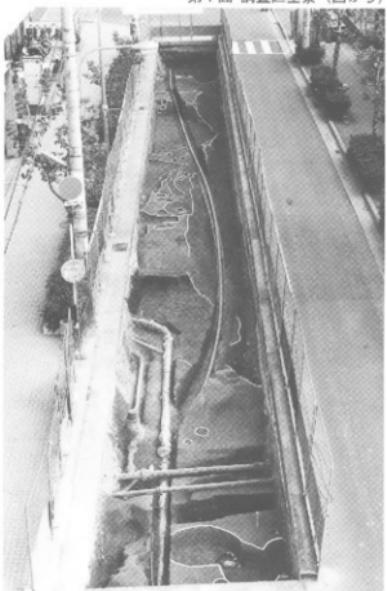
A18



第1面 調査区全景（西から）



第1面 調査区全景（東から）



第2面 調査区全景（西から）



第2面 調査区全景（東から）



C12



C13



C23



C24



C 3

C26



C 4



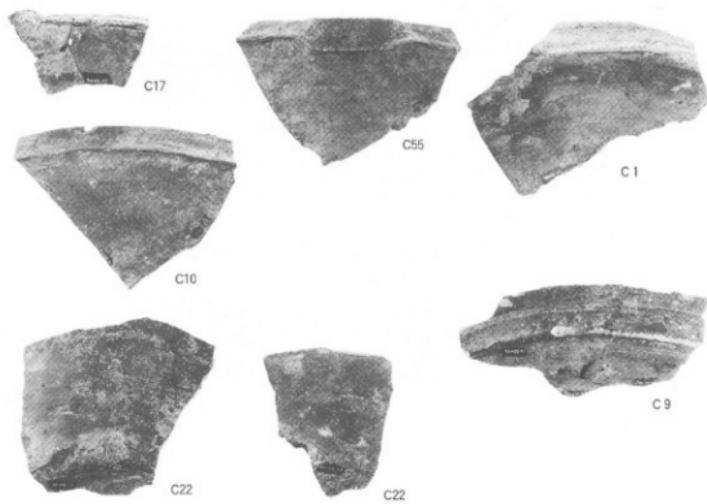
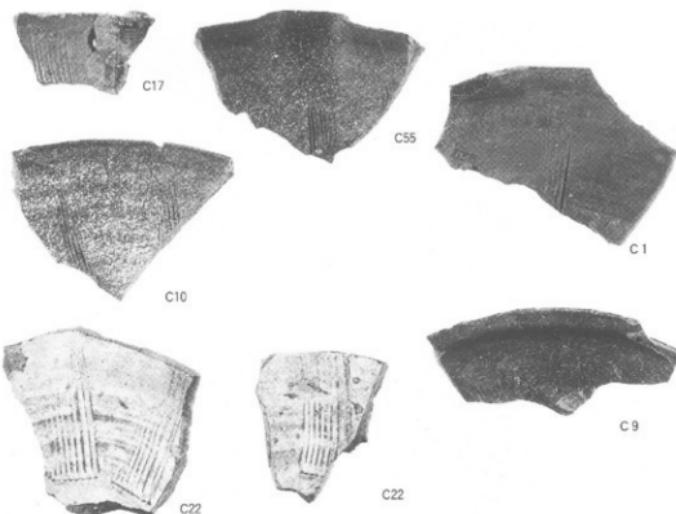
C 5



C 7

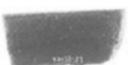


C27





C8



C8



C18



C20



C18



C20



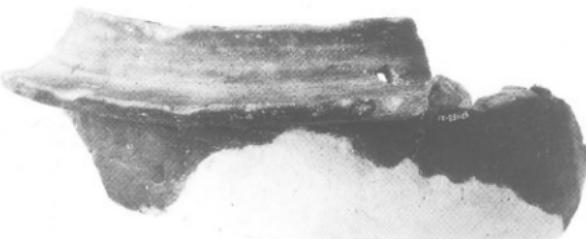
C14



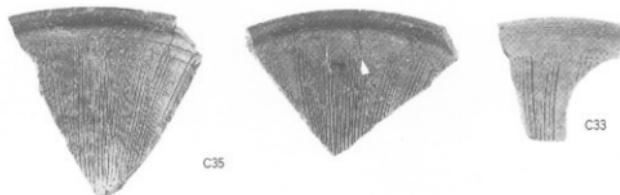
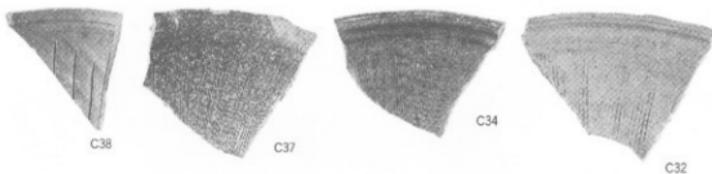
C14



C16

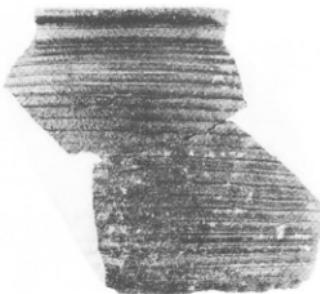


C25





C28



C30



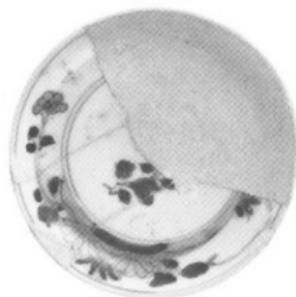
C29



C40



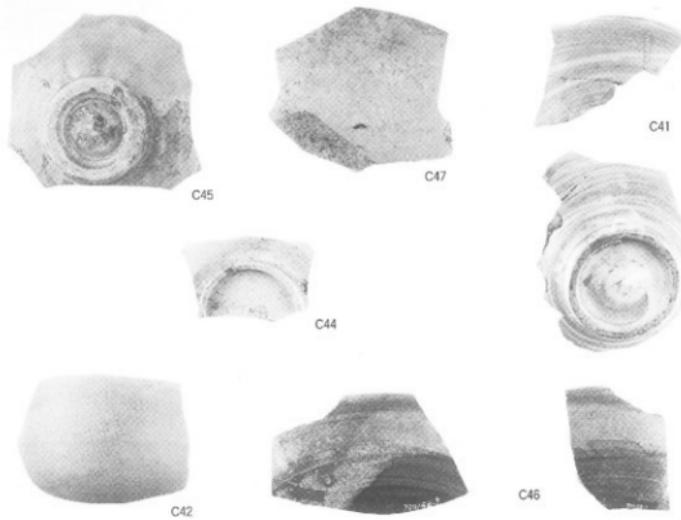
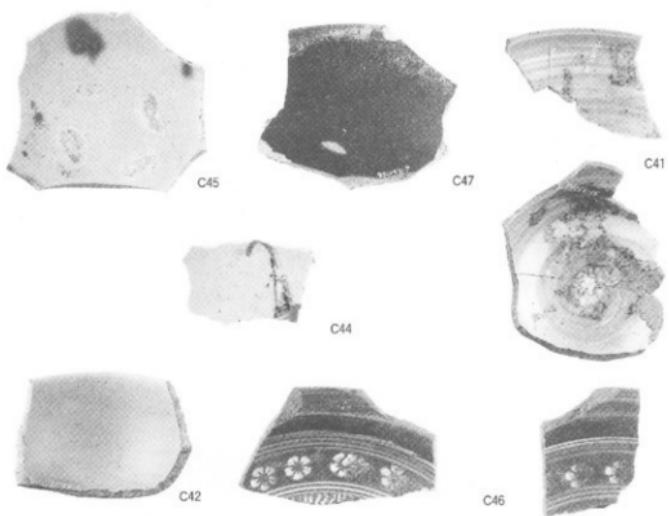
C31



C53

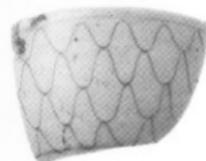


C54





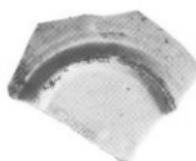
C43



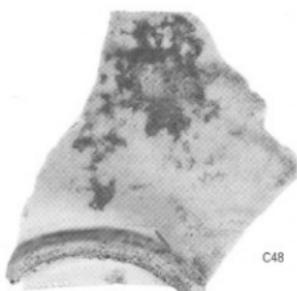
C49



C51



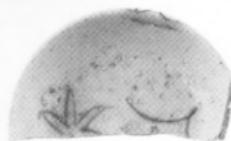
C50



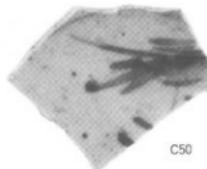
C48



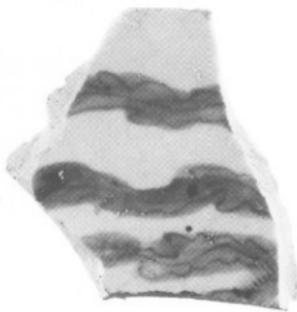
C52



C51



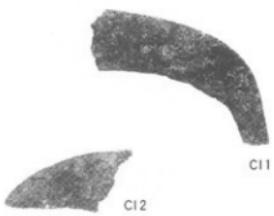
C50



C48



C52



C11



C12



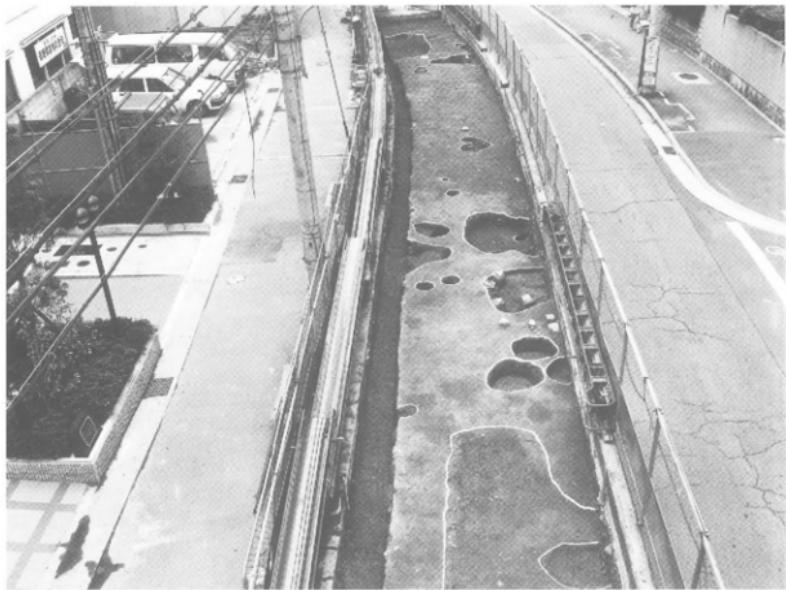
F11



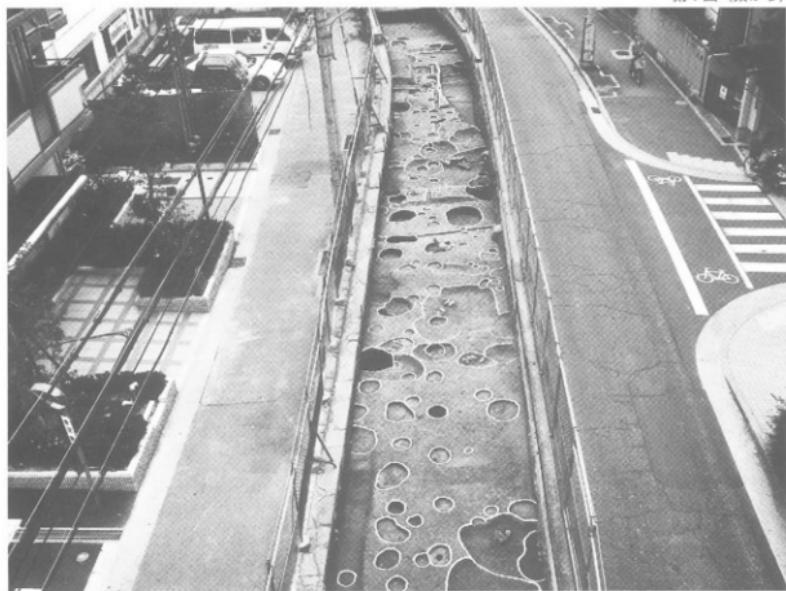
F12



C13



第1面（東から）



第2面（東から）



東から



西から